



Title	スペイン語における直接目的格三人称の形態選択と他動性の高低—le語法を誘発する要因の通時的考察—
Author(s)	高橋, 瑛奈美
Citation	大阪大学, 2025, 博士論文
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/101745">https://doi.org/10.18910/101745</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 博士論文

題目：スペイン語における直接目的格  
三人称の形態選択と他動性の高低  
—le語法を誘発する要因の通時的考察—

提出年月：2024年12月

人文学研究科外国学専攻

氏名：高橋 瑛奈美

## 要旨

本研究は、スペイン語において本来三人称直接目的格の機能を果たす人称代名詞lo(s), la(s)の代わりに、同機能を果たす代名詞として同人称の間接目的格人称代名詞le(s)を用いるle語法(leísmo)がみられやすい文脈を明らかにすることを目的としている。現在、同現象はスペイン語圏全域でみられるわけではなく、使用法や出現率は国や地域ごとに異なるとされている。また、le語法使用者はもっぱらle(s)のみを使用しているわけではなく、非le語法使用者であっても文脈によってはle(s)を使用することがあるとされている。

先行研究では、形態的および統語的要因(Cuervo1895)、ラテン語の影響とスペイン語におけるその後の発展(Lapesa2000)、通時的考察(Echenique Elizondo1981)、他動性および語用論的評価(García1975)、(Flores2004, 2006, 2007)、地域差(Fernández-Ordóñez1993, 1994, 1999, 2001)など様々な立場から同現象の起源、変遷および実態を明らかにすることが試みられてきたが、管見の限りそれらが十分に解明されてはいない。ただし、le語法の出現率は歴史を通じて増加していったことは明らかにされている。たとえば、Lapesa(2000)によると、le語法は*Cantar de Mio Cid*などの古い文書においてすでにみられ、15世紀には人の男性単数のle語法が一般化した。

本論文に先行する高橋(2022)では、le語法の初期における出現傾向を考察するために、中世に焦点を当て、13世紀から15世紀のあいだに書かれた8文学作品において特定の意味の動詞および特定の条件を満たす15の動詞を対象とし、le語法が中世を通じてどのように拡大していったのかを通時的に考察した。その結果、中世スペイン語では他動性の低い文脈においてle語法が出現しやすい可能性があることが確認された。したがって、本論文では、García(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)を支持し、他動性と関連してle語法がみられやすい文脈を考察する。また、より広範な時代からle語法の出現傾向を通時的に考察するために、13世紀から20世紀初頭までに書かれた26文学作品を資料体とする。これら26文学作品は、le語法の出現傾向の通時的考察を適切におこなうために、作者の出生年を考慮しつつ選定されており、高橋(2022)の資料体である中世に書かれた8文学作品および16世紀以降に書かれた18文学作品からなる。さらに、16世紀以降の作品については、le語法がみられやすい文脈を知る手がかりとするために、通常le語法がみられないとされている非le語法圏出身者によって書かれた作品も取り扱われている。

本論文の考察手法は以下のとおりである。まず、資料体からスペイン語の三人称の弱形代名詞(le(s)、lo(s)、la(s)、語尾消失形<sup>1</sup>、le(s)の異形li(s))の例をすべて収集し、その指示

対象を分析し、指示対象ごとのle語法の出現率を算出する。次に、Hopper&Thompson (1980)が提唱する他動性の度合いを測る項目をもとに本研究で使用する他動性の度合いを測る10項目(意図性、主語の有生性、直接目的語の特定性、直接目的語の受ける影響、動性、肯定性、法、アスペクト、話者の語用論的評価、項数)を構築し、それぞれの例においてle(s)およびli(s)が直接目的語として用いられている要因と語源を維持した形態lo(s)またはla(s)が用いられている要因を他動性の観点から見出す。このようにして、le語法の拡大を促した要因を探り、le語法の出現傾向および変遷を考察する。

第1章では、研究の背景、本論文の目的、考察手法、各章の構成を紹介する。

第2章では、スペイン語の三人称の弱形代名詞が非語源的に使用されるようになった要因に関する仮説を述べている先行研究を概観する。非語源的語法の発生と拡大に関する仮説は、伝統的仮説と1975年以降出現した新たな仮説の2つに大別される。ひとつめの仮説は、Cuervo(1895)によって提唱されたいわゆる伝統的仮説であり、同仮説では形態による有生/無生および性の区別において三人称の弱形代名詞の各形態がもつようになった機能およびその発展を明らかにすることが試みられている。一方、新たな仮説のうちのひとつであるFernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)は、地域によって三人称の弱形代名詞の体系は異なるとし、地域ごとに異なる体系が生じた過程に関する仮説を論じている。また、もうひとつの新たな仮説であるGarcía(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)は、三人称の弱形代名詞の形態の選択は対格および与格に典型的な意味に基づいているとし、直接目的語が与格に典型的な意味またはそこから派生する意味をもつ場合、le語法がみられやすいとしている。

第3章以降では、本研究の資料体である13世紀から20世紀初頭のあいだに書かれた26文学作品の例の考察をおこなう。

第3章では、非語源的用法の出現率の通時的考察をおこなうために、各作品について指示対象別にle語法およびla語法の出現率を示す。出現率の通時的考察の結果、次のことが明らかになった。時代および地域に関係なく、ほとんどすべての作品で指示対象が人の男性単数である場合、le語法がもっともよくみられる。ただし、指示対象が有生物の男性単数である場合に次いでle語法がもっともよくみられる指示対象は作品が書かれた時期や地域によって異なる。また、性による形態の区別はle語法圏のほうがよくみられる。さらに、非語源的用法の発展と衰退の時期は両地域で異なる。

第4章では、他動性と関連してle語法がみられやすい文脈を考察した。その結果、時代や地域を問わず、他動性が低い場合、le語法はみられやすいことがわかった。しかし、他動性の各項目が形態の選択に影響する程度は地域や時代によって異なる。他動性の高低を測る項目のうち、形態の選択に影響していると考えられる項目もあれば、あまり影響していないと考えられる項目もある。形態の選択に強く影響していると考えられる項目は、主語の有生性および目的語が受ける影響の強弱である。主語の有生性について、主語が有生性階層において高い位置を占める一人称または二人称である場合、語源を維持した形態が用いられる傾向にあり、反対に有生性階層において低い位置を占める無生物である場合、le語法がみられやすい。また、目的語への影響の強弱について、受ける影響が強い場合、le語法の割合が高い作品でもloが用いられ、反対に、受ける影響が弱い場合、leが用いられる傾向にある。また、直接目的語の指示対象に対する愛情や軽蔑など、与格または対格に典型的な意味から派生する要因によると考えられる形態の選択もみられる。

さらに、法とアスペクトについては、作品によっては一部の文脈でのみ形態の選択に影響していると考えられる。動性について、動詞がmatarである場合、一部の作品では指示対象が人の男性単数である場合に唯一loが用いられていることや本研究の資料体では複数形のle語法の例がみられないことから、動性の高い動詞ではloが用いられやすいと考えられる。しかし、他動性の観点からみれば、tenerが状態を表す動詞である場合、leが用いられやすいと考えられるが、le語法の割合が非常に高い作品でのみleの例がみられ、複数形のle語法がみられないことから、動性がない文脈ではle語法は用いられにくいと思われる。

反対に、形態の選択にあまり影響していないと考えられる項目は肯定性および直接目的語の特定性である。まず、肯定性について、否定文では一部の作品の特定の文脈においてはle語法が用いられる傾向にある。次に、目的語の特定性について、一部の作品では不特定の人物である場合、もっぱらleのみ用いられているが、他の多くの作品では目的語の特定性による形態の選択はなされていない。

ただし、項目間だけでなく、パラメータ間にも優劣が存在し、形態の選択においてより重視される項目のパラメータによって形態が決定されているため、形態の選択は非常に複雑になされていると考えられる。

また、第3章と第4章の考察結果から、形態の選択の歴史的変遷について、他動性による形態の選択が未発達であった13世紀の作品では、格の典型的な意味によって形態が選択されている可能性があると考えられる。しかし、14世紀以降の作品では他動性による形態の

選択がなされるようになり、15世紀末の作品では、指示対象が有生物の単数である場合、性による形態の区別がなされるようになった。ただし、他動性が高い文脈では15世紀末以降の作品であっても語源を維持した形態が用いられている例もみられる。

第5章では、主語、直接目的語、間接目的語の3つの参与者からなる三項文における形態の選択を考察する。le語法圏および非le語法圏出身者の作品に共通していえることは、間接目的語が三人称である場合よりも、一人称または二人称である場合のほうがle語法の割合が高いことである。ただし、le語法圏出身者の作品のなかには、単数形では項数に関係なく、性による形態の区別が完全なカタチでなされているものもある。また、三項文でleを要求する動詞も、loを要求する動詞も二項文ではleを従えていることから、三項文では二項文よりもloが用いられる可能性が高いと考えられる。さらに、三項文においても他動性によると考えられる形態の選択もみられる。

第6章では、本論文の総括をおこない、今後の展望を示す。

本研究の特徴は、García(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)では取り扱われていない他動性の度合いを測る項目も考慮するとともに、他動性の各項目を細かく分類して分析をおこなうことで、他動性が直接目的語の形態の選択にどのように影響しているのかを詳細に考察していることである。また、leの使用を促す項目とloの使用を促す項目またはパラメータが併存する場合、どの項目またはパラメータが形態選択において優先されるのかを論じている。

## Resumen

El objetivo del presente trabajo es aclarar en qué contexto tiende a observarse el leísmo, el uso del pronombre personal de objeto indirecto de tercera persona *le(s)* como objeto directo en lugar de los pronombres *lo(s)* y *la(s)* que originalmente desempeñan este papel de dicha persona en español. Actualmente, se piensa que este fenómeno no existe en todo el mundo hispanico y que su uso y el porcentaje de aparición son distintos según los países y regiones. Por añadidura, se sabe que los leístas no utilizan *le(s)* de manera exclusiva y a veces los que no son leístas también emplean *le(s)* en algunos contextos.

Los trabajos previos han tentado aclarar el origen, la transición y el uso real del leísmo desde varios puntos de vista como factores morfológicos y sintácticos (Cuervo1895), influencias del latín y el desarrollo consecuente en español (Lapesa2000), consideraciones diacrónicas (Echenique Elizondo1981), la transitividad y valoraciones pragmáticas de los hablantes (García1975), (Flores2004, 2006, 2007) y diferencias regionales (Fernández-Ordóñez1993, 1994, 1999, 2001). Sin embargo, ninguno de ellos da explicaciones suficientes por lo que sabemos. Lo que entendemos es que la frecuencia del leísmo ha aumentado a través de la historia. Por ejemplo, según Lapesa (2000), el leísmo ya existe en textos antiguos como *Cantar de Mio Cid* y en el siglo XV se generalizó este uso de masculino singular referente a personas.

El trabajo de Takahashi (2022) que precede a este y tiene como objetivo analizar la tendencia de aparición del leísmo en etapas tempranas, pone el foco en la Edad Media, estudia los casos de verbos que tienen un particular significado y los de los quince verbos que cumplen determinadas condiciones en ocho obras literarias escritas entre los siglos XIII y XV, y considera de manera diacrónica cómo el leísmo se expandió durante este período. Como consecuencia, se descubre que en el español medieval este fenómeno gramatical puede tender a aparecer en contextos donde la transitividad se encuentra baja.

Por lo tanto, aceptamos las ideas de García(1975) y Flores(2004, 2006, 2007) y consideramos los contextos favorables al leísmo en relación con la transitividad. Para analizar de forma diacrónica la tendencia de aparición del fenómeno en un período más

amplio, tenemos como corpus veinte y seis obras literarias escritas entre el siglo XIII y los comienzos del siglo XX. Estas veinte y seis obras son elegidas teniendo en cuenta de los años de nacimiento de los autores para estudiar de manera adecuada la tendencia mencionada y consisten en las ocho obras de la Edad Media iguales que las del trabajo de Takahashi(2022) y dieciocho obras escritas a partir del siglo XVI. En cuanto a estas obras posteriores al siglo XVI, se trata de las obras escritas por autores de zonas consideradas no leístas también para obtener alguna pista sobre los contextos favorables al leísmo.

El método tomado en este trabajo es lo siguiente. Primero, sacamos del corpus todos los casos de los pronombres átonos de tercera persona de español *le(s)*, *lo(s)*, *la(s)*, la forma apocopada *l'* y *li(s)*, forma irregular de *le(s)*, analizamos sus referentes y calculamos el porcentaje de aparición del leísmo según el referente. Segundo, creamos los diez factores que miden el grado de la transitividad (intencionalidad, animación del sujeto, especificidad del objeto directo, efecto que sufre el objeto directo, movimiento, afirmación, modo, aspecto, valoraciones pragmática de los hablantes y número de participantes) que utilizamos en este trabajo basados en los planteados por Hopper&Thompson(1980) y desde los puntos de vista de la transitividad buscamos factores que en cada caso promueven el uso de *le(s)* o *li(s)* o el mantenimiento de *lo(s)* o *la(s)* como objeto directo. Así, exploramos los factores que funcionaron para expandir el leísmo y estudiamos la tendencia de aparición y la transición del fenómeno.

En el capítulo uno, introducimos los antecedentes de la investigación, el objetivo, el método tomado y la estructura de este trabajo.

En el capítulo dos, echamos una orejada a los estudios previos que redactan hipótesis acerca de los factores por los que empezaron a utilizar los pronombres átonos de tercera persona de español de manera antietimológica. Las hipótesis sobre el surgimiento y la expansión del uso antietimológico se dividen en dos: la hipótesis tradicional y las nuevas que aparecieron a partir del año 1975. La primera hipótesis es la que propuso Cuervo(1895) y trata de aclarar las funciones que llegó a tener cada forma de los pronombres átonos de tercera persona para distinguir las formas según la animalidad y el género, y su desarrollo. Por otro lado, Fernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001),



una de las nuevas hipótesis, dice que los sistemas de los pronombres átonos de tercera persona son distintos según las zonas y constituye su hipótesis acerca del proceso por el que los sistemas diferentes surgieron dependiendo de las zonas. García(1975) y Flores(2004, 2006, 2007), otra nueva hipótesis, piensan que la elección de las formas de estos pronombres se basa en los significados típicos del acusativo y dativo, y que se observa más fácil el leísmo cuando los objetos directos poseen sentidos típicos de estos casos o los derivados de ellos.

A partir del capítulo tres, consideramos los casos del corpus de este trabajo, las veinte y seis obras escritas entre el siglo XIII y los principios del siglo XX.

En el capítulo tres, mostramos el porcentaje de aparición del leísmo y laísmo según los referentes en cada obra con el fin de considerar diacrónicamente el porcentaje del uso antietimológico. Como resultado del análisis, aclaramos lo siguiente. En casi todas las obras el leísmo se observa con más frecuencia cuando el referente es persona, masculino y singular independientemente de las épocas y las zonas. Sin embargo, el referente del leísmo que se observa más después del animado, masculino y singular, depende de las épocas y las zonas de las obras. Además, la distinción de las formas por el género se ve más en las zonas leístas. En adición, la época del desarrollo y decadencia del uso antietimológico se defiera en las zonas leístas y las no leístas.

En el capítulo cuatro, estudiamos los contextos donde se observa mucho el leísmo en relación con la transitividad. Como resultado, descubrimos que el leísmo tiende a aparecer cuando la transitividad se encuentra baja independientemente de las épocas y las zonas. Sin embargo, el grado en que cada factor de la transitividad interviene en la elección de las formas es distinto según las épocas y las zonas. Entre los factores que miden el grado de la transitividad hay unos que se pueden considerar que influyen en la elección de las formas y otros que parecen que no influyen mucho. Aquellos son la animación del sujeto y el grado del efecto que sufre el objeto directo. En cuanto a la animación del sujeto, cuando el agente es la primera o segunda persona que ocupan los lugares más altos de la jerarquía de la animación, se tienden a usar las formas etimológicas. Al contrario, cuando el agente es inanimado que se ubica en lugares bajos de dicha jerarquía, se espera que aparezca el leísmo. Acerca del grado del efecto que

sufre el objeto directo, cuando el efecto es fuerte, se observa la tendencia a utilizar la forma *lo* incluso en las obras del alto porcentaje del leísmo. Pero si el efecto es débil, hay más posibilidades de emplear la forma *le*. Además, puede que se seleccionen las formas por factores derivados de los significados típicos del acusativo y dativo como afección o desprecio hacia el referente del objeto directo.

Aparte, el modo y el aspecto parecen que influyen en la elección de las formas solo en determinados contextos de algunas obras. En cuanto al movimiento, si el verbo es *matar*, en ciertas obras es el único caso donde la forma *lo* se emplea cuando el referente es persona, masculino y singular, y no se registra ningún caso del leísmo plural en nuestro corpus. Por este motivo, se considera que la forma *lo(s)* tiende a usarse con los verbos de altamente dinámicos. Sin embargo, se espera que el verbo *tener*, cuando expresa estados, rijan la forma *le* desde el punto de vista de la transitividad, lo hace solo en las obras donde el porcentaje del leísmo es muy alto y con este verbo no se observa ningún caso del leísmo plural. Por lo tanto, es posible que el leísmo tenga dificultades en aparecer en contextos que carece del movimiento.

Por el contrario, los factores que no parecen que influyan mucho en la elección de las formas son la afirmación y la especificidad del objeto directo. En primer lugar, acerca de la afirmación, se favorece la utilización del *le* en sentencias negativas en determinados contextos de algunas obras. En segundo lugar, en lo que se refiere a la especificidad del objeto directo, en ciertas obras se emplea exclusivamente la forma *le* cuando el referente es indeterminado, pero no se seleccionan las formas por este factor en la mayoría de las otras obras.

Sin embargo, no solo entre los factores sino también entre los factores existen los elementos a los que se da más importancia en la selección de las formas y creemos que esa elección se realiza de una manera muy complicada.

Aparte, las consideraciones de los capítulos tres y cuatro dan informaciones acerca de la transición histórica de la elección de las formas como siguientes. En las obras del siglo XIII donde esa selección por la transitividad todavía no está desarrollada, probablemente se eligen las formas de acuerdo con los significados típicos de los casos. Sin embargo, en las obras escritas a partir del siglo siguiente, se seleccionan las formas

por la transitividad y en las obras del fin del siglo XV se distinguen las formas dependiendo del género cuando el referente es animado y singular. Con todo, incluso en las obras a partir del fin del siglo XV se emplean las formas etimológicas si la transitividad de los contextos es alta.

En el capítulo cinco, consideramos la elección de las formas en los ejemplos de tres participantes (sujeto, objeto directo e indirecto). Lo que las obras leístas y las no leístas tendrán en común es que el leísmo se usa con más frecuencia cuando el objeto indirecto es primera o segunda persona que cuando es la tercera. Sin embargo, algunas obras leístas distinguen completamente las formas por el género en el singular indiferentemente del número de participantes. Además, habrá más posibilidades de que se tienda a utilizar la forma *lo* en las situaciones de tres participantes que en las de dos porque tanto los verbos que rigen *le* como los que requieren *lo* en caso de tres participantes, llevan *le* cuando la frase consiste en dos participantes. En adición, en las frases con tres participantes también hay casos donde las formas se elegirán según la transitividad.

En el capítulo seis, resumimos este trabajo y damos algunas perspectivas.

Las características de este presente trabajo son estudiar de forma detallada cómo se refleja la transitividad en la elección de las formas del objeto directo por tener en consideración los factores que miden el grado de la transitividad de que no tratan los estudios de García(1975) y Flores(2004, 2006, 2007) y por analizar cada factor con categorización detallada. También tratamos de la cuestión de que en la selección de las formas a cuál factor o parámetro se da más importancia en caso de coexistir ambos factores o parámetros que favorecen la utilización de *le* y *lo*.

## 目次

1. 導入 .....	1
2. 非語源的語法の発生と拡大 .....	4
2.1. はじめに .....	4
2.2. 伝統的仮説 .....	4
2.3. 新たな仮説 .....	7
2.3.1. 地域差 .....	7
2.3.1.1. はじめに .....	7
2.3.1.2. 等語線 .....	7
2.3.1.3. 各地域の体系 .....	8
2.3.1.4. 形態統語的变化の理論と再構築 .....	12
2.3.2. 形態の選択と他動性 .....	15
2.3.2.1. García(1975) .....	15
2.3.2.2. Flores(2004, 2006, 2007) .....	19
2.4. まとめ .....	20
3. 非語源的用法の出現率の変遷 .....	23
3.1. はじめに .....	23
3.2. 先行研究 .....	23
3.3. 非語源的用法の出現率の通時的考察 .....	25
3.3.1. 考察手法 .....	25
3.3.2. 通時的変移 .....	29
3.3.3. le語法の出現率の序列 .....	41
3.4. まとめ .....	45
4. 他動性と格分裂 .....	48
4.1. はじめに .....	48
4.2. 他動性 .....	48

4.3. 格分裂 .....	50
4.3.1. はじめに .....	50
4.3.2. 格標示 .....	50
4.3.3. 分裂組織のタイプ .....	51
4.3.3.1. 名詞句の意味特徴による分裂 .....	51
4.3.3.2. 時制/アスペクト/法による分裂 .....	54
4.3.3.3. 動詞の意味的性質による分裂 .....	55
4.3.3.3.1. Langacker(1991) .....	55
4.3.3.3.2. Tsunoda/角田(1981, 1999, 2020 <sup>5</sup> ) .....	56
4.4. 分析 .....	60
4.4.1. はじめに .....	60
4.4.2. 本研究で使用する他動性の項目 .....	60
4.4.3. 各作品における直接目的語の形態の選択 .....	66
4.4.3.1. はじめに .....	66
4.4.3.2. le語法圏出身の作者による作品 .....	67
4.4.3.2.1. le語法の割合が低い作品 .....	67
4.4.3.2.1.1. はじめに .....	67
4.4.3.2.1.2. 13世紀の作品 .....	67
4.4.3.2.1.2.1. <i>Libro de Alexandre</i> .....	67
4.4.3.2.1.2.2. <i>Milagros de Nuestra Señora</i> .....	77
4.4.3.2.1.3. 14世紀前半の作品 .....	82
4.4.3.2.1.3.1. <i>Cantar de Mio Cid</i> .....	82
4.4.3.2.1.3.2. <i>El Conde Lucanor</i> .....	91
4.4.3.2.1.4. 14世紀後半の作品 .....	107
4.4.3.2.2. le語法の割合が高い作品 .....	125
4.4.3.2.2.1. はじめに .....	125
4.4.3.2.2.2. loが用いられている例 .....	125
4.4.3.2.2.3. 人の男性複数形のle語法 .....	136
4.4.3.2.2.4. 女性形のle語法 .....	142
4.4.3.2.2.5. 物のle語法 .....	144

4.4.3.3. 非le語法圏出身の作者による作品.....	146
4.4.3.3.1. le語法の割合が低い作品 .....	146
4.4.3.3.2. le語法の割合が高い作品 .....	168
4.4.3.3.2.1. はじめに.....	168
4.4.3.3.2.2. loが用いられている例 .....	168
4.4.3.3.2.3. 人の男性複数形のle語法.....	171
4.4.3.3.2.4. 物のle語法 .....	174
4.5. まとめ .....	175
5. 項数 .....	181
5.1. はじめに.....	181
5.2. se leの組み合わせ .....	181
5.3. 分析.....	182
5.3.1. le語法圏出身者の作品.....	182
5.3.2. 非le語法圏出身の作者による作品 .....	192
5.4. まとめ .....	195
6. まとめ.....	197
7. 参考文献 .....	200
8. 資料体.....	206

## 1. 導入\*

スペイン語には、本来三人称直接目的格の機能を果たす人称代名詞lo(s), la(s)の代わりに、同機能を果たす代名詞として同人称の間接目的格人称代名詞le(s)を用いるle語法(leísmo)と呼ばれる現象がある。現在、同現象はスペイン語圏全域でみられるわけではなく、その使用法や出現率は地域ごとに異なるとされている。また、le語法使用者はもっぱらleのみを使用しているわけではなく、非le語法使用者であっても文脈によってはleを使用することがあると考えられている。

これまで形態的および統語的要因(Cuervo1895)、ラテン語の影響とスペイン語におけるその後の発展(Lapesa2000)、通時的考察(Echenique Elizondo1981)、他動性および語用論的評価(García1975)、(Flores2004, 2006, 2007)、地域差(Fernández-Ordóñez1993, 1994, 1999, 2001)など様々な立場から同現象の起源、具体的な変遷および実態を明らかにすることが試みられてきたが、管見の限り十分には明らかにされていない。ただし、le語法の出現率は歴史を通じて増加していったことは明らかにされている。たとえば、Lapesa(1981, 2000)によると、le語法は*Cantar de Mio Cid*などの古い文書においてすでにみられ、15世紀には人の男性単数のle語法が一般化したとしている。

本研究は、le語法がみられやすい文脈を明らかにするために、同現象がどのような文脈をもとにして通時的に拡大していったのかを示すことを目的としている。そこで、高橋(2022)ではle語法の初期における出現傾向を考察するために、13世紀から15世紀までの中世に焦点を当て、中世に書かれた8文学作品において特定の意味の動詞および特定の条件を満たす15の動詞を対象とし、le語法が中世を通じてどのように拡大していったのかを通時的に考察した。その結果、中世スペイン語では他動性の低い文脈においてle語法が出現しやすい可能性があることが確認された。

したがって、本論文ではより広範な時代からle語法の出現傾向を通時的に考察するために、13世紀から20世紀初頭までを対象とし、le語法がどのように拡大していったのかを考察する。上記の時期におけるle語法の出現傾向の通時的考察を適切におこなうために、作者の出生年を考慮しつつ、高橋(2022)の資料体である中世に書かれた8文学作品および16世紀以降に書かれた文学作品を資料体として選定する。また、16世紀以降の作品については、le語法がみられやすい文脈を知る手がかりとするために、通常le語法がみられないとさ

---

\* 本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラムJPMJSP2138の支援を受けたものです。

れている非le語法圏出身者によって書かれた作品も取り扱うこととする。本論文の考察手法は以下のとおりである。まず、資料体からスペイン語の三人称の弱形代名詞(le(s)、lo(s)、la(s)、語尾消失形l’、le(s)の方言的な異形li(s))が目的語として用いられている例をすべて収集し、その指示対象を分析し、指示対象ごとのle語法の出現率を算出する。さらに、Hopper&Thompson(1980)が提唱する他動性の度合いを測る項目をもとに、本研究で使用する他動性の度合いを測る項目を構築し、それぞれの例においてle(s)およびli(s)が直接目的語として用いられている要因と語源を維持した形態lo(s)またはla(s)が用いられている要因を他動性の観点から見出す。このようにして、le語法の拡大を促した要因を探り、le語法の出現傾向および変遷を考察する。

また、他動性と直接目的語の形態選択の関連を論じている研究として、García(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)があげられるが、これらの研究はHopper&Thompson(1980)が提唱する他動性の度合いを測るすべての項目を考慮して分析をしているわけではない。さらに、leの使用を促す項目とloの使用を促す項目が併存する場合、どちらの項目が形態選択において優先されるのかが論じられていない。したがって、本論文では、García(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)において論じられていない他動性の項目を取り入れるとともに、他動性の各項目を細かく分類して分析をおこなうことで、他動性がどのように直接目的語の形態の選択に影響しているのかを明らかにする。

本論文の次章以降の構成は次のとおりである。次章では、スペイン語の三人称の弱形代名詞が非語源的に使用されるようになった要因に関する仮説を述べている先行研究を概観する。非語源的語法の発生と拡大に関する仮説は、伝統的仮説と1975年以降出現した新たな仮説の2つに大別される。まず、Cuervo(1895)によって提唱された伝統的仮説を考察する。同仮説では、形態による有生/無生および性の区別において三人称の弱形代名詞の各形態がもつようになった機能およびその発展を明らかにすることが試みられている。一方、新たな仮説のうちのひとつであるFernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)は、地域によって三人称の弱形代名詞の体系は異なるとし、地域ごとに異なる体系が生じた過程に関する仮説を論じている。また、もうひとつの新たな仮説であるGarcía(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)は、三人称の弱形代名詞の形態の選択は対格および与格に典型的な意味に基づいているとし、直接目的語が与格に典型的な意味およびそこから派生する意味をもつ場合、le語法がみられやすいと考えている。次に、第3章ではle語法圏およびスペイン全域における傾向としてle語法の歴史的変遷を論じている先行研究および非le語法圏



におけるle語法の歴史的変遷を観察した先行研究を概観したのち、本研究の資料体から収集されたデータから、両地域において非語源的用法がどの程度用いられてきたのかを通時的に示す。続いて、第4章ではHopper&Thompson(1980)が提唱する他動性の度合いを測るパラメータを紹介し、格標示の仕組みと他動性によって生じる格分裂のタイプを確認したのち、本研究の資料体における直接目的語の形態の選択を他動性と関連して考察する。さらに、第5章では3つの参与者からなる三項文を取り扱い、項数によると考えられる形態選択の制限がみられるのかどうかを考察する。最後に、第6章では本研究の総括をおこない、今後の展望を示す。

## 2. 非語源的語法の発生と拡大

### 2.1. はじめに

本章では、三人称の弱形代名詞が非語源的に使用されるようになった要因に関する仮説を提案している先行研究を概観する。ここでの非語源的用法とは、le語法、la語法<sup>1</sup>、lo語法<sup>2</sup>を指す。

Fernández-Ordóñez(1993)によると、非語源的語法の発生と拡大に関する仮説は基本的に2つにわけられてきているとされていることから、本研究でも同分類を踏襲する。これら2つの仮説は、方法論に変化が生じた1975年を境に区別されている。ひとつめは、形態自体の性質に注目し、各形態がもつようになった機能について説明している伝統的仮説である。同仮説はCuervo(1895)によって提唱され、後にFernández Ramírez(1987)やLapesa(2000)によって発展された。ふたつめは、新たな仮説と呼ばれるものであり、様々なアプローチから非語源的語法の発生と拡大を説明する1975年以降のものを指す。同仮説には、三人称の弱形代名詞の体系の地域における違いについて論じているもの(Fernández-Ordóñez:1993, 1994, 1999, 2001)や形態の選択と他動性の関連を論じているもの(García1975)、(Flores:2004, 2006, 2007)がある。

### 2.2. 伝統的仮説

ここでは、伝統的仮説を観察する。Cuervo(1895:234-244)は、le語法の発生は形態的要因と統語的要因に起因しているとし、次のように述べている。まず形態的要因について、leが対格および与格の機能をもつようになったことは、両機能をもつ他の弱形代名詞me、te、seが関係していると考えている。中世スペイン語では弱形代名詞me、te、seの-eが頻繁に省略され、*A lo quem semeia*のように動詞に先行する語の語尾や*Diot con la lanza*のように動詞の語尾に子音だけが結びついて表されていた(Cuervo1895:234)。これが示すのは、代名詞が対格の機能を果たしているのか、与格の機能を果たしているのかは重要ではなかったということである。また、13世紀から19世紀末までに書かれた文書から収集した

---

<sup>1</sup> 本来三人称間接目的格の機能を果たす人称代名詞le(s)の代わりに、同機能を果たす代名詞として同人称の直接目的格人称代名詞la(s)を用いる語法。Fernández Ramírez(1987:47-48)によると、la語法は、その拡大と頻度においてle語法よりもかなり劣る。

<sup>2</sup> 本来三人称間接目的格の機能を果たす人称代名詞le(s)の代わりに、同機能を果たす代名詞として同人称の直接目的格人称代名詞lo(s)を用いる語法。複数形における使用頻度が高く、これら3つの非語源的用法のなかで使用がもっともまれである(Fernández-Ordóñez1999:1320)。

データを精査した結果、語尾消失形lは男性の対格および与格、女性の与格として用いられるが、中性形として用いられている例はなく、中性形には常にloが用いられていると述べている。このように、中性形loが維持した性による区別をするために、女性にはlaが用いられる一方で、性の区別を欠く他の弱形代名詞との同化によって女性対格としてleが用いられている例もみられると指摘している。

以上のことを踏まえてCuervo(1895:235)は、他の弱形代名詞の語尾消失形m'、t'、s'の影響によってleおよび男性形loが語尾消失形lに短縮されたとすれば、格の区別をもたないme、te、seにより似ている形態leがlにより合致し、対格と与格の両方の機能をもつようになったと考えられると述べている。このように、他の弱形代名詞の影響によってleが対格と与格の機能をもつようになったとすれば、非語源的語法のなかでle語法が最初に拡大し、もっともよくみられる語法であることが説明できると考えている(Cuervo1895:235)。つまり、最初にleがloの機能を吸収し、同様に複数形でもlosの代わりにlesが用いられるようになった。このように、格の区別が消失すると、lo(s)およびla(s)もle(s)に取って代わった、つまりlo語法およびla語法が発生した(Cuervo1895:235)。

続いて、統語的要因として次のように述べている。以下に、leとloの混同が起りやすい動詞および構造の例をあげる。たとえば、*aconsejar a los niños/aconsejar la retirada, avisar el peligro/avisar a alguien del peligro, enseñar la gramática/enseñar al que no sabe*のように直接目的語に人も物も従えることができる動詞がスペイン語には非常に数多くある(Cuervo1895:236)。このような動詞では、人を指示対象とする代名詞は物を表す直接目的語がある場合、与格で表され、物を表す直接目的語がない場合、対格で表される。たとえば、*los aconseja para que sean modestos/les aconseja la modestia, los avisa del peligro/les avisa el peligro, los enseña/les enseña buena doctrina*となる(Cuervo1895:236)。しかし、物を表す対格と人を表す与格をもつ構造が規範的な形式であり、代名詞化された人を表す目的語が普通先行するので、人を表す目的語に与格の形態が先んじて与えられる。したがって、*advertir á alguien del peligro*のような人を表す語を対格として用いた別の構造の文または物を表す目的語が省略された文、つまり破格構文がつくられる。また、同様の例として、他動詞がその動詞と同じ意味を持つ名詞と軽動詞の組み合わせによって同義になるものがある。たとえば、*cansar a alguien*は*causar a alguien cansancio*、*consolar a alguien*は*dar a alguien consuelo*に言い換えられ、*Consolarle en sus trabajos*

などの例がみられる(Cuervo1895:237)。また、不定詞や目的語を修飾する叙述補語を伴う動詞でもleとloの混同がよくみられると指摘している。

Cuervo(1895)は、以下のように考えをまとめている。形態的要因によって生じたleとloの混同が統語的要因によって拡大した。統語的要因によって複数形および女性形のle語法もみられるが、人の男性単数形とは違って形態的要因を伴っていなかったために使用頻度が低い。結果、格の区別があいまいになり、性の区別を重視してそれぞれの形態が用いられるようになったとしている。

20世紀の文法家であるFernández Ramírez(1987)は上述のCuervo(1895)の主張を認めながらも、le語法の発生にはCuervo(1895)が部分的あるいは漠然としか述べていない他の要因も関与していると考え、le語法の発生には形態による性の区別に加えて、人と物の区別が関与しているとしている。まず、性の区別について、スペイン語の起源であるラテン語では男性単数対格はILLUM、中性形はILLUDで表されていたが、スペイン語では両形態ともloとなった。この性の区別を回復させるために指示代名詞este/esta/esto、ese/esa/eso、aquel(le)/aquella/aquelloと同様に、男性形にはle、女性形にはla、中性形にはloを用いる範疇が確立された。そのため、le語法はほとんどの場合、指示対象が男性である場合に用いられ、ロマンス諸語の中性形には複数がなく、los/lasの対立が指示代名詞estos/estas, esos/esas, aquellos/aquellasと完全に一致するため、複数形よりも単数形でよくみられるとしている。また、Lapesa(2000)はこのFernández Ramírez(1987)の主張を受け入れ、主格の人称代名詞および指示代名詞の複数形や一、二人称複数形の弱形代名詞nos、(v)osは対格でも与格でも同形であるため、lasや頻度は低いがlosが与格として用いられるようになったと考えを発展させている。したがって、他の人称代名詞も指示代名詞ももたない格の区別が三人称の弱形代名詞でも消失し、性の区別が強化された(Lapesa2000:299)。次に人と物の区別について、Fernández Ramírez(1987)は、人を指す形態としてそもそも人を指すことが多い与格が選ばれたとしている。このことは、指示対象が人である場合にle語法がよくみられる理由を説明している。この主張もまた、Lapesa(2000)によって受け入れられている。

## 2.3. 新たな仮説

### 2.3.1. 地域差

#### 2.3.1.1. はじめに

ここでは、1975年以降に提唱された新たな仮説を考察する。Fernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)は、現在、スペインにおいて用いられている三人称の弱形代名詞の体系は地域によって異なるとし、それぞれの地域の体系における形態の選択に用いられる基準の違いからle語法の拡大を説明している。格の混同が確認される参照体系またはカスティーリャ体系と呼ばれる体系は、スペイン中央部でみられ、同地域は非le語法圏と呼ばれる格区別体系を用いる地域に囲まれている(Fernández-Ordóñez1993:11, 2001:10)。ただし、両地域ははっきりと隔てられているわけではなく、移行体系を用いる地域が間に存在する。同体系では格に基づいて形態が選択される一方で、参照するものに基づいて形態が選択される(Fernández-Ordóñez1993:13, 2001:10)。さらに、アストゥリアス・カンタブリア地方の体系、バスク地方の体系がある。

次項ではFernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)が提唱する参照体系が用いられる地域と格区別体系が用いられる地域をわける等語線が走っている道筋を観察する。また、2.3.1.3.では各地域の三人称の弱形代名詞の体系を紹介する。Llorente(1980)もまた、三人称の弱形代名詞の体系は地域によって異なると考えており、各地域の使用法はFernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)が提唱しているものとおおむね一致している。

#### 2.3.1.2. 等語線

Fernández-Ordóñez(1993, 1994)によると、参照体系が用いられる地域と格区別体系が用いられる地域をわける等語線がある。また、同等語線は参照体系が用いられる地域を格区別体系が用いられる地域が囲むように引かれている。つまり、同等語線よりも内側の地域では参照体系が用いられ、等語線よりも外側の地域では格区別体系が用いられる。

これらの等語線は、西側、東側、南側にみられ、次のような道筋をたどっている。西側の等語線については、レオン(León)東部地域およびサモラ(Zamora)北東部地域と両県の他の地域をわけるかたちで南北に走っている。その後、同等語線はサモラとバリャドリッド(Valladolid)の境界に一致するかたちで南下し続け、より南に位置する3県(サラマンカ(Salamanca)、カセレス(Cáceres)、バダホス(Badajoz))の東部地域を同県の他の地域から分断している(Fernández-Ordóñez1993:11, 1994:45-46)。南側の等語線は、バダホスの北

東に位置するエレラ・デル・ドゥケ(Herrera del Duque)市からトレド(Toledo)とシウダー・レアル(Ciudad Real)をわけるかたちで走っている(Fernández-Ordóñez1993:11, 1994:46-48)。東側の等語線は、トレド東部とグアダラハラ(Guadalajara)西部を含むかたちでソリア(Soria)方面に北上し、ブルゴ・デ・オスマ(Burgo de Osma)市西部とソリア東部およびアグレダ(Ágreda)を離している。さらに、サラス・デ・ロス・インファンテス(Salas de los Infantes)からベロラド(Belorado)に向かって北上し、ラ・リオハ(La Rioja)に入り、アロ(Haro)市でエブロ(Ebro)川と合流するまでティロン(Tirón)川の河床をたどり、同県の他の地域と北西部をわけている(Fernández-Ordóñez1993:11, 1994:48)。

### 2.3.1.3. 各地域の体系

ここでは、Fernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)が提唱する各地域の三人称の弱形代名詞の体系を紹介する。まず、格区別体系はラテン語起源であり、すべてのロマンス語に存在する体系である(Fernández-Ordóñez2001:35)。また、同体系ではラテン語の語源が重視され、その名の通り、格によって形態の区別がなされている。さらに、同体系は先述の等語線よりも外側の地域、たとえば、ガリシア(Galicia)、アストゥリアス(Asturias)西部、カスティーリャ・イ・レオン(Castilla y León)に属する3県(レオン、サモラ、サラマンカ)の大部分の地域、ナバラ(Navarra)南部、ラ・リオハ東部、カスティーリャ・ラ・マンチャ(Castilla la Mancha)南部、アラゴン(Aragón)、カタルーニャ(Cataluña)、バレンシア(Valencia)、アンダルシア(Andalucía)、ムルシア(Murcia)、エストレマドゥーラ(Extremadura)の大部分の地域、イスパノアメリカのほとんどの国などの非常に広い地域でみられる。このような地域ではle語法はあまりみられず、非le語法圏と呼ばれている。

	単数形			複数形	
	男性	女性	中性	男性	女性
対格	lo	la	lo	los	las
与格	le			les	

表2-1 格区別体系(Gómez Seibane(2016:10)を参考に作成)

次に、参照体系は格ではなく、指示対象の相違(可算・不可算)に基づいて形態が選択される体系であり、可算名詞ではもっぱら性と数に基づいて形態が選択される。また、同体系

は先述の等語線よりも内側の地域、たとえばカスティーリャ・イ・レオンの大部分の地域、ラ・リオハの北西部の一部地域、マドリード、カスティーリャ・ラ・マンチャ北部、エストレマドゥーラの一部地域でみられる。さらに、男性複数形において用いられる形態の違いから次の(A)から(C)の3つの地域に分けられる。すなわち、(A)北部(パレンシア(Palencia)、ブルゴス(Burgos)北西部、バリャドリードなど)ではlesが用いられ、(B)南部(サラマンカ東部、アビラ(Ávila)、カセレス東部、トレド西部、マドリード西部など)ではlosが用いられ、(C)前述の2つの地域の上に位置する地域(ブルゴス東部および南部、バリャドリード南部、セゴビア(Segovia)北部および中部、ソリア西部など)では、lesとlosが共存している(Fernández-Ordóñez1993:12-13, 1994:12-24, 1999:1360-1363, 2001:11-12)。

	可算				不可算
	単数形		複数形		
	男性	女性	男性	女性	
対格 および 与格	lo	la	les(A) los(B) les~los(C)	las	lo

表2-2 参照体系(Fernández-Ordóñez(1993:12, 1994:13,17,20, 1999:1360, 2001:12)を参考に作成)

続いて、参照体系が用いられる地域の周辺地域で用いられる移行体系を考察する。同体系は次の3つの地域のものに分けられる。すなわち、西部(西の境界をボルマ(Porma)川とエスラ(Esla)川とし、東の境界をセア(Cea)川とするレオン東部)、北東部(ビスカヤ(Vizcaya)のラス・エンカルナシオネス(Las Encartaciones)地区、ブルゴス北東部)、南東部(シウダー・レアル北西部、トレド東部、グアダラハラ西部)である。

各移行体系の用法は次のとおりである。まず、西部移行体系では、男性可算名詞の対格としてle(s)がlo(s)と競合している。また、与格においてla(s)はle(s)と共存しており、女性不可算名詞にはloもlaも用いられるが、laが優勢である(Fernández-Ordóñez1993:13, 1994:24-25)。

	単数形				複数形	
	可算		不可算			
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
対格	le~lo	la	lo	la	les~los	las
与格	le	la	lo~le	la~le	les	las

表2-3 西部移行体系(Fernández-Ordóñez(1994:25)を参考に作成)<sup>3</sup>

続いて、北東部移行体系については、単数対格では主に指示対象に応じて形態が選択されている。つまり、le、laはそれぞれ男性可算名詞、女性可算名詞に用いられ、loは性に関係なく不可算名詞に用いられる。ただし、男性可算名詞ではいまだにleはloと競合している。一方、複数形では指示対象が有生である場合、女性形では頻度は低いものの、男性形ではlesがlosの代わりに対格としてよく用いられる(Fernández-Ordóñez1993:14, 1994:43-44, 2001:14-15)。

	単数形				複数形	
	可算		不可算			
	男性	女性	男性	女性	男性	女性
対格	le(<lo)	la	lo	la(<lo)	los(<les)	las
与格	le				les	

表2-4 北東部移行体系(Fernández-Ordóñez(1994:44. nota81, 2001:14)を参考に作成)<sup>4</sup>

さらに、南東部移行体系については、男性単数対格以外では格区別が維持されており、le、loはそれぞれ有生、無生の男性名詞に用いられ、laは女性名詞に用いられる。また、格区別体系が用いられる地域に近い地域では、leは指示対象が人である場合にもっともよく用いられる。反対に、参照体系が用いられる地域に近い西側の地域では、leは指示対象が

<sup>3</sup> Fernández-Ordóñez(1994:24, nota47)によると、データの計算結果、同体系が用いられている地域におけるla(s)の女性与格としての使用率およびlaの女性中性形としての使用率は80%以上を占めている。そのため、使用率の低い女性与格としてのle(s)および女性中性形としてのloはFernández-Ordóñez(1994:25)の同体系の表には記載されていないと考えられる。

<sup>4</sup> 同表でも西部移行体系と同様に、女性与格としてのlasは使用率が低いためにFernández-Ordóñez(2001:14)の同体系の表には記載されていないと考えられる。



有生の男性である場合に用いられる。さらに、参照体系が用いられている地域に近い地域であればあるほど、leはすべての可算名詞に用いられ、loは不可算の女性名詞として用いられる傾向にある(Fernández-Ordóñez1993:13, 1994:27)。

	单数形			複数形	
	男性		女性		
	有生	無生			男性
対格	le	lo	la	los	las
与格	le			les	

表2-5 南東部移行体系(Fernández-Ordóñez(1994:27, 2001:14)を参考に作成)

また、カンタブリア地方の体系は、アストゥリアス中部および東部でみられるアストゥリアス地方の体系<sup>5</sup>の地域バリエーションのひとつの体系である。同体系では基本的に格によって形態が選択されているが、指示対象が男性単数の可算名詞の場合、対格にも与格にもleが用いられる。一方、指示対象が不可算名詞の場合、対格には性に関係なくloが用いられる(Fernández-Ordóñez1994:34-37, 1999:1356-1357)。

	可算				不可算
	単数形		複数形		
	男性	女性	男性	女性	
対格	le	la	los	las	lo
与格	le		les		le

表2-6 カンタブリア地方の体系(Fernández-Ordóñez(1994:35, 1999:1356, 2001:13)を参考に作成)

さらに、バスク地方の体系は、バスク(Vasco)地方とナバラ北部にみられる体系である(Fernández-Ordóñez1993:11, 1994:37, 1999:1349-1350, 2001:13)。同体系には格の区別は存在するものの、指示対象が有生物である場合、性の区別なく対格でも与格でもle(s)が用

<sup>5</sup> アストゥリアス地方の体系では単数対格において可算/不可算の形態による区別がみられ、可算の男性名詞、女性名詞にはそれぞれlo、laが用いられ、不可算の男性名詞および女性名詞にはloが用いられる(Fernández-Ordóñez1999:1355-1356)。

いられる(Fernández-Ordóñez1993:11, 1999:1350, 2001:13)。一方、指示対象が無生物である場合、対格は無標またはlo(s)/la(s)で表され、与格はle(s)で表される(Fernández-Ordóñez1999:1350, 2001:13)。

	有生	無生		中性
	男性	男性	女性	
対格	le(s)	∅/lo(s)	∅/la(s)	∅/lo
与格	le(s)	le(s)		le

表2-7 バスク地方の体系(Fernández-Ordóñez(1994:38, 1999:1350, 2001:14)を参考に作成)

このように、各地域において用いられる三人称の弱形代名詞の体系は異なることを踏まえて、Fernández-Ordóñez(1999)は、参照体系における形態の用法からle語法が有生の単数形でよくみられる理由を説明することが可能であるとしている。まず、指示対象が有生物である場合によくみられる理由としてKlein-Andreu(1981)の仮説を取り入れている。Klein-Andreu(1981:290)によると、有生物は常に可算名詞であるのに対し、単数形では無生物はleで表される可算名詞である場合もあれば、loで表される不可算名詞である場合もあるため、指示対象が無生物である場合、可算名詞であってもleが用いられるとは限らず、leとloの交替がよくみられる。さらに、Fernández-Ordóñez(1999:1363)は、可算/不可算による形態の弁別が参照体系とカンタブリア地方の体系でみられる、つまりある程度広範な地域で同弁別がみられることもまた、指示対象が有生物である場合、le語法がよくみられる理由であると考えている。また、複数形よりも単数形でle語法がよくみられるのは、複数形のle語法は参照体系の一部地域(2.3.1.3.で示した(A)およびlosと競合している(C)の地域)のみでしかみられないためであるとしている。つまり、複数形のle語法はスペインのごく一部の地域でしかみられないため、全体としてはあまりみられないと考えている(Fernández-Ordóñez1994:22, 1999:1363)。

#### 2.3.1.4. 形態統語的変化の理論と再構築

le語法の発生と拡大について、Fernández-Ordóñez(1994, 1999, 2001)は、言語接触という外的要因によってもたらされたと考えている。また、形態統語的変化および各地域の体系同士の比較によって、前述の体系のなかで古い体系を仮定することができるとし、格区

別体系、バスク地方の体系、アストゥリアス地方の体系が古い体系であるとしている。一方、参照体系は格の区別を完全になくしているため、もっとも革新的な体系である(Fernández-Ordóñez2001:35)。

以下に、上記のFernández-Ordóñez(1994, 1999, 2001)が提唱する言語接触によるle語法の拡大の過程を示す。アストゥリアス地方の体系と格区別体系を除く、前述のすべての地域の体系でle語法が存在するが、このことはle語法がみられるすべての体系がバスク地方の体系を起源としているためである(Fernández-Ordóñez2001:31)。同地方の体系はle語法がインド・ヨーロッパ語に属さないバスク語との接触という外的要因を有する唯一の体系である。バスク語には文法上の性の区別がないため、バスク語とスペイン語の二言語話者にとって、性の区別を習得することは困難であった。したがって、典型的に性の区別がなく、有生物を指す与格の形態が対格としても用いられるようになった(Fernández-Ordóñez1994:49-50, 1999:1355, 2001:31)。

また、Fernández-Ordóñez(1994:49, 1999:1358, 2001:33)は、カンタブリア地方の体系において、leが対格として用いられることは東に位置するバスク地方と何百年にもわたる接触があったことに由来していると考えている。これら両地方の体系はともに間接目的語の形態として与格leを用いるラテン語に由来する言語であり、構造においてわずかな違いしかみられない似通った言語である。したがって、バスク地方の体系で男性対格として用いられるleはカンタブリア地方の体系に取り入れられやすい状況にあった(Fernández-Ordóñez2001:33)。再分析の結果、アストゥリアス・カンタブリア地方の他の代名詞の体系や形容詞にも存在する性と可算/不可算の区別を維持するために、カンタブリア地方の体系においてleは男性可算名詞を表す形態となった(Fernández-Ordóñez1994:51, 1999:1358-1359, 2001:34)。

さらに、Fernández-Ordóñez(1999, 2001)によると、参照体系はカンタブリア地方の体系に直接由来する体系であるとみなすのにもっとも多く項目を有している。ひとつめは、文法的観点からみると、可算/不可算を区別する点でカンタブリア地方の体系と一致していることである(Fernández-Ordóñez2001:35)。ふたつめは、格の区別は失われていないものの、カンタブリア中東部では男性単数以外でも格の区別の混同の初期段階がみられることである。たとえば、la(s)およびloのそれぞれ女性与格、中性与格への拡大や、頻度は低いものの、複数形のle語法もみられることなどがあげられる。一方、カンタブリア山脈の南の斜面の地域やブルゴス北西部に近い地域では、la(s)が女性与格を表す形態として優勢で

ある。しかし、同地域においてもlo、lesはそれぞれ中性与格、男性複数対格においてlosと競合している。また、パレンシア、ブルゴスといったより南の地域では参照体系が用いられる(Fernández-Ordóñez1999:1359-1360, 2001:35-36)。つまり、南下すればするほど、格区別が消失し、性による区別がなされていると考えられる。

同様に、移行体系の発生およびle語法拡大過程のなかでの位置づけについてFernández-Ordóñez(1994, 2001)は次のように述べている。まず、同体系は、バスク地方の体系およびカンタブリア地方の体系と部分的に一致しており、このことは移行体系でleが再分析され、最初は指示対象が有生物である場合のみであったが、後に男性可算名詞の形態として用いられるようになった経路を示していると考えられる(Fernández-Ordóñez2001:36)。また、同体系で男性を指すためにもつばらle語法が用いられていることは、同体系をバスク地方の体系とカンタブリア地方の体系の間に位置づけることでしか説明されえないとしている。ただし、このことは西部移行体系および北東部移行体系を地理的に説明することはできるが、地理的に離れた地域でこれらの体系と似ている体系、つまり南東部移行体系がみられる理由を説明することはできない(Fernández-Ordóñez2001:36)。

この理由は、Fernández-Ordóñez(2001)によると、西部移行体系および北東部移行体系と南東部移行体系にみられる違いに隠されているとしている。その違いとは、西部移行体系および北東部移行体系ではとくに男性の有生の複数対格としてlesが用いられるのに対し、南東部移行体系ではlosのみが用いられることである。この違いは、南東部移行体系が他の2つの移行体系とは発生過程が異なることを示唆している(Fernández-Ordóñez 2001:36)。また、このように南東部移行体系では指示対象が男性である場合でも、lesが対格として用いられないのは、カンタブリア地方の体系では複数形のle語法がほとんど用いられず、参照体系が用いられている地域の南部ではlosが男性複数対格として一般化されたためであるとしている。したがって、西部移行体系および北東部移行体系と南部移行体系には重大な年代的違いがある。すなわち、西部移行体系および北東部移行体系からカンタブリア地方の体系が生じ、同地方の体系から南部移行体系が生じた(Fernández-Ordóñez2001:36)。

以下に、Fernández-Ordóñez(2001)が提唱する三人称の弱形代名詞の体系の連関を表した図を示す。

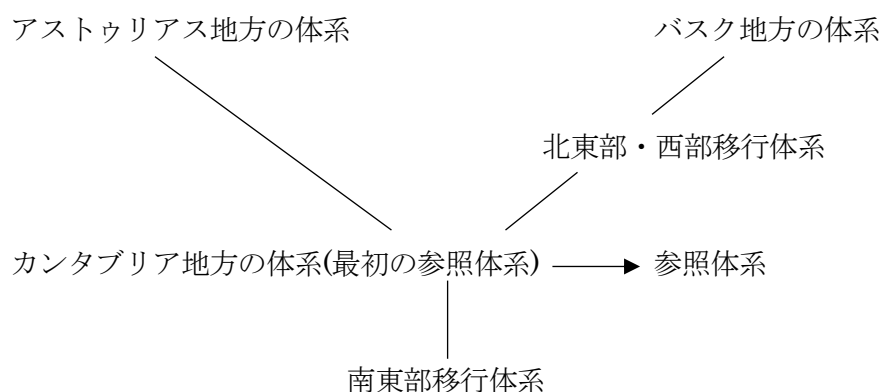


図2-1 三人称の弱形代名詞の体系の連関図(Fernández-Ordóñez(2001:38)を参考に作成)

また、Fernández-Ordóñez(2001:55)によると、上記の言語接触はレコンキスタに伴う再植民活動によって生じたとしている。しかし、非le語法圏とされるカスティーリャ・ラ・マンチャ地方およびアンダルシア地方の再植民活動は13世紀にすでにおこなわれていたが、これらの地域には参照体系は広まらなかった。その理由として、Fernández-Ordóñez(2001)は次の2つの理由をあげている。ひとつめは、スペイン中央部からタホ川(Tajo)までの再植民はゆっくりと300年以上かけて自然なかたちで南方向に進められたのに対し、カスティーリャ・ラ・マンチャ地方およびアンダルシア地方の再植民はわずか50年ほどで急速になされたため、何世紀ものあいだ人口密度が低い状態で広大な地域の占領がなされていたことである。ふたつめは、13世紀にカスティーリャの人々がアンダルシア地方の再植民に失敗し、14、15世紀に出身地不明の人々によって再植民がなされたが、その頃、同地方の言語変種が確立されたことである。したがって、アンダルシア地方ではle語法は一般化されなかった(Fernández-Ordóñez2001:55)。ただし、このように、非le語法圏に分類される地域では割合は非常に低い、le語法がみられないわけではない(Fernández-Ordóñez1999:1322)。

## 2.3.2. 形態の選択と他動性

### 2.3.2.1. García(1975)

García(1975)は、三人称の弱形代名詞の形態の選択と他動性の関連を示唆する先行研究のひとつである。García(1975:274)によると、leで表された参与者は、loで表された参与者と比べ、活動性においてより高い位置を占める。したがって、より「動作主らしく」、もっとも活動的な動作主により近いとしている。

まず、3つの参与者からなる事象を考察する。García(1975:277)によると、同事象では主語は焦点内にあり、直接目的語と間接目的語は焦点外にある。それぞれの役割については、主語はもっとも活動的であるのに対し、直接目的語はもっとも非活動的である。一方、間接目的語はもっとも非活動的な直接目的語と比べ、事象に対してより多くの効力を持ち、責任があり、もっとも活動的な主語により近い。したがって、間接目的語は主語と直接目的語のあいだに位置づけられる(García1975:305)。そのため、García(1975:277)は3つの参与者からなる事象においてそれぞれの参与者にどの形態を用いるかは非常にはっきりしているとし、以下の例(2-1)を用いて説明している。

(2-1) Le compré el libro ‘I bought the book for/from him’

(García(1975:277)より引用)

García(1975:277)によると、同例では本(el libro)がもっとも非活動的な役割を果たしており、代名詞に置き換えられると、loで表されうる。一方、leで表された人物は本の売り手または結果的に受益者となる人物、本のもらい手を指し、本よりも売買においてより活動的な役割を果たしている。そのため、より非活動的な意味をもつleで表されるほうがもっとも非活動的な意味をもつloで表されるよりも適切であるといえると考えている。また、指示対象が人であるという点で、leの指示対象は本よりも動作主のような役割を果たす、つまりより活動的である可能性が高いとしている。

一方、2つの参与者からなる事象について、García(1975:305)は次のように述べている。同事象では、直接目的語がもっとも活動的な役割を果たす主語と対極をなす場合、loが用いられる。しかし、直接目的語が主語と対極をなしていない場合、leが用いられる。以下に、García(1975)が2つおよび3つの参与者からなる事象を図で表しているものを示す。

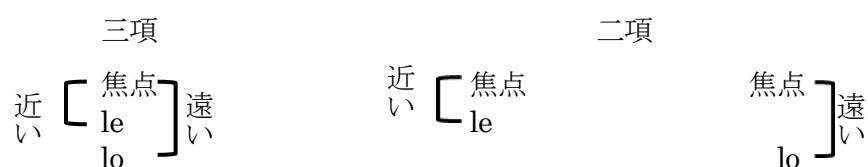


図2-2 loに対するleの位置(García(1975:305)を参考に作成)

2つの参与者からなる事象では、図2-2の二項の左側の図に示されているように、焦点内の参与者と焦点外の参与者の距離が近い場合、le語法がみられやすいとしている(García1975:305)。また、両参与者を近づける主要な要素として次の3つをあげている。

ひとつめは、主語に関するものであり、主語が通常よりも低位置である場合、たとえば、主語が無生物や女性、社会的地位の低い人物である場合や再帰不定人称である場合で(García1975:307-316)、以下に示す再帰不定人称の例(2-2)と主語が特定の人物である例(2-3)を用いてインフォーマント調査をおこなった。

(2-2) --Y cuál fue el fin de Rodríguez?

--Pues cuál iba a ser? Se \_\_\_\_ fusiló por delator.

(2-3) De pronto, le habló a Antenor como si \_\_\_\_ conociera; hizo alusión ponderativa a su destreza física y a su habilidad para el visteo.

(García(1975:313-314)より引用)

インフォーマント調査の結果、García(1975:314)は次のように述べている。(2-2)は再帰不定人称の例である。同例の動詞fusilar(撃つ)は2つの参与者の活動性の程度の違いの大きい動詞であるため、loが好まれる文脈であるにもかかわらず、28%の被験者がleを選択した。一方、主語が特定の人物である例(2-3)では、わずか5%の被験者のみがleを選択した。このように、再帰不定人称において直接目的語としてleが好まれるのは、再帰不定人称ではもっとも活動的な役割を果たす主語がseで示され、焦点から外されており、これは焦点を当てることができる特定の实体よりも焦点外の参与者に近いためであるとしている(García1975:314)。

また、焦点内の参与者と焦点外の参与者の距離を近づけるふたつめの要素は、目的語に関するものであり、目的語が通常よりも高位置にある場合である。たとえば、目的語が人である場合、目的語の活動性が高い場合、話者が目的語の指示対象に対する尊敬などを表す場合などでは、目的語が通常よりも高位置にあり(García1975:317-342)、目的語の活動性の高低による形態の選択がみられる例として次の例を用いて説明している。

(2-4) Lo llevé al hospital.

‘I took him to the hospital (inferred: in an ambulance)’

(2-5) Le llevé al hospital.

‘I gave him a ride to the hospital (he might have walked)’

(García(1975:322)より引用)

García(1975:323)によると、(2-4)では直接目的語が指す人物は身動きを取ることができず、loで表されている。一方、(2-5)では直接目的語が指す人物は車に乗せてもらっているものの、自力で歩いた可能性があり、leで表されている。

また、目的語に関する形態の選択のもうひとつの例として、García(1975)は話者の評価、つまり、話者が伝えたい事柄によって形態の選択がなされるとし、以下の対になった例を用いて説明している。

(2-6) Tengo un médico amigo mío a quien estimo mucho desde que le vi operar.

(2-7) Lo conocés a Fulano? Le tengo una desconfianza bárbara desde que lo vi operar.  
(García(1975:337)より引用)

García(1975:337)によると、(2-6)では直接目的語としてleを用いることによって、指示対象の人物に対する尊敬や愛情の念が表現されているのに対し、(2-7)ではloが用いられており、指示対象の人物に対する不信が表現されている。

さらに、焦点内の参与者と焦点外の参与者の距離を近づける三つめの要素は、事象の特徴に関するものであり、相対的な活動性の程度が想像できない場合である(García1975:342-361)。たとえば、感情を表す動詞は行為を表さないため、leと共起しやすいが、強い感情を表す場合、loと共起すると考えている。また、同じ動詞であっても、leとloが用いられることがあるとしている(García1975:348-349)。

(2-8) Todos lo miraban con afecto y hasta el jefe estuvo de un humor jovial, contándole algunas anécdotas que lo entretuvieron y al mismo tiempo le disgustaron por no parecerle sinceras.

(2-9) C. Suárez esperó en el mostrador. No tenía ningún apuro y hasta le entretuvo esa animación tan ordenada.  
(García(1975:349)より引用)

逸話が聞き手を通常よりも強く楽しませている(2-8)では、直接目的語はloで表されているのに対し、聞き手に単に関心をもたせているだけの(2-9)では、直接目的語はleで表されている(García1975:349)。



このように、さまざまな要素が形態の選択に関係しているが、leとloの選択は常にそれぞれの形態の意味、つまりあまり活動的でないか、もっとも非活動的であるかにしなされている。したがって、焦点内の参加者との距離が通常よりも近い場合、leが用いられると考えている(García1975:368)。

### 2.3.2.2. Flores(2004, 2006, 2007)

ここでは、三人称の弱形代名詞の形態選択と他動性との関連を示唆するもうひとつの先行研究としてFlores(2004, 2006, 2007)を考察する。Flores(2004, 2006, 2007)もまた、García(1975)と同様、形態の選択は与格および対格に典型的な意味に基づいていると考えている。与格は典型的に事象の影響を部分的または間接的に受けている活動性の高い実体であり、個別化された人または有生物を指し、受益者、経験者、受取人を意味することが多い。一方、対格は与格ほど特定されていない有生物または無生物を指し、被動作主を意味することが多く、事象の影響を強く受けている。したがって、直接目的語が与格に典型的な特徴、つまり事象の影響を部分的または間接的に受けている活動性および特定性の高い実体を意味するという特徴に近づくと、与格の形態が用いられる傾向にあるとしている(Flores2004:143, 2006:681-682)。

このような与格および対格に典型的な意味に基づく形態の選択に加えて、これら2つの格に典型的な意味から派生する事象の他動性の度合いや話者の語用論的評価もまた形態の選択に影響している(Flores2004:141, 2006:680-681)。まず、事象の他動性の度合いについて、他動性の低い文脈、たとえば主語が被動作主、直接目的語の指示対象が活動的で、個別化されていない人物であること、不完了アスペクト、非現実的事象、非完結的事象、継続的事象などにおいて与格の形態が用いられる傾向にある(Flores2004:146-147, 2006:682, 2007:85)。また、目的語の活動性や受ける影響の程度は他動性の程度と密接に関係している(Flores2006:682)。次に、話者の語用論的評価について、擬人化や尊敬を表現したい場合、与格の形態が用いられ、物象化や軽蔑を表現したい場合、対格の形態が用いられるとしている(Flores2004:154, 2006:682-683)。

また、Flores(2006:674-675, 2007:85)によると、le語法に有利に働く事象の意味的特徴を示す語彙的、文法的文脈が存在する。たとえば、感情動詞や指示対象が人である直接目的語を要求する動詞、再帰不定人称、目的語が叙述補語を伴う構造、不定詞の従属節を伴う使役動詞の構造があげられると考えている。このような文脈では目的語の活動性が高く、

受ける影響の程度が低い、つまり与格に典型的な意味に基づいているため、与格の形態が用いられる傾向にあるとしている。

さらに、Flores(2006)はスペインおよびメキシコで12世紀から19世紀に書かれた文学作品および文書を資料体として考察をおこなった結果、以下のように述べている。3つの非語源的用法(le語法、la語法、lo語法)の動機においてもっとも重要な要因は、指示対象の有生性である。これは、格の典型的な意味および直示の意味から派生したものである。2番目に重要な要因は、主語が人であるか物であるかである。これもまた、格の典型的な意味から派生している。3番目に重要な要因は、動詞のアスペクトに関するものであり、実現動詞のような典型的な他動的事象とはかけ離れている動詞では与格の形態が用いられやすい。4番目に重要な要因は、現実の事柄を表しているか、仮想の事柄を表しているかである。5番目に重要な要因は、完了アスペクトであるか不完了アスペクトであるかである(Flores 2006:700)。

したがって、Flores(2006)は次のように結論づけている。考察対象の時期や地域に関係なく、非語源的用法の使用は事象の他動性に条件づけられており、語源を維持していればいるほど、この傾向は強くみられる。また、変異の初期では外的な要因、つまり指示対象の直示的な性質よりも格の典型的な意味に基づく事象の内的な要因が形態選択において重要であった。さらに、変異の主要な動機のなかで、事象の内的な要因が際立っているとしている(Flores2006:702)。

## 2.4. まとめ

本章では、三人称の弱形代名詞が非語源的に使用されるようになった要因に関する仮説を提案する先行研究を概観した。非語源的語法の発生と拡大に関する仮説は、伝統的仮説と1975年以降に現れた新たな仮説の2つに大別される。伝統的仮説では、形態による有生/無生および性の区別において三人称の弱形代名詞の各形態がもつようになった機能およびその発展を明らかにすることが試みられている。

一方、新たな仮説のうちのひとつであるFernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2000)では、地域によって三人称の弱形代名詞の体系は異なるとされ、le語法圏と非le語法圏を分ける等語線の走っている道筋およびスペイン各地域における体系が示されている。地域ごとに異なる体系が誕生した理由は、レコンキスタに伴う再植民活動によって言語接触が生じ、各地域の体系に取り入れられる際に再分析がおこなわれたためであるとしている。また、

一部地域の体系を除いて、le語法がすべての体系でみられるのは、これらの体系がバスク地方の体系を起源としているためであるとしている。ただし、再植民活動がうまくなされなかったカスティーリャ・ラ・マンチャ地方およびアンダルシア地方ではle語法は定着しなかった。また、カスティーリャ・ラ・マンチャ地方およびアンダルシア地方のように、非le語法圏に分類される地域でもle語法がまったくみられないわけではないとしている。

もうひとつの新たな仮説であるGarcía(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)は、形態の選択は対格および与格に典型的な意味に基づいているとしている。また、Flores(2004, 2006, 2007)は、これら2つの格に典型的な意味から派生する事象の他動性の度合いや話者の語用論的評価もまた形態の選択に影響していると考えている。

これらの先行研究では、le語法は指示対象が人である場合によくみられるという点では一致している。ただし、その根拠は同じである部分もあるが、異なる部分もある。たとえば、伝統的仮説とGarcía(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)は、指示対象が人である場合、le語法がよくみられるのは、そもそも与格は人を指すことが多いことを根拠としている点で一致している。しかし、Klein-Andreu(1981)の仮説を取り入れているFernández-Ordóñez(1999)は、形態の区別は可算/不可算によってなされているとし、有生物は常に可算名詞であるのに対し、無生物は可算名詞である場合も不可算名詞である場合もあるため、leとloの混同が起りやすいと考えている。したがって、指示対象が有生である場合、le語法がよくみられるとしているのである。

また、指示対象が男性単数である場合にle語法がよくみられる理由について、伝統的仮説とFernández-Ordóñez(1999)の根拠は異なる。つまり、伝統的仮説は、男性単数の形態としてleが用いられることは形態的要因を伴っていることを根拠としているのに対し、Fernández-Ordóñez(1999)は性による形態の区別が複数形でもみられるほど強くなされているのはごく一部の地域であることを根拠としている。

さらに、非語源的用法の拡大について、伝統的仮説とFernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)は指示対象が物である場合や複数形でもle語法が用いられるようになり、男性形で格の区別が消失すると、性による形態の区別が強化され、la語法やlo語法がみられるようになったとする点で一致している。

本研究では、García(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)を支持し、第4章でこれらの先行研究において扱われていない他動性の項目を取り入れるとともに、他動性の各項目を

細かく分類して分析をおこなうことで、他動性が直接目的語の形態の選択にどのように影響しているのかをより詳細に考察する。

そして、他動性について論じる第4章に入る前に、次章では、非語源的用法が歴史を通してどの程度用いられてきたのかを知るために、le語法圏および非le語法圏における非語源的用法の歴史的変遷を示す。また、Fernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)がいうように、三人称の弱形代名詞の体系には地域ごとに異なる可能性があるということを考慮して考察をおこなう。

### 3. 非語源的用法の出現率の変遷

#### 3.1. はじめに

本章では、歴史を通してle語法圏および非le語法圏において非語源的用法がどの程度用いられてきたのかを明らかにする。まず、次項ではle語法圏およびスペイン全域における傾向としてle語法の歴史的変遷を扱っている先行研究を考察したのち、非le語法圏におけるle語法の歴史的変遷を観察した先行研究を考察する。3.3.では中世から20世紀初頭のあいだにle語法および非le語法圏出身者によって書かれた26文学作品を資料体とし、両地域における指示対象別のle語法および人の単数および複数のla語法の出現率を通時的に示す。最後に、3.4.で本章の総括をおこなう。

#### 3.2. 先行研究

Echenique Elizondo(1981)は、12世紀末から15世紀初頭に書かれた35の文学作品からデータを収集した結果、次のように述べている。12世紀末から13世紀初頭に書かれた作品では、指示対象が人の男性単数である場合でもle語法はみられず、同語法がみられるのは13世紀の第1四半世紀以降の作品である(Echenique Elizondo1981:133)。また、指示対象が人の男性複数である場合でも同様のことがいえると考えている(Echenique Elizondo 1981:137)。さらに、la語法について、同語法の例はほとんどなく、わずかにみられる例もはっきりとla語法の例といえるものではないとしている(Echenique Elizondo1981:148)。結論として、人のle語法の起源はラテン語で与格を要求していた動詞で与格を維持したことであり、そこから他の動詞へ拡大し、すべての直接目的語として用いられるようになったというLapesa(2000)およびFernández Ramírez(1987)の主張を支持している。

また、Lapesa(1981)およびLapesa(2000)は中世から18世紀までのle語法について次のように述べている。le語法の使用はすでに*Cantar de Mio Cid*や他の古い文書にみられる(Lapesa1981:342, 2000:280)。格ではなく性によって形態を区別する傾向は、14世紀におけるla語法の出現とともに強化されたが、15世紀を通じてleが人の男性対格として一般化し、指示対象が物である場合にも高い割合で用いられるようになり、la語法の割合も増加した(Lapesa2000:308)。さらに、16世紀前半において人の男性対格としてleを用いることは旧カスティーリャ(Castilla la Vieja)地方およびレオン地域の作者において優勢であり、のちにCervantesやLope de Vega、Tirso、Quevedo、Calderón、Solísのようなアルカラ(Alcalá)やその他のマドリッド出身の作者においても優勢になったとしている(Lapesa

1981:342)。加えて、18世紀において旧カスティーリャ地方、レオン地方、スペイン北部地方では人の男性対格としてle(s)が高頻度で用いられ、指示対象が物である場合もle語法の使用がみられた。また、18世紀まで先述の地域および新カスティーリャ(Castilla la Nueva)地方では指示対象が女性である場合、対格にも与格にもla(s)が用いられていたと考えている(Lapesa 1981:395)。しかし、Gómez Seibane(2013:42)は、la語法の使用は、19世紀には衰退し、同時にle語法も指示対象が人である場合にのみ用いられるようになったと指摘している。

さらに、Fernández Ramírez(1987)は自身が集めた20世紀のデータの分析結果およびKenistonが集めた16世紀のデータとの比較から、次のように述べている。自身のデータでもKenistonのデータでも物よりも人のle語法の割合が高いことから、物を指す場合、中性形loと同化させる傾向が16世紀あるいはそれ以前からあると考えている。ただし、16世紀においては指示対象が物の単数である場合、le語法の例のほうが多い。また、複数形ではloと区別する必要性がないため、指示対象が人である場合でも物である場合でも、複数形のle語法ははるかに少ないとしている(Fernández Ramírez 1987:44-45)。したがって、16世紀と20世紀について、他の指示対象ではleとloの使用の割合にはあまり違いはみられないが、指示対象が物の単数である場合、20世紀よりも16世紀のほうがle語法はよくみられると結論付けている(Fernández Ramírez 1987:45)。

次に、非le語法圏におけるle語法について扱っている先行研究を紹介する。Recio Doncel(2021:5)は中世におけるアンダルシア地方のle語法に関する記述について、14、15世紀に同地方で書かれた文書では、基本的に語源を維持した形態が用いられており、指示対象の性による形態の選択がほとんどなされていないとしている。

18世紀後半のアンダルシア地方出身者によって書かれた文書について論じている研究としてGarcía Godoy(2002)があり、1749年から1793年のあいだに4人のアンダルシア地方出身の教養人によって書かれた文書と1791年にマラガ出身のGaspar Fernández y Ávilaによって書かれた文学作品*La infancia de Jesu-Christo*を資料体としてデータ収集をおこなった結果、次のように述べている。アンダルシア地方出身の教養人はleを非語源的に用いることは社会的差異を表すものであると知っており、le語法を意識的に真似ていたと考えている(García Godoy 2002:652)。García Godoy(2002)のデータによると、教養人のなかでもとくに都市部出身者における人の男性単数のle語法の使用率は高く、90%以上であり、*La infancia de Jesu-Christo*について、社会的地位の高い登場人物はセリフのなかで人の

男性単数対格としてleを用いており、社会的地位の低い登場人物は同機能の直接目的語としてloを用いているとしている(García Godoy2002:650-651)。

現代におけるアンダルシア地方のle語法に関する先行研究として、Huygens(2008)があり、セビーリャ出身の性別、年齢、職業、居住地の異なる249名を対象に2005年11月にインフォーマント調査をおこなった結果、次のように述べている。セビーリャの都心部に住む若い男性において、心理動詞のなかでもとくに動作主性が低い場合、すべてのグループでle語法の割合が50%を上回っている。このように、le語法が高い割合でみられることから、アンダルシア地方を非le語法圏とみなすことはできないとしている(Huygens 2008:567)。

### 3.3. 非語源的用法の出現率の通時的考察

#### 3.3.1. 考察手法

2.3.1で確認したように、現代スペイン語における三人称の弱形代名詞の使用には地域差がみられる可能性があることを踏まえ、le語法圏および非le語法圏では非語源的用法が歴史を通してどの程度用いられてきたのかを知るために、本研究ではスペインにおけるle語法圏と非le語法圏出身の作者によって13世紀から20世紀に書かれた文学作品を資料体として通時的考察をおこなう。

考察手法は次のとおりである。資料体について、作品の制作年や作者の出生年を考慮し、先述の時期に書かれた26文学作品を選定した。まず、中世に書かれた作品として高橋(2022)で扱われている8作品(*Libro de Alexandre*<sup>6</sup>、*Milagros de Nuestra Señora*<sup>7</sup>、*Cantar*

---

<sup>6</sup> 同作品は作者不詳とされており、作者の候補としてGonzalo de BerceoやJuan Lorenzo de Astorgaがあげられているが、定かではない。Alarcos(1948:54-57)は、作中に使われているログローニョ(Logroño)のコゴリャ(Cogolla)やソリアとサラゴサ(Zaragoza)にまたがるモンカヨ(Moncayo)などの山の地名から、同作品の作者はブルゴスの南東とソリアの間の地域出身であると考えている。

<sup>7</sup> 同作品の作者はGonzalo de Berceo(1198?-1264?)であり、ラ・リオハのベルセオ(Berceo)村の生まれである(佐竹, 2009:20-21)。また、Fernández-Ordóñez(2001:15, nota 49)は、ベルセオ村の隣に位置するサン・ミリャン(San Millán)はle語法圏と非le語法圏を分ける等語線に近い地域であることから、同地域では初期のle語法がみられる可能性があるとは指摘している。

*de Mio Cid*<sup>8</sup>、*El Conde Lucanor*<sup>9</sup>、*Rimado de Palacio*<sup>10</sup>、*Poesía*<sup>11</sup>、*Cárcel de amor*<sup>12</sup>、*La Celestina*<sup>13</sup>を扱う。Fernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)の見解にしたがうと、これら8作品はいずれもle語法圏出身の作者による作品である。また、15世紀以降については、Fernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)の見解にしたがって、le語法圏および非le語法圏出身者によって書かれた18作品を選定した。これら18作品について、le語法圏の作品として8作品<sup>14</sup>(*Lazarillo de Tormes*<sup>15</sup>、*La Galatea*、*Fuente Ovejuna*、*La vida del Buscón*、*El Alcalde de Zalamea*、*El sí de las niñas*、*Don Juan Tenorio*、*Los intereses creados*)、非le語法圏の作品として10作品<sup>16</sup>(*Guzmán de Alfarache*、*Soledades*、*El diablo cojuelo*、*El burlador de Sevilla*、*Raquel*、*Cartas marruecas*、*El estudiante de Salamanca*、*El trovador*、*El sombrero de tres picos*、*Platero y yo*)を取り扱う。

さらに、中世の8作品については通時的考察が適切におこなえるよう、制作年の差が50年以内のものを対象としている<sup>17</sup>。これら8作品の制作時期について、13世紀に書かれた作

<sup>8</sup> 本資料体は、1207年に書かれた原本をPer Abbatが14世紀初頭に筆者した写本を再現したものであるため、14世紀初頭の作品として扱う。また、同作品は作者不詳とされているが、Menéndez Pidal(1961:146)は作者二人説を提唱し、それぞれサン・エステバン・デ・ゴルマス(San Esteban de Golmas)およびメディナセリ(Medinaceli)出身であるとしている。これら2つの地域は現在のソリアに位置する。

<sup>9</sup> 同作品の作者Don Juan Manuelはトレドのエスカローナ(Escalona)出身である(佐竹2009:36)。

<sup>10</sup> 同作品の作者Pero López de Ayalaはアラバ(Álava)のビトリア(Vitoria)出身である(佐竹2009:35)。

<sup>11</sup> 同作品の作者Jorge Manriqueはハエン(Jaén)のセグラ・デ・ラ・シエラ(Segura de la Sierra)およびバレンシアのパレデス・デ・ラ・ナバ(Paredes de la Nava)で生まれ育った("Jorge Manrique", Real Academia de la Historia, <https://dbe.rah.es/biografias/12792/jorge-manrique>, 閲覧日:2024年5月14日)。

<sup>12</sup> 同作品の作者Diego de San Pedroはバリャドリッド出身である(Cáseda Teresa2020:305)。

<sup>13</sup> 同作品の作者Fernando de Rojasはトレド近郊の町プエブラ・デ・モンタルバン(Puebla de Montalubán)出身である(佐竹2009:58)。

<sup>14</sup> *La Galatea*、*Fuente Ovejuna*、*La vida del Buscón*、*El Alcalde de Zalamea*、*El sí de las niñas*、*Los intereses creados*はマドリッド州出身者の作品であり(佐竹2009:117, 136, 144, 155, 182, 267)、*Don Juan Tenorio*はバリャドリッド出身者の作品である(佐竹2009:200)。*Lazarillo de Tormes*については、後述するとおりである。

<sup>15</sup> 同作品は作者不詳とされており、作者の候補としてfray Juan de Ortega、Diego Hurtado de Mendoza、Alfonso de Valdés、Juan de Valdésなどがあげられているが、定かではない。ただし、Asensio(1959:96)によると、同作品はトレド方言で書かれている。

<sup>16</sup> 非le語法圏の作品について、*Guzmán de Alfarache*、*Soledades*、*El diablo cojuelo*、*Cartas marruecas*、*El trovador*、*El sombrero de tres picos*、*Platero y yo*はアンダルシア地方出身者の作品であり(佐竹2009:126, 132, 173, 217, 259, Fernández y Arellano1988:7, Guardiola2013:132)、*El burlador de Sevilla*は後述のようにムルシア地方出身者の作品であると考えられており、*Raquel*、*El estudiante de Salamanca*はバダホス出身者の作品である(Andioc2002:7, 佐竹2009:194)。

<sup>17</sup> Serrano de Haro(1975<sup>2</sup>:280-281)は、Jorge Manriqueが詩を書いていたのは1465年から亡くなる1479年の間であり、詩で取り扱われている内容はいずれもこの期間に起こったことであるとしている。したがって、*Rimado de Palacio*と*Poesía*の制作年の差は約70年であると推察される。



品として*Libro de Alexandre*(同世紀前半)および*Milagros de Nuestra Señora*(1246-1252)、14世紀前半に書かれた作品として*Cantar de Mio Cid*(同世紀初頭)および*El Conde Lucanor*(1335)、同世紀後半に書かれた作品として*Rimado de Palacio*(1378-1403)、15世紀後半に書かれた作品として*Poesía*(1465?-1479?)および*Cárcel de amor*(1492)、*La Celestina*(1499)を選定した。加えて、15世紀以降の作品については、両地域における三人称の弱形代名詞の形態の選択における相違点の比較を容易にするために、出生年の近い作者のものを選定した。

以下に、15世紀以降の作品を作者の出生年順に並べた図を示す。また、出生年の差が10年以内のとくに出生年が近い作者の作品については、中括弧でくくられている。

作品名	作者
{ <i>La Galatea</i> (1585)	Miguel de Cervantes(1547-1616)
{ <i>Guzmán de Alfarache</i> (1599) <sup>18</sup>	Mateo Alemán(1547-1613)
{ <i>Soledades</i> (1613-1614)	Luis de Góngora y Argote(1561-1627)
{ <i>Fuente Ovejuna</i> (1619)	Lope de Vega(1562-1635)
{ <i>El diablo cojuelo</i> (1641)	Luis Vélez de Guevara(1579-1644)
{ <i>El burlador de Sevilla</i> (1617)	Andrés de Claramonte(1580-1626) <sup>19</sup>
{ <i>La vida del Buscón</i> (1604-1614)	Francisco de Quevedo(1580-1645)
<i>El Alcalde de Zalamea</i> (1636) <sup>20</sup>	Carderón de la Barca(1600-1681)

<sup>18</sup> 下線は発表者によるもので、非le語法圏出身の作者による作品であることを示す。

<sup>19</sup> 同作品の作者はTirso de Molinaであるとされてきたが、同作品の初演の年である1617年にTirsoはその一年以上前からサントドミンゴ島(la isla de Santo Domingo)にいたのに対し、Andrés de Claramonteは同年にセビーリャにいたこと(López-Vázquez2022:57-58)、作品中に使われている語や詩形(Revenga2021:80)、登場人物の名前(López-Vázquez1983:100)などから、近年の研究では同作品の作者はClaramonteであるとする説が有力視されている。

<sup>20</sup> 同作品と出生年の近い非le語法圏出身者の作品は選定できていないが、17世紀生まれの作者による作品として参考のために取り扱われている。

{	<u><i>Raque</i></u> (1775)	Vicente García de la Huerta(1734-1787)
	<u><i>Cartas marruecas</i></u> (1793)	José Cadalso y Vázquez(1741-1782)
	<i>El sí de las niñas</i> (1806)	Leandro Fernández de Moratín(1760-1828)
{	<u><i>El estudiante de Salamanca</i></u> (1840)	José de Espronceda(1808-1842)
	<u><i>El trovador</i></u> (1836)	Antonio García Gutiérrez(1813-1884)
	Don Juan Tenorio(1844)	José Zorrilla(1817-1893)
	<u><i>El sombrero de tres picos</i></u> (1874)	Pedro Antonio de Alarcón(1833-1891)
	<i>Los intereses creados</i> (1907)	Jacinto Benavente(1866-1959)
	<u><i>Platero y yo</i></u> (1914)	Juan Ramón Jiménez(1881-1958)

図3-1 作者の出生年の近いle語法圏と非le語法圏の作品

これらの資料体から各弱形代名詞(le(s)、lo(s)、la(s)、li(s)<sup>21</sup>, l')が目的語として用いられている例をすべて収集し、その指示対象を分析する<sup>22,23</sup>。次に、指示対象別に各作品におけるle語法の出現率を算出する。また、各作品において性による形態の選択がどの程度なされているのかを観察するために、la語法の出現率を示す。

なお、26の文学作品を資料体とする本研究のデータの総数は21,644であり、そのうち2,314が非語源的語法の例である。

<sup>21</sup> le(s)の方言的な異形である(中岡1993:32)。

<sup>22</sup> Cano Aguilar(1977, 1984)によると、中世から黄金世紀のスペイン語においてhablar(fablar), rogar, pagarのような動詞では指示対象が人である場合、目的語は直接目的語でも間接目的語でも表されていた。したがって、各例においてどちらの機能で用いられているのかは不明であるため、前述の動詞が人を指示対象とする目的語を伴っている例については、主な考察から外す。

<sup>23</sup> *Guzmán de Alfarache*については、大部な作品であるため、第一部のみを考察対象としている。

### 3.3.2. 通時的変移

本節では、本研究の資料体における非語源的語法の出現率を指示対象別に考察する。以下の表では作者の出生年順にle語法圏出身の作者によって書かれた作品を左側、非le語法圏出身の作者によって書かれた作品を右側に示す。また、以下の表では出生年の近い作者によって書かれた作品が並列されている。まず、人の男性単数のle語法の出現率を以下に示す。

le語法圏の作品	le	lo	l'	非le語法圏の作品	le	lo
Libro de Alexandre	3.7%(17/464)	75.2%(349/464)	21.1%(98/464)			
Milagros de Nuestra Señora	8.5%(15/175)	80.6%(141/175)	10.9%(19/175)			
Cantar de Mio Cid	25.9%(30/116)	36.2%(42/116)	37.9%(44/116)			
El Conde Lucanor	29.4%(72/245)	38.4%(94/245)	32.2%(79/245)			
Rimado de Palacio	35.5%(109/307)	58.6%(180/307)	5.9%(18/307)			
Poesía	75%(6/8)	25%(2/8)				
Cárcel de amor	77.8%(42/55)	22.2%(12/54)				
La Celestina	91.4%(106/116)	8.6%(10/116)				
Lazarillo de Tormes	89.4%(59/66)	10.6%(7/65)				
La Galatea	97.5%(306/314)	2.5%(8/314)		Guzmán de Alfarache	25.6%(80/313)	74.4%(233/313)
Fuente Ovejuna	90.5%(38/42)	9.5%(4/42)		Soledades	6.7%(1/15)	93.3%(14/15)
				El diablo cojuelo	84.2%(48/57)	15.8%(9/57)
La vida del Buscón	92.2%(118/128)	7.8%(10/128)		El burlador de Sevilla	100%(46/46)	0%(0/46)
El Alcalde de Zalamea	95.7%(44/46)	4.3%(2/46)				
				Raquel	100%(42/42)	0%(0/42)
				Cartas marruecas	87.6%(92/105)	12.4%(13/105)
El sí de las niñas	98.3%(57/58)	1.7%(1/58)				
				El estudiante de Salamanca	95.8%(23/24)	4.2%(1/24)
Don Juan Tenorio	100%(63/63)	0%(0/63)		El trovador	100%(43/43)	0%(0/43)
				El sombrero de tres picos	16.25%(13/80)	83.75%(67/80)
Los intereses creados	97%(64/66)	3%(2/66)				
				Platero y yo	7.7%(1/13)	92.3%(12/13)

表3-1 各作品における人の男性単数のle語法の出現率

この表から観察されることを次に示す。le語法圏出身の作者による作品について、13世紀の作品では同指示対象におけるle語法の出現率はわずか10%に満たないものの、徐々に

増加し、15世紀後半に書かれた作品では80%程度に達している。また、*La Celestina*以降、同指示対象のle語法の出現率は90%程度を維持している。また、非le語法圏出身の作者による作品においても*Guzmán de Alfarache*と*Soledades*を除いて、19世紀中頃に書かれた作品までは非常に高い割合でみられる。しかし、19世紀後半以降の作品では両地域に違いがみられる。le語法圏出身の作者による作品である*Los intereses creados*では97%という非常に高い出現率が示されている。一方、非le語法圏出身の作者による作品である*El sombrero de tres picos*や*Platero y yo*では割合はあまり高くない、あるいは1例もみられない。したがって、同指示対象ではle語法圏出身者の作品では中世末からすでに9割以上でle語法がみられるのに対し、非le語法圏出身者の作品ではとくに16世紀末および18世紀生まれの作者による作品のようにle語法が全例または9割前後でみられる作品もあれば、ほとんどみられない作品もあると考えられる。

次に、動物の男性単数のle語法の出現率を以下に示す。

le語法圏の作品	le	lo	l'	非le語法圏の作品	le	lo
Libro de Alexandre	0%(0/15)	66.7%(10/15)	33.3%(5/15)			
Milagros de Nuestra Señora	0%(0/0)	0%(0/0)	0%(0/0)			
Cantar de Mio Cid	41.7%(5/12)	25.0%(3/12)	33.3%(4/12)			
El Conde Lucanor	25.9%(7/27)	51.9%(14/27)	22.2%(6/27)			
Rimado de Palacio	0%(0/1)	100%(1/1)	0%(0/1)			
Poesía	0%(0/0)	0%(0/0)				
Cárcel de amor	0%(0/0)	0%(0/0)				
La Celestina	87.5%(7/8)	12.5%(1/8)				
Lazarillo de Tormes	0%(0/0)	0%(0/0)				
La Galatea	100%(3/3)	0%(0/3)		Guzmán de Alfarache	0%(0/12)	100%(12/12)
Fuente Ovejuna	0%(0/0)	0%(0/0)		Soledades	0%(0/5)	100%(5/5)
				El diablo cojuelo	100%(3/3)	0%(0/3)
La vida del Buscón	66.7%(4/6)	33.3%(2/6)		El burlador de Sevilla	0%(0/0)	0%(0/0)
El Alcalde de Zalamea	100%(2/2)	0%(0/2)				
				Raquel	0%(0/0)	0%(0/0)
				Cartas marruecas	0%(0/0)	0%(0/0)
El sí de las niñas	100%(7/7)	0%(0/0)				
				El estudiante de Salamanca	0%(0/0)	0%(0/0)
Don Juan Tenorio	0%(0/0)	0%(0/0)		El trovador	0%(0/0)	0%(0/0)
				El sombrero de tres picos	0%(0/0)	0%(0/0)
Los intereses creados	0%(0/0)	0%(0/0)				
				Platero y yo	5.6%(4/72)	94.4%(68/72)

表3-2 各作品における動物の男性単数のle語法の出現率

le語法であるかどうかを問わず、基本的に人の男性単数のle語法の出現率が高い作品では動物の男性単数のle語法の出現率も高く、人の男性単数の出現率とほぼ同等、さらにはそれを上回る作品もある。反対に、人の男性単数のle語法の出現率が低い作品では動物の男性単数のle語法の出現率も低いと考えられる。

続いて、物の男性単数のle語法の出現率を以下に示す。

作品	le	lo	l'	非le語法圏の作品	le	lo
Libro de Alexandre	0%(0/129)	89.1%(115/129)	10.9%(14/129)			
Milagros de Nuestra Señora	0%(0/55)	100%(55/55)	0%(0/55)			
Cantar de Mio Cid	3.2%(1/31)	77.4%(24/31)	19.4%(6/31)			
El Conde Lucanor	3.0%(4/132)	93.2%(123/132)	3.8%(5/132)			
Rimado de Palacio	2.0%(2/99)	97.0%(96/99)	1.0%(1/99)			
Poesía	0%(0/19)	100%(19/19)				
Cárcel de amor	3.4%(1/29)	96.6%(28/29)				
La Celestina	48.8%(39/80)	51.3%(41/80)				
Lazarillo de Tormes	37.2%(16/43)	62.8%(27/43)				
La Galatea	85.1%(171/201)	14.9%(30/201)		Guzmán de Alfarache	1.1%(3/277)	98.9%(274/277)
Fuente Ovejuna	66.7%(4/6)	33.3%(2/6)		Soledades	0%(0/15)	100%(15/15)
				El diablo cojuelo	48.3%(14/29)	51.7%(15/29)
La vida del Buscón	69.5%(41/59)	30.5%(18/59)		El burlador de Sevilla	55%(11/20)	45%(9/20)
El Alcalde de Zalamea	92.3%(12/13)	7.7%(1/13)				
				Raquel	76.5%(13/17)	23.5%(4/17)
				Cartas marruecas	10.5%(8/76)	89.5%(68/76)
El sí de las niñas	78.3%(18/23)	21.7%(5/23)				
				El estudiante de Salamanca	0%(0/4)	100%(4/4)
Don Juan Tenorio	73.9%(17/23)	26.1%(6/23)		El trovador	25%(1/4)	75%(3/4)
				El sombrero de tres picos	0%(0/21)	100%(21/21)
Los intereses creados	28.6%(4/14)	71.4%(10/14)				
				Platero y yo	0%(0/37)	100%(37/37)

表3-3 各作品における物の男性単数のle語法の出現率

この表から観察されることを次に示す。le語法圏出身の作者による作品について、13世紀の作品から *Cárcel de amor* までは、同指示対象の出現率は10%に満たないが、*La Celestina* や *Lazarillo de Tormes* では40%程度まで増加している。また、*La Galatea* 以降は19世紀中頃に書かれた *Don Juan Tenorio* まで非常に高い割合でみられる。一方、非le語法圏出身の作者による作品について、指示対象が人の男性単数である場合においてもle語法の割合が低い *Guzmán de Alfarache* と *Soledades* では同指示対象でもle語法の割合は低い。指示対象が人の男性単数である場合にle語法の割合が高い *El diablo cojuelo* や *El burlador de Sevilla*、*Raquel* では同指示対象でも比較的高い割合でle語法がみられる。しかし、同指示対象におけるle語法の出現率が減少する時期は両地域において異なる。le語法

圏では20世紀初頭に書かれた作品で出現率の減少が確認されるが、非le語法圏では18世紀末に書かれた *Cartas marruecas*以降の作品で出現率が急激に減少し、出現率が0%の作品も複数ある。

次に、人の男性複数のle語法の出現率を以下に示す。

le語法圏の作品	les	los	非le語法圏の作品	les	los
Libro de Alexandre	5.7%(13/230)	94.3%(217/230)			
Milagros de Nuestra Señora	6.5%(2/31)	93.5%(29/31)			
Cantar de Mio Cid	3.8%(5/130)	96.2%(125/130)			
El Conde Lucanor	11.1%(6/54)	88.9%(48/54)			
Rimado de Palacio	11.6%(10/86)	88.4%(76/86)			
Poesía	0%(0/4)	100%(4/4)			
Cárcel de amor	4.8%(1/21)	95.2%(20/21)			
La Celestina	11.1%(5/45)	88.9%(40/45)			
Lazarillo de Tormes	7.7%(1/13)	92.3%(12/13)			
La Galatea	34.4%(33/96)	65.6%(63/96)	Guzmán de Alfarache	5.6%(8/142)	94.4%(134/142)
Fuente Ovejuna	20%(2/10)	80%(8/10)	Soledades	0%(0/0)	100%(5/5)
			El diablo cojuelo	11.4%(4/35)	88.6%(31/35)
La vida del Buscón	6.1%(3/49)	93.9%(46/49)	El burlador de Sevilla	0%(0/8)	100%(8/8)
El Alcalde de Zalamea	11.1%(1/9)	88.9%(8/9)			
			Raquel	10%(1/10)	90%(9/10)
			Cartas marruecas	30%(21/70)	70%(49/70)
El sí de las niñas	0%(0/19)	100%(19/19)			
			El estudiante de Salamanca	0%(0/0)	0%(0/0)
Don Juan Tenorio	46.7%(7/15)	53.3%(8/15)	El trovador	25%(1/4)	75%(3/4)
			El sombrero de tres picos	0%(0/5)	100%(5/5)
Los intereses creados	16.7%(3/18)	83.3%(15/18)			
			Platero y yo	0%(0/9)	100%(9/9)

表3-4 各作品における人の男性複数のle語法の出現率

le語法圏であるかどうかを問わず、いずれの作品においても同指示対象の出現率は指示対象が人の男性単数である場合と比べると低く、ほぼ横ばいで推移している。ただし、*Libro de Alexandre*および*Milagros de Nuestra Señora*では人の男性単数が指示対象である場合とほぼ同等の割合で出現している。

また、もっとも同指示対象のle語法の出現率の高い*Don Juan Tenorio*でも全体の半分にも満たない。しかし、同作品の作者José Zorrillaの出生年との差が約半世紀前後の作者による作品*El sí de las niñas*および*Los intereses creados*では、出現率はそれぞれ0%、16.7%であり、出現率にはかなり差がある。これは、作者の出身地の違いによる可能性があると考えられる。というのも、これら2作品の作者はともにマドリードの中心部出身であるが、José Zorrillaはバリャドリード出身であるからである。Fernández-Ordóñez(1993, 1994, 1999, 2001)によると、バリャドリードは参照体系のなかでも、男性複数対格としてlesが用いられる地域である。また、Klein-Andreu(1981)によると、現代においてバリャドリードでは指示対象が人の男性複数である場合、90%以上でle語法が用いられている。したがって、*Don Juan Tenorio*においてle語法の割合が高いことは、同作品がバリャドリード出身であることと関係している可能性があると考えられる。

次に、動物の男性複数のle語法の出現率を以下に示す。



作品	les	los	非le語法圏の作品	les	los
Libro de Alexandre	0%(0/16)	100%(16/16)			
Milagros de Nuestra Señora	0%(0/0)	0%(0/0)			
Cantar de Mio Cid	0%(0/9)	100%(9/9)			
El Conde Lucanor	0%(0/9)	100%(9/9)			
Rimado de Palacio	0%(0/0)	0%(0/0)			
Poesía	0%(0/0)	0%(0/0)			
Cárcel de amor	0%(0/0)	0%(0/0)			
La Celestina	0%(0/2)	100%(2/2)			
Lazarillo de Tormes	0%(0/1)	100%(1/1)			
La Galatea	0%(0/3)	100%(3/3)	Guzmán de Alfarache	0%(0/6)	100%(6/6)
Fuente Ovejuna	0%(0/0)	0%(0/0)	Soledades	0%(0/1)	100%(1/1)
			El diablo cojuelo	0%(0/0)	100%(1/1)
La vida del Buscón	0%(0/6)	100%(6/6)	El burlador de Sevilla	0%(0/0)	0%(0/0)
El Alcalde de Zalamea	0%(0/0)	0%(0/0)			
			Raquel	0%(0/0)	0%(0/0)
			Cartas marruecas	0%(0/0)	0%(0/0)
El sí de las niñas	0%(0/0)	0%(0/0)			
			El estudiante de Salamanca	0%(0/0)	0%(0/0)
Don Juan Tenorio	0%(0/1)	100%(1/1)	El trovador	0%(0/0)	0%(0/0)
			El sombrero de tres picos	0%(0/0)	0%(0/0)
Los intereses creados	0%(0/0)	0%(0/0)			
			Platero y yo	16.7%(1/6)	83.3%(5/6)

表3-5 各作品における動物の男性複数のle語法の出現率

そもそも本研究の資料体のなかでは、動物の男性複数を示す例がみられない作品も多い。le語法圏の作品には、同指示対象のle語法の例はなく、唯一非le語法圏の作品である *Platero y yo* でle語法が用いられている例が存在する。

次に、物の男性複数のle語法の出現率を以下に示す。

le語法圏の作品	les	los	非le語法圏の作品	les	los
Libro de Alexandre	0%(0/23)	100%(23/23)			
Milagros de Nuestra Señora	0%(0/9)	100%(9/9)			
Cantar de Mio Cid	0%(0/25)	100%(25/25)			
El Conde Lucanor	0%(0/18)	100%(18/18)			
Rimado de Palacio	1.9%(1/52)	98.1%(51/52)			
Poesía	0%(0/18)	100%(18/18)			
Cárcel de amor	0%(0/6)	100%(6/6)			
La Celestina	0%(0/19)	100%(19/19)			
Lazarillo de Tormes	0%(0/7)	100%(7/7)			
La Galatea	2.6%(2/76)	97.4%(74/76)	Guzmán de Alfarache	0%(0/108)	100%(108/108)
Fuente Ovejuna	0%(0/5)	100%(5/5)	Soledades	0%(0/2)	100%(2/2)
			El diablo cojuelo	0%(0/22)	100%(22/22)
La vida del Buscón	0%(0/45)	100%(45/45)	El burlador de Sevilla	0%(0/2)	100%(2/2)
El Alcalde de Zalamea	0%(0/11)	100%(11/11)			
			Raquel	0%(0/10)	100%(10/10)
			Cartas marruecas	0%(0/21)	100%(21/21)
El sí de las niñas	0%(0/8)	100%(8/8)			
			El estudiante de Salamanca	0%(0/5)	100%(5/5)
Don Juan Tenorio	0%(0/5)	100%(5/5)	El trovador	0%(0/5)	100%(5/5)
			El sombrero de tres picos	0%(0/3)	100%(3/3)
Los intereses creados	0%(0/10)	100%(10/10)			
			Platero y yo	0%(0/8)	100%(8/8)

表3-6 各作品における物の男性複数のle語法の出現率

全体的に同指示対象におけるle語法の割合は非常に低い。Lapesa(2000:302)は、同指示対象でle語法が用いられることは書き言葉においては常に例外的であるとしている。本研究で同指示対象のle語法がみられるのは、*Rimado de Palacio*で1例、*La Galatea*で2例みられるのみであり、非le語法圏の作品では同指示対象のle語法の例はみられない。

次に、人の女性単数のle語法の出現率を以下に示す。

le語法圏の作品	le	la	l'	非le語法圏の作品	le	lo
Libro de Alexandre	0%(0/28)	96.4%(27/28)	3.6%(1/28)			
Milagros de Nuestra Señora	3.3%(2/60)	95.0%(57/60)	1.7%(1/60)			
Cantar de Mio Cid	0%(0/2)	100%(2/2)	0%(0/2)			
El Conde Lucanor	0%(0/1)	0%(0/1)	100%(1/1)			
Rimado de Palacio	0%(0/18)	100%(18/18)	0%(0/18)			
Poesía	0%(0/7)	100%(7/7)				
Cárcel de amor	0%(0/46)	100%(46/46)				
La Celestina	3.6%(5/139)	96.4%(134/139)				
Lazarillo de Tormes	33.3%(1/3)	66.7%(2/3)				
La Galatea	1.1%(2/184)	98.9%(182/184)		Guzmán de Alfarache	2.0%(3/147)	98.0%(144/147)
Fuente Ovejuna	0%(0/12)	100%(12/12)		Soledades	0%(0/4)	100%(4/4)
				El diablo cojuelo	5.3%(1/19)	94.7%(18/19)
La vida del Buscón	0%(0/22)	100%(22/22)		El burlador de Sevilla	0%(0/32)	100%(32/32)
El Alcalde de Zalamea	0%(0/21)	100%(21/21)				
				Raquel	0%(0/18)	100%(18/18)
				Cartas marruecas	0%(0/11)	100%(11/11)
El sí de las niñas	1.1%(1/91)	98.9%(90/91)				
				El estudiante de Salamanca	0%(0/20)	100%(20/20)
Don Juan Tenorio	0%(0/44)	100%(44/44)		El trovador	0%(0/64)	100%(64/64)
				El sombrero de tres picos	100%(1/1)	0%(1/0)
Los intereses creados	5.3%(1/19)	94.7%(18/19)				
				Platero y yo	16.7%(1/6)	83.3%(5/6)

表3-7 各作品における人の女性単数のle語法の出現率

いずれの作品においてもわずか数例でみられるのみである。*Lazarillo de Tormes*および*El sombrero de tres picos*では出現率が高いが、いずれも例が少ないなかでわずか1例みられるために出現率が高くなっているにすぎないと考えられる。

続いて、人の女性複数のle語法の出現率を以下に示す。

	les	las	非le語法圏の作品	le	lo
Libro de Alexandre	14.3%(2/14)	85.7%(12/14)			
Milagros de Nuestra Señora	0%(0/0)	0%(0/0)			
Cantar de Mio Cid	0.9%(1/117)	99.1%(116/117)			
El Conde Lucanor	0%(0/0)	0%(0/0)			
Rimado de Palacio	0%(0/2)	100%(2/2)			
Poesía	0%(0/0)	0%(0/0)			
Cárcel de amor	0%(0/0)	0%(0/0)			
La Celestina	0%(0/11)	0%(11/11)			
Lazarillo de Tormes	20%(1/5)	80%(4/5)			
La Galatea	7.7%(2/26)	92.3%(24/26)	Guzmán de Alfarache	0%(0/2)	100%(2/2)
Fuente Ovejuna	0%(0/1)	100%(1/1)	Soledades	0%(1/0)	100%(1/1)
			El diablo cojuelo	0%(0/4)	100%(4/4)
La vida del Buscón	0%(0/17)	100%(17/17)	El burlador de Sevilla	0%(0/0)	0%(0/0)
El Alcalde de Zalamea	0%(0/1)	100%(1/1)			
			Raquel	0%(0/4)	100%(4/4)
			Cartas marruecas	0%(0/6)	100%(6/6)
El sí de las niñas	0%(0/5)	100%(5/5)			
			El estudiante de Salamanca	0%(0/3)	100%(3/3)
Don Juan Tenorio	11.1%(1/9)	88.9%(8/9)	El trovador	0%(1/0)	100%(1/1)
			El sombrero de tres picos	0%(0/0)	0%(0/0)
Los intereses creados	0%(0/0)	0%(0/0)			
			Platero y yo	0%(0/2)	100%(2/2)

表3-8 各作品における人の女性複数のle語法の出現率

同指示対象におけるle語法の出現率は非常に低く、非le語法圏出身者による作品での出現率は0%である。また、同指示対象のle語法の半数以上の例において指示対象の文法上の性は女性であるが、実際の性は男性であり、実際の性も女性であるのは*Libro de Alexandre*で1例、*La Galatea*で2例みられるのみである。

次に、人の単数形のla語法の出現率を以下に示す。

le語法圏の作品	la	le	l'	非le語法圏の作品	la	le
Libro de Alexandre	3.0%(1/33)	48.5%(16/33)	48.5%(16/33)			
Milagros de Nuestra Señora	3.5%(2/57)	71.9%(41/57)	24.6%(14/57)			
Cantar de Mio Cid	0%(0/2)	0%(0/2)	100%(2/2)			
El Conde Lucanor	0%(0/119)	51.3%(61/119)	48.7%(58/119)			
Rimado de Palacio	0%(0/7)	100%(7/7)	0%(0/7)			
Poesía	0%(0/10)	100%(10/10)				
Cárcel de amor	0%(0/51)	100%(51/51)				
La Celestina	6.6%(6/91)	93.4%(85/91)				
Lazarillo de Tormes	0%(0/5)	100%(5/5)				
La Galatea	8.1%(13/161)	91.9%(148/161)		Guzmán de Alfarache	2.8%(5/179)	97.2%(174/179)
Fuente Ovejuna	60.0%(3/5)	40.0%(2/5)		Soledades	0%(0/4)	100%(4/4)
				El diablo cojuelo	14.8%(4/27)	85.2%(23/27)
La vida del Buscón	68.0%(17/25)	32.0%(8/25)		El burlador de Sevilla	12.5%(1/8)	87.5%(7/8)
El Alcalde de Zalamea	75.0%(3/4)	25.0%(1/4)				
				Raquel	71.4%(5/7)	28.6%(2/7)
				Cartas marruecas	75%(3/4)	25%(1/4)
El sí de las niñas	97.4%(38/39)	2.6%(1/38)				
				El estudiante de Salamanca	80%(4/5)	20%(1/5)
Don Juan Tenorio	100%(9/9)	0%(0/9)		El trovador	66.7%(2/3)	33.3%(1/3)
				El sombrero de tres picos	0%(0/38)	100%(38/38)
Los intereses creados	25%(3/12)	75%(9/12)				
				Platero y yo	6.7%(1/15)	93.3%(14/15)

表3-9 各作品における人の単数のla語法の出現率

この表から観察されることを次に示す。le語法圏出身の作者による作品について、*Libro de Alexandre*から*La Galatea*までは出現率は10%に満たないが、17世紀に書かれた作品である*Fuente Ovejuna*以降、出現率が高くなっている。とくに*Don Juan Tenorio*では、表3-1で確認したように人の男性単数のle語法の出現率も100%であり、単数形においては性による形態の区別がはっきりとなされていると考えられる。一方、非le語法圏出身の作者による作品では、出現率が高くなるのは18世紀後半に書かれた作品である*Raquel*以降である。また、同時期から19世紀中頃までに書かれた作品ではle語法圏同様、出現率が高い。しかし、19世紀後半以降に書かれた作品ではいずれの地域でも出現率が再び低下している。

ここで、両地域においてla語法の出現率が高い期間を比較すると、le語法圏の作品では17世紀前半から19世紀中頃までの200年以上のあいだに書かれた出現率が高かった時期が続いたのに対し、非le語法圏の作品では書かれた時期が18世紀後半から19世紀前半までの作品では高く、19世紀後半に書かれた*El sombrero de tres picos*では出現率は0%である。つまり、非le語法圏の作品では人の単数のla語法の出現率が高くなった時期が遅く、17世紀後半および18世紀前半の作品からはデータが取れていないことを考慮しても、少なくとも200年も続いてはいないと考えられる。以上のことから、le語法圏の作品では非le語法圏の作品よりもla語法の出現率が高い時期が早く開始し、その期間も長く続いたと考えられる。

次に、人の複数形のla語法の出現率を以下に示す。

語法圏の作品	las	les	非le語法圏の作品	las	les
Libro de Alexandre	0%(0/26)	100%(26/26)			
Milagros de Nuestra Señora	0%(0/4)	100%(4/4)			
Cantar de Mio Cid	0.8%(1/119)	99.2%(118/119)			
El Conde Lucanor	0%(0/8)	100%(8/8)			
Rimado de Palacio	0%(0/2)	100%(2/2)			
Poesía	0%(0/0)	0%(0/0)			
Cárcel de amor	0%(0/8)	100%(8/8)			
La Celestina	0%(0/11)	100%(11/11)			
Lazarillo de Tormes	0%(0/5)	100%(5/5)			
La Galatea	3.7%(1/27)	96.3%(26/27)	Guzmán de Alfarache	0%(0/5)	100%(5/5)
Fuente Ovejuna	0%(0/1)	100%(1/1)	Soledades	0%(0/1)	100%(1/1)
			El diablo cojuelo	33.3%(1/3)	66.7%(2/3)
La vida del Buscón	46.7%(14/30)	53.3%(16/30)	El burlador de Sevilla	0%(0/1)	100%(1/1)
El Alcalde de Zalamea	0%(0/0)	0%(0/0)			
			Raquel	0%(0/0)	0%(0/0)
			Cartas marruecas	0%(0/3)	100%(3/3)
El sí de las niñas	100%(1/1)	0%(0/1)			
			El estudiante de Salamanca	0%(0/0)	0%(0/0)
Don Juan Tenorio	0%(0/1)	100%(1/1)	El trovador	0%(0/0)	0%(0/0)
			El sombrero de tres picos	0%(0/0)	0%(0/0)
Los intereses creados	0%(0/0)	0%(0/0)			
			Platero y yo	0%(0/3)	100%(3/3)

表3-10 各作品における人の女性複数のla語法の出現率

le語法圏出身の作者による作品については、13世紀から17世紀前半までは*Cantar de Mio Cid*および*La Galatea*で1例みられるのみで、出現率は非常に低い。が、*La vida del Buscón*では半数近くみられ、*El sí de las niñas*でも同指示対象における例はわずか1例のみであるが、その1例でla語法が用いられている。一方、非le語法圏出身の作者による作品では*El diablo cojuelo*で1例みられるのみで、同作品以外の作品における出現率は0%であり、同地域ではほぼ例外的にしかみられなかったと考えられる。

### 3.3.3. le語法の出現率の序列

#### 3.3.3. le語法の出現率の序列

本項では、前項で確認した各作品における指示対象別のle語法の出現率が示された表から考察される各作品におけるle語法の出現率の序列を示す。前項の表から、本研究で取り扱われている資料体である26作品のなかで20作品において指示対象が人の男性単数である場合にle語法がもっともよくみられることがわかる。これら20作品のうち、le語法圏の作品が12作品(*Libro de Alexandre*、*Milagros de Nuestra Señora*、*El Conde Lucanor*、*Rimado de Palacio*、*Poesía*、*Cárcel de amor*、*La Celestina*、*Lazarillo de Tormes*、*Fuente Ovejuna*、*La vida del Buscón*、*Don Juan Tenorio*、*Los intereses creados*)、非le語法圏の作品が8作品(*Guzmán de Alfarache*、*Soledades*、*El burlador de Sevilla*、*Raquel*、*Cartas marruecas*、*El estudiante de Salamanca*、*El trovador*、*El sombrero de tres picos*)を占めており、le語法圏であるかどうかに関係なく、ほぼすべての作品で指示対象が人の男性単数である場合にle語法がもっともよくみられることがわかる。指示対象が人の男性単数である場合にle語法がもっともよくみられることは、第2章で確認した先行研究で述べられていることと一致する。

一方、他の6作品のうち、5作品(*Cantar de Mio Cid*、*La Galatea*、*El Alcalde de Zalamea*、*El sí de las niñas*、*El diablo cojuelo*)では指示対象が動物の男性単数である場合にle語法の出現率がもっとも高いが、これらのうち*El diablo cojuelo*のみ非le語法圏の作品である。また、残り1作品(*Platero y yo*)では指示対象が動物の男性複数と人の女性単数である場合にle語法がもっともよくみられる。しかし、そもそも先述のような名詞句が指示対象である例が少なく、1例で出現率が大きく変動してしまうため、指示対象が人の男性単数である

場合よりも動物や女性である場合においてle語法がよくみられることを意味しているわけではないと考えられる。以上のことから、いずれにせよ指示対象が有生物である場合、全作品でle語法がもっともよくみられると考えられる。

ところが、le語法が2番目以降によくみられる指示対象は作品が書かれた時代や地域によって異なるため、ここでは、各作品において人の男性単数に次いでle語法がよくみられる指示対象を考察する。まず、le語法圏の作品を通時的に考察すると、*Libro de Alexandre*では、人の男性複数、人の男性単数、人の女性複数の順で、le語法の出現率が高く、本作品が、本研究の資料体のなかで人の男性複数の出現率が人の男性単数のそれを上回る唯一の作品である。また、同じく13世紀の作品である*Milagros de Nuestra Señora*については、人の男性単数、人の男性複数、人の女性単数の順でle語法の出現率が高い。つまり、13世紀の作品では指示対象の性に関係なく、人である場合にのみle語法がみられる。

続いて、14世紀から15世紀末に書かれた5作品(*Cantar de Mio Cid*, *El Conde Lucanor*, *Rimado de Palacio*, *Poesía*, *Cárcel de Amor*)を考察する。これら5作品では指示対象が有生物の単数である場合、le語法の出現率がもっとも高い。<sup>24</sup> また、単数の有生物の次に人の男性複数のle語法の割合が高く、その次に物の男性単数のle語法の出現率が続く。したがって、指示対象が無生物である場合よりも有生物である場合、複数形である場合よりも単数である場合においてle語法の出現率が高い。さらに、*Rimado de Palacio*では、物の男性複数よりも物の男性単数においてle語法の出現率が高いことから、複数形よりも単数形においてle語法はよくみられる。加えて、*Cantar de Mio Cid*では物の男性単数の次に人の女性単数のle語法が続いている。ただし、同指示対象の文法上の性は女性であるが、実際の性は男性である。つまり、これら5作品では指示対象の実際の性が男性である場合にのみle語法はみられる。

次に、*La Celestina*から18世紀前半に書かれた作品についてみると、指示対象が有生物の単数である場合、le語法の出現率がもっとも高いことは前述の5作品と共通しているが<sup>25</sup>、これら5作品とは異なり、指示対象が人の複数である場合よりも物の単数である場合のほうがle語法の割合は高い。また、*Lazarillo de Tormes*以外の作品では、物の単数の次、つまり3番目に人の男性複数の出現率が高いが、*Lazarillo de Tormes*では3番目に人の女性単

<sup>24</sup> *Poesía*では、指示対象が人の男性単数である場合にのみle語法がみられる。

<sup>25</sup> *La vida del Buscón*では指示対象が動物の男性単数である場合よりも物の男性単数である場合のほうがわずかにle語法の出現率が高いが、同作品における動物の例は6例しかないので、十分なデータであるとはいえないと考えられる。



数、4番目に人の男性複数が出てくる。これは4章で取り扱う他動性によると考えられる形態選択によって出現率が高くなっているためであると考えられる。さらに、人の女性形のle語法がみられる作品のほとんどでは、同指示対象のle語法は人の男性複数に続いて、4番目に出現率が高い<sup>26</sup>。つまり、有生であることよりも男性であることがleの使用に有利に働いていると考えられるのである。以上のことから、同時期の作品では無生物よりも有生物の男性においてle語法の出現率が高い一方で、有生物の複数よりも無生物の単数においてle語法の出現率が高いといえる。ただし、表3-3でも確認したように、物が指示対象である場合における出現率は作品ごとに異なる。

以上のことから、le語法圏出身の作者による諸作品は、次の3つの時期に区切ることができる。ひとつめは、指示対象の性に関係なく、人である場合にのみle語法がみられる13世紀である。ふたつめは、有生であることがle語法に有利に働く14世紀から*La Celestina*以外の15世紀末である。三つめは、有生であることがle語法に有利に働いてはいるものの、有生物の複数よりも無生物の単数でle語法がみられる*La Celestina*から20世紀初頭まで続く時期である。

次に、非le語法圏出身の作者による作品を考察する。*Platero y yo*以外の全作品で有生物、つまり人または動物の男性単数においてle語法がもっともよくみられる。ただし、*Soledades*、*El estudiante de Salamanca*、*El sombrero de tres picos*では、指示対象が人の男性単数でのみle語法がみられる。また、指示対象が人の男性単数以外である場合でもle語法がみられる作品について、*Guzmán de Alfarache*および*Cartas marruecas*においてはle語法圏で14世紀に書かれた作品と同様、指示対象が人の男性単数である場合に次いで、人の男性複数である場合にle語法がよくみられ、その次に指示対象が物の男性単数である場合が続く。一方、*El diablo cojuelo*、*El burlador de Sevilla*<sup>27</sup>、*Raquel*では、le語法圏で15世紀以降に書かれた作品同様、人の男性単数である場合に次いで、指示対象が物の男性単数である場合、le語法がもっともよくみられる。さらに、*El trovador*では、人の男性単数に次いで、人の男性複数と物の男性単数の出現率が同じである。加えて、*Platero y yo*では動物の男性複数と人の女性単数のle語法の出現率が同率でもっとも高く、その次に人の

---

<sup>26</sup> *La Galatea*では人の女性形よりも先に4番目に物の男性複数が出ており、他の作品よりも性による形態の選択が強くなされていると考えられる。

<sup>27</sup> 同作品において、le語法は人および物の男性単数でのみみられ、人の男性複数では8例中8例でlosが用いられていることから、同指示対象よりも物の男性単数である場合にle語法の出現率が高い。

男性単数、動物の男性単数の順に出現率が高い。つまり、同作品では性を問わず、指示対象が有生物である場合のみle語法がみられる。

以上のことをまとめたものを以下に示す<sup>28</sup>。

	1	2	3	4	5	6	7
Libro de Alexandre	人男複	人男単	人女複				
Milagros de Nuestra Señora	人男単	人男複	人女単				
Cantar de Mio Cid	動男単	人男単	人男複	物男単			
El Conde Lucanor	人男単	動男単	人男複	物男単			
Rimado de Palacio	人男単	人男複	物男単	物男複			
Poesía	人男単						
Cárcel de amor	人男単	人男複	物男単				
La Celestina	人男単	動男単	物男単	人男複	人女単		
Lazarillo de Tormes	人男単	物男単	人女単	人男複			
La Galatea	動男単	人男単	物男単	人男複	物男複	人女単	人女複
Fuente Ovejuna	人男単	物男単	人男複				
La vida del Buscón	人男単	物男単	動男単	人男複			
El Alcalde de Zalamea	動男単	人男単	物男単	人男複			
El sí de las niñas	動男単	人男単	物男単	人女単			
Don Juan Tenorio	人男単	物男単	人男複	人女複			
Los intereses creados	人男単	物男単	人男複	人女単			

表3-11 le語法圏出身者の作品ごとの指示対象別le語法の出現率の序列<sup>29</sup>

<sup>28</sup> 表3-11および表3-12では、指示対象の人/動物/物、性、単数/複数の順でそれぞれの頭文字のみで各作品における指示対象別の出現率の序列が示されている。たとえば、人の男性単数は人男単と表されている。

<sup>29</sup> *Don Juan Tenorio*の人の女性複数の例について、指示対象の文法上の性は女性であるが、実際の性は男性である。

	1	2	3	4	5
Guzmán de Alfarache	人男単	人男複	人女単	物男単	
Soledades	人男単				
El diablo cojuelo	動男単	人男単	物男単	人男複	人女単
El burlador de Sevilla	人男単	物男単			
Raquel	人男単	物男単	人男複		
Cartas marruecas	人男単	人男複	物男単		
El estudiante de Salamanca	人男単				
El trovador	人男単	人男複	物男単		
El sombrero de tres picos	人男単				
Platero y yo	動男複	人男単	動男単	人女単	

表3-12 非le語法圏出身者の作品ごとの指示対象別le語法の出現率の序列

### 3.4. まとめ

本章で明らかになったことを以下にまとめる。

(1) le語法がもっともよくみられるのは、le語法圏出身者の作品であるか非le語法圏出身者の作品であるかには関係なく、ほとんどの作品で指示対象が人の男性単数の場合である。また、非le語法圏の複数の作品では同指示対象でのみle語法がみられる。ただし、その割合は両地域において異なる。le語法圏では、時代がくだるとともに同指示対象のle語法の割合は増加し、*La Celestina*以降の作品では90%程度の非常に高い割合でみられる。一方、非le語法圏の作品については、le語法圏の作品同様、同指示対象のle語法が90%程度みられる作品もあるが、出生年があまり離れていない作者による作品であってもle語法の割合に大きな違いがみられる作品もある。また、19世紀後半以降の作品では出現率は非常に低い。

(2) 指示対象が動物の男性単数である場合、指示対象が人の男性単数である場合に次いでle語法がよくみられる作品が多い。また、同指示対象でle語法がもっともよくみられる作品もある。

(3) 指示対象が有生物の男性単数である場合に次いでle語法がもっともよくみられる指示対象は、作品が書かれた時期や地域によって異なる。le語法圏においては、14世紀およ

び*La Celestina*以外の15世紀の作品では指示対象が物の男性単数である場合よりも、人の男性複数である場合によくみられる。しかし、*La Celestina*以降の作品では人の男性複数である場合よりも物の男性単数である場合によくみられ、同指示対象のle語法は指示対象が有生物の男性単数である場合と同様、le語法圏の作品では徐々に出現率を伸ばし、*La Galatea*から19世紀中頃に書かれた作品まで非常に高い割合でみられる。一方、非le語法圏では、有生物の男性単数のle語法に次いで*El diablo cojuelo*から*Raquel*までの作品では物のle語法の割合が高い。また、le語法圏と非le語法圏で同指示対象のle語法の減退の開始時期は異なると考えられ、le語法圏では20世紀の初頭で減退が確認されるのに対し、非le語法圏では18世紀末の作品ですでに減退している。さらに、*Guzmán de Alfarache*および*Cartas Marruecas*では有生物の男性単数のle語法に次いで人の男性複数のle語法がよくみられる。

(4) 複数形について、単数形と比べてle語法の出現率が低く、指示対象が人である場合、もっとも出現率の高い作品においても50%に満たない。また、le語法圏であるか非le語法圏であるかを問わず、出現率はほぼ横ばいである。

(5) 指示対象が女性である場合、単複関係なく、le語法の出現率は低く、一部の作品を除いて、もっともle語法の出現率が低い。

(6) la語法について、同語法はle語法圏の作品では17世紀前半から19世紀中頃までの200年以上にわたって出現率が高い。一方、非le語法圏の作品では18世紀後半から19世紀前半の作品では同語法の出現率が高いが、その前後の作品では高くないことから、le語法圏と比べてla語法の出現率の高い時期の開始時期は遅く、その期間も長く続かなかったと考えられる。

以上のことから、次の3つのことがいえると考えられる。

1. 性による区別はle語法圏のほうが発展している。
2. 非le語法圏とされる地域出身者の作品でもle語法が高い割合でみられることから、同地域をle語法圏がみられない地域とみなすことはできない。
3. 非語源的用法の発展と衰退の時期には両地域において違いがあると考えられる。

次章では、Hopper&Thompson(1980)が提唱する他動性の度合いを測るパラメータを基本とし、García(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)では扱われていない他動性の項目を取り入れるとともに、他動性の各項目を細かく分類して分析をおこない、本研究の資料体における直接目的語の形態の選択を他動性と関連して考察する。

## 4. 他動性と格分裂

### 4.1. はじめに

本章では、本研究の資料体である26文学作品において直接目的語の形態がどのように選択されているのかを他動性と関連して分析する。分析に入る前に、次項ではHopper & Thompson(1980)が提唱する他動性の度合いを測るパラメータを紹介し、4.3.では格標示の仕組みと他動性によって生じる格分裂のタイプを確認する。続いて、4.4.では先述の分析をおこなう。そして最後に、4.5.では本章を総括する。

### 4.2. 他動性

他動性の原型に関する先駆的な研究のひとつとしてHopper & Thompson(1980)があげられる。同研究によると、伝統的に他動性とは、動詞の行為が動作主から被動作主へ「実行される」または「移る」ことと理解されていた(Hopper & Thompson 1980:251)。しかし、この解釈は参加者が少なくとも2つ以上であり、動詞が直接目的語である人や物に影響を与える場合のみ当てはまり、動詞が直接目的語である人や物に何の変化ももたらさない場合や、状態または性質を表す場合には当てはまらない。このような伝統的な他動性の見方に対し、Hopper & Thompson(1980:251)は、他動性は多数の要素を含んでおり、そのうちのひとつは動詞が目的語をもつことであるとしている。また、このような要素はすべて行為の効果性に関係しているとし、行為の効果性とは、動詞の瞬時性および完結性、動作主の意識的行為、目的語の指示性と影響を受ける程度を指すとしている。さらに、他動性の度合いを測るパラメータとして次の10項目を提案している。

	他動性高	他動性低
(A) Participant (参与者)	2以上	1
(B) Kinesis (動性)	動作	状態
(C) Aspect (アスペクト)	完了	不完了
(D) Punctuality (瞬時性)	瞬時的	非瞬時的
(E) Volitionality (意図性)	意図 あり	なし
(F) Affirmation (肯定性)	肯定	否定
(G) Mode (法)	現実	非現実
(H) Agency (動作主性)	高	低

(I) Affectedness of O(目的語への影響)	全面的	非全面的
(J) Individuation of O(目的語の個別性)	高	低

表4-1 Hopper&Thompson(1980:252)の他動性の10項目

以下に、それぞれの項目に関するHopper&Thompson(1980:252-253)の説明を示す。

(A) 参与者について、少なくとも2つ以上の参与者がいらない限り、何の変化ももたらされない。

(B) 動性について、行為はある参与者から別の参与者へ実行されうるが、状態は実行されない。

(C) アスペクトについて、終点から観察される行為、つまり完結した行為は、終点を伴わない行為よりも被動作主に効果的に実行される。

(D) 瞬時性について、開始と完了のあいだに明らかな移行の段階なしに実行される行為は、本質的に継続を表す行為よりも被動作主に効果的に実行される。

(E) 意図性について、被行為者に対してなされる影響は、行為者が意図的に行動している場合、典型的によりはっきりしている。

(F) 肯定性について、これは肯定的であるか否定的であるかを測るものである。

(G) 法について、事象の現実性と非現実性を区別している。起こらなかった行為や非現実世界で起こるとされている行為は、現実に行うことが確信されている行為ほど効果的でない。

(H) 動作主について、動作主性の高い参与者は、動作主性の低い参与者ができない方法で行為を実行することができる。

(I) 目的語への影響について、行為が被動作主に実行される程度は、被動作主がどの程度完全なかたちで影響を受けているかによる。

(J) 目的語の個別性について、被動作主が個別化されている場合、個別化されていない場合よりも行為は効果的に実行される。

Hopper&Thompson(1980:266)によると、他動性は二分できるものではなく、連続体をなしている。また、これら10項目の他動性の高い特徴を多くもっていればいるほど、他動性が高く、世界のすべての言語で他動性の高い特徴同士は共起し、反対に他動性の低い特

徴同士は共起するとしている(Hopper&Thompson1980:253)。さらに、他動性はあらゆる言語において共通してみられるが、その構成要素は言語ごとに異なるものであるとしている(Hopper&Thompson1980:254)。

一方、Tsunoda(1999:4)は、他動性の高い特徴同士は共起せず、食い違う場合もあるとし、4.3.3.3.2.で扱うように、Hopper&Thompson(1980)の考えを修正および発展させている。

### 4.3. 格分裂

#### 4.3.1. はじめに

本節では、格標示の仕組みと他動性によって生じる格分裂を考察する。他動性は、格分裂というかたちで統語的・形態的側面に反映されるとされている。Dixon(1994)によると、格の分裂を引き起こすタイプとして、動詞の意味的性質による分裂、名詞句の意味特徴による分裂、時制/アスペクト/法による分裂、「主節」対「従属節」の分裂があげられる。次項では、格標示について確認したあとで、4.3.3.で先述の格分裂のそれぞれのタイプを考察する。ただし、動詞の意味的特徴による分裂について、Dixon(1994)では自動詞の意味内容によるもののみが扱われているにすぎないため、ここでは本研究の主な考察対象である他動詞も考慮しているTsunoda/角田(1981, 2020<sup>5</sup>)およびLangacker(1991)を考察する。また、「主節」対「従属節」の分裂タイプに基づいて分裂がなされる言語は報告数が少ないため、同タイプは本研究では取り扱わないこととする。

#### 4.3.2. 格標示

類型論的観点からみると、格標示には基本的に2つのタイプがある。ひとつめは、主格/対格の格対立がみられる対格言語である。同言語では他動詞文でも自動詞文でも主語は主格で表され、他動詞文の目的語だけが異なる格、つまり対格で表される。ふたつめは、能格/絶対格の格対立がみられる能格言語である。同言語では他動詞文の目的語と自動詞文の主語は絶対格で表され、他動詞文の主語だけが異なる格、つまり能格で表される。ただし、Maldonado(2007:830)によると、異なる事象タイプを表す場合、対格言語で能格・絶対格型の格区別が起り、反対に能格言語では主格・対格型の格区別が起る。また、主格・対格的方法と能格・絶対格的方法で格標示がなされるのはそれぞれ対格と能格であり、格標示がなされないのはそれぞれ主格(動作主)と絶対格(被動作主)であるとしている。



### 4.3.3. 分裂組織のタイプ

#### 4.3.3.1. 名詞句の意味特徴による分裂

本項では、Dixon(1994)が提唱する格分裂のタイプをひとつずつ考察する。ここでいう格分裂とは、まず名詞句の意味特徴による分裂ということであり、名詞句の有生性には人称と数に基づく階層があることをSilverstein(1976)が提唱したことにはじまり、また、格標識の分裂は無作為になされているわけではなく、同階層は語彙的に指定された名詞句が意味的に自然に真の他動詞の動作主または被動作主として機能することを表しているとしている(Silverstein1976:113)。また、同階層においては二人称がもっとも上位を占め、次に一人称、固有名詞、人間や人間以外の有生物を表す普通名詞の順で続き、無生物を表す普通名詞がもっとも下位を占め、一人称および二人称は発話行為の参与者であるのに対し、三人称は発話行為における非参与者であり、基本的に名詞句であるため、一、二人称とは統語的ふるまいが完全に異なるとしている。Dixon(1994)は、同階層には数は関係していないとする点でSilverstein(1976)とは意見を異にしているが、Dixon(1994:84)もまた、同階層は発話行為の参加者(話者、聞き手、特定の人々)の重要度に従っているとし、Silverstein(1976)の階層をもとに、次の階層を示している。

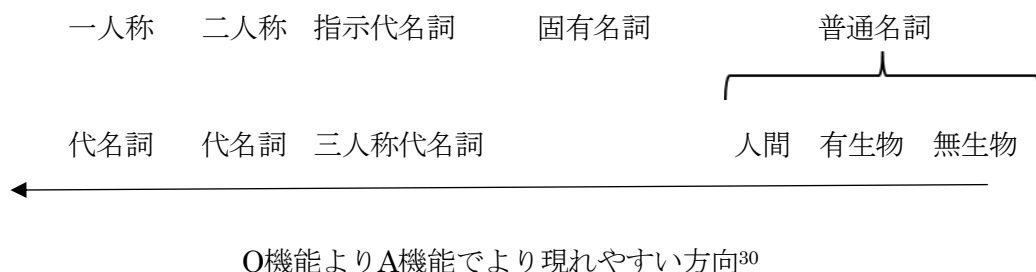


図4-1 名詞類階層(出典:Dixon(1994:85) [柳沢、石田訳(2018:106)]を参考に作成)

さらに、Comrie(1989:128)、Croft(2003:168-171)、Dixon(1994:85)、Silverstein(1976:123)は、同階層と関連する格標示について次のように述べている。他動詞構文について、上述の階層においてより上位を占める名詞句は他動詞の主語として機能するのが意味的に自然であり、格標示はなされないが、このような名詞句が他動詞の目的語として機能する場合、意味的に不自然となり、格標示がなされる。一方、より下位を占める名詞句は他動

<sup>30</sup> A、Oはそれぞれ、他動詞の主語、他動詞の直接目的語を指し、のちに登場するSは自動詞の主語を指す。

詞の目的語として機能するのが意味的に自然であり、格標示はなされないとしている。しかし、このような名詞句が他動詞の主語として機能するのは意味的に不自然であり、格標示がなされるとしている。

また、Dixon(1994:91)は、有生性の階層にはこのような対格的/能格的な分裂に加えて、定性も関係していると考えており、名詞句が名詞類階層の左に位置すればするほど、定になりやすく、同階層の右に位置すればするほど不定になりやすいとしている。

一方、Croft(2003:130)は有生性の階層には人称、直示性、有生性の3つの機能的側面が関係しているとし、それぞれの側面における有生性の高低について以下のように示している。

- (i) 人称 一人称、二人称>三人称
- (ii) 直示性 代名詞>固有名詞>普通名詞
- (iii) 有生性 人間>動物>無生物

しかし、Comrie(1989:199[柳沢、石田訳(2018:213)])は先述の名詞句階層は「単一の線状的階層というよりはむしろ、ひとつの複雑な錯綜体と見られる」と考え、その根拠として、次の2つをあげている。ひとつめは、字義通りの意味では一人称および二人称代名詞が普通名詞句よりも有生的であるわけではないが、格標識において「有生的」として扱われることである(Comrie 1989:195)。ふたつめは、定性、個体化などといった人間が付与するいくつかのパラメータ間の自然な相互作用が有生性に反映されていることである(Comrie 1989:199)。

また、名詞句の意味的特徴によって条件づけられる分裂がなされる位置は言語によって異なるとされている。Dixon(1994:85-86)は、名詞類階層の右端から中間点辺りまで能格標示がなされ、その点から階層の左端まで対格標示がなされ、これらは本質的に独立したパラメータとみなすことができると考えている。さらに、中間点を起点に能格標示と対格標示が完全に分かれる言語もあれば、重なりあっている言語もあるとしている。たとえば、北東オーストリアのジルバル語(Dyirbal)では人称によって格標示が決定されている。同言語では、一人称、二人称代名詞が他動詞または自動詞の主語の機能を果たしている場合、無標であるが、他動詞の目的語の機能を果たしている場合、対格標示がなされる。反対に、

三人称が自動詞の主語または他動詞の目的語の機能を果たしている場合、無標であるが、他動詞の主語の機能を果たしている場合、能格標示がなされる(Dixon1994:85)。

A	∅	<span style="border: 1px solid black;">-ŋgu</span>	-ŋgu	-ŋgu
S	∅	∅	∅	∅
O	<span style="border: 1px solid black;">-na</span>	∅	∅	∅
	一、二人称 代名詞	三人称 代名詞	固有名詞	普通名詞

表4-2 ジルバル語(出典:Dixon(1994:86) [柳沢、石田訳(2018:107)]を参考に作成)

一方、Dixon(1994:86)によると、ペルーのパノ(Panoan)語族のカシナワ語(Cashinawa)およびオーストラリアのイディン語(Yidiny)では、中間点において格標示のタイプが複数存在する。また、カシナワ語では三人称代名詞は両パラメータの標示をもち、機能ごとにそれぞれ異なる格標示がなされる。一方、三人称代名詞以外では名詞句の果たす機能が意味的に自然である場合、格標示はなされない。したがって、一人称および二人称代名詞が他動詞の目的語として機能している場合、対格標示がなされ、自動詞または他動詞の主語として機能している場合、無標であるとしている。さらに、固有名詞および普通名詞が他動詞の主語として機能している場合、能格標示がなされ、自動詞の主語または他動詞の目的語として機能している場合、無標である(Dixon1994:86)。

A	∅	<span style="border: 1px solid black;">habū</span>	鼻音化
S	∅	habu	∅
O	<span style="border: 1px solid black;">-a</span>	<span style="border: 1px solid black;">haa</span>	∅
	一、二人称 代名詞	三人称 代名詞	固有名詞、 普通名詞

表4-3 カシナワ語(出典:Dixon(1994:86) [柳沢、石田訳(2018:107)]を参考に作成)

さらに、Dixon(1994)は、イディン語では次のように格標示がなされるとしている。人間を表す直示語および疑問語は機能ごとに異なる標示がなされる。また、無生物を表す直示語が他動詞の目的語として機能する場合、無標または特別な対格標示をすることができる。

そして、人を表す固有名詞および親族用語が他動詞の目的語として機能する場合、任意で対格標示をすることができる一方で、カシナワ語同様、上記の名詞句以外ではその機能が意味的に不自然である場合には格標示がなされとされている。したがって、階層の左側を占める一、二人称代名詞は他動詞の直接目的語として機能する場合、対格標示がなされ、階層の右側を占める無生物を表す疑問語および普通名詞、形容詞は他動詞の主語として機能する場合、能格標示がなされる(Dixon1994:87)。

A	∅	能格	能格	能格	能格
S	∅	∅	∅	∅	∅
O	対格	対格	対格	∅	∅
	一、二人称 代名詞	人間 直示語、 疑問語	無生物 直示語、 固有名語、 親族用語	無生物 疑問語	普通名詞、 形容詞

表4-4 イデイン語(出典:Dixon(1994:87) [柳沢、石田訳(2018:109)]を参考に作成)

以上のことから、それぞれの言語において動作主が物である場合、名詞句は能格の格標識をもち、被動作主が人である場合、名詞句は対格の格標識をもつ傾向にあると考えられる。

#### 4.3.3.2. 時制/アスペクト/法による分裂

Dixon(1994)によると、時制/アスペクト/法もまた、形態的分裂を引き起こしている。能格言語について、過去時制および完了アスペクトでは他動詞の主語が能格で標示され、非過去時制および不完了アスペクトでは他動詞の目的語が対格標示あるいはその他の標示がなされる。尾谷、二枝(2011:222-223)によると、これは話者の視点と関係しており、過去時制および完了アスペクトでは話者の視点は行為の終点にあり、行為の出発点と認識されやすい参加者が有標化され、到達点と認識されやすい参加者は無標のままである。一方、非過去時制および不完了アスペクトでは話者の視点は行為の始点にあり、到達点と認識されやすい参加者は有標化され、行為の出発点と認識されやすい参加者は無標のままである。すなわち、話者の視点と一致しないほうの参加者が有標化されとされている。

また、法については、Dixon(1994:101)によると、命令法では対格標示がなされ、他のほとんどあるいはすべての法では能格標示がなされる。さらに、クイクロ(Kuikúlo)語では「相互作用」法(命令法、勸奨法、目的法)では能格標示は随意であるが、「記述」法では必ず能格標示がなされるとしている。また、古典アルメニア語では複合完了においてのみ能格・絶対格標示がなされる(Comrie1981:181)。

一方、Coon(2013)は、時制、アスペクト、法のなかでアスペクトのみが格分裂を引き起こしているとし、アスペクトによる格分裂を以下のように示している。

能格                      //                      非能格

完了アスペクト    <<    非完了アスペクト    <<    進行アスペクト

表4-5 アスペクトによる分裂の方向性(Coon(2013:177)を参考に作成)

Coon(2013:177)は、言語によって分裂の位置は異なるが、通言語的に上記の図の左側に位置するアスペクトでは能格標示がなされ、右側に位置するアスペクトでは対格標示またはその他の標示がなされる傾向にあると考えている。また、進行アスペクトは不完了アスペクトの副次的タイプであり、不完了アスペクトよりも能格性において下位に位置している。

#### 4.3.3.3. 動詞の意味的性質による分裂

##### 4.3.3.3.1. Langacker(1991)

Langacker(1991)は、主語から直接目的語へのエネルギーの伝達の側面から格標示を次のように説明している。典型的な他動詞文では主語から直接目的語へのエネルギーの伝達がある。典型的に、主語と直接目的語はそれぞれ動作主と被動作主の意味役割を果たし、単一の事象であると解釈されたエネルギーの相互作用の連鎖において両極にある。つまり、主語は動力連鎖のエネルギーの流れに関して最上流の位置にある参与者であるのに対し、直接目的語は最下流の位置の位置にある参与者であり、典型的に直接目的語は状態の変化を被るとしている。このように主語および直接目的語が典型的な意味役割を果たす場合、これらは格標示されない(Langacker1991:213, 217)。

しかしながら、他動詞文であってもこのようなエネルギーの伝達を伴わない他動詞がある。たとえば、譲渡動詞や伝達動詞では物理的なエネルギーの伝達を伴わない。ただし、このような動詞では主語は目的語の移動を引き起こしており、抽象的なエネルギーの源と解釈することができる(Langacker1991:220-221)。

一方、知覚動詞および思考動詞など抽象的にもメタファー的にもエネルギーの伝達を伴わない他動詞も存在する。このような動詞の主語、直接目的語はそれぞれ経験者、絶対者(absolute)として機能する。さらに、いずれの参与者もエネルギーをもたない状態を表す他動詞も存在し、このような動詞は主語と目的語の役割を入れ替えることができる2つの絶対者を結びつけている(Langacker1991:221-222)。

以上のことから、抽象的であってもエネルギーの伝達を伴う動詞では格標示がなされないが、それとは異なり、いかなるエネルギーの伝達も伴わない動詞では格標示がなされると考えられる。

#### 4.3.3.3.2. Tsunoda/角田(1981, 1999, 2020<sup>5</sup>)

ここでは、Tsunoda/角田(1981, 1999, 2020<sup>5</sup>)が提唱する動詞の意味的性質による格分裂を考察する。Tsunoda/角田(1981, 1999, 2020<sup>5</sup>)は、他動詞文の原型の意味的側面を次のように定義している。

『参加者が二人(動作主と動作の対象)又はそれ以上いる。動作主の動作が対象に及び、かつ、対象に変化を起こす。(動作主と対象は無生物の場合もある。従って、二人でなく、二つの場合もある。)』(角田2020<sup>5</sup>:76-77)

また、この定義に基づいて、同書は他動詞の原型を「相手に及び、かつ、相手に変化を起こす動作を表す動詞」(Tsunoda/角田1999:5, 2020<sup>5</sup>:77)と定義している。さらに、Hopper &Thompson(1980)とは異なり、パラメータは通言語的に同等ではないとし、Hopper &Thompson(1980)のパラメータのなかで(I)目的語への影響(Affectedness of O)に注目し、同パラメータに対象に変化を起こすという特徴を加え、これを最重要視している。

以上のことを踏まえ、Tsunoda/角田(1981, 2020<sup>5</sup>)は、通言語的に動詞の意味、つまり目的語への影響と格を考慮し、以下に示す二項述語の階層を提案している。

類	1		2		3	4	5	6	7
意味	直接影響		知覚		追求	知識	感情	関係	能力
下位類	1A	1B	2A	2B					
意味	変化	無変化							
例	殺す 壊す 温める	叩く 蹴る ぶつかる	see hear 見つける	look listen	待つ 探す	知る 分かる 覚える 忘れる	愛す 惚れる 好き 嫌い 欲しい 要る 怒る 恐れる	持つ ある 似る 欠ける 成る 含む 対応する	出来る 得意 強い 苦手 good capable proficient

表4-6 二項述語の階層(Tsunoda1981:395, 角田2020<sup>5</sup>:101)を参考に作成)

Tsunoda/角田(1981:397, 2020<sup>5</sup>:113-114)によると、表4-6の左側に位置する動詞は他動詞枠組みを取り、対格標示が起こるが、右側に行くにつれて他動詞枠組みが取られにくく、他の枠組みが取られることもあり、対格標示がされにくくなる。

また、Tsunoda/角田(1981, 2020<sup>5</sup>)は、それぞれの類に属する動詞について以下のように述べている。まず、1類から3類に分類される動詞について、これらは動作動詞であり、動作が対象に及ぶ程度にしたがって分類されているとしている。1類の動詞では動作は対象に及ぶが、2類の動詞では動作は対象に及ばない。しかし、2類の動詞は対象を捉えているという点で、永久に対象を捉えない3類の動詞よりは動作は対象に及んでいるといえるとしている(角田2020<sup>5</sup>:102)。また、1類および2類には下位類があり、1A類に分類される動詞では動作が対象に必ず変化を起こすが、1B類に分類される動詞では動作が対象に必ず変化を起こすとは限らないとしている。さらに、2A類に分類される動詞では対象をすでに捉えているが、2B類に分類される動詞では対象を捉えようとしていることを表す(角田2020<sup>5</sup>:103)。加えて、1A類や2A類の動詞では目的語は対格で表されるが、1B類や2B類の動詞では対格以外の格で表されることもあり、左に位置する動詞ほど他動詞格枠組みが出やすい(角田2020<sup>5</sup>:113)。一方、4類以下の動詞は状態動詞であり、他動詞格枠組みが出やすい順序にしたがって分類されており、右側にある動詞ほど形容詞で表されやすいとしている(角田2020<sup>5</sup>:104, 113)。

Malchukov(2010:5)は、Tsunoda/角田(1981, 2020<sup>5</sup>)の一元的な動詞タイプの階層では、直接目的語の被動作主性の程度のみがかかわる階層と同階層に加えて、主語の動作主性の

程度もかかわる階層が混同していると指摘し、これら2つの階層をわけの必要があるとしている。以下に、Malchukov(2010)が提唱する二次元の動詞タイプの階層を示す。

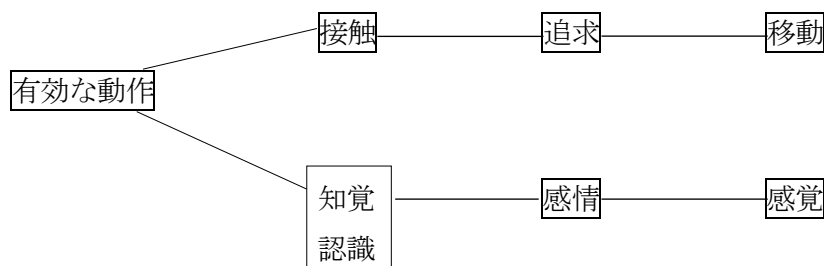


図4-2 二元的二項述語階層Malchukov(2015:5)を参考に作成

Malchukov(2015:4)によると、上側の階層は直接目的語の被動作主性の程度のみがかかわる階層を表しており、下側の階層は主語の動作主性の程度と直接目的語の被動作主性の程度の両方がかかわる階層を表している。また、直接目的語について、上下の両階層においてより左側に位置する動詞では目的語が受ける影響は大きい。一方、主語について、これは下側の階層のみにかかわることであるが、左側の動詞では動作主の機能になりやすいのに対し、右側に行くにつれて経験者の機能になりやすいとしている。

また、Tsunoda(1981:392-393)によると、通言語的に動詞の意味的性質による分裂および時制/アスペクト/法による分裂には有効性条件(effectiveness condition)という共通の原理が関与しており、意味と格標示のメカニズムは基本的に同じである。さらに、動作主および被動作主の活動または状況の有効性、完結性、定性、現実性などに関係しているとしている。

Tsunoda(1981)が提唱する有効性条件の10のパラメータは以下のとおりであり、同パラメータ同士は密接にかかわっているとしている。また、同パラメータのなかにはHopper&Thompson(1980)の他動性のパラメータと重複しているものもある。

一致	不一致
(A) 行為	状態
(B) Oへの衝撃あり	Oへの衝撃なし
(C) Oが達成されている	Oが達成されていない
(D) Oが完全に影響を受けている	Oが部分的に影響を受けている



(E) 完了	未完了または進行中
(F) 一瞬	継続
(G) 完了アスペクト	不完了アスペクト
(H) 変化を伴う	変化を伴わない
(I) 特定または単発の活動/状況	慣例、一般、習慣
(J) 定/特定/指示的O	不定/不特定/非指示的O
(K) 実際の/実現された	潜在的/実現されていない
(L) 現実	非現実
(M) 肯定	否定

表4-7 有効性条件(Tsunoda(1981:393)を参考に作成)

Tsunoda(1981:400-402)によると、対格言語において有効性条件が一致する場合、他動詞の主語、目的語はそれぞれ主格、対格で表され、対格は有標になる。反対に、有効性条件が一致しない場合、他動詞の主語、目的語の両方もしくはどちらか一方がそれぞれの格階層において周縁的な斜格に降格する。また、対格が降格する場合、与格、分格、属格のいずれかの斜格で表されるとしている。

他動詞の目的語	他動詞(自動詞)の主語
対格	> 主格 > 斜格

表4-8 対格言語の格階層(Tsunoda(1981:400)を参考に作成)

また、動詞の意味的性質とアスペクトに関連して、Givón(1985:93-94)によると、ネワリ語(Newari)において原型他動詞は完了/過去あるいは未来/非現実相では能格標示が義務的であるが、継続アスペクトおよび進行アスペクトでは動作主に焦点が置かれているかどうかで格標示の有無が決まる。さらに、より他動性の低い動詞では、完了アスペクトでは能格標示されるが、習慣を表す場合、主格標示も選択できる。加えて、**tener**などでは主語は経験者の役割を果たし、能格ではなく、与格で標示されるとしている。

## 4.4. 分析

### 4.4.1. はじめに

本項では、本研究の資料体である26文学作品において三人称の直接目的語の形態が他動性と関連してどのように選択されているのかを考察する。そのために、さまざまな言語における他動性に関する多くの研究で受け入れられているHopper&Thompson(1980)が提唱する他動性の度合いを測る10項目をもとに、本研究で使用する他動性の項目を設定する。次項では、本研究で使用する他動性の項目を提示し、続く4.4.3.では、同項目を用いて、各作品における直接目的語の形態の選択を通時的に考察する。

### 4.4.2. 本研究で使用する他動性の項目

ここでは、本研究で使用する他動性の項目を提示する。本研究で使用する他動性の項目は、さまざまな言語における他動性に関する多くの研究で受け入れられているHopper&Thompson(1980)によって提唱されている他動性の10項目を基本としているが、4.3.3.で確認した格分裂のタイプを考察している研究も考慮し、これら10項目のうち、いくつかの項目についてはより細かく分類し、le語法の出現傾向がより詳細に分析できるように設定している。また、García(1975)およびFlores(2004, 2006, 2007)では取り扱われていない他動性の項目を取り入れることで、他動性の高低と形態の選択をより詳細に考察する。さらに、それぞれの項目において、他動性が高いと考えられるパラメータ、つまりloが用いられやすいパラメータ、反対に他動性が低いパラメータ、つまりleが用いられやすいパラメータを示す。おしなべて、他動性が高いパラメータをまったく有しない文脈ではloが用いられにくく、他動性が低いパラメータをまったく有しない文脈ではleが用いられにくいと考えられる。

以下に、本研究で使用する他動性の10項目を示す。

- 1) 意図性
- 2) 主語の有生性
- 3) 目的語の特定性
- 4) 目的語への影響
- 5) 動性
- 6) 肯定/否定

- 7) 法
- 8) アスペクト
- 9) 話者の語用論的評価
- 10) 項数(1, 2, 3)<sup>31</sup>

1) 意図性について、Dixon(1994:23-24)によると、他動詞の主語は典型的に意思をもつ行為者を指している。そのため、The falling branch hit meやJohn hit Tom accidentally with a stickのような文では、それぞれthe falling branchとJohnが他動詞の主語として機能しているが、前者は行為者ではなく、後者はaccidentallyという副詞の存在によって本来動作を支配する他動詞の主語は同動作を意図的に制御できていないため、行為者として標示はされず、これらの文は非典型的な例であるとしている。以上のことから、動詞の行為が意図的である場合、直接目的語はloで示され、非意図的である場合、直接目的語はleで表される傾向にあると考えられる。

2) 主語の有生性について、Silverstein(1976)、Dixon(1994)、Comrie(1989)、Croft(2003)らが提唱する名詞類階層をもとに以下の階層を構築する。

人>動物						無生物		
人称代名詞		三人称の人称代名詞、 固有名詞	普通名詞					
			定		不定		特定	不特定
一人称	二人称	特定	不特定	特定	不特定			

表4-9 主語の有生性階層<sup>32</sup>

主語が同表の左側にする名詞であるほど、直接目的語はloで表されやすく、表の右側に位置する名詞であるほど直接目的語はleで表されやすいと考えられる。また、定および不定、特定および不特定については、*Nueva Gramática de la Lengua Española*(2009)の記述から、以下の基準にしたがって判別されている。

- i) 定(definido): 定冠詞、指示詞、所有詞、ambos, cada, todoに修飾された名詞

<sup>31</sup> 他動詞構文を取り扱う本研究ではhaberのみが一項文の例である。

<sup>32</sup> 三人称複数を用いた不定人称は不定性の不特定に含める。

- ii) 不定(*indefinido*): 不定冠詞、不定代名詞、不定形容詞、数詞、無冠詞<sup>33</sup>
- iii) 特定(*específico*): 話者が特定できている人および物
- iv) 不特定(*inespecífico*): 話者が特定できていない人および物、総称、集合名詞

さらに、主語が無生物である場合、直接目的語として与格の形態がとられやすいことは、先述のGarcía(1975)およびFlores(2004, 2006)に加え、Butt&Benjamin(2019)やCuervo(1895)、Fernández Ramírez(1987)、Hurst(1951)らによって支持されている。Hurst(1951: 74-75)によると、物が主語である場合、直接目的語の形態を完全に弁別する動詞もある一方、主語が有生物であるか無生物であるかに関係なく、対格の形態を選択する動詞もある。ただし、後者の動詞については、動詞によって程度は異なるものの、主語が無生物である場合、主語が有生物である場合よりも与格の形態が選択される割合が高いとしている。

3) 目的語の特定性について、Croft(2003:132)が提唱する特定性の序列(定性>特定>不特定)から、以下の階層を構築する。

人>動物		
固有名詞	普通名詞	
	特定	不特定

表4-10 目的語の特定性の階層

Flores(2004, 2006, 2007)は、与格は典型的に個別性の高い人または有生物を指すことから、*le*は個別性の高い人または有生物を指すことが多いとする一方で、*le*語法に有利に働く他動性が低い要素として直接目的語がほとんど個別化されていないことをあげている。また、Moreno Cabrera(2002<sup>2</sup>:497)によると、目的語が個別化されているほうが行為は集中する。さらに、Hopper&Thompson(1980:291)は、典型的な目的語は特定性の高い有生物であり、有標である傾向にあり、他動性が高いことを表しているとしている。

以上のことから、他動性の高低の観点からみれば、目的語の特定性が高い場合、*lo*が用いられる傾向にあり、反対に、目的語の特定性が低い場合、*le*が用いられる傾向にあると

<sup>33</sup> 中世の作品において無冠詞で現れている主語は定性に含める。

考えられる。一方、対格および与格に典型的な意味からみると、目的語の特定性が高い場合、leが用いられる傾向にあり、反対に、目的語の特定性が低い場合、loが用いられる傾向にあると考えられる。そこで、本研究では、各作品においてどちらの観点から形態が選択されているかを考察する。

4) 目的語への影響について、先述のLangacker(1991)の説およびTsunoda/角田(1981:395, 2020<sup>5</sup>:101)が提唱する二項述語の階層をもとに、目的語が受ける影響の程度によって次の3つに分類する。

- i) 物理的变化や移動を伴う行為または物理的行為を受ける、目的語が非活動的役割を果たしている
- ii) 物理的变化や移動を伴わない行為または非物理的行為を受ける
- iii) 目的語が受益者または経験者、受取人であり、活動的な役割を果たしている

また、2.3.3.3.で、Flores(2004, 2006, 2007)は、形態の選択は与格および対格に典型的な意味に基づいているとしていることを確認したが、同書ではそれぞれの格に典型的な意味に従うと、物理的变化や移動を伴う、つまり目的語が動詞の表す行為の影響を強く受ける場合、直接目的語としてloがもっとも用いられやすいとされている。反対に、物理的变化や移動を伴わないまたは非物理的行為を表す、つまり目的語が動詞の表す行為の影響を間接的に受ける場合は、直接目的語としてleが用いられやすいとされている。

さらに、Hurst(1951:76)もまた、動詞の行為が直接目的語に与える影響の程度によって選択される形態は異なり、動詞の行為が物理的または動詞の意味が動的である場合、主語が無生物であったとしても、対格の形態が選択される傾向にあるとしている。逆に、動詞の行為が精神的または動詞の意味が静的である場合は、与格の形態が選択される傾向にあるとしている。

5) 動詞が表す行為の動性について、Tsunoda/角田(1981:395, 2020<sup>5</sup>:101)が提唱する二項述語の階層および行為がおこなわれる時間の長さによって次の3つに分類する。

- i) 瞬間的に影響を及ぼす行為

ii) ある程度続く行為

iii) 持続する状態

表4-6で示したTsunoda/角田(1981:395, 2020<sup>5</sup>:101)が提唱する二項述語の階層において、左側に位置する動作動詞では他動詞枠組みを取り、対格標示が起こるが、状態動詞など右側に位置する動詞では他動詞枠組みが取られにくく、対格標示がされにくくなること、さらに、Hopper&Thompson(1980)によると、瞬間的に実行される行為は継続的に実行される行為よりも被動作主に効果的に実行されることから、瞬間的に影響を及ぼす行為を表す動詞では直接目的語としてloが用いられやすく、持続する状態を表す動詞ではleが用いられやすいと考えられる。

6) 肯定性について、これはHopper&Thompson(1980)と同様、肯定文であるか否定文であるかを指す。ある事象を正しいとする肯定文では直接目的語としてloが用いられやすく、ある事象を正しいとしない否定文ではleが用いられやすいと考えられる。

7) 法について、法は直説法、接続法、命令法のような定型と、不定詞、現在分詞のような非定型<sup>34</sup>に分類される。Tsunoda(1981)が提唱する有効性条件のパラメータにおいて、実際に生じた事柄や現実的事柄を表す文脈は他動性が高く、まだ実現されていない事柄や非現実的事柄を表す文脈は他動性が低いとされていることから、それぞれの型において選択される形態を次のように仮定する。まず、定型について、仮定や非現実的な事柄を表す接続法ではleが用いられやすいが、そのような内容を表さない直説法ではloが用いられやすいと考えられる。また、Dixon(1994)によると、一部の言語で対格標示が唯一なされる命令法ではloが用いられやすいことから、命令法ではloが用いられる傾向にあると考えられる。さらに、非定型については、不定詞が条件を表す場合<sup>35</sup>や現在分詞が譲歩や条件を表す場合、leが用いられやすいと考えられる。

8) アスペクトについて、以下の3つに分類し、考察をおこなう。

<sup>34</sup> 非定型に分類される過去分詞は直接目的語を伴わないため、本研究では考察対象外とする。

<sup>35</sup> deを伴って条件を表すものが想定されている。

- i) 完了アスペクト(直説法単純過去形・直前過去形・現在完了形・過去完了形・未来完了形・過去未来完了形、接続法現在完了形、過去完了形、未来完了形、過去分詞、不定詞複合形、現在分詞複合形)
- ii) 不完了アスペクト(直説法現在形・不完了過去形・未来形・過去未来形、接続法現在形・過去形・未来形、不定詞単純形、現在分詞単純形、命令法)
- iii) 進行アスペクト(全時制の進行形)

先述のComrie(1981)およびCoon(2013)、Givón(1985)、Hopper&Thompson(1980)、Tsunoda(1981)らの考えから、完了アスペクト、さらにそのなかでもとくに完了形で`lo`が用いられやすく、不完了アスペクトやとくに進行アスペクトで`le`が用いられやすいと考えられる。

9) 話者の語用論的評価について、尊敬や愛情など直接目的語の指示対象に特別な意味が与えられている場合、与格の形態が用いられる傾向にある(Butt&Benjamin2019)。逆に、Flores(2004, 2006, 2007)によると、物象化または軽蔑を表している場合は、対格の形態が用いられる傾向にある。

また、指示対象が`usted`である場合、スペイン語圏全域で敬称として`le`語法が用いられる(Butt&Benjamin2019)、(Fernández-Ordóñez1999)、(García1975)、(Gómez Seibane2021)。さらに、Fernández-Ordóñez(1999:1340)によると、敬称の`le`語法においても指示対象が女性であるよりも男性である場合のほうがよくみられる。このような敬称の`le`語法について、Gómez Seibane(2021)によると、18、19世紀に書かれた私的な手紙を資料体として3つの体系(格区別体系、参照体系、バスク地方の体系)における`le`語法の使用法と割合を分析した結果、敬称の`le`語法は18世紀からすでにみられ、指示対象の性によって形態の区別がなされる参照体系以外の2つの体系では、指示対象の性を問わず、指示対象が本来の三人称である場合よりも高い頻度でみられる。

10) 項数について、一般的に、二項文よりも三項文のほうが他動性は高いと考えられている。本章では一項文および二項文を取り扱い、三項文は次章で取り扱う。

本研究では、これら10項目のうち、他動性が低いパラメータで`le`が用いられやすいと仮定し、考察をおこなう。また、各作品および地域において形態の選択に影響していると考

えられる項目および形態の選択においてより重視される項目を考察する。以下に、これら10項目のパラメータに基づく分析の例を示す。

- (1) Ayudó<sup>36</sup>le el Criador, el Señor que es en cielo. (*Cantar de Mio Cid*, 1094)<sup>3637</sup>  
 『天にまします創造主(かみ)はシッドを助け給い』(牛島、福井, 1994, 98)

1) 意図:	あり
2) 主語:	固有名詞
3) 直接目的語:	固有名詞
4) 直接目的語への影響:	受益者
5) 動性:	瞬間的に影響を及ぼす行為
6) 肯定/否定:	肯定
7) 法:	直説法
8) アスペクト:	完了
9) その他	特になし
10) 項数:	2

#### 4.4.3. 各作品における直接目的語の形態の選択

##### 4.4.3.1. はじめに

ここでは、各項において取り扱う資料体を確認する。なお、le語法圏と非le語法圏において形態の選択は異なる方法でおこなわれているのかを考察するために、両地域をわけて分析をおこなう。各項において取り扱う資料体は次のとおりである。まず、4.4.3.2.1.では人の男性単数のle語法の割合が50%未満のle語法圏出身者による作品(*Libro de Alexandre*、*Milagros de Nuestra Señora*、*Cantar de Mio Cid*、*El Conde Lucanor*、*Rimado de Palacio*)を通時的に考察する。次に、4.4.3.2.2.では同指示対象におけるle語法の割合が75%以上である15世紀後半以降のle語法圏の作品(*Poesía*、*Cárcel de amor*、*La Celestina*、*Lazarillo de Tormes*、*La Galatea*、*Fuente Ovejuna*、*La vida del Buscón*、*El Alcalde de Zalamea*、*El sí de las niñas*、*Don Juan Tenorio*、*Los intereses creados*)を取り扱う。さらに、非le語法圏出身者の作品についても同様に、le語法の割合の高さを基準として作品群を二分し、

<sup>36</sup> 例文中の四角囲みおよび下線は筆者による。以下の例でも同様である。

<sup>37</sup> 以下、とくに断りがない限り、スペイン語の訳は筆者による。



4.4.3.3.1.では同指示対象のle語法の割合が50%未満の作品(*Guzmán de Alfarache*、*Soledades*、*El sombrero de tres picos*、*Platero y yo*)を扱い、4.4.3.3.2.では同指示対象におけるle語法の割合が80%以上の作品(*El burlador de Sevilla*、*El diablo cojuelo*、*Raquel*、*Cartas marruecas*、*El estudiante de Salamanca*、*El trovador*)を考察する。

また、考察手法について、動詞自体がもつ他動性の高低によって考えられる形態の違いを排除するために、同一作品中の同一動詞においてle語法が用いられている例と語源的形態lo(s)が用いられている例を主に取り扱い、各形態が用いられている要因を他動性の視点から分析する。さらに、人の男性単数のle語法の割合が高い資料体については、同指示対象において語源を維持した形態が用いられている例をもとに同形態の使用を促している他動性の項目、つまりle語法の出現を抑制する要因を探るとともに、指示対象が複数や女性、物である場合といった指示対象が人の男性単数である場合よりも、le語法の割合が低い指示対象においてle語法が用いられている例を考察し、同用法を促している要因を探る。加えて、一部の資料体については、特定の他動性の項目に注目してデータを集計し、同項目における形態選択の考察をおこなう。

#### 4.4.3.2. le語法圏出身の作者による作品

##### 4.4.3.2.1. le語法の割合が低い作品

###### 4.4.3.2.1.1. はじめに

ここでは、le語法の割合が低い13、14世紀の作品、つまり*Libro de Alexandre*、*Milagros de Nuestra Señora*、*Cantar de Mio Cid*、*El Conde Lucanor*、*Rimado de Palacio*の5作品を通時的に考察する。4.4.3.2.1.2.では、13世紀の作品(*Libro de Alexandre*、*Milagros de Nuestra Señora*)の考察をおこない、4.4.3.2.1.3.では14世紀前半の作品(*Cantar de Mio Cid*、*El Conde Lucanor*)の考察をおこなう。さらに、4.4.3.2.1.4.では14世紀後半の作品(*Rimado de Palacio*)を考察する。

###### 4.4.3.2.1.2. 13世紀の作品

###### 4.4.3.2.1.2.1. *Libro de Alexandre*

まず、*Libro de Alexandre*を考察する。高橋(2022:12-13)によると、ayudarなど「助ける」を意味する動詞では13世紀の作品からすでに単数形でも複数形でも高い割合でle語法がみられる。また、García(1975:327)は、ayudarの直接目的語は活動的な参与者であると

している。*Libro de Alexandre*には同意味をもつ動詞において人の男性単数および複数のle語法の例がそれぞれ12例、8例あり、3.3.2.で確認したように、同作品における人の男性単数および複数のle語法の例はそれぞれ17例、13例あることから、それぞれの指示対象におけるle語法の例の半数以上を占めていることがわかる。以下にみられるように、同意味をもつ動詞では、(2)のように主語が有生性の高い一人称や、(3)および(4)のようにより有生性が低い三人称の特定の人物、(5)のようにさらに有生性が低い三人称の不特定の人物や(6)および(7)のように無生物であっても、直接目的語はle(s)で表されている。

- (2) »¡Valámos<sup>le</sup>, amigos, sí Dïos vos bendiga!  
 ¡Muy grant preçio nos cabe vengar tan grant nemiga!  
 ¡nunca fue de los buenos la trãición amiga!  
 ¡Valámos<sup>le</sup>, amigos, sí nos Dïos bendiga! (*Libro de Alexandre*, 1730)  
 『友たちよ、彼を助けよう、神がお前たちを祝福してくださらんことを  
 このような大それた裏切りに復讐するのは我々に非常に大きな対価をもたらす  
 裏切りは決して善人たちの味方ではなかった  
 友たちよ、彼を助けよう、神が我々を祝福してくださらんことを』(太田, 2021, IX, 184)
- (3) Acorrio<sup>li</sup> Filotas, un su leal braçero,  
 por'en tales faziendas un estraño bozero.  
 Abatió a Enús con otro cavallero:  
 ¡fueron desbaratados en poco de mijero! (*Libro de Alexandre*, 1363)  
 『アレクサンダーの忠実な兵士フィロータスが彼を助きました  
 そのような戦いにおける並外れた仲介役です  
 彼はエヌスともう一人の騎士を倒しました  
 二人はわずかな時間で打ち破られました(太田, 2020, VII, 286)』
- (4) Fazienlos seer quedos, que les non vagava;  
 i xir a la batalla ninguno non osava.  
 Todo'l poder de Greçia embargado estava:  
 ¡maldizién a Aquiles, que tan mal <sup>les</sup> uviava! (*Libro de Alexandre*, 607)  
 『トロヤ人たちはギリシャ人をおとなしくさせ、息をつかせませんでした  
 誰も戦闘に出ようとはしませんでした  
 ギリシャ全軍が身動きできないようにされていて  
 彼らは自分たちをこのようにしておくアキレスを呪いました』(太田, 2019, IV, 78)
- (5) Como Dios non querié, no'l podié res valer:  
 non <sup>le</sup> pudieron físicos ningunos acorrer.  
 Entendió el buen omne qué avié de seer:  
 mandose sacar fuera, en el campo poner. (*Libro de Alexandre*, 2620)  
 『神が望まなかったのも、何も彼を助けることができませんでした:  
 どの医者も彼を助けることができませんでした  
 善人はそれがどのように終わるかを理解しました:  
 彼は彼らに彼を外に出し、彼を野原に置くよう命じました』(太田, 2022, XIV, 122)
- (6) Alongose Maçeos: non lo pudo tomar;

afrontós' con Oco: óvolo a matar.

Presto[le] a Maços que's ovo a longar:

¡si non, por essa mesma oviera a passar! (*Libro de Alexandre*, 1019)

『マセオスは遠ざかって行き、フィロタスは彼を捉えることはできませんでした

フィロタスはオコと対決し、彼を殺しました

そのことはマセオスが逃げるのを助けました

もしそうでなければ、マセオスも同じ運命をたどっていたでしょう』(太田, 2019, VI, 101)

- (7) »La otra, como saben, si fueren arrancados,  
non [les] han a prestar yermos nin poblados,  
más querrán en el campo seer descabeçados  
que de gentes estrañas seer tan aontados. (*Libro de Alexandre*, 1316)

『さらに、彼らも知っての通り、もし負けたら

荒野も村も役に立たなくなるでしょう

彼らは戦場で首を落とされる方がましでしょう

外国人にひどい侮辱を受けるよりは』(太田, 2020, VII, 276)

なお、(2)は同作品において主語が一人称である場合にle語法の例がみられる唯一の例であり、同意味以外の意味をもつ動詞では主語が有生性の高い一、二人称である場合、lo(s)が用いられている。

また、(8)のように他動性の高い完了アスペクトの肯定文でも、(9)のようにより他動性の低い完了アスペクトおよび不完了アスペクトの否定文でも、「助ける」を意味する動詞ではleが用いられている。

- (8) Quatro de sus vassallos —Timëus el braçero,  
segundo Pëucostes, Leonatus el terçero;  
el quarto fue Astrión, un mortal cavallero—,  
estos, por su ventura, [le] uviaron primero. (*Libro de Alexandre*, 2238)

『彼の家臣のうちの4人

—槍騎兵ティマエウス、

2人目のプセステス、3人目のレオナト

致命的な騎士4人目のアリストン、

彼らは幸運にも、最初に彼を助けました』(太田, 2022, XII, 168)

- (9) Veyelo mal prender; non [le] pudo prestar,  
que, por que lo quisiesse, non [le] podió uviar.  
¡Toás, que a Umbrásides fizo quedo estar,  
toda su alegría tornós'le en pesar! (*Libro de Alexandre*, 523)

『兄がひどい目に遭ったのを見ましたが、助けることができませんでした

望んでも彼に救いの手を差し伸べることはできなかったのです

ウンブラシデスを殺したトアスは

喜びが全部悲しみになりました』(太田, 2018, III, 232)

しかし、以下に示すように、同意味の動詞であっても、(10)および(11)のように直接目的語がloで表されている例が2つ存在する。

- (10) Tanto corrié el cavallo que dizién que volava;  
si un mes dayunasse, él nunca se quexava;  
al señor en fazienda muy bien lo ayudava;  
i non tornava la rienda quien a él se llegava! (*Libro de Alexandre*, 126)

『馬は非常に速く走ったので人々が飛んでいると言うほどでした  
一ヶ月食べなくとも、決して不満はもらさず  
戦いにおいて非常に主人の助けとなりました  
近づく者に手綱を取らせませんでした』(太田, 2017, I, 49)

- (11) Ovieron d'esti fecho las gentes grant plazer:  
fueron tan confortadas como con buen beber.  
Todos dizién: «¡Tal rëy fágalo Dios valer,  
que sabe a vassallos tal lealtat tener!». (*Libro de Alexandre*, 2154)

『このことに兵士たちは大いに喜びました  
十分水を飲むのと同じくらい元気づけられました  
皆が言いました：《このような王を神がお護りくださいますように  
臣下に対してこのように誠実であることができる王を》(太田, 2022, XII, 151)

(10)について、ayudarの主語はel cavallo、つまり動物であり、主語および直接目的語の指示対象が同じ他の動詞の例でもloが用いられている。また、(11)について、直接目的語の指示対象は不特定の人物であり、loが用いられている。このように直接目的語が不特定の人物である場合、loが用いられていることは対格に典型的な意味に由来していると考えられる。ただし、以下の例にみられるように、同例のように同意味の動詞の直接目的語の指示対象が不特定の人物である場合でも、le(s)で表されている例が存在する。

- (12) Muchos con grant cobdiçia tórnanse usureros:  
dan dos e cogen quatro, cuemo de sus pecheros;  
venden los malastrugos las almas por dineros:  
¡el día del Jüiçio non [les] valdrán vozeros! (*Libro de Alexandre*, 1820)

『多くの人が食欲で高利貸しになります  
2与えて、4受け取ります、まるで徴収権があるかのように  
不幸なことに彼らの魂をお金で売ります  
最後の審判の日に彼らを弁護する弁護士はいないでしょう！』(太田, 2021, X, 453)

- (13) Él querié que al bueno la verdat [le] valiesse,  
non levasse soldada qui non la mereçiesse;  
cadaúno al suyo tal siella le pusiesse,  
e tal puesta de carne qüal lo entendiesse. (*Libro de Alexandre*, 1553)

『王は望みました真実が善人を守るように  
値しない者が金を受け取らないように  
各々自分がふさわしい席に着くように

(12)のvalerの主語は特定のvozerosではなく、弁護士一般を指している。つまり、主語は不特定の人物であり、同例は一般論を表す文脈である。一方、(13)の主語はla verdat、つまり無生物である。したがって、直接目的語の指示対象が不特定の人物であっても、主語が不特定の人物や無生物のような有生性の低い名詞である場合、le(s)が用いられると考えられる。ただし、同意味以外の意味をもつ動詞では、(14)のように主語が無生物かつ直接目的語が不特定の人物を指す場合、直接目的語はloで表されている。

- (14) Fizieron la camisa dos fadas so el mar;  
diéronle dos bondades por bien la acabar:  
quisquier' que la vistiesse non se pudiés'embebdar  
e nunca lo pudiés' luxuria retentar. (*Libro de Alexandre*, 100)  
『下着は二人の妖精が海中で作りました  
よく仕上げるために二つの特質を与えました  
それを身につける者は誰でも酔っ払うことはない  
決して欲情がその人を誘惑することはない』(太田, 2018, I, 44)

以上のことから、同作品において「助ける」を意味する動詞について、一部の例外を除いて直接目的語はle(s)で表されると考えられる。ひとつめの例外は主語が動物の場合であり、ふたつめの例外は直接目的語が不特定の人物かつ主語が特定の人物の場合である。また、肯定性やアスペクトは形態の選択に影響していないと考えられる。

続いて、「助ける」を意味する動詞と同様、le語法との相性がいいと考えられる動詞を考察する。たとえば、直接目的語を伴わない不定詞を伴うmandarは直接目的語が単数である場合、(15)に示すように2例でleが用いられているが、(16)のようにloが用いられるケースが1例あり、同例の指示対象は不特定の人物である。

- (15) Mando<sup>le</sup> a Parmenio con muchos de poderes  
ir por las tierras planas, prometiendo averes,  
por saber de ti, Dario, en quáles tierras eres,  
si finqueste en Persia o fūiste a Seres. (*Libro de Alexandre*, 1595)  
『王は大きな兵力を持つパルメニオに  
財産を約束して平地に行くことを命じました  
お前について、ダリウスよ、どの地にいるのかを知るために  
ペルシャに留まったのか、セレスに行ったのかを知るために』(太田, 2021, IX, 156)

- (16) Derraiga e descree, e déxase morir.  
Presto es el diablo e vien'lo rezebir;

liévalo al Infierno; mándalo bien servir:  
¡faz'lo en la resina e en plomo bollir! (*Libro de Alexandre*, 2389)

『根無しになり、不信に陥り、死のうとします  
悪魔は用意ができていて、彼を迎えに来ます  
地獄に連れて行き、よく仕えるように命じ  
松ヤニと銅の中で彼を煮させます』(太田, 2022, XIII, 86)

(16)は特定の人物について言及しているわけではなく、一般論を表す文脈である。ただし、(12)で示したように、「助ける」を意味する動詞valerの例では一般論を表す文脈においても直接目的語としてlesが用いられている。また、直接目的語が複数形である場合、「助ける」を意味する動詞では全8例でlesが用いられているが、不定詞を伴うmandarでは(17)のように全4例でlosが用いられている。

- (17) Sobre Éufrates el río los mandó ir posar  
—un agua de grant guisa, fascas semeja mar—.  
Allí prendién consejo cuémo avrién de far,  
si irién adelant' o querrién esperar. (*Libro de Alexandre*, 821)

『ダリウス王はユーフラテス河のほとりに兵を配置するよ(ママ)に命じました  
—それは大河で、ほとんど海のようにでした—  
そこでどうするのか決めることになりました  
前進するのか待つのか』(太田, 2019, V, 201)

以上のことから、不定詞を伴うmandarはle語法との相性がいいと考えられる動詞ではあるものの、「助ける」を意味する動詞ほどle語法が用いられやすい動詞ではないと考えられる。これらの例のように不定詞を伴う主動詞の構造においてle語法がみられやすいことは、Cuervo(1895)やGarcía(1975)など複数の先行研究で指摘されているが、同作品ではmandar以外の直接目的語を伴わない不定詞を伴う主動詞の例ではいずれもlo(s)が用いられているため、不定詞を伴うmandarの例においてle語法が用いられていることを構造上の問題と結論づけることはできず、同動詞ではle語法が早い段階からみられたと考えられる。

また、preguntarやparçirなどのような特定の動詞<sup>38</sup>ではle語法が用いられている。

- (18) Ovieron con cavallos d'ellos a alcançar,  
ca eran muy ligeros, non los podién tomar.  
Maguer les preguntavan, non les sabién falar,  
que non los entiendién e avién a callar. (*Libro de Alexandre*, 2474)

『馬で彼らに追いつかなければなりませんでしたが  
彼らは非常に軽快だったので、捕らえることはできませんでした

<sup>38</sup> Cano(1984:234)によると、中世スペイン語においてpreguntarは人を表す対格を要求する。

彼らに質問しても、話ができませんでした  
ギリシャ人たちの言っていることがわからず、黙っていなければならなかったのです』  
(太田, 2022, XIII, 103)

- (19) Mentre los quatro príncipes la grant priessa les dieron,  
los otros en el muro toda vía rompieron.  
Entraron a grant priessa, deque lugar ovieron:  
ja los que alcançavan parçir non **les** quisieron! (*Libro de Alexandre*, 2243)  
『四人の王子たちが敵に激しい攻撃を仕掛けているあいだ  
その間他の者たちは壁を破壊しました  
道路を開けるとと(ママ)大急ぎで入り  
捕えた敵を許そうとしませんでした』(太田, 2022, XII, 169)

(19)のparçirは現代スペイン語ではperdonarを意味する動詞である。後述するように、*Milagros de Nuestra Señora*において動詞がperdonarである場合、指示対象が人の男性単数である場合、大半の例においてleで表されている。

続いて、他動性の低い文脈におけるle語法の例を考察する。13世紀の作品からすでに他動性によると考えられる直接目的語の形態の選択がみられる。たとえば、以下に示すように、主語の有生性によって直接目的語の形態の選択がなされていると考えられる例が存在する。

- (20) ¡Tomole con la ira ravia al corazón!  
¡mayores saltos dava que çiervo nin león!  
¡Nin popó cavallero nin escusó peón!  
¡iva dando a todos muy mala maldición! (*Libro de Alexandre*, 1402)  
『怒りと共に苦痛が彼の心を捉え  
鹿や獅子よりも激しい攻撃を仕掛けました  
騎士も歩兵も許しませんでした  
すべての者を激しく呪って行きました』(太田, 2020, VIII, 26)

- (21) Abaxaron las lanças e fuéronse golpar.  
Errolo Nicolao: non **lo** pudo tomar.  
El infante fue artero: sópolo bien sestar;  
¡ayudol' su ventura e óvolo a matar! (*Libro de Alexandre*, 140)  
『彼らは槍を下ろし、攻めあいました  
ニコラオは的を外し、王子をとらえられませんでした  
王子は狡猾でニコラオをしっかりとらえ  
運が味方し、ニコラオを殺すことができました』(太田, 2018, I, 52)

(20)および(21)の動詞はともにtomarであるが、(20)では主語はravia、つまり物であり、直接目的語はleで表されているのに対し、(21)では主語はNicolao、つまり人であり、直接

目的語はloで表されている。また、以下に示すように複数形の例でも同様のことが起きていると考えられる。

- (22) Toviéronse los griegos por bien estrenados:  
fueron por lidiar todos más abivados.  
Davan e reñibién, como escalentados:  
i soltávan<sup>les</sup> los sueños que avien soñados! (*Libro de Alexandre*, 2052)  
『ギリシャ人たちは自分たちはうまく取りかかったと思いました  
皆撥刺と戦いに臨み  
熱い攻防になりました  
彼らが夢見た事が現実になっていました』(太田, 2021, XI, 87)

- (23) Soltolos de tributos e de todas las pechas;  
mandoles que toviessen la Lëy a derechas.  
Mandó todas sus gentes que's tornassen derechas,  
ca avie por jamás con ellos pazes fechas. (*Libro de Alexandre*, 1144)  
『彼ら貢ぎ物とすべての税から解放し  
立法に従うように命じ  
すべての人々に胸を張って生きるように命じました  
彼らと永遠の好を結んだのですから』(太田, 2019, VI, 127)

(22)および(23)の動詞はともにsoltarであるが、(22)では主語がlos sueños que avien soñados、つまり物であり、直接目的語はlesで表されているのに対し、(23)では主語は明示されていないが、Alexandre、つまり人であり、直接目的語はlosで表されている。

しかし、(24)および(25)で示すように動詞が同じであっても、主語が物である場合に、直接目的語の形態の使い分けがなされていない例もみられる。

- (24) »Son las huestes de Dario grandes a desmesura:  
temiendo la primera, passaron a anchura,  
que engaño<sup>les</sup> ante mucho el angostura;  
traen en su fazienda recabdo e cordura. (*Libro de Alexandre*, 1313)  
『ダリウスの軍勢は途方もなく巨大です  
最初の戦闘に恐れをなして、広いところへ移りました  
というのは前は狭さが彼らに重大な過ちを犯させたからです  
(今度は)戦闘に当たって用心深さと分別を示しています』(太田, 2020, VII, 276)

- (25) Mataron muchos d'ellos, fiziéronlos quedar:  
nunca mejor apresos fueran en un logar.  
Pudiéranse con tanto bien honrados tornar,  
mas óvolos esfuerço loco a engañar. (*Libro de Alexandre*, 2012)  
『インド人の多くを殺し、その場に残しました  
彼らはどこでもこんなにうまい具合に行ったことはありませんでした  
これで大いなる名誉をもって帰ることができたでしょう  
しかし狂った勇気は彼らを欺くことになりました』(太田, 2021, XI, 79)



(24)および(25)の主語はそれぞれel angostura、esfuerzo loco、つまりいずれも物であるが、直接目的語としてそれぞれ異なる形態les、losが用いられている。したがって、主語の有生性による形態の選択は完全なかたちではなされていないと考えられる。

また、アスペクトによって形態の選択がなされていると考えられる例が存在する。

- (26) Entendiolo Éctor e fue<sup>le</sup> atendiendo:  
quiquier' ge lo verié que'l avié poco miedo.  
A poder de cavallo vino Áyaz corriendo:  
¡firiol'en el escudo, tod' su poder metiendo! (*Libro de Alexandre*, 579)  
『エクトルは彼に気づき待っていました  
誰でも彼があまり恐れていないことが分かったでしょう  
アヤスは馬に乗って全速力で駆けつけて来て  
力一杯エクトルの盾に攻撃をしかけました』(太田, 2018, III, 243)

- (27) Pero, por desmayado con miedo e con quexa,  
por ferirse con él fizo una remessa.  
No'l dio vagar don Éctor: fuelo a ferir d'essa;  
atendiolo Patroclo: ¡fue buelta la contessa! (*Libro de Alexandre*, 642)  
『パトロクロはエクトルに恐れを抱かせるために  
彼に顔を向けることも答えようとしませんでした  
《本当に一とエクトルは言いました—こんなことはあってはならない  
このままでは終わらないのだから》』(太田, 2019, IV, 85)

(26)および(27)の動詞はともにatenderであるが、直接目的語に用いられている形態は異なる。過去進行形、つまり進行アスペクトの例である(26)ではleが用いられている一方、点過去、つまり完了アスペクトの例である(27)ではloが用いられている。

さらに、直接目的語の受ける影響が小さいと考えられる例においてleが用いられている例がある。

- (28) Diol'en somo del ombro una poca ferida,  
por ó quatro sortijas rompiol' de la loriga.  
Plego<sup>le</sup> a la carne: sacol' la sangre biva.  
Dixo Éctor: «¡Aquesta te será bien vertida!». (*Libro de Alexandre*, 584)  
『アヤスは肩先にわずかな傷を負わせ  
そこから鎧の四つの輪をもぎ取りました  
傷は肉まで届き、鮮血を流させました  
エクトルは言いました：《この血はちゃんと君に降りかかることになるだろう》』  
(太田, 2018, III, 244)

同例において直接目的語の指示対象である人物が傷を受けたのは身体の一部である肩であり、かつ受けた傷の程度はわずかな傷(una poca ferida)と表現されている。したがっ

て、直接目的語は大きなダメージを負っていない、つまり直接目的語が受けた影響は小さいため、leで表されていると考えられる。ただし、同作品において他動性の高低によって考えられる形態選択がみられるのは、(20)～(28)によって例証したようなごく一部の例においてのみであり、これらの例はいずれも主語が三人称、つまり有生性のあまり高くない名詞句が主語であるという共通点をもっている。

以上のことから、同作品において直接目的格三人称男性形の形態は、次のような理由のもとについて選択されていると考えられる。同作品においては直接目的語の特定性によって形態選択の始点が異なり、直接目的語が不特定の人物である場合、基本的にはlo(s)で表されることが考えられる。ただし、例外として主語が不特定の人物または無生物のような有生性が低い動作主で、動詞がvalerである場合は、le(s)が用いられていると考えられる。一方、直接目的語が固有名詞または特定の人物である場合、acorrer、ayudar、hubiar、prestar、valerのような「助ける」を意味する動詞およびpreguntar、不定詞を伴うmandarなどのような特定の動詞の直接目的語には、主語が動物である場合や不定詞を伴うmandarの複数形の例など一部例外を除き、le(s)が用いられると考えられる。また、上記以外の動詞では主語が一、二人称である場合、lo(s)が用いられるが、主語が三人称場合、とくに他動性の低い文脈ではle(s)が用いられることもあると考えられる。

以上のことを図で示すと以下のようなになる。

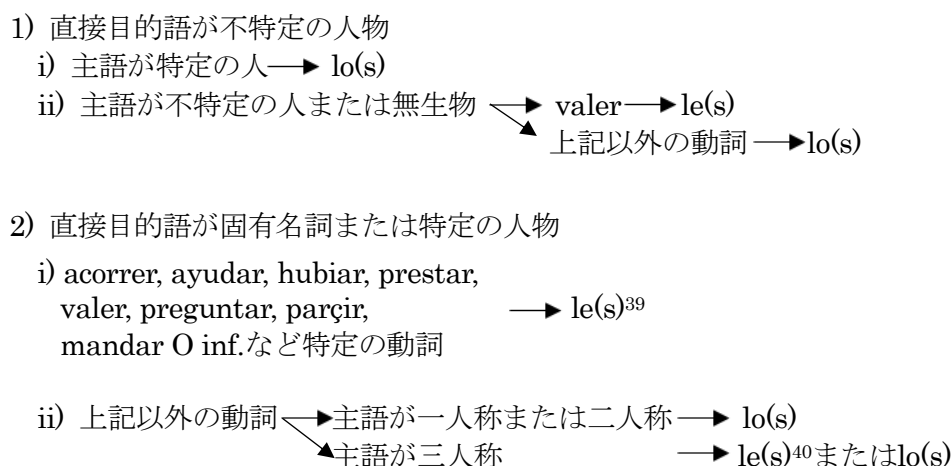


図4-3 *Libro de Alexandre*における三人称の直接目的語の形態選択

<sup>39</sup> 主語が動物である場合や不定詞を伴うmandarの複数形の例など一部例外あり。

<sup>40</sup> 他動性の低い文脈に限られる。

#### 4.4.3.2.1.2.2. *Milagros de Nuestra Señora*

次に、*Libro de Alexandre*と同世紀の作品である*Milagros de Nuestra Señora*を考察する。同作品においても*Libro de Alexandre*と同様、「助ける」を意味する動詞におけるle語法の割合は高く、人の男性単数および複数のle語法の例について、それぞれ全15例中8例、全2例中2例を占めている。また、*Libro de Alexandre*と同様に、同意味の動詞では(29)のように主語が有生性の高い一人称でも、(30)および(31)のように三人称の特定の人物である場合でも、また(32)のように無生物である場合でも、指示対象が人の男性である直接目的語は与格の形態li(s)で示されている。

- (29) Dizié: «Mal só fallido, mesquino pecador,  
por nada no **li** puedo valer al fiador;  
será por mí reptado el mi Redimidor  
e la su Madre sancta, la de Rocamador. (*Milagros de Nuestra Señora*, 664)  
『彼は言いました、《私は約束を違えました、哀れな<sup>つみびと</sup>罪人です  
どうしても保証人をお助けできません  
私のために私の購い主が責めを受けるでしょう  
そしてその母であるロカマドゥールの聖母も』(太田, 2016, V, 57)
- (30) La Madre preciosa, que nunca falleció  
a qui de corazón a pies li cadió,  
el ruego del su clérigo luego ge lo udió,  
no lo metió por plazo, luego **li** acorrió. (*Milagros de Nuestra Señora*, 227)  
『決して聖母は  
自分に心から跪く者を見捨てたことがなく  
その司祭の願いをすぐに聞き入れ  
遅滞なくただちに彼を助けました』(太田, 2014, II, 241)
- (31) Los sanctos ni las sanctas no **lis** querién valer,  
peoravan cutiano a muÿ grand poder;  
prisieron un consejo, ant fuera a prender,  
tornar enna Gloriosa, que los fazié arder. (*Milagros de Nuestra Señora*, 388)  
『聖人たちも聖女たちも彼らを助けようとしませんでした  
日々彼らの状態は極度に悪化して行きました  
前に取るべきだった手段を取ることにしました  
聖母のところに戻るのは、彼女は彼らを焼き殺そうとしていました』(太田, 2015, III, 180)
- (32) Fo con esto Teófilo alegre e pagado,  
tovo todo so pleito que era bien parado;  
tornó a su posada durament engañado,  
mucho más **li** valiera si se fuesse quedado. (*Milagros de Nuestra Señora*, 731)  
『これを聞いてテオフィロは喜び満ちました  
厄介な事がすべてちゃんと収まりました  
(しかし)彼はひどく騙されて家へ帰ったのです  
出かけて行かないほうがずっと良かったのです』(太田, 2016, VI, 175-176)

さらに、(33)のように指示対象が女性である場合でも、liで表現されている例がみられる。

- (33) Las ondas vinién cerca, las gentes alongadas,  
avié con el desarro las piernas embargadas;  
las compañías non eran de valer<sup>li</sup> osadas,  
en poquiello de término yazién muchas jornadas. (*Milagros de Nuestra Señora*, 438)

『波が近くまで来て、人々は遠くにいて  
悪い事に足が言うことを聞きませんでした  
仲間たちは彼女を助けるほど勇敢ではありませんでした  
わずかの間にずっと離れてしまいました』(太田, 2015, III, 190)

ただし、(34)では指示対象がla abadessaである直接目的語はlaで表されている。したがって、指示対象が女性である場合、使用に揺れがあったと考えられる。

- (34) Díssoli su hacienda por que era pasada:  
por sos graves pecados cómo fo engañada,  
cómo <sup>la</sup>acorió la Virgo coronada  
—si por ella non fuesse, fuera mal porfazada—,  
(*Milagros de Nuestra Señora*, 564)

『彼女はなぜこのような事になったか  
彼女の重い罪のためにどのように欺かれたのか  
いかに冠を戴いた乙女が彼女を助けたのか  
もし乙女がいなかったら、ひどい中傷を受けていたろうことを彼に話しました』  
(太田, 2015, IV, 245)

次に示す(35)は、同作品における「助ける」を意味する動詞のなかで指示対象が人の男性である場合に対格が用いられている唯一の例である。

- (35) »Si la Virgo gloriosa no l oviesse valido,  
era el azedoso fieramiente torcido;  
mas la su sancta gracia álo ya acorrido,  
á cobrada la carta; si non, fuera perdido. (*Milagros de Nuestra Señora*, 844)

『もし聖母が助けて下さらなかったら  
不幸者はひどく道を外していたでしょう  
しかし彼女の聖なる恩寵が彼を助けて  
契約書を取り戻してくれました、そうでなかったら彼は破滅していたでしょう』  
(太田, 2016, VI, 199)

同例では動詞acorrerが複合完了形に活用されている。先述のように、完了形は対格がもつとも用いられやすいと考えられる語形であるため、loが用いられている可能性があると考えられる。

また、「助ける」を意味する動詞以外にも、le語法が用いられやすいと考えられる動詞がある。たとえば、perdonarでは(36)のように直接目的語としてloが用いられている例もみられるが、他の4例では(37)のようにleが用いられている。

- (36) Dezir no lo sabría sobre cuál ocasión,  
ca nós no lo sabemos si lo buscó o non,  
diéronli enemigos salto a est varón,  
ovieron a matarlo, ¡Domne Dios lo perdón! (*Milagros de Nuestra Señora*, 103)  
『どんな折だったか言うことはできません  
というのは彼が自分からそうしたのかどうか分らないからです  
敵がこの男を襲って  
殺してしまったのです、主を彼を許したまえ』(太田, 2014, I, 120)
- (37) Si fazié otros males, esto non lo leemos,  
serié mal condempnarlo por lo que non sabemos,  
mas abóndenos esto que dicho vos avemos;  
si ál fizo, perdóneli Christus en qui creemos. (*Milagros de Nuestra Señora*, 143)  
『もし彼が他の悪事を働いていたとしても私たちはその事は読んでいません  
私たちの知らないことで彼を責めるのはよくないでしょう  
私たちがあなたがたに言ったことで十分としましょう  
もっと他のことをしたのなら私たちの信じるキリストよ彼を許してください』(太田, 2014, II, 224)

さらに、*Libro de Alexandre*においてleと相性のいい動詞として不定詞を伴うmandarの例を紹介したが、以下に示すように*Milagros de Nuestra Señora*では同一主語および時制において単数形の2例でloが用いられ、複数形の1例でlisが用いられている。

- (38) El otro omne bono, no l sabría nomnar,  
al que Sancta María lo mandó mastrar,  
cogió amor tan firme de tanto la amar  
que dessar s ie por ella la cabeza cortar. (*Milagros de Nuestra Señora*, 494)  
『もう一人の善人、その名は知りませんが  
聖マリアが修道士にその人に告解するように命じた人ですが  
彼女を揺るぎない愛で愛するする(ママ)あまり  
彼女のためなら首を切られてもかまわないと思う程でした』(太田, 2015, IV, 231)
- (39) Desfizo la figura, empezó a foír,  
nunca más fo osado al monge escarnir;  
ante passó grand tiempo que podiesse guarir,  
plógoli al diablo cuando lo mandó ir. (*Milagros de Nuestra Señora*, 480)  
『聖母が行っていいと命じると悪魔は喜び  
姿を変え逃げ去りました  
決して再び修道院を愚弄しようとはしませんでした  
悪魔は回復するまで多くの時間を要しました』(太田, 2015, IV, 228)

- (40) Acorrió l la Gloriosa, reína general,

ca tenién los diablos mientes a todo mal;  
 mandó<sup>[is]</sup> atender, non osaron fer ál,  
 movió<sup>[is]</sup> pletesía firme e muy cabdal. (*Milagros de Nuestra Señora*, 88)

『するとすべての女王である聖母が馳せ参じました  
 というのは悪魔たちは諸々の悪に心を砕いているいる(ママ)からです  
 聖母は彼らに待つように言うと、彼らはあえて他の事はしませんでした  
 聖母は彼らを断固とした非常に重要な戦いに駆り立てました』(太田, 2014, I, 117)

複数形よりもle語法がみられやすい単数形の例では、(38)および(39)のようにloが用いられているが、複数形の例である(40)は、同作品において直接目的語を伴わない不定詞を伴う主動詞の例のなかで唯一le語法が用いられている例である。したがって、同作品においても不定詞を伴うmandarは*Libro de Alexandre*同様、「助ける」を意味する動詞ほどle語法が高い確率で用いられる動詞であるわけではないが、leと相性のいい動詞であると考えられる。

続いて、他動性の低い文脈におけるle語法の例を考察する。同作品においても他動性による形態の選択がなされていると考えられる例がみられ、たとえば、動作主が被動作主に与える影響の強弱によって形態が選択されていると考えられる例がみられる。

- (41) Menazó<sup>[i]</sup> la dueña con la falda del manto,  
 esto fo pora elli un muÿ mal quebranto;  
 fusso e desterrósse faziendo muy grand planto,  
 fincó en paz el monge, ¡gracias al Padre Sancto!

(*Milagros de Nuestra Señora*, 469)

『聖母はマントの裾で悪魔を威嚇しました  
 これが悪魔にとって大打撃になり  
 大声で泣きながら逃げ去りました  
 修道士は聖なる父のおかげで無事でした』(太田, 2015, IV, 225)

- (42) Issió de la eglesia alegre e pagado,  
 fue luego a su casa como era vezado;  
 menazó<sup>[o]</sup> el padre, porque avié tardado,  
 que mereciente era de seer castigado. (*Milagros de Nuestra Señora*, 359)

『少年は朗らかに満足して教会を出て  
 いつも通りすぐに帰宅しました  
 父親は少年の帰りが遅かったので彼を脅し付けました  
 むち打たれてもおかしくない程でした』(太田, 2015, III, 174-175)

(41)および(42)はいずれも動詞がmenazarの例である。直接目的語としてleが用いられている(41)では聖母はマントの裾で悪魔を威嚇したとされており、動作主である聖母が直接目的語である悪魔に間接的に影響を及ぼしており、大きな影響は与えていないと考えられ

る。一方、直接目的語としてloが用いられている(42)では帰りが遅かった少年を父親が脅しており、直接目的語である少年が受けた影響は大きいと考えられる。

また、同作品においても、(43)の例のように主語が無生物であるために、直接目的語がleで表されていると考えられる例がみられる。

- (43) El fuego, porque bravo, fue de grand cosiment:  
no li nuzió nin punto, mostróli buen talent,  
el niñuelo del fuego estorció bien e gent;  
fizo un grand miráculu el Rey Omnipotent. (*Milagros de Nuestra Señora*, 365)  
『火は激しかったけれど、非常に情けがありました  
少年を少しも傷つけず、彼に善意を見せました  
彼は火から無事に見事に逃れました  
全能の王が偉大な奇跡を起こしたのです』(太田, 2015, III, 176)

ただし、(44)にみられるように、主語が無生物であっても、直接目的語にloが用いられている例がある。

- (44) Teófilo, mesquino, de Dios desamparado,  
venciólo su locura e muda del Pecado:  
fo demandar consejo al trufán diablado  
cómo podrié tornar al antigo estado. (*Milagros de Nuestra Señora*, 727)  
『哀れなテオフィロは神から見放され  
自分の狂気と悪魔の要求が彼を打ち負かしました  
彼はあの悪魔付きのベテン師のところへ助言を求めに行きました  
どうしたら元の状態に戻れるかと』(太田, 2016, VI, 175)

同例から、*Libro de Alexandre*同様、主語が無生物である場合、必ずしもleが選択されているわけではないと考えられる。

また、verについて、人の男性単数を指示対象とする代名詞化された直接目的語を伴う例は7例あるが、そのうちの1例である(45)でのみleが用いられている。同例は過去の反実仮想を表す条件文の例であり、後述するように同文脈はle語法との相性のいい文脈である。

- (45) Si la Madre gloriosa, que li deñó valer,  
éssa no l entendiesse, no le vernié veer.  
Mas qui a mí quisiere escuchar e creer  
viva en penitencia, puede salvo seer. (*Milagros de Nuestra Señora*, 862)  
『もし彼を助けてくださった聖母が  
彼に耳を傾けなかったら、彼に現れたりしなかったでしょう  
しかし私の言うことを聞き、信じるつもりのある人は  
償いに生きるように、そうすれば救われるでしょう』(太田, 2016, VI, 202)

以上のことから、13世紀の作品では特定の動詞ではle(s)が選択される傾向にあるが、文脈によっては例外が存在し、目的語が不特定の人物であるという対格に典型的な意味をもつ場合などにおいてはloが用いられると考えられる。また、他動性の高低によると考えられる形態の選択もみられるが、同世紀にはこのような形態の選択は未発達であり、完全なカタチで弁別がなされているわけではないと考えられる。

#### 4.4.3.2.1.3. 14世紀前半の作品

##### 4.4.3.2.1.3.1. *Cantar de Mio Cid*

ここでは、14世紀前半の作品を考察する。まず、*Cantar de Mio Cid*を扱う。指示対象が人の男性単数である場合、同作品では直接目的語の特定性が形態の選択に関係していると考えられる例がみられ、leは不特定の人物を指すことも、固有名詞の人物を指すこともあるのに対し、(46)に示す一般論を表す1例を除き、loの指示対象はすべて固有名詞の人物である。つまり、指示対象が特定性の低い人物である場合、一般論を示す文脈以外では(47)のように全例でleが用いられている。

- (46) Dixo el rey: —Mucho es mañana  
omne airado, que de señor non ha gracia,  
por acogello a cabo de tres semanas. (*Cantar de Mio Cid*, 881-883)  
『王は答えた—「それは早すぎる。  
主君の忌諱に触れて追放の刑に処されたものが  
たった三週間で赦しを得られると思うのか。』(牛島、福井, 1994, 76)

- (47) tres días le speraré en Canal de Celfa.— (*Cantar de Mio Cid*, 1194)  
『同志を三日間カナル・デ・セーリャで待っている。』(牛島、福井, 1994, 106)

(46)について、主語も直接目的語も特定の人物ではなく、主君の地位にある人物が追放した人物に対して三週間で赦しを与えるわけがないという一般論を表す文脈である。一方、(47)のleの指示対象は、触れ文を読んで、Cidとともにバレンシアの包囲戦に参加してくれる不特定の人物である。このことをさらに確証するために、動詞は同じであるが、直接目的語の特定性によって形態が選択されていると考えられる例のペアを2つ示す。

- (48) passé por ti, con el moro me of de ayuntar,  
de los primeros golpes of de arrancar. (*Cantar de Mio Cid*, 3320-3321)  
『私がお前の代りに進み出て そのモーロ人と戦い  
最初の数撃で彼を打ち倒したのだ。』(牛島、福井, 1994, 260)



- (49) Cuando al rey de Marruecos assí lo an arrancado, (*Cantar de Mio Cid*, 1741)  
『かくしてモロッコの王を蹴散らしたシッドは』(牛島、福井, 1994, 147)
- (50) que si alguno s' furtare o menos le fallaren, (*Cantar de Mio Cid*, 1260)  
『そして もし誰かこっそり逃げ出したり いなくなっている者があれば』(牛島、福井, 1994, 111)
- (51) Demandó por Alfonso, dó lo podrié fallar; (*Cantar de Mio Cid*, 1311)  
『さて ミナーヤがアルフォンソ王の居場所を尋ねると』(牛島、福井, 1994, 116)

(48)のleの指示対象はPero Vermúezが打ち倒した特定のモーロ人ではあるが、名前は明らかではない人物であるのに対し、(49)のloの指示対象はモロッコの王(el rey de Marruecos)、つまりYúcef王であり、名前もはっきりしている、かなり特定性の高い人物である。また、(50)のleの指示対象はalgunoであり、存在するかどうか不明な人物であるが、(51)のloの指示対象はAlfonso、つまり固有名詞である。したがって、一般論を表す文脈を除き、指示対象が固有名詞ほど特定性の高くない人物または不特定の人物である場合、直接目的語はleで表されており、他動性の高低による形態選択がなされていると考えられる。

次に、主語の有生性に注目しつつ、他の他動性の項目と関連して人の男性単数のle語法の例を考察する。主語が有生性の高い一人称である場合、leの例は3例存在する。そのうち2例は先述の(47)および(48)である。残る1例は、(52)に示す仮定を表す譲歩文の譲歩節の例である。

- (52) maguer que mal le queramos non ge lo podremos far, (*Cantar de Mio Cid*, 1524)  
『われらはたとえそうしようと思っても シッドに危害を加えることはできない』  
(牛島、福井, 1994, 130)

なお、主語の有生性に関係なく、譲歩を表す文脈でloが用いられている例は存在しない。したがって、直説法か接続法といった法については、事実と反する事柄を表す文脈ではleが用いられると考えられる。また、このように事実と反する事柄を表す文脈や、先述のように直接目的語の指示対象が不特定の人物である場合のような特定の文脈を除いて、主語が一人称である場合、(53)のように7例でloが用いられている。

- (53) —E servirlo he sienpre mientra que ovisse el alma.—  
(*Cantar de Mio Cid*, 1820)  
『生ある限り陛下への忠誠を誓います。』(牛島、福井, 1994, 152)

続いて、一人称に次いで有生性が高い二人称が主語である例を考察する。このような場合、直接目的語としてle、loが用いられている例は2例ずつある。leが用いられている例について、ひとつめの例は13世紀からすでにle語法が高い割合でみられる「助ける」を意味する動詞の例である。

- (54) ya vie mio Cid que Dios **le** iba valiendo. (*Cantar de Mio Cid*, 1096)  
『すでにわがシッドは自分が神の庇護のもとにあることに気づいていた』(牛島、福井, 1994, 98)

ふたつめの例は、指示対象に対する尊敬を表す文脈の例である。

- (55) Echástes**le** de tierra, non ha la vuestra amor; (*Cantar de Mio Cid*, 1325)  
『シッドは追放刑に処せられ いまだ陛下の寵愛を回復してはおりませぬが』(牛島、福井, 1994, 117)

(55)の話者はCidの家臣であるMinayaであり、Cidを指す直接目的語としてleを用いており、これはCidに対する尊敬を表していると考えられる。また、(56)のように主語が三人称である場合も尊敬を表す文脈では、直接目的語はleで表されている。

- (56) ya lo vedes, que el rey **le** á airado, (*Cantar de Mio Cid*, 114)  
『ご存じのようにカンベアドルは追放の刑に処せられ』(牛島、福井, 1994, 17)

このことから、より有生性の高い、つまりより他動性の高い文脈でleが用いられる場合、より有生性の低い文脈でもleが用いられると考えられる。しかしながら、同じ内容が表されている文脈で、とくに敬意が表されていない場合は、loが用いられている。

- (57) airólo el rey Alfonso, de tierra echado **lo** ha, (*Cantar de Mio Cid*, 629)  
『アルフォンソ王の寵愛を失い 国を追われて』(牛島、福井, 1994, 56)

(57)の話者はユダヤ人であり、同人物にとってCidはとくに敬意の対象ではないので、loで表されていると考えられる。

次に、主語が定性の特定以上の三人称である場合の例を考察する。以下に示すように、いくつかの他動性の低い文脈では、直接目的語はleで表されている。このような文脈として、直接目的語の受ける影響が小さい場合があげられる。高橋(2022:19-20)でも指摘され

ているように、行為の影響が目的語に対して一部しか及ぼされていない場合、leが用いられている。

- (58) a part **le** preso, que non cab'el corazón, (*Cantar de Mio Cid*, 3682)  
『槍はまっすぐに だが心臓を外して』(牛島、福井, 1994, 285)

- (59) **Prísolo** al conde, pora su tienda lo levava, (*Cantar de Mio Cid*, 1012)  
『彼は伯を捕虜にして幕舎に連れてくると』(牛島、福井, 1994, 88)

(58)は体の一部に矢が刺されている、つまり、目的語に及ぼされる影響が一部であることを表している文脈であり、直接目的語としてleが用いられており、一方、(59)は「捕まえる」という目的語の人全体に影響が及ぼされることを表している文脈であり、直接目的語としてloが用いられていると考えられる。

また、目的語の活動性による形態の選択がなされていると考えられる例として次の例がある。

- (60) diéron**le** en Valencia o bien puede estar rico. (*Cantar de Mio Cid*, 1304)  
『バレンシアの司教区を与えられて 豊かな暮らしを保証された。』(牛島、福井, 1994, 115)

- (61) Moros **le** reciben por la seña ganar, (*Cantar de Mio Cid*, 712)  
『モーロの軍はシッドの旗を捕ろうとして彼をとり囲み』(牛島、福井, 1994, 61)

- (62) Recibió**lo** el Cid, abiertos amos los braços: (*Cantar de Mio Cid*, 203)  
『シッドは両の手を広げて彼を出迎えた——』(牛島、福井, 1994, 23)

darは第一義的に「与える」を意味する動詞であるが、(60)では「任命される」を、(61)ではrecibirが「対立する」を意味し、直接目的語としてleが用いられているが、「迎える」を意味する(62)ではloが用いられている。このように、動詞の意味によって用いられる形態が異なることはGarcía(1975:317-318)によって指摘されており、同書は動詞perderが「失う」を意味する場合よりも「だめにする」を意味する場合のほうが目的語の活動性が高く、leが用いられる傾向にあるとしている。したがって、(60)について、darが「与える」を意味する場合よりも、「任命する」を意味する場合のほうが目的語の活動性が高いため、leで表され、同様に(61)について、recibirが「迎える(受け入れる)」を意味する場合よりも、「対立する」を意味する場合のほうが目的語の活動性が高いため、leで表されていると考えられる。

さらに、直接目的語がleで表されやすい文脈として、非現実的な事象を表す文脈があげられる。

- (63) Sabet bien que, si ellos le viessen, non escapara de muert.  
(*Cantar de Mio Cid*, 2774)  
『もし感づかれたら死を免れることは難しかったであろう。』(牛島、福井, 1994, 224)

- (64) Si Dios me llegare al Cid e lo vea con el alma,  
d'esto que avedes fecho vós non perderedes nada.  
(*Cantar de Mio Cid*, 1529-1530)  
『もし神のお陰で私がシッドのもとに戻り生きて会えるものなら  
あなたの行為はそれ相応の評価を受けることになりましょう。』(牛島、福井, 1994, 130)

(63)のように過去の事実に反する事柄、つまり過去に起こらなかった事柄を表す条件文の条件節の例では直接目的語としてleが用いられている。しかし、(64)のように起こる可能性が低い事柄を表す場合、直接目的語はloで表されている。したがって、4.4.3.2.1.2.2.で確認したように、le語法の割合が非常に低い*Milagros de Nuestra Señora*からすでに、過去の反実仮想を表す条件文では同語法が用いられていることから、直説法が接続法といった法については、とくに過去の反実仮想を表す条件節という、実現可能性がゼロに等しい仮定を表す文脈ではleが用いられると考えられる。

次に、形態の選択に影響していないと考えられる項目の例を考察する。アスペクトについて、他動性が低いと考えられるため、le語法の使用が期待される進行アスペクトでは(65)のように2例でloが用いられている。

- (65) pagado es mio Cid, que lo está aguardando,  
porque el conde don Remont tan bien bolvié las manos.  
(*Cantar de Mio Cid*, 1058-1059)  
『ドン・ラモン伯の手がテーブルと口の間をせわしく往復するのを  
じっと眺めていたシッドは大いに満足した。』(牛島、福井, 1994, 92)

また、(60)のようにle語法の使用を促す文脈では、完了アスペクトでもle語法が用いられていることから、同作品ではアスペクトは形態の選択に影響していないと考えられる。

続いて、主語が不特定の人物である例を考察する。このような場合、(66)および(67)のように直接目的語はleで表されている。ただし、(68)は例外である。

- (66) ciento omnes le dio mio Cid a Álbar Fáñez por servir<sup>le</sup> en la carrera [.....],  
(*Cantar de Mio Cid*, 1284)  
『わがシッドは道中アルバル・ファニェスに仕える百人の騎士を指名し』(牛島、福井, 1994, 113)
- (67) no·s' fartan de catar<sup>le</sup> cuantos ha en la cort. (*Cantar de Mio Cid*, 3495)  
『その場に居合わせた者は皆まじまじとそれを見つめた。』(牛島、福井, 1994, 273)
- (68) A maravilla lo han cuantos que y son  
e tornáronse al palacio, pora la cort. (*Cantar de Mio Cid*, 2302-2303)  
『その場に居合わせた者はひとしくシッドの豪胆ぶりに驚き  
みな口々に感嘆しながら広間に戻っていった。』(牛島、福井, 1994, 188)

(68)では動詞がhaberであり、直接目的語としてloが用いられている。後述するように、同動詞のような所有を表す動詞ではlo(s)が要求され、人の男性複数のle語法の割合が75%以上を占める作品でのみleが用いられている例がみられる。しかし、主語が定性の特定以上の三人称である場合、(69)のようにleが用いられている理由が説明できないと考えられる例が複数存在する。

- (69) Atorgárongelo los fieles, Pero Vermúez <sup>le</sup> dexó. (*Cantar de Mio Cid*, 3645)  
『審判団がこれを認めたので ペドロ・ベルムデスはそこで手を止めた。』(牛島、福井, 1994, 282)

(69)ではdejarが周縁的な意味をもつ文脈ではなく、過去に実際に起こった事柄が表されているため、loが用いられることが期待されるところで、直接目的語がleで表されている。このような例の存在は、14世紀前半の作品からすでに性による形態の区別がみられつつあることを示している可能性があると考えられる。

次に、指示対象が人の男性複数である場合については、主語が有生性の高い一人称または二人称である場合、le語法が用いられている例はみられない。一方、主語が有生性の低い無生物である例(70)では、直接目的語はlesで表されている。しかし、(70)と同様、動詞がservirである(71)では主語が人であり、直接目的語はlosで表されている。

- (70) sírvan<sup>les</sup> sus herdades do fuere el Campeador, (*Cantar de Mio Cid*, 1364)  
『この者たちがシッドに仕えてどこにあらうとも彼らの所領は元のままである。』  
(牛島、福井, 1994, 120)
- (71) fata en Valencia sirvía<sup>los</sup> sin falla, (*Cantar de Mio Cid*, 1556)  
『モーロの大將は彼らの世話をしながらバレンシアへの随行を続け』(牛島、福井, 1994, 132)

また、同作品には主語が無生物であり、代名詞化された単数形の直接目的語を伴う動詞の例はないが、主語が定の不特定以下の人物である場合、haberの1例以外ではleが用いられていること、さらに主語が無生物である場合、複数形の例でle語法が用いられていることから、主語が無生物である場合、単数形においてもleが用いられると考えられる。ところで、主語の有生性に関係なく、特定の動詞ではle(s)が用いられている。

- (72) Mandáron<sup>le</sup> ir adelante, mas de su grado non fue; (*Cantar de Mio Cid*, 2766)  
『先に行けと命ぜられて従ったものの もとより不承不承であった。』(牛島、福井, 1994, 223)

- (73) Martín Antolínez, el burgalés conplido,  
a mio Cid e a los suyos abásta<sup>les</sup> de pan e de vino; (*Cantar de Mio Cid*, 66)  
『マルティン・アントリーネスと申す高潔なブルゴス市民が  
わがシッドとその家臣にパンと葡萄酒を振る舞った。』(牛島、福井, 1994, 12)

(72)では、主語は明示されていないが、los ifantes de Carriónである。同例の動詞である不定詞を伴うmandarは、4.4.3.2.1.2.で確認したように13世紀からすでにle語法が用いられている動詞である。また、(73)について、同例ではabastarは対格で表された人を表す目的語と前置詞deに導かれた被制辞補語を伴っている。Cuervo(1895)によると、同動詞の同義語であるproveerは、2.2.で確認したaconsejarやavisar同様、直接目的語に人も物も従えることができ、規範的な形式がもつ物を表す目的語を欠く場合でも、人を表す目的語に与格の形態が先んじて与えられる動詞である。そのため、同義の動詞の例である同例でもle語法が用いられている可能性があると考えられる。

続いて、指示対象が動物である例を考察する。指示対象が人である場合と同様、指示対象に対する愛情を表す場合には、leが用いられている。

- (74) Yo vos <sup>le</sup> dó en don, mandédes<sup>le</sup> tomar, señor.— (*Cantar de Mio Cid*, 3515)  
『これを謹んで陛下に献上いたします。どうかお納めくださいますよう。』(牛島、福井, 1994, 275)

同例のtomarの直接目的語leの指示対象であるBaviecaは話者であるCidの愛馬であり、ここではBaviecaに対する愛情を表すためにleが用いられていると考えられる。また、次章でも述べるように、三項文においても同指示対象にはleが用いられている。

以上の例から、同作品において他動性の各項目が形態の選択に作用しているかどうかを次のような観点から考察する。

(1) 意図性について、同作品には代名詞化された三人称の直接目的語の例のなかで主語が無生物である例が1例しか存在せず、非意図的になされた行為を表す例も存在しないため、意図性が形態の選択に影響しているかどうかは判別できないと考えられる。

(2) 主語の有生性について、主語が一、二人称である場合、leは他動性の低い文脈においてのみ使用されている。また、主語が定の不特定または不特定の特定の人物である場合、特定の動詞と特定の文脈を除いて、leが用いられている。したがって、主語の有生性は形態の選択に影響していると考えられる。

(3) 目的語の特定性について、指示対象が固有名詞ほど特定性の高くない人物または不特定の人物を表す場合、一般論を表す文脈を除いて、必ずleが用いられる。したがって、他動性の高低によって形態が選択されていると考えられる。

(4) 目的語が受ける影響および動性について、目的語が受ける影響の大小および目的語の活動性によって形態が選択されていると考えられる例がみられる。また、目的語に影響を与えない状態動詞haberでは2例でloが用いられているが、これら2つの例と同様、主語の有生性は低いが、目的語に少しでも影響を与える動詞ではleが用いられている。したがって、目的語が受ける影響の大小によって形態の選択がなされていると考えられる。

(5) 肯定性について、同作品には否定文の例がleとloでそれぞれ1例ずつみられるのみであり、それらの主語はそれぞれle、loの使用を促すと考えられる定の不特定、一人称である。先述のように、主語が一人称であっても特定の文脈ではleが用いられるが、否定文ではleが用いられていないことから、主語が一人称であるという有生性がきわめて高い場合、否定文であることはleの使用に有利に働いていないと考えられる。しかし、例の数が少ないので、否定文であることがleの使用に有利に働いているかどうかを判断することはできない。

(6) 直説法か接続法といった法について、実現可能性がほぼゼロに等しい仮定を表す反実仮想を表す条件節ではleが用いられているが、実現可能性はかなり低いゼロではない

仮定を表す文脈ではloが用いられていることから、極端に実現可能性が低い場合のみ、同項目による選択される形態の違いはみられる。

(7) アスペクトについて、leがもっとも用いられやすいと考えられる進行アスペクトでもloが用いられていることや、完了アスペクトの例においてもleの使用に有利に働く文脈ではleが用いられているから、アスペクトは形態の選択に影響していないと考えられる。

(8) 話者の語用論的評価について、愛情や尊敬を表す文脈ではleが用いられている。

また、同作品において直接目的格三人称男性単数形の形態は、次のような理由にもとづいて選択されていると考えられる。同作品においても、*Libro de Alexandre*同様、直接目的語の特定性によって形態選択の始点が異なる。ただし、*Libro de Alexandre*では格に典型的な意味にしたがって同項目による形態選択がなされているのに対し、*Cantar de Mio Cid*では他動性の高低によって形態選択がなされていると考えられ、逆の形態が選択されている。つまり、*Libro de Alexandre*では対格に典型的な意味にもとづき、直接目的語が不特定の人物である場合、基本的にlo(s)で表されるが、*Cantar de Mio Cid*では他動性の高低にもとづき、直接目的語が名前不明の特定の人物または不特定の人物である場合、一般論を表す文脈を除いてleで表されている。一方、直接目的語が固有名詞である場合は、特定の文脈および動詞では常にleが使用されており、ここでの特定の文脈とは、譲歩、過去の反事実条件、指示対象に対する尊敬や愛情、動詞の意味が第一義的でない文脈を指す。また、これらの文脈以外では主語の有生性によって直接目的語の形態が異なり、主語が一人称という有生性において階層の高い人物である場合、loが使用され、主語が定性の不特定以下の人あるいは無生物である場合、haberの例を除いてleで表される。また、主語が二人称または固有名詞である場合で、動詞が「助ける」を意味する動詞である場合、直接目的語はleで表される。しかし、同意味の動詞以外では主語が二人称である場合、直接目的語はloで表され、主語が三人称である場合、leまたはloで表される。

以上のことを図で示したものを以下に示す。



1) 直接目的語が名前不明の特定の人物または不特定の人物

- i) 一般論を表す文脈 → lo
- ii) それ以外の文脈 → le

2) 直接目的語が固有名詞

i) 特定の文脈および動詞 → le

- ii) 特定の文脈以外
  - 主語が一人称 → lo
  - 主語が定性の不特定以下 → le<sup>41</sup>

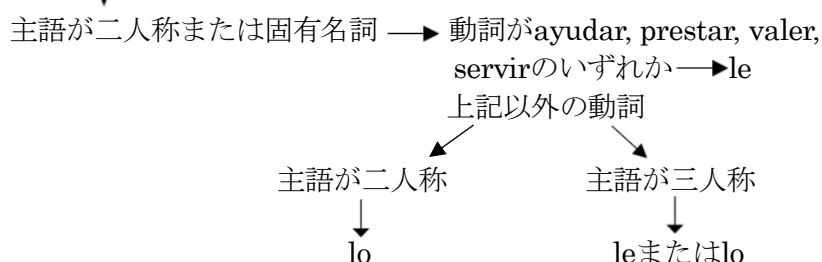


図4-4 *Cantar de Mio Cid*における形態選択基準

#### 4.4.3.2.1.3.2. *El Conde Lucanor*

本項では、同じく14世紀前半に書かれた作品である*El Conde Lucanor*を考察する。まず、*Cantar de Mio Cid*と同様、主語の有生性に注目して同作品における人の男性単数のle語法を考察する。同作品では、以下に示すように主語が一人称である場合、(75)のように全3例で直接目的語はloで表されている。

- (75) Et porque yo querría que él acertasse en lo mejor, ruégovos que me digades en qué manera lo conseje por que passe lo mejor que pudiere en aquella tierra.  
(*El Conde Lucanor*, 131, 5-7)

『わたしはその者に最善の行為をとらせたいので、彼がかの地でできるだけうまくやっていくにはどのような助言をしたらよいものか、ぜひそちに教えてもらいたい』(牛島、上田, 1994, 173)

続いて、主語が一人称の次に有生性の高い二人称の例を考察する。(75)では、主語が一人称であり、直接目的語はloで表されていることを確認したが、同例と同じ動詞で主語が二人称である場合、(76)のように直接目的語はleで表されている。また、同動詞が代名詞化された人の男性単数を直接目的語として伴っている例はほかに2例存在し、これら2例の主語は三人称であり、(77)のように直接目的語はleで表されている。したがって、有生性がよ

<sup>41</sup> 動詞haberの例を除く。

り高い文脈でle語法がみられる場合には、有生性のより低い文脈においても同様にle語法が用いられていると考えられる。

- (76) —Señor conde Lucanor —dixo Patronio—, para que vós **le** podades aconsejar en esto, plazermé ya que sopiéssedes lo que contesció una vez a un raposo que se fezo muerto. (*El Conde Lucanor*, 131, 8-10)

『「ルカノール伯爵」パトロニオはこたえた、「この件でその方によりき助言をしていただくために、ある時死んだふりをしたキツネに起こったことを知っていただければ幸いです」』  
(牛島、上田, 1994, 173)

- (77) Et tan bien **le** consejava el conde et tanto fiava dél el soldán,  
(*El Conde Lucanor*, XXV, 103, 13-14)

『伯爵の助言はいつもの確で、それ故サラディンも大いに彼を信頼いたしましたので』  
(牛島、上田, 1994, 135)

ただし、主語が二人称である場合、直接目的語がleで表されている例は少なく、他に3例あるのみであり、それら3例の動詞は以下に示すようにacorrer、ayudar、servirである。

- (78) ; et aunque vos faga algunos enojos, datles passada et acorred**le** sienpre al su mester, (*El Conde Lucanor*, XLIII, 176, 23-25)

『よしんば相手は伯爵のお気に召さないことをしたとしても見逃してやり、必要な時にはいつも援助なさいませ。』(牛島、上田, 1994, 245)

- (79) después que lo suyo fuesse en salvo, que sería contra vós et non podríades dél ser seguro; si él tal fuer, faríades mal seso en **le** ayudar;  
(*El Conde Lucanor*, IX, 49, 21-22)

『安全が保証された暁に、ふたたび敵対行動に出て、今度はあなたを窮地に追いやるような人物であると思ひなら、そのような者を信用して、救済の手をさしのべるのは愚かなことでございます…』(牛島、上田, 1994, 56)

- (80) , et sabedes que en cosa del mundo, segund el vuestro estado que vós tenedes, non **le** podedes tanto servir commo en aver guerra con los moros,  
(*El Conde Lucanor*, XXXIII, 144, 6-8)

『そして、あなたのご身分とお立場では異教のモーロ人との戦いほど、カトリックの真正にして聖なる信仰を称揚し、神に奉仕するものはないことをご承知ください。』(牛島、上田, 1994, 193)

acorrerとayudarはすでに指摘したように13世紀からle語法がよく用いられる動詞であり、(78)および(79)を含め、leの例はそれぞれ2例、4例ある。また、servirについては、(80)を含む4例でleが用いられている。しかし、これら3つのいずれの動詞においても同指示対

象でloが用いられている例が存在する。まず、acorrerについて、反復を表す文脈ではleが用いられているが、一度きりの行為を表す文脈ではloが用いられている。

- (81) Et él tornó a furtar, porque veyá que siempre le acorría don Martín.  
(*El Conde Lucanor*, XLV, 185, 18-19)  
『男は盗みを始めました。必ずドン・マルティンが助けに来てくれることが分かっていたからです。』  
(牛島、上田, 1994, 260)
- (82) Et luego que lo prendieron, llamó a don Martín que lo acorriesse,  
(*El Conde Lucanor*, XLV, 185, 1-2)  
『男は捕まるとすぐにドン・マルティンに助けを求めました。』(牛島、上田, 1994, 259)

(81)では男が盗みをし、捕まるたびにDon Martínが彼を助けに来るという何度も繰り返された行為が直接法線過去で表され、直接目的語にはleが用いられている。それに対し、(82)では男が盗みをし、捕まり、初めてDon Martínに助けを求める一回の行為が表され、直接目的語にはloが用いられている。だから、反復の有無、つまりアスペクトによって形態選択がなされているといえる。

次に、ayudarについて、(79)で同動詞では主語が有生性の高い二人称である場合でも、le語法の例がみられることを確認したが、(83)では同主語でloが用いられている。

- (83) Pero si vierdes que aquel vuestro enemigo es tal o de tal manera, que desde lo oviédeses ayudado en guisa que saliese por vós de aquel peligro que,  
(*El Conde Lucanor*, IX, 49, 17-20)  
『安全が保証された暁に、ふたたび敵対行動に出て、今度はあなたを窮地に追いやるような人物であると思います。』(牛島、上田, 1994, 56)

*Milagros de Nuestra Señora*においても同意味の動詞の複合完了形の例では対格が用いられていることを確認したように、(83)でもまた語形が複合完了形であるため、直接目的語としてloが用いられているのではないかと推測されるが、*El Conde Lucanor*において同語形では直接目的語として必ずloが用いられるわけではなく、leの例が2例であるのに対し、loの例は4例であることから、le語法と共起しやすいとは考えられない動詞escogerだけでなく、他のle語法と相性のいい動詞consejarでも、(84)のように主語が三人称である場合、leが用いられている。

- (84) , llamó a la condessa et a sus parientes et díxoles en grant poridat que bien sabién que el conde le escogiera entre otros muy mejores que él, et que lo fiziera porque el soldán le consejara que casasse su fija con omne.

(*El Conde Lucanor*, XXV, 106, 10-13)

『新郎はその前に伯爵夫人と親類の人々を集め、ひそかにこう申したのでございます。伯爵が私より身分の高い者をさしおいて、とくに私を花婿にお選びになったのは、伯爵の娘と結ばれるのは真の男でなければならないというサラディンの助言によるものと承知しています』

(牛島、上田, 1994, 139)

ただし、(76)で示したように、*consejar*は主語が二人称である場合、不完了アスペクトの例では直接目的語は*le*で表されている。したがって、主語が二人称かつ語形が複合完了過去形である場合は、直接目的語に*lo*が用いられると考えられる。さらに、*ayudar*の直接目的語として*lo*が用いられている例がもうひとつある。

- (85) Et devedes saber que todos devían rogar a Dios que guardasse a su señor de querer fazer mal fecho, ca si el señor lo quiere, cierto seed que nunca menguará quien gelo conseje et quien lo ayude a lo conplir.

(*El Conde Lucanor*, L, 207, 14-17)

『臣下たる者、主君がこんな道にはずれたことをしでかさないように、神に祈ってしかるべきでございましょう。ところが、主君の望みとあれば、それに迎合し、よからぬ入れ知恵をして、もくろみの手助けをする輩にはこと欠かないものでございます。』(牛島、上田, 1994, 291)

同例の主語は三人称の不定の不特定の人物であり、後述するように、同作品では主語が三人称の定の不特定以下の人物である場合は、特定の文脈を除いて、*lo*が用いられるため、同例でもまた*lo*が用いられていると考えられる。最後に、*servir*について、次に示す(86)のみ直接目的語として*lo*が用いられている。

- (86) Todos los que quieren et desean servir a Dios, todos quieren una cosa, pero non lo sirven todos en una manera, que unos le sirven en una manera et otros, en otra. (*El Conde Lucanor*, 11, 13-15)

『神を愛し神に奉仕しようとする人々の気持はみな同じでも、その方法は千差万別である。』

(牛島、上田, 1994, 9)

同例のように、一方について述べ、もう一方について述べる文脈では、どちらか一方では*le*が用いられ、もう一方では*lo*が用いられている例が(87)に示すように、ほかにも存在する。

- (87) Et aquel su amigo le dixo que de todos non **le** podía desenbargar, mas que él sabía un escanto con que **lo** desenbargaría del uno dellos, o del pardal o de la golondrina. (*El Conde Lucanor*, XXXIX, 160, 5-7)

『友人はその両方を排除するというわけにはいかないが、一方だけなら黙らせる秘法を知っている。さあ、スズメとツバメのどちらにするか、と言いました。』(牛島、上田, 1994, 220)

本研究の資料体である13世紀の2作品ではservirの直接目的語はすべてloで表されている。しかし、*El Conde Lucanor*ではleが用いられている例のほうが多い。したがって、「助ける」を意味する動詞に加え、14世紀前半の作品では同意味の動詞同様、直接目的語が受益者の役割を果たすservirとconsejarのような動詞もle語法と相性のいい動詞となったと考えられる。ただし、consejarにおいて主語が一人称である場合や、ayudarにおいて主語が二人称かつ語形が複合完了形である場合、loが用いられている例がみられることから、他動性の高い文脈ではloが用いられ続けていると考えられる。

次に、主語が定性の不特定、または不定性の特定および不特定の人である例を考察する。このような例におけるle語法の割合は非常に低く、leの例は9例のみであるのに対し、loの例は25例ある。また、le語法の例は他動性が低い文脈でのみみられるため、主語が定性の不特定以下の人である場合、基本的にはloが用いられると考えられる。以下に、主語が定性の不特定以下の人である場合にle語法がみられる文脈を示す。このような文脈のひとつとして、*Cantar de Mio Cid*と同様に、現実性の低い文脈があげられる。ただし、*Cantar de Mio Cid*では、過去の事実に反する事柄を表す文脈でのみ直説法か接続法といった法によると考えられる形態の選択はみられたが、*El Conde Lucanor*では(88)のように未来を表すcuando節、(89)のように不確実な事柄を表す仮定文でもleが用いられている例がある。

- (88) ; et otros le dixieron que cuando **le** levassen a la muerte, que non lo desanpararían fasta que oviessen conplido en él la justicia et quel farían onra al su enterramiento. (*El Conde Lucanor*, XLVIII, 197, 19-21)

『君が死刑のために引き立てられていく時は、刑が執行されるまでずっと君に付き添い、そのあと立派な埋葬をしてあげようと言う者もありました。』(牛島、上田, 1994, 277)

- (89) Et tenié sin duda que cuando todo el mundo **le** desconociése, que non lo desconocería la reyna, su muger. (*El Conde Lucanor*, LI, 218, 31-33)

『自分が王であることを認めるものがこの世にひとりもないとしても、奥方である王妃ならば分からぬはずはない、と確信していたからです。』(牛島、上田, 1994, 308)

また、習慣を表す文脈ではleが用いられていると考えられる。

- (90) ; et luego que el año era acabado, tomávanle cuanto avía et desnuyávan<sup>le</sup> et echávan<sup>le</sup> en una ysla solo, que non fincava con él omne del mundo.

(*El Conde Lucanor*, XLIX, 202, 24-26)

『その一年が終わると、領主は財産をすべて奪われ、裸にされたあげく、お供もなく、たったひとりで島流しにされたのでございます。』(牛島、上田, 1994, 284)

- (91) , ante que se acabasse el año del su señorío mandó en grand poridat fazer en aquella ysla do sabía que lo avían de echar una morada muy buena et muy complida, (*El Conde Lucanor*, XLIX, 202, 30-32)

『在任中、極秘のうちに、流される予定の島に設備の整った住居を作らせ、』(牛島、上田, 1994, 284)

(90)および(91)の例がみられる話では、ある国で毎年領主が交代で選ばれ、任期の一年が終わると、島に流されることが習慣的におこなわれていることが紹介されている。(90)はそのような習慣が説明されている文脈であり、leの指示対象は特定の領主ではなく、毎年島に流される不特定の領主であるが、(91)のloの指示対象はある年の特定の領主であり、とある年における島流しについて説明されている。後述するように、*Cantar de Mio Cid*ほど厳密に使い分けられているわけではないものの、*El Conde Lucanor*においても、直接目的語が特定性の低い人物である場合、leで表される傾向にあるが、loが用いられやすい文脈ではこれが用いられていることから、(90)の場合、主語が三人称複数形という不定人称文、つまりleの例があまり多くない主語の特定性の低い例においてleが用いられており、ここではアスペクトによって形態が選択されていると考えられる。

さらに、動詞の意味が非物理的である場合、次のようにleが用いられていると考えられる。

- (92) ca si por aventura lo fiziese, sabía que muchas gentes <sup>le</sup> travarían en ello;

(*El Conde Lucanor*, II, 22, 14-15)

『というのは、もしこれをすれば、口さがないおおくの者が非難するであろうし、』  
(牛島、上田, 1994, 21)

- (93) —Patronio, vos sabedes que una de las cosas del mundo por que omne más deve trabajar es por aver buena fama et por se guardar que ninguno non <sup>le</sup> pueda travar en ella. (*El Conde Lucanor*, XLVI, 187, 8-10)

『バトロニオよ、そちも知ってのとおり、この世で人がそのために努力しなければならない最も大切なことはよき評判を得ること、そしてその評判を無傷のまま守りとおすことだ。』  
(牛島、上田, 1994, 264)

travarは「捕まえる」という物理的行為を表す意味をもつ動詞でもあるが、(92)および(93)ではそれぞれ「非難する」、「(評判に)傷をつける」という非物理的な行為を意味してい

る。したがって、直接目的語が受ける影響の大小によって形態選択がなされていると考えられる。

また、指示対象の人物に対する尊敬を表す文脈でもle語法が用いられている。

- (94) Et dende a cabo de siete o de ocho días, vinieron dos escuderos muy bien vestidos et muy bien aparejados, et cuando llegaron a él, besáronle la mano et mostráronle las cartas en cómmo **le** avían esleýdo por arçobispo.

(*El Conde Lucanor*, XI, 55, 18-21)

『そしてまた、七、八日すると、今度は立派な身なりの威儀を正した二人の紳士がやってきて、彼の手に接吻し、大司教に選出された旨の手紙を差し出しました。』(牛島、上田, 1994, 64)

同例のleの指示対象はこれから大司教になる人物であり、尊敬を表すためにleで表されていると考えられる。

ただし、肯定文よりも他動性が低い否定文では、直接目的語はloで表されている。

- (95) Et non quiso que otro camarero **lo** vestiesse nin **lo** calçasse sinon él,  
(*El Conde Lucanor*, XXIV, 100, 3-6)

『しかも王に服を着せたり靴をはかせたりするのを侍従にまかせることなくすべて自分でやることによって、』(牛島、上田, 1994, 131)

したがって、14世紀前半の作品においては、肯定文であるか否定文であるかどうかは形態の選択に影響していないと考えられる。

続いて、主語が三人称の人称代名詞または固有名詞または定性の特定の人である場合の例を考察する。同主語においても、主語が定性の不特定、または不定性の特定および不特定の人である場合と同様の文脈では、直接目的語としてleが用いられている。たとえば、動詞の意味によって形態が選択されていると考えられる例がみられる。

- (96) Et por cosa que fizieron, nunca desta entención **le** pudieron sacar.  
(*El Conde Lucanor*, XVIII, 77, 6-7)

『誰が何と言おうともこの信念を変えませんでした。』(牛島、上田, 1994, 97)

- (97) Et el yerno del conde fió en el soldán et sacó**lo** luego de la galea et fuesse con él.  
(*El Conde Lucanor*, XXV, 108, 9-10)

『サラディンのことばを信じた伯爵の婿は、彼をすぐガレーラ船から出すと、またお供をしながら戻りました。』(牛島、上田, 1994, 142)

「信念から取り出す」という非物理的行為を表す文脈である(96)では、直接目的語にはleが用いられており、「ガレーラ船から降ろす」という物理的行為を表す文脈である(97)では、直接目的語にはloが用いられている。このように、非物理行為を表す文脈では直接目的語にはleが用いられている例が(98)のような同作品の他の動詞の例でもみられる。

- (98) Et que se quería yr et que les dexava aquella donzella con qui él avía de casar et el condado, que él fiava por Dios que él **le** endereçaría por que entendiesen las gentes que fazía fecho de omne. (*El Conde Lucanor*, XXV, 106, 16-19)  
『そのため、花嫁と伯爵の領土をみなさまの手におあずけして直ちにこの土地を去り、神のお導きにしたがって世間に真の男として認められることを成し遂げてくるつもりです、と。』  
(牛島、上田, 1994, 139)

enderezarは「まっすぐにする」を意味する動詞であり、物理的に物をまっすぐにするという意味で用いられることもある動詞であるが、同例では「(正しい方向に)導く」という非物理的行為を表しているため、leが用いられていると考えられる。García(1975:356-357)もまた、同一動詞において、意味の違いによってleとloが選択され、物理的行為を表す場合、loが用いられるとしている。同様に、直接目的語が受ける影響の程度にしたがって形態が選択されていると考えられる例が存在する。

- (99) Et cuando sus gentes que avían a yr con él vieron esta ocasión que acaesciera, pesóles ende mucho et començaron **le** a maltraer diziéndol:  
(*El Conde Lucanor*, XVIII, 76, 29-31)  
『お供をしようとしていた家来たちはこれを見てひどく悲しみ、彼の神に対する信頼に愚痴をこぼしました』(牛島、上田, 1994, 96)
- (100) Cuando el philósopho que estava cativo oyó dezir a su señor todo lo que avía pasado con el rey, et cómo el rey entendiera que quería él tomar en poder a su fijo et al regno, entendió que era cayó en grant yerro et començólo a maltraer muy fieramente so et díxol que fuese cierto que era en muy grant peligro del cuerpo et de toda su fazienda, (*El Conde Lucanor*, I, 19.32-20.5)  
『捕らわれの身である賢者は主人と王のやりとりをすべて聞くと、主人が王子と王国を手に入れようとしていることが王にさとられたと判断し、主人に、大変な過ちを犯した、あなたの生命も財産も大変な危険にさらされることになったと言い、きつく詰りはじめました。』  
(牛島、上田, 1994, 16-17)

(99)および(100)はともにmaltraerの例であるが、直接目的語として用いられている形態は異なる。(100)では動詞が「きつく(muy fieramente)」という副詞によって修飾されており、目的語に及ぶ影響が大きいと考えられる。つまり、目的語の受ける影響が大きい場合



はloで表され、あまり大きくないときにはleで表されると考えられる。

また、以下のように典型的な意味で解釈されない文脈ではleが用いられ、典型的な意味で解釈される文脈ではloが用いられていると考えられる例が存在する。

- (101) Et la madre, porque non avía otro fijo et tenía que su marido non era vivo, conortávase con aquel fijo et amávalo commo a fijo; et por el grand amor que avía a su padre, llamávalo marido. (*El Conde Lucanor*, XXXVI, 154, 10-13)

『妻には他に子供がいませんでしたし、夫はもう生きていないと思っていましたので、彼女は一人息子に慰めを見出して、彼を息子として愛するだけでなく、その子の父親に対する愛情と懐かしさのあまり、私の夫と呼んでおりました。』(牛島、上田, 1994, 209)

- (102) E quando el rey esto oyó, plúgole mucho de lo que don Llorenço Suárez fiziera, e amóle e precióle e fizo mucho más dél de allí adelante.

(*El Conde Lucanor*, XXVIII, 129, 30-32)

『これを聞いた王はロレンソ・スアレスのことばと行動にたいそう満足し、彼を高く評価しました。そして、そのときから、以前にもまして彼を寵愛するようになったのでございます。』(牛島、上田, 1994, 171)

- (103) Mas luego que entró en la mancebía, començó a despreciar el consejo daquel que lo criara et allegósse a otros consejeros de los mancebos et de los que non avían tan grand debdo con él por que mucho fiziessen por le guardar de daño.

(*El Conde Lucanor*, XXI, 86, 20-24)

『ところが、若王はいっぱしの若者になるともう養育係の忠告など無視するようになり、王のことなどすこしも大事に思わない、従って彼の健康や名誉を守ろうとはしないほかの顧問たちに近づくようになりました。』(牛島、上田, 1994, 112)

- (104) : que bien sabía él que el rey le avía criado et le avía fecho mucho bien, et quel fallara sienpre muy leal et quel serviera muy bien et muy derechamente; et que por estas razones fiava en él más que en omne del mundo

(*El Conde Lucanor*, I, 19, 4-8)

『予はそちを育てあげ、いろいろと世話をしてきた、また、予はそちのつねに変わらぬ忠誠心と正しく立派な仕事ぶりなどを高く評価し、誰よりもそちを信頼している』(牛島、上田, 1994, 16)

まず、(101)および(102)について、これらの例の動詞はいずれもamarであり、同動詞に典型的な意味は、親や恋人などが誰かを愛することであり、この意味をもつ(101)では直接目的語はloで表されているが、「寵愛する」という非典型的な意味をもつ(102)では、leで表されている。次に、(103)および(104)について、これらの例の動詞であるcriarは典型的に親などが子どもを育てることを意味し、この意味をもつ(103)では、直接目的語はloで表されている。一方、寵臣として人を育てるというこの典型的な意味とはずれた意味をもつ(104)ではleで表されている。

さらに、主語が特定の人物である場合もまた、指示対象に対する尊敬を表す文脈でle語

法が用いられていると考えられる例が存在する。

- (105) Et non consintieron quel coxiessen, mas enterráron<sup>le</sup> et esperaron tanto tienpo fasta que fue toda la carne desfecha. (*El Conde Lucanor*, XLVIII, 179, 23-25)  
『こうして煮ることは許さず、そのまま埋葬し、肉が腐敗して骨だけになるまで、長いあいだ待ちました。』(牛島、上田, 1994, 249)

同例のleで表された人物は同一文の主語である三人の騎士がお供している伯爵である。つまり、指示対象である伯爵への尊敬を表すために、leが用いられていると考えられる。

ここでは、直接目的語が受ける影響の大きさによって形態が選択されていると考えられる例を考察する。尾谷、二枝(2011)によると、「殺す」はすべての述語のなかで動作が対象に影響を与える程度がもっとも高い動詞である。また、先述のTsunoda/角田(1981, 2020<sup>5</sup>)が提案する二項述語の階層において、同動詞は階層の最高位に位置づけられている。以上ことから、同動詞は他動性がもっとも高い動詞であると考えられる。*El Conde Lucanor*においてスペイン語で「殺す」を意味する動詞matarについて、大半を占める9例で直接目的語はloで表されているが、leが用いられている例も4例存在する。ただし、leが用いられている文脈には制限がある。つまり、loで表されている9例のうち、5例で(106)のように実現された行為が表されており、4例で(107)のように未実現の行為が表されているが、(108)のようにleで表されている4例はいずれも未完了の事柄を表している。

- (106) Acaesció por ventura que en aquel tiempo avían muerto un omne en aquella villa, et non podían saber quién lo matara.

(*El Conde Lucanor*, XLVIII, 198, 20-21)

『ところがちょうどその頃、その町でひとりの男が殺されたのですが、その下手人がなかなか見つかりませんでした。』(牛島、上田, 1994, 279)

- (107) , assacáronle muy grand falsedat et buscáronle tanto mal con el rey, que acordó de lo mandar matar. (*El Conde Lucanor*, XVIII, 76, 22-24)

『彼と王との仲を裂こうとして根も葉もない中傷をしましたので、王はそれを真に受け、ついに彼を殺すことにしました。』(牛島、上田, 1994, 96)

- (108) Et que si por esto <sup>le</sup> mandase matar, que nunca vería el mejor día.

(*El Conde Lucanor*, XXVIII, 129, 28-29)

『このために命を失うことになれば、私はこの日を生涯最良の日とみなすでしょう』  
(牛島、上田, 1994, 171)

したがって、目的語に物理的变化を与える動詞では、必ずしもloが用いられるわけではないが、leが用いられるのは未実現の行為を表す場合のみであると考えられる。

一方、*Cantar de Mio Cid* 同様、状態を表す動詞では直接目的語としてloが用いられていると考えられる。

- (109) Et pues si él lo tenía por tan leal, que cuydava que faría esto por él, que era moro, que parase mientes, si él leal era, que devía fazer, si era cristiano, por guardar el cuerpo de Dios, que es rey de los reyes e señor de los señores.

(*El Conde Lucanor*, XXVIII, 129, 25-28)

『私のモーロ人の王への忠節がこれほどなのですから、キリスト教徒としての私が王のなかの王であり、主のなかの主たる神の聖体をお守りすべく、いかなる行動をとらねばならないかお分かりいただけるでしょう。』(牛島、上田, 1994, 171)

同作品にはtenerが代名詞化された人の男性単数の直接目的語を伴う例が4例あるが、(109)のように全例でloが用いられている。このことから、14世紀前半の作品では状態動詞の直接目的語としてloが用いられる傾向にあったと考えられる。

また、完全に同じであると考えられる文脈でleとloが用いられている例が存在する。

- (110) Et pues él por omne lo escogiera, que bien entendía que non fuera él omne si esto non fiziera; (*El Conde Lucanor*, XXV, 108, 1-2)

『真の男ということで選ばれたからには、それに<sup>こた</sup>えるためにも、このような行動に出ざるを得なかったと言った上で、』(牛島、上田, 1994, 141)

語形が複合完了過去形である例(84)において、leが用いられていると指摘したが、同例と主語、目的語、動詞および時制が同じ例である(110)では、直接目的語としてloが用いられている。したがって、これらの例におけるleとloの使い分けを説明することはできないと考えられる。

さらに、主語が無生物の場合、全2例で直接目的語はleで表されている<sup>42</sup>。

- (111) Et cuando le aquexaba la fanbre, yba demandando por las puertas,  
(*El Conde Lucanor*, LI, 219, 6-9)

『そして、空腹にせめたてられると、家々の戸口から戸口を回って施しを乞いました。』  
(牛島、上田, 1994, 277)

- (112) Mas la mentira treble, que es mortalmente engañosa, es la quel miente et le engaña diziéndol verdat. (*El Conde Lucanor*, XXVI, 113, 13-14)

『ところが、三重のいつわりとなりますと、これは真実を言いながら実はだまして欺くことになるという、きわめつきのずる賢い嘘でございます。』(牛島、上田, 1994, 148)

<sup>42</sup> 同例の主語はla mentira treble(三重のいつわり)であり、擬人化の例である。

また、目的語の特定性について、他動性の高低の観点からみれば、直接目的語の指示対象が不特定の人物である場合、(113)のようにleが用いられやすいと考えられるが、(114)および(115)のようにloが用いられている例もみられる。

- (113) : la una, que se ayude el omne faziendo bien para aver bien o faziendo mal para aver mal; et la otra, que **le** galardone Dios segund las obras buenas et malas que el omne oviere fecho. (*El Conde Lucanor*, XLVI, 190, 15-18)

『ひとつは、努力し善を行ったがゆえに幸運を得るか、もしくは悪事ゆえに不運に遭う場合であり、もうひとつは神のご配慮により、人がそれぞれの善行と悪行に応じた報いを受ける場合だ。』  
(牛島、上田, 1994, 268)

- (114) Mas si de otra manera lo fiziesse contra vós, estrañad**lo** en tal manera por que vuestra fazienda et vuestra onra sienpre finque guardada.

(*El Conde Lucanor*, XIII, 63, 22-24)

『相手が、目をつむることのできないような行動に出てくる場合にはその者たちを退けてあなたの領地と名誉の安全に心をお配りください』(牛島、上田, 1994, 76-77)

- (115) Ca el que poco se prescia et por cobdicia o por devaneo aventura su cuerpo bien creed que non tiene mientes de fazer mucho con el su cuerpo, ca el que mucho prescia el su cuerpo ha menester que faga en guisa por que **lo** precien mucho las gentes. (*El Conde Lucanor*, XXXVIII, 158, 28-32)

『命を大切にしない者、欲得やつまらぬことに命をかける者は、自分の生命でもって大きなことを成し遂げようという覇気のない者とみなして差し支えありません。それに対して、自らの命を大切にする者は他の人々からも高く評価されるような具合に行動するはずでございます。』  
(牛島、上田, 1994, 217)

ここでは、直接目的語としてloが用いられている(114)および(115)を考察する。まず、(114)について、loの指示対象は特定の人物ではなく、主語であるLucanor伯爵を怒らせるようなことをする不特定の人物であり、同例はそのような人物を退けなさいという命令を表す文脈であり、先述のように命令法はloが用いられやすいと考えられる文脈である。次に、(115)については、loは自らの命を大切に人全般を指しており、同例はそのような人物は他の人々からも高く評価されるよう行動するという一般論を表す文脈であり、同文脈では4.4.3.2.1.3.1.で確認したように、*Cantar de Mio Cid*でもloが用いられている。したがって、指示対象が不特定の人物である場合であっても、loが用いられやすいと考えられる文脈ではloが用いられていると考えられる。

次に、指示対象が動物である例を考察する。直接目的語の指示対象が人であるacorrerの例では、反復を表す文脈ではleが用いられ、一度きりの行為を表す文脈ではloが用いられている例を示したが、以下の例に示すように指示対象が動物である場合においても同じことがいえると考えられる。

- (116) Et esto fue assí bien tres o quatro vezes: que cada que el águila se yva, luego el falcón tornava a la garça; et cada que el falcón tornava a la garça, luego vinía el águila por le matar. (*El Conde Lucanor*, XXXIII, 143, 11-14)

『こうしてワシがいなくなると、すぐにタカがサギのところへもどり、タカがサギのところへもどると今度はワシがタカを殺そうとして襲ってくるということが、三度か四度繰り返されたのでございます。』(牛島、上田, 1994, 192)

- (117) Et andando con ella muy alto, vino el águila otra vez por lo matar.  
(*El Conde Lucanor*, XXXIII, 143, 18-19)

『サギを追って空高く飛んでいたところ、そこにまたしてもワシがやって来たのでございます。』(牛島、上田, 1994, 192)

(116)および(117)では主語および目的語の指示対象、さらに動詞が同じではあるが、(116)ではワシがタカを殺そうと襲ってくる行為が何度か繰り返されたことが表されている一方で、(117)ではその行為がサギを追って高く飛んでいた際という特定の場面に一度なされたことが表されている。したがって、繰り返しおこなわれている行為を表す場合にはle、一度きりの行為を表す場合にはloが用いられていると考えられる。

また、指示対象が人である場合と同様、指示対象が動物である場合においても、主語が無生物である場合、leで表されている。

- (118) Et el cativo del gallo tomó miedo sin razón, non parando mientes cómo aquel miedo que el raposo le ponía non le podía enpecer, et espantóse de valde et quiso foýr a los otros árboles en que cuidava estar más seguro,

(*El Conde Lucanor*, XII, 60, 11-15)

『すると、あわれな雄鶏は、キツネがどれほど脅してもそこにいれば安全だということを忘れて、いたずらに恐怖を覚え、訳もなく恐慌状態に陥って、もっと安全に思われる別の木に逃れようと思いました。』(牛島、上田, 1994, 71)

同例のenpecerの主語はmiedo(恐怖)、つまり物である。したがって、主語の他動性が低い場合、指示対象が動物である場合においてもleが用いられる傾向にあると考えられる。

続いて、物のle語法の例を考察する。

- (119) Et porque entendió don Johán que este enxienplo era muy bueno, fizolo le poner en este libro et fizo estos viessos que dizen assí:

(*El Conde Lucanor*, VI, 42, 16-17)

『ドン・フアンにはこれがとてもよい話だと思われたので、この本に書きとらせ、次のよう詩をつかった——』(牛島、上田, 1994, 46)

- (120) Et entendiendo don Johán que este enxienplo era muy bueno, fizolo lo poner en este libro et fizo estos viessos que dizen assí: (*El Conde Lucanor*, X, 52, 4-5)

『ドン・ファンにはこれがとてもよいものだと思われたので、この本に収めさせ、次のよう詩をつくった——』(牛島、上田, 1994, 60)

各話を締めくくる同じ文脈でenxiemplo(教訓)を指す直接目的語としてleとloが表されている。(119)は同文脈でleが用いられている唯一の例であるが、(120)を含め、同文脈の他の12例ではloが用いられている。したがって、(119)ではleで表されている理由を説明することは不可能であると考えられる。

最後に、複数形のle語法の例を考察する。主語が一人称および二人称である場合、複数形のle語法はみられず、このようなle語法がみられるのは、(121)のように主語が三人称の特定以下的人物の場合である。

(121) Et cuando los del real vieron aquellos cavalleros entre los moros, fueron les acorrer. (*El Conde Lucanor*, XV, 69, 7-8)

『そのとき、本陣にいた兵士たちが三人の騎士がモーロ兵に囲まれているのを見て、救済に駆けつけました。』(牛島、上田, 1994, 84)

先述のように、同作品において、人の男性単数のle語法もまた、主語の有生性が高い場合はみられにくい、つまり、主語が一人称である例はなく、主語が二人称である場合、特定の動詞においてのみみられることから、人の男性単数以外のle語法は人の男性単数のle語法が用いられる文脈においてのみみられると考えられる。

以上の例から、同作品において他動性の各項目が形態の選択に作用しているかどうかを次のような観点から考察する。

(1) 意図性について、主語が通常、意図をもって行動していると考えられる人である場合、直接目的語にはleもloも用いられている。しかし、主語が自らの意図をもたない無生物である場合は、直接目的語はleで表されることから、意図性は形態の選択に影響していると考えられる。

(2) 主語の有生性について、主語が無生物である場合、leが用いられることに加え、主語が一人称である場合、loの例のみが観察されることや、二人称および特定または不特定の人物である場合、限られた文脈でしかleの例がみられないことから、主語の有生性もまた形態の選択に影響しており、有生性階層で高い位置を占める名詞句ではloが用いられ

る傾向にあると考えられる。

(3) 目的語の特定性について、目的語の指示対象が不特定の人物である場合、leが用いられる傾向にあるため、他動性の高低による形態の選択がなされていると考えられる。ただし、目的語の指示対象が不特定の人物である場合においても、loが用いられやすいと考えられる文脈ではloが用いられている。

(4) 直接目的語が受ける影響について、物理的变化を受けている場合は、loが用いられている一方、物理的变化を受けていない場合や非物理的行為を表す文脈ではleが用いられていることから、直接目的語の受ける影響の強弱によって形態の選択がなされていると考えられる。

(5) 動性について、状態を表す動詞tenerではloの例しかみられないが、動作が一瞬で完了する動詞matarではleが用いられている例もloが用いられている例もある。したがって、動作を表さない動詞ではloが用いられ、動作を表す動詞では文脈に応じて形態が選択されていると考えられる。

(6) 肯定性について、他動性の高低の観点からみれば、否定文ではleが用いられやすいと考えられるが、先述のように特定の文脈ではleが用いられている主語が不特定の人物である場合であっても、否定文ではloが用いられている。したがって、否定文であることは、主語が不特定の人物である場合にleが用いられる特定の文脈に含まれておらず、肯定文であるか否定文であるかは形態の選択に影響していないと考えられる。

(7) 法について、直説法であるか接続法であるかには関係なく、直接目的語としてleもloも用いられている。ただし、接続法について不確実な事柄を表す文脈ではleが用いられていることから、法は形態の選択にまったく影響していないわけではないと考えられる。

(8) アスペクトについて、主語が二人称である場合、完了アスペクトではloが用いられ、同アスペクトでleの例がみられるのは主語が三人称以下の人物であることから、完了アスペクトではle語法はみられにくいと考えられる。

(9) 話者の語用論的評価について、尊敬を表す文脈ではleが用いられていると考えられる。

また、同作品において直接目的格三人称男性単数形の形態は、次のような理由にもとづいて選択されていると考えられる。主語が有生性のもっとも高い一人称である場合、直接目的語はloで表され、主語が無生物である場合、直接目的語はleで表される。主語が一人称以外の有生物である場合について、他動性の低い特定の文脈ではleが用いられるが、それ以外の文脈では主語の有生性にしたがって形態選択の分岐が続く。主語が定の不特定以下の人物である場合、loが用いられると考えられる。一方、主語が二人称である場合、主にloが用いられるが、ayudar、servir、consejarといった動詞の不完了アスペクトではleが用いられる。しかし、主語が三人称の人称代名詞または固有名詞である場合、完了アスペクトであるか不完了アスペクトであるかに関係なく、前述の動詞ではleが用いられ、それ以外の動詞ではleまたはloが用いられる。

以上のことを図で示すと以下のようになる。

1) 主語が一人称 → lo

2) 主語=物 → le

3) 主語が一人称以外の有生物 → 特定の文脈 → le

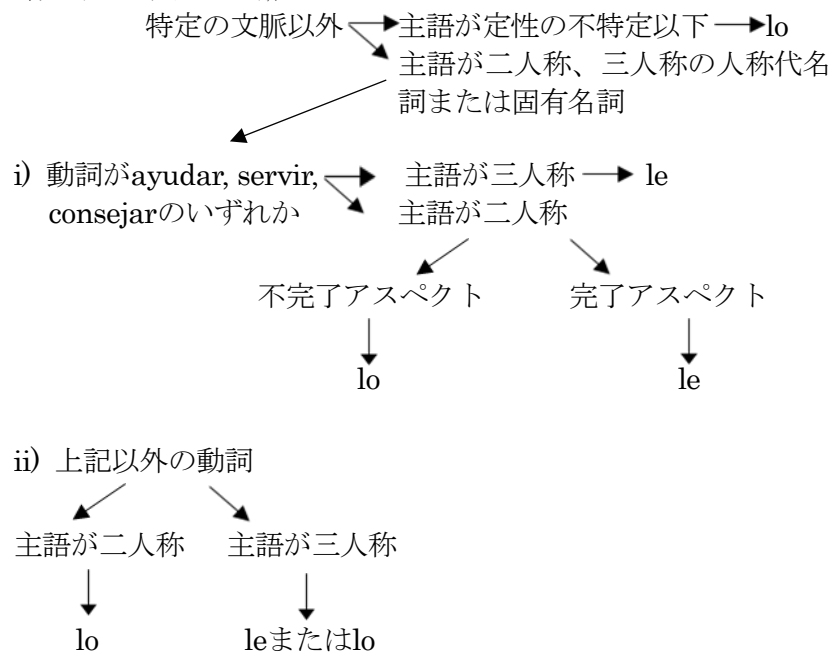


図4-5 *El Conde Lucanor*における形態選択基準



#### 4.4.3.2.1.4. 14世紀後半の作品

次に、14世紀後半に書かれた*Rimado de Palacio*においてle語法が用いられやすい動詞および文脈を考察する。14世紀前半以前の作品では、主に特定の動詞または他動性の低い文脈においてle語法がみられることが確認されたが、同作品でもまた、このような文脈においてle語法がみられる。たとえば、「助ける」を意味する動詞では、(122)のように主語が有生性の高い一人称であっても、(123)および(124)のようにより有生性の低い三人称の人物や、(125)のようにさらに有生性の低い無生物であっても、人の男性単数の直接目的語として全例でleが用いられている。

- (122) E dexé yo al pobre de fanbre peresçer  
que con pan e con agua **le** pudiera acorrer,  
e d'él he poco duelo por verle irse perder,  
tanto que al mi cuerpo cunpla al su plazer. (*Rimado de Palacio*, 107)

『私は空腹に見える貧しい人をそのままにしました  
パンと水で彼を助けることができたのに  
そして彼について、私は彼が亡くなるのを見てもほとんど悲しくありません  
私の体にとってと同じくらい彼にとって喜びになるのに』

- (123) Veemos que un omne començó a usar mal  
grant tienpo en su vida e fazer su obra tal;  
a la fin Dios **le** ayuda e **le** acorre e **le** val',  
que la su alma va salva, ¿quién judgará lo tal? (*Rimado de Palacio*, 1431)

『人間が人生の大部分を悪用し、  
そのような行為をし始めたことがわかります  
結局、神は彼を助け、彼を救い、彼を助けます  
彼の魂が救われることに誰が同意しますか？』

- (124) »Verdat es que ninguno non podrá egualar  
contra tan grant poder, si otro non **le** ayudar;  
mas estonce allí llega Aquél que non ha par  
que faze sus miraglos sienpre en tal logar». (*Rimado de Palacio*, 1197)

『「実は、そのような大きな力に対して誰も同等になることができないのです  
他の人を助けないなら  
しかしそのときそこに  
いつもそのような場所で奇跡を起こす、比肩するものがない人が来ます」』

- (125) Luego es puesto en la prisión cargado de cadenas,  
que non vea sol nin luna menazándol' d'aver penas;  
pero si diese un paño de Mellinas con sus trenas,  
valer **le** ha piedat: non le pornían de las almenas. (*Rimado de Palacio*, 358)

『すぐに彼は鎖でつながれて刑務所に入れられる  
罰があると云って太陽や月を見ないように脅して  
しかし、組みひも付きのメリナスの布を渡した場合、  
慈悲が彼を助けるでしょう。銃眼のある城壁から吊られないでしょう』

続いて、同作品においてleと相性がいいと考えられる他の動詞を考察する。そのような動詞としてperdonar、servir、errarがあげられる。まず、perdonarについて、4.4.3.2.1.2.で確認したように13世紀の作品からle語法が優勢である同動詞では、(126)のように全2例中2例でle語法が用いられている。

- (126) Por ende, quien nos faze grant enojo e tristura  
devemos perdonarle e le non tener rencura,  
con buena paçiençia sin ninguna falsura,  
sofrir la penitençia aunque sea muy dura. (*Rimado de Palacio*, 409)  
『したがって、私たちにひどく怒らせ、悲しませる人を  
私たちは許さなければならず、その人に恨みを抱いてはなりません  
何の偽りもないよき忍耐でもって、  
それが非常に厳しい場合でも、悔い改めに耐えなければなりません』

次に、servirとerrarについて、これらの動詞には指示対象が人の男性単数である場合にleが用いられている例がそれぞれ4例、3例あり、(127)および(128)のように主語が一人称である例もある。

- (127) Mucha merçed me fizo Dios en me dar logar  
e tienpo de servir<sup>le</sup> e pedirle e rogar  
que aya compasión de me querer librar  
de perigros del mundo que me quieren matar. (*Rimado de Palacio*, 422)  
『神は彼に仕え、彼に頼み、  
私を殺したがっている世界の危険から  
私を解放するという哀れみを持つよう懇願する  
時間と場所を与えることで私に多くの恩恵をしました』

- (128) A Él pido merçed que non quiera catar  
las mis grandes maldades en que <sup>le</sup> fui errar,  
que nunca yo podría sufrir nin soportar  
las penas que meresco, si s'han de egualar. (*Rimado de Palacio*, 10)  
『私は神に彼に対して間違った私の大きな悪事に  
目をつむるよう懇願する  
というのも、私に値する罰と同等でなければならないならば、  
私はそれを耐えることも我慢することも決してできないからである』

また、4.4.3.2.1.3.において14世紀前半の作品では一般論を表す文脈ではloが用いられやすいことが確認されたが、これらの動詞の例のなかには(129)のように、同文脈においてleが用いられている例もある。

- (129) Cada día el niño alcança su edat,

e cata quien **le** yerra o le dize verdat,  
o le tomará dinero o la su heredat,  
e quien **le** sirve bien o le fizo maldat. (*Rimado de Palacio*, 670)

『日々、子供は彼の年齢に達します  
誰が彼に過失を犯しているか、あるいは彼に本当のことを言っているか  
彼からお金または遺産を取るか、  
誰が彼によく仕えるか、彼に悪いことをするかを見ます』

しかし、同様に一般論を表す文脈において、これらの2つの動詞の直接目的語としてloが用いられている例が1例ずつある。

(130) Por ende con grant acuçia sienpre devemos amar  
a Dios Nuestro Criador e sus carreras buscar:  
quien leal mente **lo** sirve, segunt que vemos pasar,  
no es dubda que a **El** se llegue, porque lo pueda fallar. (*Rimado de Palacio*, 2086)

『したがって、非常に熱心に私たちは  
常に私たちの創造主である神を愛し、彼の道を探さなければなりません  
私たちが起こっているのを見るとおり、彼に忠実に仕える人は  
彼を見つけるために彼に到達することは間違いありません』

(131) El príncipe no ha culpa si dexe ordenados  
sus alcaldes muy buenos, de todo bien famados,  
ellos si **lo** erraren, merescen ser penados  
en cuerpos e en bienes que paguen sus pecados. (*Rimado de Palacio*, 602)

『王子はとてもいい名声を持っている、  
非常によい市長たちを秩序ある状態にしておけば無罪です  
彼らが彼に義務を怠った場合、彼らは  
彼らの罪を払う体や物において罰せられるに値する』

(130)および(131)については、いずれも主語は不特定の人物であり、一般論を表す文脈の例である。したがって、これらの動詞はleとの相性はいいが、loが用いられやすい文脈ではloが用いられることもあると考えられる。また、次の例からも一般論を表す文脈ではloが用いられやすいと考えられる。

(132) Por ende, dixo Job que quería amistad  
poner con los sus ojos, que non pensase maldat  
de pecar con la virgen e guardase castidat,  
e Dios **le** guardará con la su piedat. (*Rimado de Palacio*, 1249)

『したがって、ヨブは自分の目と仲良くなりたいと言った  
処女と罪を犯すという悪を考えず、  
貞節を守るために  
神は彼の慈悲で彼を守ってくださるだろう』

(133) Dios non tira esperança al omne pecador,

mas con su misericordia lo guarda de error  
e pone su melezina en el crúo dolor,  
qu'el diablo le faze, si es conoçedor. (*Rimado de Palacio*, 1461)

『神は罪人に希望を投げかけません  
しかし、彼の慈悲で彼は彼を間違いから守ります  
そして熟知しているならば、自分の薬を  
悪魔が彼に引き起こす厳しい痛み塗る』

(132)および(133)では主語はDiosであり、動詞がguardarであることは共通しているが、直接目的語の特定性は異なり、(132)のleの指示対象はJobという特定の人物であるのに対し、(133)のloの指示対象はel omneであり、人間一般を指している。つまり、一般論を表す文脈である(133)ではloが用いられている。

続いて、leとloが使い分けられていると考えられる例を考察する。同作品でもまた、主語が一人称である場合においても、特定の文脈では直接目的語としてleが用いられる。

(134) Non ove piedat del que vi en prisión,  
nin le di mi esfuerço, nin la pobre ración;  
de le ver en cadena, non ove compasión,  
mas olvidelo sienpre con duro coraçón. (*Rimado de Palacio*, 138)

『私が刑務所で見た人に同情しませんでした  
私は彼のために努力をしませんでした、わずかな食事すらもです  
彼が鎖でつながれているのを見ても、同情せず  
いつも冷酷な心でそれを忘れました』

(135) Anda el rey en esto en derredor callando,  
paresçe que es un toro que andan garrochando:  
«Amigos», dize a todos, «yo lo veré de grado,  
¡Dios sabe como él tiene su coraçón folgado!». (*Rimado de Palacio*, 491)

『王はこれについて黙って周りを歩きます  
鞭でたたかれながら歩く雄牛のように見えます  
「友よ」、彼は皆に言います。「私は喜んで彼に会いましょう  
神は彼がどのように彼の心を休めているかをご存じです!』

(134)および(135)は、ともに主語が一人称であるverの例であり、条件を表す文脈(134)ではleが用いられているのに対し、条件を表していない文脈(135)ではloが用いられている。

また、直接目的語の受ける影響が大きいと考えられる文脈でloが用いられている例が存在する。

(136) El uno de sus fijos luego le fue cobrir,  
el otro començó fuerte mente a reír;  
quando el padre lo vio, óvole a maldezir,

en él la servidunbre començó a venir. (*Rimado de Palacio*, 103)

『彼の息子の1人が直ちに彼を隠しに行きました  
もう一人は大声で笑い始めました  
父親がそれを知ったとき、彼を罵りました  
彼は奉仕の仕事をし始めました』

- (137) E sea paçiençia contigo toda vía;  
aquésta es la verdat que al omne mejor guía  
aver perdón de Dios; ésta David tenía  
cuando tan dura mente Semí lo maldezía. (*Rimado de Palacio*, 1453)

『いつもあなたが忍耐強くありますように  
忍耐は人間が神からの許しを持つようよりよく導く真実である  
ダビドは耐えていた  
セミが彼をひどく罵倒していたとき』

(136)および(137)の動詞はともにmaldecirであるが、loが用いられている(137)では、tan duramente(ひどく)という副詞を伴っている。つまり、直接目的語で表された人物が受ける影響が大きい場合、loが用いられると考えられる。

反対に、leとloの使い分けを説明することができないと考えられる例が存在する。(138)および(139)では、ほぼ同じ文脈で異なる形態が用いられている。

- (138) Los fijos de Israel con envidia perdieron  
a Josep, su hermano, cuando le así vendieron,  
e después a su padre con malicia mintieron  
que bestia lo matara falsa mente dixerón. (*Rimado de Palacio*, 97)

『妬みからイスラエルの息子たちは  
そのように兄ヨセフを売ったとき、彼を失った  
そして後で悪意を持って彼らは父親に嘘をつき、  
獣が誤って彼を殺したと言った』

- (139) Ésta enseñó a Josep con homildat padesçer  
aquella dura presión do le fueron poner  
con muy manso corazón e después fuera acorrer  
a los que lo vendieron sin gelo retraer. (*Rimado de Palacio*, 1748)

『この法則はヨセフに謙虚に  
彼が置かれた厳しい圧力にとっても柔和な心で  
苦しみ、後に彼らにそれを非難することなく  
彼を売った人々を助けるよう導いた』

(138)および(139)の動詞はともにvenderであり、直接目的語は同一指示対象Josepを指している。また、(138)のvendieronの主語であるlos queはlos fijos de Israelを指しており、(138)の主語と同じである。つまり、(138)および(139)では兄弟たちがヨセフを売るという同じ事象が表されているにもかかわらず、直接目的語は異なる形態で表されている。した

がって、ほぼ同じ文脈でleとloが用いられており、形態の選択の説明は困難であると思われる。

次に、loと相性のいい動詞を考察する。このような動詞としてtenerがあげられ、同動詞が代名詞化された人の男性単数の直接目的語とその叙述補語を伴っている場合、人を表す目的語にはleが用いられやすいことはCuervo(1895)やLapesa(2000)など複数の先行研究で指摘されているが、leの例はなく、loの例は9例ある。しかも、そのうち6例は(140)のように、leが用いられやすいと考えられる主語が無生物の例である。

- (140) Non tomar presunción jamás de tal pecado,  
ca sería desesperar e ser muy más culpado,  
e sienpre perdonar pide el que es errado,  
pues flaqueza natural lo tiene así obligado. (*Rimado de Palacio*, 1277)  
『そのような罪の推定を決してしないでください  
絶望し、はるかに非難されるからである  
間違った人は常に許しを乞います  
生まれ持った弱さが彼をそうするよう余儀なくするからである』

また、直接目的語の叙述補語を伴わないtenerの例でも、(141)のように全3例でloが用いられている。

- (141) E, por ende, nós devemos a nuestro governador  
aunque non sea tan justo tenerlo en grant honor,  
e onrrarlo e sofrirlo, pues que Dios es el mayor,  
los yerros que tal fiziere emendará muy mejor. (*Rimado de Palacio*, 1624)  
『したがって、私たちの統治者を  
大いに称えることはあまり公正ではありませんが、  
名誉を与え、耐えるべきです。神は最も偉大なので  
そのようにする間違いをずっと良く正すでしょう』

したがって、tenerはloが用いられやすい動詞であると考えられる。

以上のことから、同作品にはleまたはloが用いられやすい動詞および文脈があると考えられる。このことを踏まえて、主語の有生性に注目して考察をおこなう。以下に、主語の有生性別に同作品における指示対象が人の男性単数である直接目的語の形態の例の内訳を示した表を示す。

	主語		総数		
			le	lo	%
人	一人称		15	22	40.5%
	二人称		9	23	28.1%
	三人称の人称代名詞 固有名詞		28	35	44.4%
	定	特定	5	19	20.8%
		不特定	18	27	40.0%
	不定	特定	0	2	0%
		不特定	16	20	44.4%
動物	不定	特定	0	1	0%
物	特定		15	29	34.1%
	不特定		2	1	66.7%
	文		2	0	100.0%
計			110	179	38.1%

表4-11 *Rimado de Palacio*における主語の有生性別人の男性単数の直接目的語の形態の内訳

表3-1で示した同作品における人の男性単数のle語法の割合を語尾消失形l'を除いて換算し直すと、同指示対象のle語法の割合は38.1%である。表4-11によると、主語が一人称、人を表す三人称の人称代名詞または固有名詞、定および不定の不特定の人、不特定以下の無生物である場合、前述の数値を上回っている。しかしながら、主語が一人称である場合、15例中5例をacorrer、errar、perdonar、servirという同作品においてleと相性のいい動詞が占め、それに加えてle語法の使用を促す条件を表す文脈の例も1例あり、le語法の割合を高めている、つまり、le語法に有利に働く要因によってleの例が多いため、主語が一人称である場合にとくにle語法がみられやすいことを示しているわけではないと考えられる。また、主語が人を表す三人称の人称代名詞または固有名詞である場合においても、28例中9例において主語がいかなる人称でも同作品ではleが用いられるacorrer、ayudar、valerの動詞の例であるため、同主語でle語法がみられやすいことを示しているわけではないと考えられる。さらに、主語が二人称または特定の人または物である場合、le語法の割合は低い。以上のことから、主語の特定性が高い場合、特定の動詞以外ではle語法はみられにくく、主語が有生物であるか、無生物であるかに関係なく、特定性が低い場合、le語法がみられやすいと考えられる。

また、主語が無生物である場合については、14世紀前半の作品では主語が有生物であるか無生物であるかによって、直接目的語の形態が選択されていると考えられることを確認したが、同作品では同世紀前半の作品のように主語が有生物であるか無生物であるかによる形態の選択がなされているわけではない。さらに、表4-11によると、主語が特定の無生物である場合、le、loの例はそれぞれ15例、29例あり、むしろloの例のほうが多い。

主語が特定の無生物である場合、同じ動詞の例であっても、(142)のようにleが用いられている例もあれば、(143)のようにloが用いられている例もある。

- (142) Pues, ¿qué del ipócrita e de su sanidat  
en esta vida pobre?, ca non es de verdat  
lo que muestran sus obras; por ende, la maldat  
le aconpaña sienpre, perdida la bondat. (*Rimado de Palacio*, 1587)  
『この貧しい生活における偽善と健康はどうですか？  
彼らの行為が示すものは本当ではないからです  
したがって、悪事は常に彼に付随し、  
良さは失われます』

- (143) Así es sin dubdança qu’el omne que ha poder  
la sobervia lo aconpaña e lo faz’ orgulleçer,  
e non cata nin comide qué es lo que deve fazer:  
la grant onra le acarrea en todo más duro ser. (*Rimado de Palacio*, 1386)  
『権力を持つ人間に傲慢が付き添い、  
彼に誇りを持たせることは間違いない  
すべきことが何なのか考えるべきではありません  
偉大な名誉はすべてにおいて彼をより厳しくする』

(142)および(143)はともにacompañarという動詞において、主語が無生物である例であり、直接目的語はそれぞれleとloで表されている。したがって、同作品では主語の有生性による形態の分別が完全になされてはいないと考えられる。

しかし、主語が(144)のように不特定の無生物である場合、全3例中、後述する1例を除く2例でle語法が用いられ、また、主語が(145)のように中性冠詞を伴う代名詞である場合、全2例でle語法が用いられている。

- (144) En la saña que es honesta e con discreción,  
sienpre omne tenga miente e guarde su coraçón  
que se mueva con buen zelo, non le mueva turbación  
que le ensañe más allende que deve buena razón. (*Rimado de Palacio*, 1659)  
『公正な怒りの中で裁量をもって  
常に人間はよく考え、羨望をもって動く心に留めてください』



正当な理由を超えて彼を怒らせる変化は  
彼を動かさないと』

- (145) Si hoy si non cras, el súbdito terná  
con que sirva al señor e nunca cansará,  
si gelo toma a fuerça lo tal **le** enojará,  
e por mucho que tome nunca aprovechará. (*Rimado de Palacio*, 693)  
『今日か明日、国民は主に仕えるものを持ち、  
決して疲れないだろう  
彼から無理やりそれを取れば、彼に怒ります  
いくら取っても、それは決して利用されません』

また、目的語の特定性について、動詞が同じであり、指示対象が不特定の人物であることは共通しているが、直接目的語が異なる形態で表されている例を考察する。

- (146) E por tanto ninguno non se deve espantar  
que otro es más perfeto e más va soportar  
trabajos e dolores, mas nunca olvidar  
de estar muy firme en Dios que **le** puede sanar. (*Rimado de Palacio*, 2099)  
『したがって、誰も他の人はもっと完璧で、  
苦労と痛みをもっと耐えられるのではないかと恐れてはいけません  
しかし、彼を癒すことができる神を強く信じることを  
決して忘れてはいけません』

- (147) »Si Dios quiere e manda alguno encerrar,  
¿quién cuidas», dize Job, «que lo puede librar?  
E si Él derribare, ¿quién puede edeficar?  
E si alguno fiere, ¿quién **lo** puede sanar? (*Rimado de Palacio*, 1100)  
『「神が誰かを閉じ込めたいと思い、命じる場合、  
誰が彼を解放できると思いますか？」とヤコブは言います  
彼が壊した場合、誰が建てることができますか？  
誰かを傷つけるなら、誰が彼を癒すことができますか？』

(146)および(147)の動詞はともにsanarであり、直接目的語の指示対象は不特定の人物であるが、用いられている形態は異なる。確かに、両例の主語はそれぞれDios、quién、つまり(146)の主語は特定の有生物であるのに対し、(147)の主語は不特定の人物であるという違いはある。ただし、主語が不特定の人物である場合、同作品ではle語法がみられる傾向にあることを考慮すれば、(147)のほうがleが用いられやすい例であるとは考えられるものの、同例ではloが用いられている。したがって、目的語の特定性は形態の選択においてあまり重要ではないと思われる。

また、同作品では上記のような14世紀前半以前の作品においてle語法の使用がみられる他動性の低い文脈に加えて、それ以外の他動性の低い文脈でもle語法が好んで用いられて

いると考えられ、そのような文脈のひとつは否定文である。同作品には、代名詞化された三人称の男性単数の直接目的語を伴う否定文の例が43例あり、これら43例のうち、半数以上の24例でleが用いられている。したがって、le語法は肯定文よりも否定文においてよくみられると考えられる。以下に、表4-11で確認した主語の有生性別のle、loの例のなかで否定文におけるle、loの例の内訳および否定文におけるle語法の割合を示した表4-12、さらに主語の有生性別にそれぞれの形態が否定文において占める割合を示した表4-13を示す。

	主語		否定文		
			le	lo	%(le)
人	一人称		5	3	62.5%(5/8)
	二人称		1	5	16.7%(1/6)
	三人称の人称代名詞 固有名詞		3	5	37.5%(3/8)
	定	不特定	5	1	83.3%(5/6)
	不定	不特定	5	4	55.6%(5/9)
物	特定		5	0	100%(5/5)
	不特定		0	1	0%(0/1)
計			24	19	55.8%(24/43)

表4-12 *Rimado de Palacio*における否定文中のle、loの主語の有生性別の内訳とle語法の割合

	主語		否定文が占める割合	
			le	lo
人	一人称		33.3%(5/15)	13.6%(3/22)
	二人称		11.1.%(1/9)	21.7%(5/23)
	三人称の人称代名詞 固有名詞		10.7%(3/28)	14.3%(5/35)
	定	不特定	27.8%(5/18)	3.7%(1/27)
	不定	不特定	31.3%(5/16)	20%(4/20)
物	特定		33.3%(5/15)	0%(0/29)
	不特定		0%(0/2)	100%(1/1)
計			21.8%(24/110)	10.6%(19/179)

表4-13 *Rimado de Palacio*においてle、loが否定文中で占める主語の有生性別の割合

表4-12によると、否定文において主語が一人称、定および不定の不特定の三人称の人物、特定の物である場合、le語法の割合が50%を超えている。また、表4-13によると、主語が一人称である場合、作品全体におけるle、loの例がそれぞれ15例、22例であるのに対し、否定文におけるleとloの例はそれぞれ5例、3例であることから、主語が同人称である場合、否定文ではle語法の例が33.3%を占めており、割合が高い。したがって、主語が一人称である場合、基本的にはloが用いられるが、否定文ではleが用いられる傾向にあると考えられる。また、主語が定および不定の不特定の人物または特定性を問わず物である場合、いずれも総数ではloの例のほうが多いが、否定文ではleの例のほうが多い。しかしながら、主語が二人称または三人称の人称代名詞、固有名詞である場合は、否定文でもle語法の割合は全体における割合よりも低い。したがって、主語が特定性の高い人物である場合、主語が一人称である場合を除いて、否定文であることがle語法の使用に有利に働いているとは考えられない。

ここでは、否定文における形態選択の実例の例を考察する。まず、主語が一人称である場合については、同じ動詞であっても否定文であれば必ずle語法が用いられるわけではなく、(148)のようにleが用いられている例も、(149)のようにloが用いられている例も存在する。

- (148) Si yo vi pobre muerto, d'el muy poco curé  
de le dar sepultura, mas los ojos çerré  
por non le ver de enojo; muchas vezes dexé  
pasar por la carrera do muerto fallé. (*Rimado de Palacio*, 136)  
『かわいそうな人が死んでいるのを見かけると、  
私は彼に墓を与えるという施しをほとんど考えず、  
不機嫌な様子で彼を見ないようにするために目を閉じ、  
私は何度も死者を見つけた道を通りました』

- (149) »Mas veo yo al omne muerto e consumido,  
non lo veo después ni él a mí nunca vido  
en aquel primero estado, por ende, yo te pido  
que me digas dó está así con tal olvido. (*Rimado de Palacio*, 1121)  
『しかし、私は人間が死んで消費されるのを見ます  
私はその後で彼に会うことも、彼が私に会うこともありません  
したがって、あの最初の状態で私はあなたに  
そのような忘れられた状態で彼がどこにいるのか私に言うようあなたに頼みます』

次に、主語が無生物である場合について、le語法が用いられているのは49例中19例で、割合的にも決して頻度が高いとはいえない。ただし、次に示す例のように肯定文と否定文で形態が使い分けられていると考えられる例がある。

- (150) Alcalde e juez e todo judgador,  
segunt manda la ley del grant enperador,  
non deve ser muy pobre, ca sería peor  
por ventura cobdiçia non **le** ponga en error. (*Rimado de Palacio*, 598)

『市長と裁判官、そしてすべての裁判官は  
偉大な皇帝の法律が命じることによると  
とても貧しくはいけません、もっと悪いでしょうから  
思いがけず強欲が彼に過ちを犯させないように』

- (151) Cuando cuida ser librado, que ve como está perdido,  
con muy duros atamientos, todo mucho detenido,  
querría mucho escusar, mas fállase adormescido,  
ca los bienes que cobrara **lo** ponen así en olvido. (*Rimado de Palacio*, 2046)

『解放されると思うとき、迷っているように感じるので、  
非常に厳しい拘束により、すべてが長い間止まっている  
弁解したいが、眠気に襲われている  
彼が獲得した財産は彼をそのように忘却に追いやるからである』

(150)および(151)ではともに動詞がponerであり、主語が無生物である。しかし、否定文では(150)のようにleが用いられ、肯定文では(151)のようにloが用いられている。また、データを精査すると、主語が無生物である場合、主語が一人称である場合よりも否定文であるかどうかによるleとloの使い分けが厳格になされていると考えられる。というのも、主語が無生物である否定文の例では、(150)のように5例でleが用いられ、loが用いられているのはわずか1例のみであるからである。このloが用いられている例については次のアスペクトに関する考察で取り扱う。以上のことから、主語が無生物である場合、否定文ではle語法が用いられる傾向にあるといえる。

ここでは、完了アスペクトの例を考察する。同作品には、完了アスペクトの例が72例あり、そのうち21例でleが用いられている。以下に、表4-11で確認した主語の有生性別のle、loの例のなかで完了アスペクトにおけるle、loの例の内訳および完了アスペクトにおけるle語法の割合を示した表4-14、さらに主語の有生性別にそれぞれの形態が完了アスペクトにおいて占める割合を示した表4-15を示す。

	主語		完了アスペクト		
			le	lo	%(le)
人	一人称		3	7	30%(3/10)
	二人称		2	6	25%(2/8)
	三人称の人称代名詞 固有名詞		7	16	30.4%(7/23)
	定	特定	4	10	28.6%(4/14)
		不特定	3	4	42.9%(3/7)
	不定	不特定	1	0	100%(1/1)
動物	不特定		0	1	0%(0/1)
物	特定		0	6	0%(0/6)
	不特定		0	1	0%(0/1)
	文、中性		1	0	100%(1/1)
計			21	51	29.2%(21/51)

表4-14 *Rimado de Palacio*における完了アスペクトのle、loの主語の有生性別の内訳とle語法の割合

	主語		完了アスペクトが占める割合	
			le	lo
人	一人称		20%(3/15)	31.8%(7/22)
	二人称		22.2%(2/9)	26.1%(6/23)
	三人称の人称代名詞 固有名詞		25%(7/28)	45.7%(16/35)
	定	特定	80%(4/5)	52.6%(10/19)
		不特定	16.7%(3/18)	14.8%(4/27)
	不定	不特定	6.3%(1/16)	0%(0/20)
動物	不特定		0%(0/0)	100%(1/1)
物	特定		0%(0/15)	24.1%(6/29)
	不特定		0%(0/2)	100%(1/1)
	文、中性		50%(1/2)	0%(0/0)
計			19.1%(21/110)	28.5%(51/179)

表4-15 *Rimado de Palacio*においてle、loが完了アスペクト中で占める主語の有生性別の割合

表4-14によると、全体的にle語法の割合は低く、主語が定または不定の不特定である場合のみ、作品全体におけるle語法の割合を上回っている。また、主語が特定の物かつ動詞

が完了アスペクトである場合、le語法が用いられている例はなく、(152)のように7例でloが用いられている。

- (152) Si por tu culpa fuere alguno profaçado,  
non ha mérito ninguno por ser así blasfamado,  
ca su meresçimiento lo traxo a tal estado  
que d'él ríen los omnes e anda así cuitado. (*Rimado de Palacio*, 1091)  
『あなたによって誰かが侮辱されれば、  
そのように非難されることに何の価値也没有せん  
彼の報いにより彼は人に笑われるような状態になったからです  
彼はそのようにとても注意深い』

さらに、否定文の考察において、主語が無生物である場合、5例でleが用いられているのに対し、1例でのみloが用いられていることを指摘したが、このloが用いられている例は(153)であり、完了アスペクトの7例のうちの1例である。加えて、主語が無生物かつ否定文である場合、leが用いられている5例はいずれも不完了アスペクトの例である。

- (153) »Así como abortivo siquiera más non durara,  
e como él conçeido, que nunca lo alunbrara  
ninguna luz del mundo, e con tanto folgara,  
e non aver cuidado que así lo atormentara. (*Rimado de Palacio*, 1702)  
『予定日を過ぎて生まれる者がもう長くは生きられないが、  
彼が宿ったとき、この世の光が  
彼を照らすことはなく、たくさん休んだために、  
そのように彼を苦しめようとは考えなかった』

ただし、主語が中性の代名詞である場合、(154)のようにle語法が用いられていると考えられる。

- (154) Por esto santo Job deve considerar  
cómo en sus palabras sienpre quiso guardar  
la pura sabença e después soportar  
con buena paçiençia lo que le fue llagar. (*Rimado de Palacio*, 2019)  
『このために聖なるヨブは考慮しなければなりません  
いかに彼の言葉の中に純粋な知識を常に維持したかったかを  
それから忍耐強く耐えなければならない  
彼を傷つけたものを』

したがって、完了アスペクトでは語源を維持した形態が用いられる傾向にあるが、主語の有生性がきわめて低い場合、leが用いられていると考えられる。

また、表4-15によると、主語が一人称、二人称、三人称の人称代名詞または固有名詞という有生性の高い名詞句である場合、完了アスペクトではそれぞれの人称においてloの例のほうが多いだけでなく、同アスペクトにおいてloが用いられている割合のほうが高いことから、これらの主語では同アスペクトであることがloの使用に有利に働いていると思われる。しかし、主語が定の特定制および不特定である場合、完了アスペクトであってもleが用いられている割合が高い。とくに、不特定の人物である場合、7例中半数近くの3例がleの例である。したがって、同主語では完了アスペクトであることがloの使用に影響していないと考えられる。

また、法について、命令法では(155)のようにleが用いられている例も、(156)のようにloが用いられている例もある。

- (155) »En un muy breve tienpo su gloria pasará;  
 si fuere muy sobervio, aína caerá;  
 si su cabeça al çielo tan alto alçará,  
 espéra<sup>le</sup> un poco, verás a dó irá. (*Rimado de Palacio*, 1172)  
 『非常に短い間に彼の栄光は過ぎ去ります  
 とても傲慢だとすぐに落ちぶれるでしょう  
 頭が空のように高く上昇すると  
 彼のことを少し待ってください、彼がどこに行くかを見るでしょう』

- (156) Si tu vieres alguno que con tribulaçión  
 le fallesçe el esfuerço e mengua el corazón,  
 esfuérçalo, por Dios, non aya ocasión,  
 que por desesperança vaya en perdiçión. (*Rimado de Palacio*, 179)  
 『もし苦悩しており、  
 力が欠けており、心が弱っている者を見たら  
 神に誓って、彼を励ましてください  
 絶望から滅びに行かないように』

したがって、もっとも対格で表されやすい命令法でのloの使用は随意的であると考えられる。

複数形のle語法については、主語が一人称である場合、le語法の例は存在せず、主語が二人称または三人称である場合にみられる。

- (157) Si estos son menistros, sonlo de Satanás,  
 ca nunca buenas obras tú fazer les verás;  
 grant cabaña de fijos sienpre <sup>les</sup> fallarás  
 derredor de su fuego que nunca ý cabrás. (*Rimado de Palacio*, 227)  
 『彼らが弟子である場合、彼らはサタンの弟子です』

なぜなら、あなたは決して彼らが善行をするのを見ることはないからです  
あなたが決して入らない彼らの炎の周りに  
子どもの集団を常に見つけるでしょう』

- (158) »Este tal nos mantiene en guerras que fazemos,  
e con los enemigos, do quier que los fallemos,  
este tu mandamiento sobre todo guardemos,  
e así lo guardando todo lo conpliremos». (*Rimado de Palacio*, 714)  
『「このことは私たちが行う戦争を私たちに続けさせ、  
私たちが敵を見つけるところではどこでも敵という状態にします  
私たちは何よりもあなたの命令を守ります  
そのようにしてそれを守ることによって、すべてを果たします」』

(157)および(158)の動詞はともにfallar(hallar)であるが、主語が二人称である(157)では、直接目的語としてlesが用いられているが、主語が一人称である(158)では、直接目的語としてlosが用いられている。また、完了アスペクトである場合も、複数形のle語法の例は存在しない。

さらに、「助ける」を意味する動詞について、(159)および(160)のようにlesが用いられている例もあるが、(161)のようにlosが用いられている例もある。

- (159) Quiera por su merçed Dios bien les ayudar,  
que puedan los sus pueblos regir e governar  
en paz e con sosiego que grant cuenta han de dar  
a aquel Rey verdadero que la sabrá tomar. (*Rimado de Palacio*, 238)  
『神は彼の恩恵によって彼らを助けてくださいますように、  
彼らの民を支配し、統治できるように  
というのも大いなる責任を取ることができるあの真の王に  
平和にそして落ち着いてそれを与えなければなりませんから』

- (160) En sus mercadorías han mucha confusión,  
a mentira e a engaño e a mala confesión,  
Dios les quiera valer e ayan su perdón,  
que cuanto ellos non dexan dar quinta por bordón. (*Rimado de Palacio*, 299)  
『彼らの商売には、多くの混乱を抱えています  
嘘、欺瞞、悪い告白、  
神は彼らを守り、許しを与えることを望んでいます  
なぜなら彼らは騙すのをやめないからである』

- (161) Segunt que dixo el apóstol, por los que están perdidos  
por sus grandes pecados damos nuestros gemidos  
que Dios los acorra e sean convertidos,  
porque salven sus almas e non finquen fallidos. (*Rimado de Palacio*, 1503)  
『使徒が言ったことによると、彼らの大きな罪のために失われた彼らのために  
私たちはうめき声をあげる  
彼らの魂を救い、彼らが消えたままにならないように  
神が彼らを助け、悔悛するようにするために』



一方、否定文ではlesが用いられる傾向にあると考えられる。

- (162) Si son cosas que a peso ellos ayan de vender,  
que pesen más sus cosas, sus artes van fazer;  
en otros pesos sus almas lo avrán de padeçer,  
si Dios por la su graçia non **les** quiere defender. (*Rimado de Palacio*, 307)  
『彼らは重さで販売をしなければならぬものである場合、  
彼らのものが重いほど、騙します  
軽ければ、彼らの魂はそれに苦しむでしょう  
神が恵みによって彼らを守りたくないのなら』

- (163) Esto nos faze a los omnes e a la Iglesia padesçer  
sola mente, mas aquél en tal fecho cresçer:  
costunbrado es el malo que querría enpesçer  
los fieles si pudiese, mas Dios **los** puede defender. (*Rimado de Palacio*, 1944)  
『このことは人間と教会だけを苦しめるが、  
そのようなものはそのことにおいて大きくなります  
可能であれば忠実な人々を傷つきたい悪人は慣れているが、  
神は彼らを守ることができます』

(162)および(163)は、同じ動詞defenderの例であるが、否定文の例(162)ではlesが用いられているのに対し、肯定文の例(163)ではlosが用いられている。

また、主語が物である場合、直接目的語としてlesが用いられている例が存在する。

- (164) Es verdat que los malos en aqueste fuego tal  
verán muy grandes compañías con que fizieron el mal:  
para esto tal **les** alunbra, enpero poco les val',  
pues para cresçer tormentos lo cobran e non para ál. (*Rimado de Palacio*, 1735)  
『悪人はそのような火の中に  
ともに悪さをした非常に素晴らしい仲間を見ることは本当です  
このため、そのようなものは彼らを照らす、彼らにとってほとんど価値がありません  
他のためではなく、苦痛を増やすためにそれを獲得するからです』

したがって、複数形のle語法、すなわちlesは、単数形のle語法がみられる文脈でみられやすいと考えられる。

以上のことから、他動性の各項目と関連して以下のことがいえる。

(1) 意図性について、主語が無生物である場合、loの例のほうが多く、有生物であるか無生物であるかによって形態の選択がなされていないと判断されるため、意図性は形態の選択にほとんど影響していないと考えられる。

(2) 主語の有生性について、主語が不特定の物または文などである場合には、必ずleが用いられる。また、主語が不特定の人である場合でも、le語法が優勢である。したがって、主語の有生性は形態の選択に影響していると考えられる。ただし、いくつかの動詞については、指示対象が人の男性単数である場合、主語の有生性に関係なく、もっぱら一方の形態が選択されている。

(3) 目的語の特定性について、目的語の特定に関係なく、leが用いられている例も、loが用いられている例もみられることから、同項目は形態の選択に影響していないと考えられる。

(4) 直接目的語の受ける影響と動性について、受ける影響の強弱にしたがって形態が選択されていると考えられる例があることから、これらの項目は形態の選択に影響していると思われる。

(5) 肯定性について、主語が二人称または三人称の人称代名詞または固有名詞である場合を除いて、否定文ではle語法の割合が高いことから、否定文はle語法の使用を促していると考えられる。

(6) 法について、条件を表す文脈ではleが用いられている例がみられる一方、命令法ではleが用いられている例もloが用いられている例もみられることから、もっとも対格で表されやすい命令法でのloの使用は随意的であるが、条件を表す文脈ではleが用いられる傾向にあるといえる。

(7) アスペクトについて、主語が一部の人称である場合を除いて、完了アスペクトではloの割合が高いことから、アスペクトは形態の選択に影響していると考えられる。

また、アスペクトと肯定性について次のことがいえる。主語が中性の名詞句である場合、完了アスペクトでもleが用いられることから、アスペクトよりも主語の有生性が形態の選択において優先されていると考えられる。一方、主語が特定の無生物である場合については、完了アスペクトである場合、否定文であってもloが用いられることから、肯定性よりもアスペクトが形態の選択において優先されていると思われる。

#### 4.4.3.2.2. le語法の割合が高い作品

##### 4.4.3.2.2.1. はじめに

ここでは、人の男性単数のle語法の割合が75%を超える15世紀後半以降の11作品(*Poesía*, *Cárcel de amor*, *La Celestina*, *Lazarillo de Tormes*, *La Galatea*, *Fuente Ovejuna*, *La vida del Buscón*, *El Alcalde de Zalamea*, *El sí de las niñas*, *Don Juan Tenorio*, *Los intereses creados*)を考察する。人の男性単数のle語法の割合が高いこれら11作品において、同指示対象にloが直接目的語として用いられている例、同指示対象よりもle語法の割合が低い人の男性複数、女性単数、物が指示対象である場合にle語法が用いられている例を考察する。

##### 4.4.3.2.2.2. loが用いられている例

まず、*Poesía*の例を考察する。同作品では二項動詞において動詞がmatarである場合のみ直接目的語がloで表されている例がみられる。

- (165) Dos coplas que hallaron al señor  
don Jorge Manrique en el seno cuando lo mataron.  
Don Jorge Manrique (*Poesía*, 105, 47章の題)  
『ホルヘ・マンリケが殺されたとき  
ホルヘ・マンリケの懐から見つかった2つの詩』

そのため、(166)のように命令法である場合には、直接目的語にleが用いられている。

- (166) Quien biviere con su grado,  
de razón ya despedido,  
siga le, pues le a seguido,  
para ser de él más privado. (*Poesía*, 87, 10-14)  
『すでに理性のない、  
気の向くままに生きる人に  
追随してきたので、彼に追随してください  
もっと彼のお気に入りになるために。』

したがって、同作品ではloの使用を促すと考えられる命令法であってもleが用いられているが、動詞がmatarという直接目的語に一瞬で物理的変化をもたらす他動性の高い動詞ではloが用いられている。

次に、*Cárcel de amor*の例を考察する。同作品では、主語が物である場合、loが用いられている例が1例ある。同例は、主語はそれぞれ異なる無生物であるが、直接目的語の指示対象は同じである文脈のなかのひとつである。

- (167) : dolor le atormenta, pasión le persigue, desesperança le destruye, muerte le amenaza, pena le secuta, pensamiento lo desvela, deseo le atribula, tristeza le condena, fe no le salva; (*Cárcel de amor*, V, 14, 18-21)

『痛みは彼を苦しめ、情熱は彼を迫害し、絶望は彼を破壊します、死は彼を脅かし、悲しみは彼を追い詰め、思考は彼を眠れなくし、欲望は彼を悩ませ、悲しみは彼を非難し、信仰は彼を救いません。』

この例からは、主語が無生物である場合であっても、必ずleが用いられるとは限らないと考えられる。

また、行為が実現させたかどうかによって、形態の選択がなされていると考えられる例がある。

- (168) ; en sigulle le había peligro y en dexalle flaqueza; con la turbación no sabía escoger lo mejor. (*Cárcel de amor*, I, 5, 5-7)

『彼の後を追うには危険があり、彼を放っておくには弱さがありました。混乱して、最良のものを選ぶことができませんでした。』

- (169) ; y como el ruego del forçado fue causa que lo siguiese, para cometer al que lo levava faltávame aparejo y para rogalle merescimiento, de manera que me fallecía consejo; (*Cárcel de amor*, I, 5, 13-16)

『四人に懇願されたことが彼の後を追う理由だったので、彼を連行している人を攻撃するには私は戦いに備えておらず、彼に懇願するにはそれに値する事柄を欠いていたので、私は決心することができなかった。』

動詞がseguirである(168)および(169)の主語と直接目的語は同じ人物である。(168)は直接目的語の指示対象である人物の後を追うかどうかを決めかねている文脈であり、直接目的語はleで表されている。一方、(169)では(168)に続く場面において実際に彼の後を追っている様子が表されており、直接目的語はloで表されている。

さらに、逸話のなかで代名詞化された男性単数の直接目的語の例は4例あり、全例で(171)のようにloが用いられている。

- (170) ; y sabido en la corte como iva, todos los grandes señores y mancebos cortesanos salieron a recibir le; (*Cárcel de amor*, XVIII, 30, 21-22)

『宮廷では彼がどうであるのか知られていたもので、すべての偉大な領主たちと宮廷の若い男たちが彼を迎えに来ました。』

- (171) , en cuya labor pasaron veinte años, después de los cuales, venido Ulixes, viejo, solo, destruido, así lo recibió la casta dueña como si viniera en fortuna de prosperidad. (*Cárcel de amor*, XLV, 73, 26-28)

『その作業に20年を費やし、その後、年をとって、一人で、ボロボロになってユリクスが来ると栄えた幸運のなかに来たかのように貞淑な女性は彼を迎えました。』

(170)および(171)の動詞はともにrecibirであるが、(170)では同作品の登場人物であるLerianoがleで表されているのに対し、(171)では逸話のなかの人物であるUlixesはloで表されている。

続いて、*La Celestina*の例を考察する。指示対象の人物に対する軽蔑を表していると考えられる文脈では、指示対象はloで表されている。

- (172) ¡Y tal enfermo, señora! Por Dios, si bien le conocieses, no le juzgases por el que has dicho y mostrado con tu ira. (*La Celestina*, IV, 132, 17-18)

『おまけにこれほどの病人なら、お嬢様！よくお知りになれば、きつときつとおわかりになりますのに、おっしゃるようなお方じゃない、腹立ち紛れに決めつけたようなお方じゃないと。』(岡村, 2020, 95)

- (173) Has de saber, Pármemo, que Calisto anda de amor quejoso; y no lo juzgues por eso por flaco, que el amor impervio todas las cosas vence. (*La Celestina*, I, 68, 1-3)

『いいかい、パルメノ、カリスト旦那は恋わずらい。けど、だからって、めめしいなんて嗤うのは間違いだよ。難しいほど歯止めが利かなくなるのが恋ってもん。』(岡村, 2020, 51-52)

(172)および(173)の動詞はともにjuzgarである。また、両例の話者および直接目的語の指示対象は同じであり、それぞれ*Celestina*、*Calisto*である。しかし、(173)は肯定命令文よりも他動性が低いと考えられる否定命令文であるものの、同例ではloが用いられている。ただし、命令文では必ずloが用いられているわけではなく、次に示すように、肯定命令文においてleが用いられている例もある。

- (174) ¡Elicia, Elicia, cátale aquí! (*La Celestina*, I, 48, 22)

『エリーシア、エリーシア、下にこの人がきてるよ！』(岡村, 2020, 40)

続いて、動性および直接目的語の受ける影響については、同作品は他動性がもっとも高い動詞であるとされるmatarや状態動詞tenerの直接目的語としてleが用いられている本研究においてもっとも古い作品であり、それぞれ全6例、全4例でleが用いられている。同

作品以降に書かれたle語法圏の作品では後述する各1例を除いて、両動詞の直接目的語として全例でleが用いられている。

- (175) En sueños la veo tantas noches, que temo no me acontezca como a Alcibíades, que soñó que se veía envuelto en el manto de su amiga y otro día matáron<sup>le</sup>, y no hobo quien le alzase de la calle ni cubriese sino ella con su manto.

(*La Celestina*, VI, 154.20-155.1)

『夜ごと夢に見ています。だから、アルキビアデスの二の舞にならないかと心配なのです。アルキビアデスは愛人のマントにくるまっている夢を見た。そしてやがて殺され、遺体を道から運ぶ者はおろか、なにかで覆ってくれる者さえいなかった、愛人が自分のマントを掛けてくれるまでは。』(岡村, 2020, 115)

- (176) ¡Ten<sup>le</sup>, Pármelo, ten<sup>le</sup>! (*La Celestina*, XII, 260, 18)

『とめて、パルメノ、とめてったら!』(岡村, 2020, 203)

これらの例からは、同作品以降の作品では動性および直接目的語の受ける影響は、loが選択される要因ではなくなっただと考えられる。

次に、*Lazarillo de Tormes*を考察する。同作品においてleとloが使い分けられていると考えられる例を考察する。直接目的語がloで表されている例として、指示対象が死者であるためであると考えられる例が存在する。

- (177) —Aquí arriba lo encontré, (*Lazarillo de Tormes*, VII, 60, 25)

『「すぐそこ、ちょっとのぼったところで死人に出くわしたんです。』(岡村, 2018, 102)

このことから、直接目的語が死者であるという活動性の低い人物である場合、loが用いられていると考えられる。

また、動詞の行為が繰り返しおこなわれているかどうかで異なる形態が用いられていると考えられる例が存在する。

- (178) Y en esto yo siempre <sup>le</sup> llevaba por los peores caminos, y adrede, por le hacer mal y daño, (*Lazarillo de Tormes*, I, 19, 8-9)

『よし、それならばと、あたしのほうでもわざとなるだけ歩きにくい道ばかり歩かせてひどい目に遭わせ、困らせてやりました。』(岡村, 2018, 29)

- (179) Yo que vi el aparejo a mi deseo, saquele de bajo de los portales y llevelo derecho de un pilar o poste de piedra que en la plaza estaba,

(*Lazarillo de Tormes*, I, 25, 8-10)

『あたしは、うまくいった、しめしめと、やつを拱廊から連れ出し、広場の周りに立っている石の柱のほうへ向かいました。』(岡村, 2018, 41)

(178)と(179)は主語および直接目的語、動詞は同じである。(178)ではLázaroが主人である盲人を歩きにくい道に誘導するという反復しておこなわれている行為が表されており、直接目的語である盲人はleで表されている。一方、(179)ではLázaroがその主人と別れるために石の柱のほうへ連れて行くという一度のみおこなわれた行為が表されており、直接目的語はloで表されている。

さらに、他のloが用いられている例として次の例がある。

- (180) Mas no había piedra imán que así trajese a sí como yo con una paja larga de centeno que para aquel menester tenía hecha, la cual, metiéndola en la boca del jarro, chupando el vino lo dejaba a buenas noches.

(*Lazarillo de Tormes*, I, 16.18-17.3)

『でも、あたしがあれ用に用意したライ麦の長い麦藁、どんな磁石だってあんなに物を引き寄せる力はありません。あたしはそいつを壺の口へ入れ、中味をちゅうちゅう吸ってあかんべえしておりました。』(岡村, 2018, 24)

(180)のloはLázaroの主人と壺を同時に指している。同例の直接目的語である主人は(178)および(179)の直接目的語の指示対象と同一人物であることから、直接目的語で表されている人物自体にloの使用を促している可能性のある要因はないと考えられる。また、同例と主語および動詞が同じ例である(181)では、同一指示対象の直接目的語にleが用いられている。

- (181) Y en cuanto esto pasaba, a la memoria me vino una cobardía y flojedad que hice, por que me maldecía: y fue no dejalle sin narices,

(*Lazarillo de Tormes*, I, 23, 21-23)

『そうしているうち、ああ、自分は弱虫で意気地なしだったと思いあたりました。その情けなさにおれとわが身を責めました。つまり、どうして鼻を食いちぎらなかったのかと。』(岡村, 2018, 37)

このことから、動詞dejarがloの使用を促している可能性も低いと考えられる。したがって、同作品ではleであまり表されない物も同時に指しているため、(180)ではloが用いられていると考えられる。

続いて、*La Galatea*の例を考察する。同作品にはle語法が高い割合でみられる作品においてleとloが使い分けされていないと考えられる例が存在する。

- (182) Merece quien en el suelo  
en su pecho a amor no encierra,  
que lo desechen del cielo

y no **le** sufra la tierra. (*La Galatea*, I, 72, 1-4)

『《この世にて愛を  
抱かざる人間どもは  
天国を追い落とされよ  
地上でもはねつけられよ》』(本田, 2017, 91-92)

(183) Y merece el que su celo  
de tal amor le destierra,  
que **le** desechen del cielo  
y no **le** acoja la tierra. (*La Galatea*, I, 73, 9-12)

『その愛の熱意を捨てる  
者どもはさてはせいぜい  
《天国を追い落とされよ  
地上でもはねのけられよ》』(本田, 2017, 92)

loとleの指示対象はそれぞれquien、el queであるという違いもあるものの、(182)と(183)はほぼ同じ文脈である。また、主語がla tierra、つまり無生物である(182)および(183)の4行目では同じ指示対象に対しては、ともにleが用いられている。

さらに、同作品には他動性によると考えられる形態の選択ではなく、韻を踏むために形態が選択されていると考えられる例が存在する。

(184) Del maestro GARAY las dulces obras  
me incitan sobre todos a alabarle;  
tú, Fama, que al ligero tiempo sobras,  
ten por heroica empresa el celebrar**le**. (*La Galatea*, VI, 367, 129-132)

『ガライ師の甘美なる詩を見れば  
誰にもまして称えたくなるというもの  
迅速なく時>に勝れる名声よ  
彼を称えることにより勇者なるべし』(本田, 2017, 498)

(185) Pastores, si le viéredes, honraldo  
al famoso varón que os diré ahora  
y en graves dulces versos celebra**ldo**,  
como a quien tanto en ellos se mejora. (*La Galatea*, VI, 379, 457-460)

『皆の衆、もし汝らが見かけたら  
これから述べる著名なる者を称えよ  
荘重で甘美なる詩で抜きでた  
才能をもった者として誉れ授けよ』(本田, 2017, 516)

(184)および(185)はいずれもニンフが歌う詩のなかの例であり、動詞はいずれもcelebrarである。(184)では韻を踏んで2行目のalabarle同様、直接目的語にはleが用いられている。一方、(185)では韻を踏んで2行目のhonraldo同様、直接目的語にはloが用いられている。



また、一方について述べ、もう一方について述べる文脈では、*El Conde Lucanor*同様、一方ではleが用いられ、もう一方ではloが用いられている。

- (186) Antes tenía lástima y envidia a Erastro: lástima, en ver que al fin amaba, y en parte donde era imposible coger el fruto de sus deseos; envidia, por parecerle que quizá no era tal su entendimiento, que diese lugar al alma a que sintiese los desdenes o favores de Galatea, de suerte, o que los unos **le** acabasen, o los otros **lo** enloqueciesen. (*La Galatea*, I, 26.14-27.3)

『むしろ彼はエラストロに同情しかつ羨んでいた。同情というのは彼もまた己が欲望の果実を摘むことのできぬ相手を受してしまったからであり、羨望というのは彼の知性がおそらくガラテアの蔑みや好意に敏感に反応するほど繊細なものではなかったと思われたからである。もしエリシオであれば蔑まれれば死んでしまったであろうし、好意を示されれば狂喜してしまったはずであった。』(本田, 2017, 36-37)

同例について、le、loの指示対象はともにElicioであり、主語はそれぞれdesdenes、favoresである。ここでは、Elicioは蔑まされた場合、死んでしまい、好意を示された場合、狂気してしまっていたという、一方のケースとそれとは反対のもう一方のケースが表されており、直接目的語には異なる形態が用いられている。

次に、*Fuente Ovejuna*の例を考察する。命令を表す文脈において、同一指示対象かつ同じ動詞でleとloが用いられている例が存在する。

- (187) ...azota**le** hasta que salten  
los hierros de las correas. (*Fuente Ovejuna*, 1249-1250)  
『……ひっぱたけ！皮ひもの留め金が飛びちるまで、ひっぱたけ！』(田尻, 2020, 240)

- (188) Que **lo** azotéis. (*Fuente Ovejuna*, 1244)  
『鞭打ちの刑に処す。』(田尻, 2020, 240)

このように、命令を表す文脈ではleとloの交替がみられることから、同文脈はloの使用が維持されやすい文脈であると考えられる。

続いて、*La vida del Buscón*の例を考察する。動詞がtenerである場合、*La Celestina*以降の作品では直接目的語としてleが用いられていることを指摘したが、leとloが使い分けられている例が*La Celestina*よりもあとに書かれた同作品でみられる。

- (189) —Pues, en verdad, que por lo que yo vi hacer a V. Md. en el campo denantes, que más **le** tenía por encantador, viendo los círculos.  
(*La vida del Buscón*, II, I, 59, 3-5)

『「でも、正直なはなし、さっき野原であなたがやってることを見たときには、魔法使いなんじゃないかと思いましたけどね。円を描いてらしたでしょ』(牛島, 1997, 184)

- (190) Y porque no lo tengan por maricón, ahaje ese cuello y agobie de espaldas;  
(*La vida del Buscón*, II, I, 174.15-16)

『おかま掘りだなんて思われねえように、その襟はしわく<sup>えり</sup>ちやにして前かがみになることであ。』  
(牛島, 1997, 184)

(189)では直接目的語の叙述補語はencantador(魔法使い)であり、とくに直接目的語に対する軽蔑が表されている文脈ではないが、(190)ではmaricón(おかま掘り)であり、直接目的語に対する軽蔑が表されている文脈であるため、loが用いられていると考えられる。

また、同作品では代名詞化された直接目的語の指示対象が人の男性単数である場合、sacarではle語法の例が4例あり、(191)のように物理的の行為を表す場合でも、(192)のように非物理的の行為を表す場合でもle語法が用いられている。

- (191) Fuímonos a acostar y en toda la noche pudimos yo ni don Diego dormir, él trazando de quejarse a su padre y pedir que le sacase de allí, y yo aconsejándole que lo hiciese; (*La vida del Buscón*, I, III, 21, 16-18)

『私たちは床についたものの、二人とも夜っぴてまんじりともいたしません。ドン・ディエゴは父親に文句を言って、ここから出してもらおう考えを語り、私はぜひそうするようにと勧めながら時を過ごしたのです。』(牛島, 1997, 136)

- (192) Mas sacole de la puja don Lorenzo del Pedroso, el cual entró con una capa muy buena, la cual había trocado en una mesa de trucos a la suya, que no se la cubriera pelo al que la llevó, por ser desbarbada.

(*La vida del Buscón*, III, III, 119, 3-6)

『しかしドン・ロレンソ・デル・ペドロソの方が一枚うわてで、彼はとても上等なマントを着て入ってきましたが、それは玉突き場で自分のマントとすり替えたものだったのです。』  
(牛島, 1997, 249-250)

(191)のように、寄宿塾から出してもらおうという物理的の行為を表す文脈においても、(192)のように直接目的語の指示対象であるMerlo Díazよりも、主語であるdon Lorenzo del Pedrosoのほうが術策において優れているという非物理的の行為を表す文脈においても、直接目的語にはleが用いられている。しかしながら、次に示すように、同動詞において同指示対象でloが用いられている例が1例存在する。

- (193) Era de ver a los que no tenían cama llegar y asir de los pies al acostado, y sacarlo<sub>lo</sub> arrastrando en medio de la sala y encajarse en la cama, y aquél asir de otro para acomodarse. (*La vida del Buscón*, III, IV, 123, 7-10)

『ベットをあてがわれていない人々がやって来て、寝ている人の足を掴み、引きずって部屋の真ん中に出し、ベッドに横になり、引きずり出された人がベッドに横になるために他の人を掴む様子は見ものでした。』

同例では直接目的語の指示対象が引きずり出されている、つまり活動性が非常に低いいため、*lo*が用いられていると考えられる。

さらに、動詞の意味によって*le*と*lo*が使い分けられていると考えられる他の動詞の例が存在する。

- (194) Pues andar a pie pareciera mal, y más entonces, fuime a San Filipe y topéme con un lacayo de un letrado, que tenía un caballo y le aguardaba, que se había acabado de apearse a oír misa. (*La vida del Buscón*, III, VII, 148, 16-19)

『てくてくやっているのではみっともないですし、今日のような場合にはなおさらでしたから、ひとまずサン・フェリーペ教会に寄ってみました。するとある弁護士の従者が馬をつれているに出くわしましたが、その従者はミサにあずかるために馬を下りた主人をそこで待っていたのです。』(牛島, 1997, 285)

- (195) No bien me aparté dél con su capa, cuando ordena el diablo que dos que lo aguardaban para cintarearlo por una mujercilla, entendiendo por la capa que yo era don Diego, levantan y empiezan una lluvia de espaldarazos sobre mí.

(*La vida del Buscón*, III, VII, 151, 27-30)

『私がドン・ディエゴのマントをはおってその場を離れるとすぐのことです、これは悪魔の奴に仕組まれたのですが、ある商売女のことで彼をめった打ちにしてやろうと手ぐすね引いて待っていた二人の男が、マントを見て私をてっきりドン・ディエゴだと思いこんで、走ってくるなり私の背中に棒打ちを雨と降らせたのです。』(牛島, 1997, 290)

(194)は従者が主人である弁護士が教会から出てくるのを待っている場面であり、直接目的語に*le*が用いられている。一方、直接目的語として*lo*が用いられている(195)では、直接目的語の指示対象であるDon Diegoに恨みをもつ二人の男が攻撃をしかけるために相手が来るのを待ち構えている場面である。このように、相手が来るのを待ち伏せている文脈では、直接目的語で表される人物は活動性が低いため*lo*が用いられる傾向にあると考えられる。

また、命令文では*lo*が用いられている例はなく、(196)のように*le*が用いられている。

- (196) Consérvelle V. Md., que bien se le puede sufrir el ser bellaquillo por la fidelidad; lo mejor de la plaza trai. (*La vida del Buscón*, I, VI, 43, 11-12)

『しっかりとつかまえておくことですね。これだけまめに働くんだから、悪さをするくらいは大目に見なくっちゃ。市場からは一番いいものを見つけてきますし。』(牛島, 1997, 164)

次に、*El Alcalde de Zalamea*の例を考察する。同作品では動詞がmatarである場合、(197)および(198)のようにleが用いられている例もあれば、(199)のようにloが用いられている例もある。

- (197) Sí, voto a Dios;  
y aunque fuera el general,  
en tocando a mi opinión  
le matara. (*El Alcalde de Zalamea*, 247, 858-861)  
『さよう、存じております。だけれども、たとえ將軍さまでおありなさろうと、わが家の面目に指一本触れるやつは、打ち果たします。』(高橋, 2001, 158)

- (198) (Dentro.) Todas las puertas tomad,  
y no me salga de aquí  
soldado que aquí estuviere;  
y al que salirse quisiere,  
matadle. (*El Alcalde de Zalamea*, 293, 2171-2175)  
『(奥で)戸口を全部固めよ。なかの兵は誰も出てはならぬ。出ようとする者があれば、斬ってよい。』(高橋, 2001, 212)

- (199) ¡Vive Dios,  
si por el honor no fuera  
de Isabel, que lo matara! (*El Alcalde de Zalamea*, 250, 929-931)  
『イサベールに免じて、命ばかりは助けてやるか。』(高橋, 2001, 162)

(197)では、Crespoが彼の家の名をわずかたりとも汚そうとする者は、たとえ將軍であろうとも討ち果たすと発言している文脈であり、leの指示対象はel capitánを含む、そのような行為をする不特定の人である。また、(198)のloの指示対象は、大尉の宿舎から出ようとする者であり、発話の時点ではいるかどうかは不明である。一方、(199)のloの指示対象は特定の人物であるel capitánである。しかし、同例のように指示対象がel capitánである場合、(200)のようにleが用いられている例も存在する。

- (200) A poco rato, mi hermano  
dio al capitán una herida;  
cayó, quiso asegurarle,  
cuando los que ya venían  
buscando a su capitán  
en su venganza se incitan. (*El Alcalde de Zalamea*, 289, 2026-2031)  
『見ると、兄さまが相手を一突き、突きました。倒れながら、もう一突き突こうとなさいましたところへ、大尉さんを追って駆けつけた兵士たちが仇を討とうと立ちむかって参ります。』(高橋, 2001, 207)

したがって、指示対象がel capitánであることではなく、動詞が他動性の高い動詞matarであることがloの使用を促していると考えられる。また、(197)および(198)では直接目的語の指示対象が不特定の人物であるため、同動詞では、leが用いられていると考えられる。

続いて、*El sí de las niñas*の例を考察する。同作品では指示対象が人の男性単数である場合、loが用いられている例が1例みられる。

- (201) Vosotros (*asiendo de las manos a doña Francisca y a don Carlos*) seréis la delicia de mi corazón; y el primer fruto de vuestro amor... Sí, hijos, aquél... No hay remedio, aquél es para mí. Y cuando lo acaricie en mis brazos podré decir:  
(*El sí de las niñas*, III, VIII, 171, 18-19)

『お前たちは(ドニャ・フランシスカとドン・カルロスの手をとりながら)わしの無上の喜びだよ。二人の愛の結晶……そうだと……これはだ、選択の余地はないのだが、わしへの賜物だよ。いつかわしのお腕で赤ん坊をあやすときがくれば、わしはきっとこう言うだろう、』(佐竹, 2018, 153)

同例のloの指示対象は二人の愛の結晶(el fruto de vuestro amor)であり、字義通りには物であるが、実際表されているのは赤ん坊、つまり人である。

最後に、*Los intereses creados*の例を考察する。指示対象に対する軽蔑を表している場合、直接目的語はloで表されていると考えられる。

- (202) ¡Cuando es él quien me debe todo su crédito en esta ciudad, que hasta emplearlo yo en el atavío de mi persona no supo lo que era vestir damas!  
(*Los intereses creados*, I, II, I, 99, 12-14)

『むかうこそ、この市で得た信用はみんなあたしのお蔭ぢやないか！あたしがこの身の衣装に用を言ひつけてやるまでは、ほんたうの貴婦人の粧へつてものを、知りもしなかつたくせに！』  
(永田, 2010, 30)

(202)のloの指示対象は仕立て屋であり、雇用される側という話者よりも身分の低い立場にあるため、loが用いられていると考えられる。

また、直接目的語の叙述補語が表す内容によって形態の選択がなされていると考えられる例がある。

- (203) Siempre le creímos un noble caballero.  
(*Los intereses creados*, II-III-IX, 142, 30)

『レアンドロさんは高潔いお方と、いつも思つてましたぢや。』(永田, 2010, 101)

- (204) No lo creo tan necio ni tan loco. (*Los intereses creados*, II-III-V, 129, 13)

『殿様がそんな馬鹿な方、そんな狂人でたまるもんですか。』(永田, 2010, 79)

leおよびloの指示対象は同じであり、Leandroである。leの叙述補語は気高い人物であり、直接目的語に対する軽蔑を表す文脈ではないが、loの叙述補語は馬鹿、狂人であり、直接目的語に対する軽蔑を表す文脈である。

#### 4.4.3.2.2.3. 人の男性複数形のle語法

ここでは、人の男性複数形のle語法の例を考察する。4.4.3.2.1.2.で13世紀の作品からすでに動詞ayudarが「助ける」を意味する場合、単数形でも複数形でもle語法の出現率が高いことを確認したが、人の男性単数形のle語法の出現率の高い作品である*Lazarillo de Tormes*および*La Galatea*について、同意味の動詞では複数形においてもle語法の例のみみられる。また、*Lazarillo de Tormes*については、(205)が人の男性複数形のle語法の唯一の例である。

(205) Y mejor les ayude Dios que ellos dicen la verdad.

(*Lazarillo de Tormes*, VII, 78, 10-11)

『ああ、ありがたい、ほんとのことを言ってくれて。』(岡村, 2018, 135)

(206) ; y más, ayudándoles de entre las espesas ramas mil suertes de pintados pajarillos que, con divina armonía, parece que como a coros les iban respondiendo. (*La Galatea*, II, 107, 3-5)

『また、繁った枝の間から色とりどりの小鳥たちが素晴らしい囀り声で彼らに加勢していたので、まるで合唱隊のコーラスのように聞こえた。』(本田, 2017, 139-140)

また、leと相性のいい動詞では複数形においてもle語法、すなわちlesが用いられている例がみられる。

(207) , vinieron los amantes y los que les ministraron en amargo y desastrado fin.

(*La Celestina*, 24, 6-7)

『やがて愛欲に溺れる二人と、彼らを手助けした者たちは、つらく惨めな最期を迎えるはめになる。』(岡村, 2020, 21)

(208) Dejad que yo les advierta de todo, que cometerán mil torpezas y pagaré yo luego, que mi señor, como veis, no perdona falta...

(*Los intereses creados*, I-II-VII, 90, 3-5)

『このおれに、萬事の指揮をさせてくれ。手落ちだらけだと、その尻がみんなこつちへ廻るんだ。うちの殿様ときちや、今も見ての通り、決して御容赦なさらないからな……』(永田, 2010, 15)

*La Celestina*および*Los intereses creados*は複数形のle語法の使用率が低い作品である

が、(207)および(208)のように動詞がそれぞれministrar、advertirである場合、男性複数対格としてlesが用いられている。2.2.で確認したように、Cuervo(1895)によると、これらの動詞は人を表す目的語として与格が用いられる動詞である。

さらに、*La Galatea*では(209)および(211)のように被制辞補語を伴う全3例でlesが用いられている。

- (209) ; no quites a los pastores destos prados la luz de sus ojos, la gloria de sus pensamientos y el honroso estímulo que a mil honrosas y virtuosas empresas les incitaba. (*La Galatea*, V, 322, 4-6)

『これらの牧場の牧人たちから、彼らの目の輝きと、栄えある思いと、数多くの立派な行動を促す清い刺激を奪い去らないでくれ。』(本田, 2017, 435)

- (210) , los cuales no querrán consentir que se les arrebatte y quite delante de sus ojos el sol que los alumbra, y la discreción que los admira, y la belleza que los incita y anima a mil honrosas competencias. (*La Galatea*, V, 318, 2-5)

『彼らは君の中に見出だす光り輝く太陽や、感嘆すべき分別や、また名誉ある競争心を煽る美しさが、自分たちの目の前から奪い去られるのをむざむざ許しはしませんよ。』(本田, 2017, 430)

- (211) casi de un mismo pensamiento movidos, Orompo, Crisio, Orfinio y Marsilo comenzaban a templar sus instrumentos, les forzó a volver las cabezas un ruido que a sus espaldas sintieron, el cual causaba un pastor que con furia iba atravesando por las matas del verde bosque, (*La Galatea*, V, 327, 4-8)

『オロンポ、クリシオ、オルフェニオ、マルシリオの四人も、同じ思いに駆られ、各々の楽器を調律し始めていた。そのとき彼らは背後にざわめきを感じてふと振り返ってみると、一人の牧人が森の茂みをもつすごい勢いで横切っていくのが見えた。』(本田, 2017, 442)

(209)および(210)の動詞はともにincitarであるが、被制辞補語a mil honrosas y virtuosas empresasを伴う(209)では直接目的語としてlesが用いられているのに対し、被制辞補語を伴っていない(210)ではlosが用いられている。また、forzarが被制辞補語a volver las cabezasを伴う例(211)においても直接目的語はlesで表されている。

続いて、主語が無生物である場合の例を考察する。le語法の割合が低い14世紀後半までの作品において主語が無生物である場合、le語法が用いられる傾向にあることを指摘したが、le語法の割合が高い15世紀後半以降の作品でも同様に、同主語では人の男性複数にもle語法、つまりlesが用いられている作品が複数存在する。ただし、16世紀中頃までに生まれた作者の作品である*La Celestina*および*La Galatea*、*Fuente Ovejuna*では、losが用いられている例もみられる。まず、*La Celestina*の例を確認する。

- (212) No sé si me han sentido, no sé qué se sea aquejar<sup>[les]</sup> más agora este cuidado que nunca. (*La Celestina*, XVI, 295, 22-24)

『なにか感づいたのかしら？ どうして急にここまでわたしの結婚が気になりだしたのかしら？』  
(岡村, 2020, 230)

- (213) Así que ellos, muy enojados –por una parte los aquejaba la necesidad que priva todo amor; (*La Celestina*, XV, 289, 1-2)

『それで二人はかっとなった。ひとつには金に困って情けもなにもなくなってたし、』  
(岡村, 2020, 224)

(212)および(213)の動詞はともにaquejarであり、主語はそれぞれeste cuidado、la necesidad、つまり無生物であるが、直接目的語としてはそれぞれ異なる形態les、losが用いられている。これらの例から、同作品では主語が有生物であるか無生物であるかによって直接目的語の形態が選択されているわけではないと考えられる。

次に、*La Galatea*について、3.3.2.で確認したように指示対象が人の男性複数である場合、le語法の例は33例あり、その割合は34.4%である。これら33例のうち、主語が無生物である例が19例を占め、losのそれは15例であるため、全体における人の男性複数のle語法の出現率は低いが、主語が無生物である場合、le語法の割合が上回っている。

同作品において、主語が有生物であるか無生物であるかによって形態が使い分けられていると考えられる例が存在する。

- (214) Y estoy confusa en pensar qué causa <sup>[les]</sup> habrá movido a dejar Tirsi su dulce y querida Fili, y Damón su hermosa y honesta Amarili:

(*La Galatea*, II, 92, 14-16)

『今以て分からないのはティルシがどうして優しくも愛しいフィリを、またダモンが彼の美しく貞節なアマリリを捨てる気になったのかということです。』(本田, 2017, 118)

- (215) , por mover<sup>[los]</sup> y convidarlos a que otro tanto hiciesen, rogó a Elicio que su rabel tocasse, al son del cual así comenzó a cantar: (*La Galatea*, II, 104, 21-22)

『そこでできれば彼らにも弾き語りをしてもらいたいと思い、エリシオに三弦琴を弾くように頼み、みずからこのように歌い出した。』(本田, 2017, 135-136)

(214)および(215)の動詞はともにmoverであるが、(214)では主語が無生物であるcausaであり、直接目的語にはlesが用いられているのに対し、(215)では主語が人であり、直接目的語にはlosが用いられている。

ただし、先述のように、主語が無生物である場合、lesとlosが完全なかたちで使い分けられているわけではなく、ponerの例について、(216)のようにlesが用いられている例が2例あり、(217)のようにlosが用いられている例が1例ある。



- (216) Pero, estando en esto, oyeron un tan doloroso suspiro que les puso en confusión y deseo de saber quién le había dado; (*La Galatea*, V, 309, 14-15)

『しかしこのとき彼らの耳に、いかにも痛々しげな嘆き声が聞こえてきたので、何ごとかと不審に思い、また誰の声なのかを知りたいと思った。』(本田, 2017, 419)

- (217) con tan arraigado rencor y mal ánimo, que no ha sido parte para ponerlos en paz ninguna humana diligencia. (*La Galatea*, I, 40, 8-9)

『遺恨と悪意はあまりに根深いものでしたから、どんなに人間的な努力を払っても、双方を和解させることはできませんでした。』(本田, 2017, 53-54)

また、*Fuente Ovejuna*では、(218)および(219)のようにlesが用いられている例もある一方で、(220)のようにlosが用いられている例もある。

- (218) Yo voy, señor, que amor les ha movido. (*Fuente Ovejuna*, 1864)

『行ってまいります。愛ゆえに人は行動を起こすものなものですから。』(田尻, 2020, 250)

- (219) Sus armas borran con picas  
y a voces dicen que quieren  
tus reales armas fijar,  
porque aquellas les ofenden. (*Fuente Ovejuna*, 1992-1995)

『自分たちを侮辱した領主の紋章をはぎ取り、王家の紋章を掲げるのだとロ々に叫んでおりました。』(田尻, 2020, 253)

- (220) los Marqueses de Villena,  
y otros capitanes, tantos,  
que las alas de la fama  
apenas pueden llevarlos. (*Fuente Ovejuna*, 125-128)

『ビリェナ侯爵の軍団と大勢の隊長の軍功は名声の翼が運びきれないほどでございます。』(田尻, 2020, 222)

ただし、(220)のlosの指示対象はlos Marqueses de Villenaとotros capitanes、つまり人であるが、意味的には彼らを指しているのではなく、彼らの軍功、つまり物を指している。

また、同作品では主語が人である場合は、(221)のようにlosが用いられている。

- (221) Parece que los encantas. (*Fuente Ovejuna*, 2232)

『なめておるな。』(田尻, 2020, 257)

しかしながら、16世紀後半以降に書かれた*La vida del Buscón*および*Don Juan Tenorio*では、主語が無生物である場合、lesのみ用いられ、losの例はみられない。

- (222) Confesóme que los farsantes que hacían comedias todo les obligaba a restitución, (*La vida del Buscón*, III, IX, 162, 23-25)

『彼はつづけて、芝居を書く役者たちはみんな借り物だけでやっている(中略)と私に打ち明けました。』(牛島, 1997, 303)

- (223) Mas cuando una buena espada,  
por un buen brazo esgrimida,  
con la muerte **les** convida,  
todo su valor es nada. (*Don Juan Tenorio*, I, II, II, 932-935)  
『鍛えに鍛えた腕ぶしで、真剣でもふるわれる段になったら、命でもかける段になったら、そんな空威張りは、たちまち、すぼんでしまいさ。』(高橋, 1976, 53)

ここでは、アスペクトに注目して考察をおこなう。*La Galatea*において、行為が実現したかどうかによって形態が選択されていると考えられる例がみられる。

- (224) A esta sazón llegó Erastro, y, viendo que Galatea se iba y **les** dejaba, le dijo:  
(*La Galatea*, 53, 30-31)  
『この時エラストロがやって来たが、ガラテアが皆をおいて行こうとしていたのを見て言った。』(本田, 2017, 68)

- (225) No pudo Galatea responder a Erastro, porque andaba guiando su ganado hacia el arroyo de las Palmas, y, abajando desde lejos la cabeza en señal de despedirse, los dejó. (*La Galatea*, 54, 3-5)  
『ガラテアはエラストロに答えることができなかった。遠くから会釈を送って彼らに別れを告げ、パルマスの小川の方に羊たちを引き連れて行ってしまったからである。』(本田, 2017, 69)

(224)ではGalateaが皆を置いて行こうとしている場面が描かれており、直接目的語はlesで表されているが、(225)ではGalateaが皆を置いて行ってしまったあとの場面が描かれており、直接目的語はlosで表されている。

さらに、同作品におけるverの例では、(226)のように譲歩を表す文脈ではlesが用いられている。一方、同動詞において同例以外ではlosが用いられており、(227)のように実際に見た場合を表す文脈の例が5例、(228)のように実際には見ていないことが確定している文脈の例が2例ある。

- (226) : que fue que, habiéndole dicho de la manera que habían hallado a Silerio y en el lugar do quedaba, le rogó Tirsi que, sin que ninguno dellos se le diese a conocer, se fuesen llegando poco a poco hacia él, ora **les** viesse o no,  
(*La Galatea*, V, 285, 3-7)  
『というのもティルシはティンブリオにシレリオがどのようにしていたかを話してから、彼のいる場所に見つからないように少しずつ近づいていくように頼んだのである。彼に見られようが見られまいがどうでもよかった。』(本田, 2017, 390)

(227) ; antes, haciendo de sí gallarda e improvisa muestra, hacia donde estaba Elicio se fueron; el cual, como los vio, conociendo a su amigo Damón, con increíble alegría le salió a recibir, diciéndole: (*La Galatea*, II, 101, 2-5)

『つまり彼らは偶然居合わせたかのようにエリシオのいたところに颯爽と出てきたのである。エリシオは彼らを目にし、そのうちの一人が友人のダモンであることを知ると、喜びを隠しきれない様子で彼を迎えに出て来て、こう言った。』(本田, 2017, 131)

(228) ; y tan transportado en sus imaginaciones venía, que pasó lado con lado de los pastores, sin que los viese; (*La Galatea*, V, 339, 1-3)

『彼はあまりに物思いに耽っていたせいで、彼らに見向きもせず、傍らを通り過ぎて行ってしまった。』(本田, 2017, 456-457)

ただし、(229)のように実行中の行為を表す文脈ではlesが用いられているのに対し、(230)のように未実現の行為を表す文脈ではlosが用いられている例がある。

(229) , y luego por sus mismas pisadas les fueron siguiendo, hasta que el caballero y las pastoras, pareciéndoles estar bien adentro del bosque, (*La Galatea*, IV, 210, 25-27)

『彼らの後を織っていくと、男と牧女たちは森の中のかかなり入り込んだところにきたと思ったのか、無数の藪に囲まれたこじんまりした牧場の真ん中で足を止めた。』(本田, 2017, 294)

(230) Dijo Damón a Elicio que los siguiesen, (*La Galatea*, V, 313, 9)

『ダモンはエリシオにいっしょについて行こうと言った』(本田, 2017, 423)

これらの例から、行為が実際になされたかどうかによって形態が完全なかたちで分別されているわけではないと考えられる。

最後に、直接目的語の受ける影響と関連して考察する。*Lazarillo de Tormes*の単数形の例において、指示対象が死者であるためloが用いられていると考えられる例を確認したように、*Don Juan Tenorio*においてもまた、死者を表す直接目的語としてlosが用いられている例が存在する。

(231) CENTELLAS: ¿Venís aun a escarnecellos?

DON JUAN: No, los vengo a visitar. (*Don Juan Tenorio*, 3144-3145)

『センテーリャス 君は、まだこの連中をからかいに来たのか。

ドン・フアン そうじゃない。おれは墓参りに来たんだが[...]』(高橋, 1949, 145)

同例は複数形の例であるが、本研究の資料体のなかで人の男性複数のle語法がもっとも高い割合でみられる同作品においても直接目的語の指示対象が死者である場合、全2例中2例でlosで表現されており、lesが用いられている例は存在しない。

#### 4.4.3.2.2.4. 女性形のle語法

次に、人の女性形のle語法の例を考察する。le語法の使用率が高いle圏出身者による作品のうち、同指示対象で動詞が「助ける」を意味する動詞である例は*La Galatea*において1例みられ、leが用いられている。

- (232) ; y, puniendo en la mano muerta de Leonida el puñal que su hermano traía, que era el mismo con que él la había muerto, ayudando **le** yo a ello, tres veces se le hiqué por el corazón. (*La Galatea*, I, 50, 31-34)

『彼女の萎えた手に兄のもっていた短刀を握らせました。それは彼女が殺されたのと同じものでした。ぼくは彼女の手をとって彼の心臓に三度それを突き刺しました。』(本田, 2017, 65)

同指示対象でもまた、指示対象が男性である場合と同様に、主語が無生物である場合、leで表されている例が複数の作品でみられる。まず、*La Celestina*の例を示す。

- (233) Porque mi Melibea mató a sí misma de su voluntad a mis ojos con la gran fatiga de amor que **le** aquejaba; el otro matáronle en muy lícita batalla.

(*La Celestina*, XXI, 342, 11-14)

『娘のメリベアは愛ゆえの苦悩に責め苛まれ、わたしの眼前でみずから命を絶った。』(岡村, 2020, 265)

- (234) Mejor será que vayas con ella y **la** aquejes (*La Celestina*, II, 85, 10)

『おまえが横にいて急かすほうがよくはないか?』(岡村, 2020, 64)

(233)および(234)は同じ動詞の例であるが、(233)では主語が無生物であり、直接目的語はleで表されている。一方、(234)では主語が二人称、つまり人であり、直接目的語はlaで表されている。ただし、同作品では主語が無生物である場合、同指示対象のle語法の例はほかに2例あるが、必ずしもle語法が用いられているわけではなく、(235)のように、語源を維持した形態laが用いられている例が3例ある。

- (235) De todo esto **la** dotó natura; cualquiera que nos pidan hallarán bien cumplido. (*La Celestina*, II, 295, 2-3)

『生まれながらにこれが全部備わっている。なにを求められようとすべて完璧だ。』(岡村, 2020, 229)

次に、主語が無生物である場合、le語法の例のみみられ、laが用いられている例は存在しない作品の例を示す。

- (236) ; y estando mi madre una noche en la aceña, preñada de mí, tomo<sup>le</sup> el parto y pariome allí. (*Lazarillo de Tormes*, I, 6, 7-9)

『あたしを身籠ったおふくろは、ある晩水車小屋にいたとき産気づき、そこであたしを産み落としました。』(岡村, 2018, 11)

- (237) , y hay en su mirada un misterio de encanto y en su voz una dulzura que llega al corazón y <sup>le</sup> conmueve como si contara una historia triste.

(*Los intereses creados*, I, II, VII, 111. 31-112.1)

『眼付が人を魅<sup>ま</sup>はす不思議な力を持ち、聲が人の胸に徹つて、悲しい物語じみた感動を與へる優しい調子を持つてるからね。』(永田, 2010, 49)

また、主語が無生物である場合について、*La Galatea*では人の女性複数形のle語法の例もみられる。3.3.2.で同作品では指示対象が女性複数である場合、le語法の例が2例みられることを確認したが、次に示す2例がその2例である。

- (238) Acetaron ellas el convite; y, sentándose luego, desecharon la hambre, que por ser ya subido el día comenzaba a fatigar<sup>les</sup>. (*La Galatea*, I, 71, 3-5)

『彼女たちは誘いを受け入れて腰を下ろして食べ始めたが、その時はすでに日も高くなっていてかなり空腹を覚えていたのである。』(本田, 2017, 90)

- (239) Lo cual visto por las tres pastoras, Galatea, Florisa y Teolinda, determinaron de ver, si pudiesen, quién eran las disfrazadas pastoras y el caballero que las llevaba; y así, acordaron de rodear por una parte del bosque, y mirar si podían ponerse en alguna que pudiese serlo para satisfacer<sup>les</sup> de lo que deseaban.

(*La Galatea*, IV, 210, 20-22)

『この様子を見ていた三人の牧女ガラテア、フロリサとテオリンダは、顔を隠した二人の牧女を連れていった男がいったい何者なのかぜひ知りたいと思った。そこで、森の中にどこか陣取れる場所があるかどうか見てみようと考えた。』(本田, 2017, 294)

(238)および(239)のlesはともにellasを指し、三人の牧女Galatea、Florisa、Teolindaを示している。また、これらの例の主語は、それぞれla hambre、alguna parte、つまり物である。したがって、同作品では主語が無生物である場合にのみ同指示対象のle語法がみられると考えられる。ただし、主語が無生物である場合、必ずしもle語法が用いられるわけではなく、(240)のようにlasが用いられている例もみられる。

- (240) Mas, viendo Florisa que el sol estaba hacia la mitad del cielo, y que sería bien buscar alguna sombra que de sus rayos <sup>las</sup> defendiese, o, a lo menos, volverse a la aldea, (*La Galatea*, IV, 216, 23-26)

『しかし、フロリサは日が中天まで昇ってきたのに気づき、どこか日陰に入って日射しを避けるか、さもなければ村に戻ったほうがいいと思った。』(本田, 2017, 301)

ここでは、*El sí de las niñas*の例を考察する。同作品では、指示対象が人の女性単数である場合に、le語法が用いられている例(241)が1例存在する。しかし、同例と直接目的語の指示対象および動詞は同じであるが、主語が異なる例(242)では直接目的語としてlaが用いられている。

- (241) ¿Será posible que usted no conozca otro más amable que yo, que le quiera bien y que la corresponda como usted merece?

(*El sí de las niñas*, III, VIII, 152, 20-22)

『わたしよりも親切で、心からあなたを愛してくれて、あなたにふさわしい別の男が現れないなんてはずがありませんよ!』(佐竹, 2018, 122)

- (242) ¿No sabe usted que la quiero tanto? (*El sí de las niñas*, III, VIII, 151, 17-18)

『わしがどれだけ愛しているかわかりますよね!』(佐竹, 2018, 121)

(241)および(242)のle、laの指示対象はいずれもustedで表されたdoña Franciscaである。また、両例で動詞はquererであるが、(242)では主語はyoで表されたdon Diegoであるのに対し、(241)では主語は従属節において接続法で表されたotroという不特定の人物である。同作品において、指示対象がusted(女性)である場合にle語法が用いられているのは(241)のみであり、同指示対象の他の15例ではlaが用いられている。そのため、指示対象であるustedに対する敬意を表すためにle語法が用いられているのではなく、主語が不特定の人物であるためにle語法が用いられていると考えられる。

#### 4.4.3.2.2.5. 物のle語法

次に、指示対象が物であるle語法の例を考察する。*El sí de las niñas*には、leとloの使い分けが説明できない例が存在する。

- (243) DOÑA FRANCISCA. Ellos eran, sin duda... Aquí estarían cuando yo hablé desde la ventana... ¿Y ese papel?

RITA. Yo no le encuentro, señorita.

DOÑA FRANCISCA. Lo tendrán ellos, no te canses... Si es lo único que faltaba a mi desdicha... No le busques. Ellos le tienen.

(*El sí de las niñas*, III, VI, 149, 23-27)

『ドニャ・フランシスカ あの人たちここにいたのよ……私が窓辺で話しかけていたとき、ずっとここにね……それで手紙のほうはどうなの?』

リタ それが見つからないんですよ、お嬢さま。

ドニャ・フランシスカ すでにお二人の手に渡ったかもよ。もういいわ……私の不幸にとどめを刺されたのも同然だし……相手の手に渡った以上、もう探さなくても結構。』(佐竹, 2018, 117-118)

この例では、指示対象がese papel(手紙)である4行目のtenerの直接目的語としてloが用いられているのに対し、その前後の文脈では同一指示対象に対してleが用いられている。状態動詞であるtenerでは直接目的語にloがよく用いられるとすでに述べたが、5行目にtenerの直接目的語としてleが用いられている例があるため、tenerの直接目的語であることをloが用いられている理由とすることはできないと考えられる。

また、3.3.2.で*La Galatea*には物の男性複数のle語法の例が2例みられることを確認したが、そのうち1例は主語が無生物である例である。

- (244) Venía vestida a la serrana, con los luengos cabellos sueltos al viento, de quien el mismo sol parecía tener envidia, porque, hiriendo[les] con sus rayos, procuraba quitarles la luz si pudiera, (*La Galatea*, I, 52, 13-15)

『彼女は山家娘のいでたちで長い髪を風になびかせていたが、太陽すらも彼女に羨望を抱いているように見えた。なぜなら太陽はできることなら自らの輝きで彼女の光を奪おうとしていたからである。』(本田, 2017, 66)

(244)でのlesの指示対象はlos luengos cabellosであり、主語がel mismo sol、つまり無生物である。また、同作品において物の男性複数のle語法がみられるもうひとつの例は、次のものである。

- (245) ¿Quién es el que, a su pesar,  
mete sus pies por los ojos,  
y sin causarles enojos,  
[les] hace luego cantar? (*La Galatea*, VI, 418, 1-4)

『苦痛のうちにその足を  
目玉の中に突っ込んで  
痛みを何ら与えずに  
音をきしらすものは誰?』(本田, 2017, 575)

同例の指示対象はlos ojosであり、cantarの主語の役割を果たしている。

ただし、(246)で示すように主語が無生物である場合、必ずしもle語法が用いられるわけではなく、指示対象が人である場合と同様に、物の男性複数である場合においても、語源を維持した形態が用いられている例が存在する。

- (246) -Si los tuyos tuvieras, discreto Lenio -respondió Tirsi-, sin las sombras de la vana opinión que los ocupa, vieras luego la claridad de los nuestros,  
(*La Galatea*, I, 140, 13-15)

『「賢明なレニオ」とティルシは答えた。「もし君の考えが根も葉もない意見に惑わされていないとすれば、すぐにぼくらの考えの正しさが分かるはずです。』(本田, 2017, 179)

#### 4.4.3.3. 非le語法圏出身の作者による作品

##### 4.4.3.3.1. le語法の割合が低い作品

本項では、人の男性単数のle語法の割合が30%以下の非le語法圏出身の作者による作品(*Guzmán de Alfarache*, *Soledades*, *El sombrero de tres picos*, *Platero y yo*)を考察する。

作品の作者の出生年順にしたがって、最初に*Guzmán de Alfarache*を考察する。同作品では動詞によって形態の選択がなされている例が多くみられる。まず、leが用いられる傾向にあると考えられる動詞を考察する。たとえば、動詞が*ayudar*の場合、全例で直接目的語としてleが用いられており、(247)のように主語が有生性の高い一人称で、被制辞補語*a todo*を受ける場合も例外ではない。

(247) Ayude<sup>le</sup> a todo, entregándoles las frentes y orejas.

(*Guzmán de Alfarache*, I, I, VI, 98, 4)

『ロバの額と耳をこすってやることによってすべてにおいて彼を手伝いました。』

また、*ayudar*同様、主語がいかなる人称でもleが用いられている他の動詞として*servir*があげられる。同動詞では主語が一人称である場合、(248)および(249)のように全5例で直接目的語としてleが用いられている。

(248) Compuse mis galas y, oída una misa, fui a visitar al capitán, diciéndole cómo venía en su busca para servir<sup>le</sup>. (*Guzmán de Alfarache*, I, II, IX, 239, 3-5)

『私は服装を整え、ミサを聞いた後、隊長を訪ねに行き、彼に仕えるためにいかにして彼を探して来たのかを彼に話しました。』

(249) ; que sin duda al amo que honra el criado <sup>le</sup> sirve, y si bien paga, bien le pagan; pero si es humano, lo adoran. (*Guzmán de Alfarache*, I-III-IX, 315, 20-21)

『というのも、使用人を大事にする主人には人は喜んで仕え、十二分に報酬が与えられれば、それだけ心をこめて奉仕するというのが世の常だからです。かてて加えて、主人が思いやりのある人であれば、さらに彼は敬慕されることにさえるでしょう。』(澁澤, 1991, 140)

(249)の*servir*と*adorar*の直接目的語は同じ対象*el amo*を指しているが、それぞれle、loで表されていることから、動詞が*servir*であるためにleが選択されていると考えられる。

さらに、同作品でもまた、*advertir*はle語法と相性のいい動詞であると考えられる。



- (250) Así lo cumplió y señaló la hora en que pudiera ir, advirtiéndole de cierta señal que haría de la ventana. (*Guzmán de Alfarache*, I-III-X, 332, 28-30)  
『彼女はそれを果たし、彼が行くことができる時間を示し、彼女が窓から送るある合図を彼に教えた。』

次に、loが好まれて用いられていると考えられる動詞を考察する。たとえば、状態動詞 tenerは(251)のようにいかなる人称でも全15例でloが用いられており、(252)のように主語が無生物かつ直接目的語が叙述補語を伴う場合も、loが使用されている。

- (251) Creyeron los hombres haberles el Contento quedado y que lo tienen consigo en el suelo; y no es así, que solo es el ropaje y figura que le parece, y el Descontento está metido dentro. (*Guzmán de Alfarache*, I-I-VII, 106.9-12)  
『人間は彼らのもとの満足が残り、地上に彼がいると信じていました。しかしそうではなく、彼に似ているのは服と姿だけであり、不満足が中に入れられています。』

- (252) Esto, por una parte; los pleitos, los amores de mi madre y otros gastos que ayudaron, por otra, lo tenían harto delgado,  
(*Guzmán de Alfarache*, I-I-II, 62, 21-23)  
『もう一方では、訴訟や母の恋愛問題、その他の出費も手伝って、彼は非常に困窮していました。』

反対に、対象に物理的変化を与えるため、もっとも他動性が高いとされる動詞である matarでも(253)やほか1例、全2例でloが用いられている。

- (253) que, buscando al mozuelo no me vieran sus vestidos y, achacándome haberlo muerto para robarlo, me lo pidieran por nuevo y que diera cuenta de él. (*Guzmán de Alfarache*, I-II-VIII, 225, 10-12)  
『すなわち、若者を探している連中に、私が彼の衣装を身に着けているところを見つけられでもしたら、連中は私が彼を殺して強奪したものと早合点し、この点に関して申し開きをするように迫ってくると思われましたので』(澁澤, 1991, 120)

これらの例から、同作品では動詞によってleまたはloが使い分けられているといえる。

続いて、他動性と関連して同作品においてle語法がみられやすいと考えられる文脈を考察する。たとえば、非現実的な事柄を表す場合、leが用いられている例がある。

- (254) ; y con mis flacas fuerzas y pocos años, arranqué de un poyo y tirele un medio ladrillo que, si con el golpe le alcanzara y tras un pilar no se escondiera, creo que me dejara vengado. (*Guzmán de Alfarache*, I-I-VI, 99, 17-19)  
『私の弱い力と若さで私は腰掛けから立ち上がり、彼に半分のレンガを投げました。もし打撃を伴って彼に当たり、彼が柱の後ろに隠れなければ、彼は私に復讐していたと思います。』

(255) Dete tanta vida el cielo que lo alcance y deje gozar el galardón que por ello te debo. (*Guzmán de Alfarache*, I-III-X, 340, 14-15)

『私が彼に追いつき、そのために私が君に負う報酬を楽しむことができるほどの命を天があなたに与えてくださいますように。』

(254)および(255)の動詞はalcanzarである。(254)は、実際には直接目的語で表されている人物にレンガは当たらなかったが、もし当たっていたならば彼は私に復讐していただろうという反実仮想を表す文脈であり、直接目的語にはleが用いられている。一方、現実性が(254)ほど低くない(255)では直接目的語としてloが用いられている。

また、指示対象がustedである場合、全3例においてleで表現されており、(256)のように主語が一人称である場合も例外ではない。

(256) El amo daba voces pidiendo socorro, a quien el mozo respondió: «Vuesa merced cumple con pagarme cada mes mi salario y yo con acompañar le como lo prometí, y el uno ni el otro no estamos a más obligados».

(*Guzmán de Alfarache*, I-II-V, 203, 28-32)

『主は助けを求めて叫び、使用人はこう答えました。「あなたは私に給料を支払うことで役目を果たし、私はお約束したようにあなたにお供することで役目を果たしており、私たちはお互いにそれ以上は義務付けられておりません。」』

一方、loが用いられやすいと考えられる文脈として、命令を表す文脈があげられる。同文脈では、(257)のように全10例でloが用いられている。

(257) ¡No lo suelten, ténganlo! (*Guzmán de Alfarache*, I-II-X, 248, 25)

『そいつを放すな、捕まえておけ。』

以上の例から、同作品では特定の動詞および文脈ではもっぱらleまたはloが用いられると考えられる。このことを踏まえて、主語の有生性に注目して考察をおこなう。同作品における主語の有生性別の内訳を示した表を以下に示す。

	主語		le	lo	%
人	一人称		19	49	27.9%
	二人称		1	9	10.0%
	三人称の人称代名詞 固有名詞		10	59	14.5%
	定	特定	12	37	24.5%
		不特定	4	13	23.5%
	不定	特定	0	3	0.0%
		不特定	11	46	19.3%
動物	定	特定	0	1	0.0%
		不特定	0	2	0.0%
人と物	人: 定性, 不特定、物: 特定		1	0	100.0%
物	特定		14	12	53.8%
	不特定		3	0	100.0%
	文		5	2	71.4%
計			80	233	25.6%

表4-16 *Guzmán de Alfarache*における主語の有生性別人の男性単数の直接目的語の形態の内訳

3.3.2.でも確認したように、同作品のle語法の使用率は25.6%であり、主語が有生物である場合、いずれの人称においても同数値を大きく上回っていない(表4-16)。

一方、主語が無生物である場合について、とくに不特定の物または文といったより有生性が低い無生物である場合、le語法が優勢である。同主語の例を合計すると、leとloの例はそれぞれ22例、14例であり、leが用いられている例のほうが多いが、主語が有生物であるか無生物であるかによって形態の選択がなされているわけではない。ただし、loの例は(258)のように主語の有生性に関係なく、全例でloが用いられているtenerの例や、(259)のように主語が動作主である神の手(las manos de Dios)である例、(260)のように一般論を表す文脈または後述するように完了アスペクトの例のような一部の文脈でのみみられる。

(258) ¿Qué frenesí de Satanás casó este mal abuso con el hombre, que tan desatinado lo tiene? (*Guzmán de Alfarache*, I, II, II, 172, 20-21)

『サタンのどのような狂乱がこの邪悪な乱用を人間と結び合わせ、彼を非常に愚かにしているのですか?』

(259) Pues, desdichado del amenazado, si las manos de Dios lo han de castigar: más le valiera no ser nacido. (*Guzmán de Alfarache*, I-I-III, 86, 12-13)

『というのも、脅された人の不幸なことに、神の手が彼を罰するならば、生まれない方が良かったでしょうから。』

- (260) Salvo si no me dices que anda tal el mundo, que por el mismo caso que uno es bueno, diestro en su oficio y en él hace como debe, por eso mismo *lo* descompone y arrincona para que todo se yerre, (*Guzmán de Alfarache*, I-II-VII, 215, 25-28)  
『もっとも、所詮人の世とはそうしたものだと言われれば是非ありませんが。つまり、この世では、善良で有能な、しかもちゃんと義務を果す人でさえ、まさに立派であるが故に悲惨なめに会い、衆愚によって疎んじられる』(澁澤, 1991, 104)

(259)と関連して、Flores(2007)は動作主が働きかけている物について、次の例を用いて説明している。

- (4-1) , puesto que para los ejercer trajese *provisiones de vuestra merced*, las cuales si traía, le pedía por merced y le requería *les presentase* ante mí,  
(Flores(2007:101)より引用)

Flores(2007)によると、物を介して有生物が行動していると考えられる場合、物と有生物の動作主性とのあいだに密接な関係が確立され、この場合、規定(*provisiones*)の発行者である国王の権力および威厳が規定に付与されているため、直接目的語として*les*が用いられている。これと同様のことが(259)でもいえると思われる。同例の主語は神の手(*las manos de Dios*)、つまり手を介して動作主である神が行動していると解釈される。したがって、主語は字義通りには物であるが、意味的には有生物であるため、直接目的語は*lo*で表されていると考えられる。

また、(260)について、*lo*の指示対象は直前の文で説明されているような不特定の人物であり、同文脈では特定の人物に当てはまることが表されているのではなく、先述のような特徴をもつ人であれば誰にでも当てはまることが表されている、つまり一般論を表す文脈であるため、*lo*が用いられていると考えられる。

次に、肯定性の観点から考察をおこなう。*Rimado de Palacio*同様、同作品においても否定文での*le*語法の割合は高く、代名詞化された三人称の男性単数の直接目的語を伴う45例の否定文の例のうち、半数近くの22例で*le*が用いられている。3.3.2.で確認したように、同作品において指示対象が人の男性単数である直接目的語として用いられている*le*、*lo*の割合がそれぞれ25.6%、74.4%であることを考慮すると、*le*語法は肯定文よりも否定文においてよくみられるといえる。以下に、表4-16で確認した主語の有生性別の*le*、*lo*の例のなかで

否定文におけるle、loの例の内訳および否定文におけるle語法の割合を示した表4-17さらに、主語の有生性別にそれぞれの形態が否定文において占める割合を示した表4-18を示す。

	主語		否定文		
			le	lo	%(le)
人	一人称		6	3	66.7%(6/9)
	二人称		1	2	33.3%(1/3)
	三人称の人称代名詞 固有名詞		2	2	50%(2/4)
	定	特定	2	6	25%(2/8)
		不特定	2	3	40%(2/5)
	不定	不特定	6	4	60%(6/10)
物	特定		2	3	40%(2/5)
	不特定		1	0	100%(1/1)
計			22	23	48.9%(22/45)

表4-17 *Guzmán de Alfarache*における否定文のle、loの主語の有生性別の内訳とle語法の割合

	主語		否定文が占める割合	
			le	lo
人	一人称		31.6%(6/19)	6.1%(3/49)
	二人称		100%(1/1)	22.2%(2/9)
	三人称の人称代名詞 固有名詞		20%(2/10)	3.3%(2/59)
	定	特定	16.7%(2/12)	16.2%(6/37)
		不特定	50%(2/4)	23.0%(3/13)
	不定	不特定	54.5%(6/11)	8.7%(4/46)
物	特定		14.3%(2/14)	25%(3/12)
	不特定		100%(1/1)	0%(0/0)
計			27.5%(22/80)	9.9%(23/233)

表4-18 *Guzmán de Alfarache*においてle、loが否定文中で占める主語の有生性別の割合

表4-18によると、同作品においてleが用いられている80例のうち、22例が否定文の例であり、その割合は27.5%であるのに対し、loが用いられている例は233例あるが、23例が否

定文の例であり、その割合はわずか9.9%である。また、表4-17によると、主語が一人称である場合、leの例は19例あり、そのうち否定文の例は6例ある。一方、同人称の主語において、loの例は49例もあるが、そのうち否定文はわずか3例しかなく、leの例の半分である。つまり、主語が有生性の高い一人称である場合、leの例は少ないが、否定文においてはle語法の割合が高い。

また、主語が二人称である場合、le語法の例は1例のみみられ、同例は(261)に示される否定文の例である。

- (261) «Mirad que importa y es mi voluntad que, cuando pasare, no le ofendáis,  
(*Guzmán de Alfarache*, I-I-III, 83, 26-27)  
『それが起こったとき、あなたが彼を攻撃しないことが重要であり、私の意志である。』

次に、主語が二人称の否定文である場合、(262)および(263)に示されるようにloの例は2例存在するが、両例とも先述のように同作品では全例でloが用いられている命令文の例である。

- (262) Pues, hasta que allá lo tengas, no lo busques acá.  
(*Guzmán de Alfarache*, I-I-VII, 107, 7-8)  
『というのも、あなたがそこで満足の神という限り、ここで彼を探してはいけないからです。』

- (263) No por eso te ensañes ni lo gruñas, que por ventura estará otro a su lado que te la quiera dar y, viéndote soberbio, te la quite.  
(*Guzmán de Alfarache*, I-III-III, 268, 30-32)  
『それはあなたが彼に腹を立てたりうめき声を上げたりする理由ではありません。あなたにそれを与えたいと思っていて、あなたが傲慢になっているのを見て、あなたからそれを奪うほかの誰かがおそらく彼の側にいるでしょうから。』

さらに、主語が三人称の人称代名詞または固有名詞である場合、le、loの例はそれぞれ10例、59例あり、そのうち否定文の例は2例ずつある。したがって、主語が特定性の高い三人称である場合でも、否定文におけるle語法の割合は高いが、主語が一人称である場合ほどではないといえる。ただし、主語が定性の特定の人物である場合、le、loの例はそれぞれ12例、37例であり、そのうち否定文の例はそれぞれ2例、6例である。したがって、leまたはloが選択される割合はほぼ同じであり、同主語では否定文であることがle語法の使用に有利に働いているとは考えにくい。

続いて、主語が定の不特定の人である例を考察する。このような場合、否定文の例はいずれも一般論を表す文脈であり、leとloの例はそれぞれ4例、13例あり、そのうち否定文の例がそれぞれ2例、3例ある。ただし、leが用いられている2例は(264)に示されるservirとそれに並列するregalarの例であり、loが用いられている3例中2例は(265)に示す命令を表す文脈の例であり、もう1例は(266)に示す全5例でloが用いられているamarの例であるため、いずれもleまたはloが用いられやすいと考えられる文脈である。

- (264) Y al contrario, al señor soberbio, mal pagador, de poco agradecimiento, ni le dicen verdad ni le hacen amistad, no le sirven con temor ni regalan con amor;  
(*Guzmán de Alfarache*, I-III-IX, 315, 22-24)

『これに対して、傲岸で、しみつたれで、感謝の念の薄いような主人には、人が胸襟を開くこともなければ親しみを覚えることもなく、また、恐懼して仕えることもなければ敬愛の情をもってかしくくこともありません。』(澁澤, 1991, 140)

- (265) »Que en los puestos y asientos guarden todos la antigüedad de posesión y no de personas, y que el uno al otro no lo usurpe ni defraude.  
(*Guzmán de Alfarache*, I-III-II, 263, 5-7)

『すべての役職と議席において、皆人の年功ではなく地位の年功を守り、一方が他方から奪ったり詐欺をしたりしないこと。』

- (266) Y es imposible que sea el criado diligente con el señor que no lo amare.  
(*Guzmán de Alfarache*, I-III-II, 316, 3-4)

『すべともかくにも、召使いを愛さないような主人に対して、召使いが懸命に尽くすことなどありえないのです。』(澁澤, 1991, 140-141)

また、主語が不定の不特定の人物である場合、le、loの例はそれぞれ11例、46例あり、そのうち否定文の例はそれぞれ6例、4例あり、総数はloの例よりも少ないが、(267)のような否定文ではleの例のほうが多い。ただし、(268)のようにloが用いられやすいと考えられる動詞ではloが用いられている。

- (267) ; que al hombre pobre ninguno le acomete, vive seguro y lo está en despoblado, sin temor de ladrones que le dañen ni de salteadores que le asalten.  
(*Guzmán de Alfarache*, I-II-VII, 224, 7-9)

『だってそうでしょう、みすばらしい恰好をしている者を襲おうなんて奴はいやしませんから、日々安穩で、人里離れた所にいたところで、泥棒や追いはぎに危害を加えられる気遣いもないんです。』(澁澤, 1991, 118)

- (268) Mucho importa no tenerlo y quien lo tuviere trátelo de manera como si en breve hubiese de ser su amigo. (*Guzmán de Alfarache*, I-II-V, 198, 13-14)

『敵をつくらないことは非常に重要であり、敵がいる人はすぐに友達にならなければならないかのうに彼を扱いなさい。』

一方、肯定文の一般論を表す文脈では、loの例が24例あるのに対し、leの例はわずか3例である。以上のことから、一般論を表す文脈について、特定の動詞および文脈を除いて、否定文ではleが用いられる傾向にあると考えられる。また、一般論を表す文脈においてleが用いられている3例のなかに、条件を表す文脈が含まれている。

- (269) ¿Y cómo queda el hombre discreto, noble, virtuoso, de claros principios, de juicio sosegado, cursado en materias, dueño verdadero de la cosa, que, dejándolo le sin ella, se queda pobre, arrinconado, afligido y por ventura necesitado a hacer lo que no era suyo, por no incurrir en otra cosa peor?

(*Guzmán de Alfarache*, I-II-IV, 183, 16-20)

『人はどうして慎重で、高貴で、高潔で、明確な原則を持ち、穏やかな判断を下し、問題を研究し、それがなければ惨めで、追い詰められ、悩まされ、より悪いことに陥らないようにするために自分のことではないことをさせられる貧者になるのですか?』

このように、dejarでleが用いられているのは同例のみで、その他の例では(270)のように9例でloが用いられている。

- (270) Y dejándolo con este seguro, fuese donde Daraja estaba, que ya con el alboroto de los ministros y sirvientes lo sabía todo y aun de días antes lo había barruntado. (*Guzmán de Alfarache*, I-I-VIII, 123, 2-4)

『このように彼を監禁すると、すでに大臣と使用人の騒動ですべてを知っており、何日も前からそのことを予知していたダラジャがいるところに行きました。』

さらに、表4-16で確認したように、主語が特定の物である場合、le、loの例はそれぞれ14例、12例であり、leの例のほうが多い。しかし、表4-17によると、そのなかで否定文におけるle、loの例はそれぞれ2例、3例であるため、loの割合のほうが上回っている。ただし、後述するように、loが用いられているこれら3例はいずれもloの使用に有利に働く完了アスペクトの例である。

一方、主語が不特定の物である場合には、(271)および(272)のように否定文であるかどうかにかかわらず、全3例でleが用いられている。

- (271) Como al bien ocupado no hay virtud que le falte, al ocioso no hay vicio que no le acompañe. (*Guzmán de Alfarache*, I-II-VI, 205, 22-23)

『とても勤勉な人に欠けている美徳はないように、怠惰な人に付き添わない悪徳はありません。』

- (272) Y con las ansias de la ejecución, procurando alcanzar ver a su querida esposa, cobró aliento y algún esfuerzo, resistiendo animosamente las cosas que podían dañar le. (*Guzmán de Alfarache*, I-I-VIII, 117, 4-6)



『実行することを熱望し、彼の最愛の妻を垣間見ようとして、彼は氣力と少し力を取り戻し、彼に害を及ぼす可能性のあるものに勇気を持って抵抗しました。』

以上のことから、主語が三人称の人称代名詞または固有名詞である場合を除いて、主語が有生物であるか無生物であるかに関係なく、否定文ではleのほうがよく用いられると考えられる。

次に、完了アスペクトの例を考察する。同作品には代名詞化された直接目的語を伴う動詞の例のうち、完了アスペクトの例は111例あり、そのうちle、loの例がそれぞれ24例、87例ある。完了アスペクトにおけるle語法の割合は21.6%であり、全体における割合を下回っており、完了アスペクトでのle語法は出現しにくいと考えられる。以下に、表4-16で確認した主語の有生性別のle、loの例のなかで完了アスペクトにおけるle、loの例の内訳および完了アスペクトにおけるle語法の割合を示した表4-19、さらに主語の有生性別にそれぞれの形態が完了アスペクトにおいて占める割合を示した表4-20を示す。

	主語		完了アスペクト		
			le	lo	%(le)
人	一人称		5	19	20.8%(5/24)
	三人称の人称代名詞 固有名詞		3	22	12%(3/25)
	定	特定	2	20	9.1%(2/22)
		不特定	0	1	0%(0/1)
	不定	特定	0	2	0%(0/2)
		不特定	3	15	16.7%(3/18)
動物	特定		0	1	0%(0/1)
人と物	人: 定、不特定 物: 特定		1	0	100%(1/1)
物	特定		8	5	61.5%(8/13)
	不特定		1	0	100%(1/1)
	文		1	2	33.3%(1/3)
計			24	87	21.6%(24/111)

表4-19 *Guzmán de Alfarache*における完了アスペクト中のle、loの主語の有生性別の内訳とle語法の割合

	主語		完了アスペクトが占める割合	
			le	lo
人	一人称		26.3%(5/19)	38.8%(19/49)
	三人称の人称代名詞 固有名詞		30%(3/10)	37.3%(22/59)
	定	特定	16.7%(2/12)	54.1%(20/37)
		不特定	0%(0/4)	7.7%(1/13)
	不定	特定	0%(0/0)	66.7%(2/3)
		不特定	27.3%(3/11)	36.6%(15/41)
動物	特定		0%(0/0)	50%(1/2)
人と物	人: 定、不特定 物: 特定		100%(1/1)	0%(0/0)
物	特定		57.1%(8/14)	41.7%(5/12)
	不特定		33.3%(1/3)	0%(0/0)
	文		20%(1/5)	100%(2/2)
計			30%(24/80)	37.3%(87/233)

表4-20 *Guzmán de Alfarache*においてle、loが完了アスペクト中で占める主語の有生性別の割合

表4-19によると、主語が人である場合、le語法の割合はいずれの人称においても作品全体における完了アスペクトにおけるle語法の割合である21.6%よりも低い。また、表4-20によると、とくに、主語が定の特定の人物である場合、loの例は半数以上の54.1%を占めている。一方、主語が無生物であるとき、主語が特定または不特定の物である場合にはle語法の割合が高い。ただし、完了アスペクトにおいてle語法が用いられているのは、(273)および(274)のように特定の動詞、または(275)のように特定の文脈に限られている。

(273) Demás que la ira en que ardía **le** ayudara, que semejante coraje acrecienta las fuerzas; (*Guzmán de Alfarache*, I-III-X, 334.25-26)  
『燃えていた怒りが彼を助けた以外に、そのような勇気が力を強めました。』

(274) »Dorado quedó sin sentido de oír esas palabras y fue maravilla poderse tener en pie, según **le** hirieron en el corazón; (*Guzmán de Alfarache*, I-III-X, 339, 13-14)  
『ドリドはそれらの言葉を聞くと、意識を失った。そのような言葉は彼の心を傷つけたので、立っていることができたのは驚きであった。』

(275) Mirábanse el uno al otro, empero él siempre los ojos tristes y ella tristísimos, pensando qué lo pudiera causar, que su vista no **le** hubiera alegrado.  
(*Guzmán de Alfarache*, I-I-VIII, 146, 1-3)

『彼らはお互いを見つめていましたが、彼はいつも悲しそうな目をしていて、彼女は何がそれを引き起こしているのかを考え、とても悲しそうな目をしていた。彼女を見ても彼は喜んでいなかったからです。』

(276) Ella no sabía qué hacer ni cómo poderlo alegrar;

(*Guzmán de Alfarache*, I-I-VIII, 128, 9-10)

『彼女は何をすべきなのか、どうすれば彼を元気づけられるのかも分かりませんでした。』

(273)について、*ayudar*のような「助ける」を意味する動詞では、本研究の他の資料体でも直接目的語として*le*が用いられている傾向にある。また、(274)について、同作品では動詞が*herir*である場合、同例を含む全3例で直接目的語として*le*が用いられている。さらに、(275)および(276)について、主語が無生物である(275)では完了アスペクトでも*le*で表されている一方、主語が有生物である(276)では、不完了アスペクトであるものの、*lo*で表されていることから、主語が無生物である場合、完了アスペクトでも直接目的語として*le*が用いられる傾向にあると考えられる。

さらに、主語が有生物であるか、無生物であるかによって形態が弁別されている動詞においても、アスペクトが完了アスペクトである場合には、*le*が用いられている。

(277) Creyeron todos quedaba mal herido, mas defendióle el almete no haberle hecho gran daño. (*Guzmán de Alfarache*, I-I-VIII, 145, 22-23)

『彼らは皆、彼がひどい怪我をしたと思ったが、兜が彼を守り、大きなダメージを負わなかった。』

(278) Aconteció que, como una vez echase su enemigo mano para él, su criado lo defendió con pérdida del contrario, que lo retiró en cuanto su señor se puso en salvo; (*Guzmán de Alfarache*, I-II-V, 203, 21-23)

『敵が彼に対して剣を鞘から抜くと、彼の使用人は敵を負かして彼を擁護し、主人が無事になるとすぐに彼を撤退させました。』

(279) Fuímonos alargando un poco y, donde me pareció lugar conveniente, metí la mano en el seno y saqué el agnosedí de oro, de cuyo precio estaba yo bien informado, como del que lo había pagado. Satisfizo al platero.

(*Guzmán de Alfarache*, I-II-X, 247, 14-17)

『私たちは少し離れ、都合が良いと思われる場所で手を胸に入れ、私が支払ったため値段をよく知っていた金の神の子羊の像を取り出しました。それは銀細工職人を満足させた。』

(280) Creció su sospecha no me hubiera sucedido alguna desgracia y, apretando mucho por saber de mí, fue necesario satisfacerlo, diciéndole la verdad.

(*Guzmán de Alfarache*, I-III-IX, 322, 11-13)

『しかし、さすがの猊下も、もしや私の身に悪いことでも起こったのではという疑いを強め、なんとしても私のことを知ろうとしましたので、とうとう真実を明かさざるを得なくなりました。』

(澁澤, 1991, 150-151)

(277)および(279)では、主語は無生物であり、直接目的語はleで表されているが、これらの例と同じ動詞であるdefender、satisfacerについて、人が主語である場合、(278)および(280)のようにそれぞれ1例、3例でloが用いられている。これらの例から、これらの動詞では主語が有生物であるか、無生物であるかによって直接目的語の形態が選択されていると考えられる。しかし、上記以外の動詞の完了アスペクトの例では、(281)のように主語が無生物であっても直接目的語にはloが用いられている。

- (281) Muchas cosas pensaba, todas lejos de la cierta, y la que más lo turbó fue sospechar si su jardinero era moro que con cautela hubiera venido a robar a Daraja. (*Guzmán de Alfarache*, I-I-VIII, 122, 25-28)

『彼を最も悩ませたのは、彼の庭師が慎重にダラジャを奪いに来たイスラム教徒ではないかと思っていたことでした。』

また、先述のように、主語が無生物である否定文におけるloの例は、(282)に示すようにいずれも完了アスペクトの例である。

- (282) »Con esto se ausentó de Roma, pareciéndole que, sin su Clorinia, patria ni vida pudieran consolarlo. (*Guzmán de Alfarache*, I-III-X, 342.15-16)

『これで彼はローマを去りました彼のクロロニアがいなければ、国も暮らしも彼を慰めることができないように思われたのです。』

さらに、同作品には主語が文を表す名詞句である場合、次に示す2例では直接目的語としてloが用いられているが、いずれもアスペクトは完了アスペクトである。

- (283) Por otra parte llegó un destripaterrones y diole con una tranca de puerta en un hombro, que lo hizo arrodillar. (*Guzmán de Alfarache*, I, I, VIII, 150, 11-13)

『一方、木こりが到着し、ドアを閉めるための柱で彼の肩を殴り、彼をひざまずかせました。』

- (284) »Ozmín quedó tan triste de ver al descubierto la instancia que en su daño se hacía, que casi salía de juicio con el celo. De manera lo apretó, que de allí adelante no se le pudo más ver el rostro alegre, pareciéndole lo imposible posible. (*Guzmán de Alfarache*, I-I-VIII, 127, 31-34)

『オズミンは懇願が彼にとって損害になっていることが明らかになったとわかってとても悲しかったので、彼は嫉妬して正気を失いかけていた。そのように彼を苦しめたので、それ以降、彼の幸せそうな顔を見ることができなくなり、彼には可能なことが不可能であるように見えました。』

(284)の主語は、直前の文に示されているように、彼が願い出たことがかえって彼の損害になってしまった状況に至ったことである。これらの例から、主語が無生物かつアスペク

トが完了アスペクトである場合、基本的にはloが用いられるが、特定の動詞および文脈ではleが用いられると考えられる。

以上のことから、完了アスペクトではle語法の割合は全体における割合を下回り、とくに主語が人である場合、その傾向は顕著にみられるといえる。一方、主語が無生物である場合、特定の文脈ではleが用いられているが、それ以外の文脈ではloが用いられている。したがって、主語の有生性に関係なく、完了アスペクトではloが用いられやすいと考えられる。

また、複数形について、le語法の例、つまりlesが用いられている例がみられるのは、(285)から(287)に示すようにayudarやservir、acometerのような特定の動詞である場合、または(288)および(289)のように、主語が不特定の無生物または文を表す名詞句である場合のみである。

- (285) Demás que no se expenden ya las haciendas con los virtuosos, antes con otros tales que **les** ayudan a pecar, (*Guzmán de Alfarache*, I-I-II, 82, 19-21)

『さらに、美德のある人々ではなく、むしろ彼らが罪を犯すのを助けるような他の人たちが財産は費やされるからです』

- (286) Los manjares que gustaban, alzábamos el plato; servíamos **les** con salado, acedo y mal sazonado. (*Guzmán de Alfarache*, I-III-X, 327, 7-8)

『私たちは彼らが好きな料理の皿を片付けました。私たちは彼らに塩辛く、酸っぱく、まずいものを提供しました。』

- (287) Esto le llegó con la cólera en tal desesperación que estuvo determinado de acometer **les**, dándoles caza, si no le aguardaran y, si se defendieran, matarlos.

(*Guzmán de Alfarache*, I-III-X, 334, 21-24)

『このことは彼に非常に絶望的な怒りをもたらしたので、彼を待ち受けない場合、彼らを捕まえ、彼らに襲い掛かり、彼らが防御するならば彼らを殺そうと決心した。』

- (288) Son pícaros y no me maravillo, pues cualquier bajeza **les** entalla y se hizo a su medida, como a escoria de los hombres.

(*Guzmán de Alfarache*, I-II-VII, 217, 26-28)

『そもそもがピカロであってみれば、彼らが悪習に溺れたところで別に驚くにはあたらないからです。まして、この世のありとあらゆる俗悪野卑は、人間の屑としてのピカロにいかにも似つかわしいものであり、』(澁澤, 1991, 108)

- (289) La causa es, amigo, que son azotes de Dios, con que temporalmente los castiga en la parte que más les duele, demás de lo que para después **les** aguarda.

(*Guzmán de Alfarache*, I-II-III, 181, 1-3)

『その理由は、友よ、それらが神の鞭であり、それでもって後で彼らを待っていることに加えて、最も痛いと感じる部分に神が一時的に彼らを罰するからです。』

動詞がacometerである場合、(287)のように完了アスペクトの例を含む全3例でlesが用いられている。ただし、servirについて、同作品において単数形ではleが用いられていることを確認したが、複数形では(286)のようにlesが用いられている例も(290)のようにlosが用いられている例もみられる。

- (290) Hice más de lo que pude: humilleme, comedime a servirlos, meterles las mulas en la caballeriza y entrar la ropa en el aposento.

(*Guzmán de Alfarache*, I-II-I, 164, 16-18)

『私はできるよりも多くのことをしました。謙虚になり、彼らに仕えるように提供し、彼らのロバを馬小屋に入れ、彼らの服を部屋に入れました。』

また、(288)と同様、動詞がentallarである(291)では、主語が人であり、直接目的語はlosで表されている。

- (291) Estropeolo, como lo hacen muchos de todas las naciones en aquellas partes, que de tiernos los tuercen y quiebran como si fueran de cera, volviéndolos a entallar de nuevo, según su antojo, formando varias monstruosidades de ellos para dar más lástima. (*Guzmán de Alfarache*, I, III, V, 280, 20-24)

『彼はその地のすべての国の多くの人々がするように自分の息子をだめにした。子どもたちは柔らかいため、まるで蠟でできているかのように彼らをねじって、壊し、自分の気まぐれに従って彼らを再び彫り、より多くの哀れみを与えるために彼らの様々な怪物を形成する。』

ここでは、指示対象が女性の動物である例を考察する。同主語の場合、次の1例でのみleが用いられている。

- (292) Toquele con la rodilla en el hocico; alzó la cabeza, dándome con ella en los míos una gran cabezada (*Guzmán de Alfarache*, I-II-VIII, 235, 15-17)

『その瞬間、私の膝が彼女の鼻面に触れたため、驚いた彼女が不意に首をあげたものですから、それが頭突きとなって私の顔面をしたたかに打ちすえたのです。』(澁澤, 1991, 138)

同例のleの指示対象はuna borrica (ロバ)であり、主語であるGuzmánは意図的にロバの鼻面に膝を当てたわけではない、つまり非意図的に触れてしまった場面が描かれている。先述のように、同作品では指示対象が男性や複数である場合においても、主語が無生物である場合、つまり主語が意図的に行動していない場合、le語法が用いられる傾向にあることから、行為が非意図的である場合、leが用いられる傾向にあると考えられる。

最後に、指示対象が物の男性単数である例を考察する。

(293) Del mío me llega al alma si hallo una hormiga que **le** dañe o pájaro que **le** pique, porque es mío. (*Guzmán de Alfarache*, I-III-III, 274, 32-34)

『私の木に関しては、それを傷つけるアリやそれを囓む鳥を見つけると、私の琴線に触れます。なぜなら、私のものであるからです。』

同例は同作品でわずか3例のみみられる物の男性単数のle語法の例のうちの2例であり、主語は不特定の動物である。先述のように、指示対象が人の男性単数である例において、主語が不特定の無生物である場合、le語法の例のみみられることから、主語が不特定である場合、le語法がみられやすいため、(293)ではleが用いられていると考えられる。

以上のことから、同作品における形態の選択基準について他動性の各項目と関連して以下のことがいえると思われる。

(1) 意図性について、主語が無生物である場合、le語法の割合のほうが高い。また、指示対象が動物の女性である場合、le語法の割合は低いにもかかわらず、非意図的行為を表す場合、同指示対象の直接目的語としてleが用いられている例があることから、意図性は形態の選択に影響していると考えられる。

(2) 主語の有生性について、主語が無生物である場合のみle語法の割合が高い。また、一般論を表す文脈では基本的にloが用いられている。したがって、主語の有生性が低い場合、形態の選択に影響していると考えられる。

(3) 目的語の特定性について、同項目が形態の選択に影響していると考えられる例はみられない。

(4) 直接目的語の受ける影響および動性について、特定の動詞では文脈を問わずleまたはloがもっぱら用いられていることから、これらの項目は形態の選択に影響していると考えられる。

(5) 肯定性について、主語が定の特定の人物である場合を除いて、否定文ではle語法の割合が高い。したがって、否定文であることはle語法の使用を促していると考えられる。

(6) 法について、反実仮想を表す文脈ではleが用いられており、命令法ではloが用いられていることから、法もまた形態の選択にまったく影響していないわけではないと考えられる。

(7) アスペクトについて、完了アスペクトでは主語の有生性と特定性に関係なく、loが用いられている例が多い。したがって、完了アスペクトではloが用いられやすいと考えられる。

(8) 話者の語用論的評価について、指示対象がustedである場合、必ずleで表されていることから、同項目もまた、形態の選択に影響していると考えられる。

また、主語が無生物である場合、leとloの選択は以下のようになされていると考えられる。同主語では基本的にleが用いられるが、特定性の文脈および完了アスペクトではloが用いられる。ただし、完了アスペクトでは必ずしもloが用いられるわけではなく、le語法がよくみられる特定の動詞および文脈ではleが用いられている。

次に、*Soledades*の例を考察する。3.3.2.でも確認したように、同作品では指示対象が人の男性単数である場合、次に示す1例でのみle語法がみられる。

- (294) mientras de su barraca el extranjero  
dulcemente salía despedido  
a la barquilla, donde **le** esperaban  
a un remo cada joven ofrecido. (*Soledades*, II, 682-685)  
『そのころ旅人はその苫屋から  
優しい別れにおくられて小舟へと  
出て行った、そこには各々の若者が  
一つの櫂を手に彼を待っていた。』(吉田, 1999, 101)

同例においてleが用いられている理由を明らかにすることは簡単ではない。なぜなら、同例と主語および直接目的語の指示対象が同じ例はほかになく、主語の人物と直接目的語の人物の関係性によることを証明することはできないからである。ただし、(295)のように主語が無生物である例では(294)と直接目的語の指示対象が同じ人物はloで表されていることから、直接目的語の指示対象の性質によるものではないと考えられる。



- (295) Besa la arena, y de la rota nave  
aquella parte poca  
que lo expuso en la playa dio a la roca: (*Soledades*, I, 29-31)

『砂にくちづけ、そして壊れた船の

あのわずかな部分

彼を浜辺に運んだものを岩に与えた。』(吉田, 1999, 8-9)

また、このように主語が無生物である場合、同例を含む6例でloが用いられていることから、同作品では主語の有生性による形態の選択はなされていないと考えられる。

さらに、(294)と同様に動詞esperarが代名詞化された三人称の直接目的語を伴う他の例はないが、同例と同様に線過去で表現された過去において持続的におこなわれた行為が表されている文脈では直接目的語にloが用いられている。

- (296) Con gusto el joven y atención lo oía,  
cuando torrente de armas y de perros,  
[...] tierno discurso y dulce compañía  
dejar hizo al serrano, (*Soledades*, I, 222-227)

『心ひかれて若者は注意深く聴きいていた、

その時武具の響きと犬の吠え声の奔流が

(省略)心にしみる物語とところよい案内を

山びとに止めさせ、』(吉田, 1999, 19)

したがって、同作品における形態の選択については、直接目的語への物理的变化を与えず、ある程度持続する行為を表す動詞である場合に不完了アスペクトではleが用いられる可能性があるとしか述べることができない。このように、主語の有生性による形態の選択はなされていないにもかかわらず、動詞の性質によると考えられる形態の選択がみられることは他の作品における形態の選択方法とは異なる。

続いて、*El sombrero de tres picos*の例を考察する。動詞がayudarである場合、直接目的語はleで表されている。

- (297) Yo le ayudaré a usted a aparejar la bestia.  
(*El sombrero de tres picos*, XV, 54, 28-29)  
『俺らもあんたの驢馬の支<sup>43</sup>度するのを手傳ふだからね。』(会田, 2008, 77)

以下に示すseguirの例では、(298)および(299)のように未実現の行為を表す文脈では

<sup>43</sup> 本文では「支」の旧字体を使用。

le、(300)および(301)のようにすでに実行済みまたは実行中の行為を表す文脈ではloが用いられている。

- (298) ¡Te he dicho que no salgas! -añadió luego con dureza, viendo que la obstinada molinera quería seguirle. (*El sombrero de tres picos*, XV, 52, 18-20)  
『—出ちやいけないって言つてゐるぢやないか!』—彼は強情者のお神さんがついて来さうにするのを見てどぎつくつけ加へた。』(会田, 2008, 73)

- (299) (adonde tan pronto había de seguirle el tío Lucas con sombrero de tres picos y capa de grana), (*El sombrero de tres picos*, XXII, 77, 34-36)  
『(しかもこの時ルーカス父つあんも三角帽子に緋羅紗の外套で、彼の直ぐ後を矢張り市に向つてみたのであるが、)』(会田, 2008, 112)

- (300) Por cierto que Garduña, que lo seguía a alguna distancia, se ha sentado en la ramblilla a la sombra... (*El sombrero de tres picos*, 34, 10-12)  
『—きつと一寸後からお伴して来たガルドゥーニャは川岸の木蔭に坐つてゐるんだわ……』  
(会田, 2008, 45)

- (301) Toñuelo lo siguió, canturriando una copla entre dientes.  
(*El sombrero de tres picos*, XV, 55, 33)  
『トニェロは口の中で小歌をくちずさみながら彼の後に従つた。』(会田, 2008, 79)

- (302) Tengo orden de llevarme a su marido de usted nada más, y de impedir que usted lo siga. (*El sombrero de tres picos*, XV, 55, 10-12)  
『俺らはあんたの御亭主だけ連れて来い、あんたがついて来たら留めろと命ぜられてるだよ。』  
(会田, 2008, 78)

直接目的語にleが用いられている(298)および(299)の2例では、主語である人物はどちらも付いて行こうとしている、つまりまだ実行していない行為が表されているが、直接目的語にloが用いられている3例のなかで、(300)および(301)の2例では実際に実行中の行為またはすでに実行した行為が表されている。ただし、もうひとつの例である(302)では実行していない行為であるにもかかわらず、loが用いられているが、これは後述するように、同作品では直接目的語である場合、leで表されることもあるustedが主語であるためではないかと思われる。

また、主語が無生物である場合、(303)および(304)のようにleが用いられる例と(305)のようにloが用いられている例がみられる。

- (303) ¿Qué le aguardaba dentro de su casa? (*El sombrero de tres picos*, XX, 65, 8-9)  
『一體家の中に彼を待つてゐるものは何であらう?』(会田, 2008, 90)

- (304) La duda, o sea la esperanza (que para el caso es lo mismo), volvió todavía a mortificarle un momento... (*El sombrero de tres picos*, XX, 68, 5-7)

『疑惑或は希望が(この場合どちらでも同じことであるが,)ほんの一瞬彼を引留めたのである……。』(会田, 2008, 96)

- (305) El rugido de la señá Frasquita y su aparición en la escena no habían podido menos de sobresaltarlo. (*El sombrero de tres picos*, XXXI, 94, 19-21)

『フラスキータお神さんの唸り聲と、この場面へ登場したことは、何と言つても彼を極度に脅かさざるを得ない。』(会田, 2008, 136)

これらの例から、主語が有生物であるか無生物であるかによる形態の選択は完全なかたちではなされていないと考えられる。

次に、指示対象がustedである例を考察する。同指示対象は(306)のように必ずleで表されるわけではなく、(307)のようにloで表されている例もみられる。

- (306) ¡Márchese usted por donde ha venido si no quiere que yo le arroje otra vez al agua con mis propias manos! (*El sombrero de tres picos*, XXI, 72, 8-9)

『さあ、貴方、今はいつていらつした所から出て下さい！それともお望みならもう一遍水の中へ抛り込んで差上げませうか！』(会田, 2008, 102-103)

- (307) -¿No le digo a usted que lo quiero ya? (*El sombrero de tres picos*, XI, 37, 5)

『先程申し上げたぢやございませんか、私の好きなことは？』(会田, 2008, 49)

また、指示対象が女性である場合、(308)に示される1例でのみleが用いられている。

- (308) ¿Qué le trae a usted por aquí? (*El sombrero de tres picos*, XXIV, 79, 12-13)

『どうして此處へやつて來たんだね？』(会田, 2008, 115)

- (309) Sígueme, Toñuelo, y usted, señá Frasquita, espérese a la puerta hasta que yo la llame. (*El sombrero de tres picos*, XXVII, 85, 4-5)

『トニュエロ、貴様はわしについてこい。それからあんた、フラスキータお神さんはわしが呼ぶまで門で待つてゐて下さい。』(会田, 2008, 123)

- (310) ¿No oye usted que soy yo? ¿Quiere usted que la ahorque también?  
(*El sombrero de tres picos*, XXVIII, 89, 7-8)

『わしだつてことが分らんのか？貴様も絞首臺に行きたいのか？』(会田, 2008, 129)

(308)のleの指示対象はustedで扱われている女性Frasquitaである。同様に、ustedが直接目的語に代名詞化された他の2例(309)および(310)では、laが用いられている。また、(308)および(309)の話者と直接目的語の指示対象は同じである。ただし、(308)の主語は無生物であるが、直接目的語がlaで表された他の2例の主語は一人称であり、同例はleが用いられ

やすい文脈である。また、4.4.3.2.2.4.においてle語法の割合が高いle語法圏出身の作者の作品のひとつである*El sí de las niñas*の例でも確認したように、主語が有生性の低い不特定の人物である場合にのみ、指示対象がustedである女性の直接目的語としてleが用いられている。さらに、主語が無生物である場合、女性の直接目的語としてleが用いられている例が他の作品でもみられることから、(308)では主語が無生物であるために、le語法が用いられている可能性が高いと考えられる。

以上のことから、同作品でも他動性が低い文脈ではle語法が用いられる傾向にあると思われる。

最後に、*Platero y yo*の例を考察する。指示対象に対する愛情を表す場合、leが用いられている例が存在する。

- (311) **Le** obligué, entonces, con un cariñoso imperio, y Platero, de un tirón, sacó carretilla y rucio del atolladero, y les subió la cuesta.

(*Platero y yo*, XXXVII, 126, 13-15)

『それから、やさしい命令口調で掛け声をかけた。するとプラテローは、一回ぐいと引っぱただけで、荷車と驢馬をぬかるみから曳き出し、そのままいっしょに斜面をのぼってやった』  
(長南, 2013, 88)

- (312) Monté en Platero, y, obligándolo **lo** con las piernas, subimos, en un agudo trote, al pinar. (*Platero y yo*, XXXII, 121, 13-14)

『わたしはプラテローの背中にまたがると、脚で脇腹をしめつけ、荒あらしい早足で松林へむかっ  
てのぼって行った。』(長南, 2013, 79)

(311)および(312)の動詞はともにobligarであり、両例の主語および直接目的語の指示対象も同じである。(311)では主語である私(作者)が直接目的語であるPlateroにやさしい命令口調で掛け声をかけているのに対し、(312)ではそのような表現はない。同様に、主語および直接目的語が同じである例(313)においても指示対象に対する愛情が表されていると考えられる。

- (313) Yo **le** aguardaba en la puerta, echado en el quicio de cal y envuelto en la tibia fragancia de los heliotropos. (*Platero y yo*, LXXVIII, 176, 3-5)

『わたしは入り口で待っていた—石灰を白く塗った柱にもたれ、足を投げ出し、ヘリオトロップの生あたたかな香りにつつまれて。』(長南, 2013, 179)

- (314) Allí **lo** esperaban cuatro hombres, cruzados los velludos brazos sobre las camisetas de colores. (*Platero y yo*, XV, 99, 14-16)

『そこには四人の男が毛むくじゃらの腕を、派手なシャツの上に組んで待っていた。』  
(長南, 2013, 179)

(314)のloの指示対象はel potroであり、直接目的語である子馬を去勢しようと四人の男が待ち構えている場面が表されている。

また、(315)に示されるように現実と異なる事柄を表している文脈ではleが用いられている。

- (315) Y trota Platero, cuesta arriba, encogida la grupa cual si alguien le fuese a alcanzar, sintiendo ya la tibieza suave, que parece que nunca llega, del pueblo que se acerca... (*Platero y yo*, V, 89, 14-16)

『そしてプラテロは、なにものかに追いつがられるかのように、尻をちいさくすぼめて、坂道をかけのぼる。』(長南, 2013, 18-19)

同例は、実際にPlateroは何者かに追われているわけではないが、まるでそうであるかのように坂道をかけのぼるという現実と反する文脈であり、直接目的語にはleが用いられている。

さらに、動詞の意味によって形態が使い分けられている例がみられる。

- (316) Antes de volverle a ver en él mismo, Platero, creí ver este paraje, encanto de mi niñez, en un cuadro de Courbet y en otro de Bocklin.  
(*Platero y yo*, CXXVIII, 227, 13-15)

『さて、プラテロ。わたしはその男の姿の中に昔のあの男のことをふたたび思い出すよりも前に、こどものころのわたしを夢中にさせたこの場所の風景を、クルーベの画か、ベックリーンの画の中で、どうも見たような気がしたのだよ。』(長南, 2013, 287)

- (317) En esta gavia es donde se murió Pinito y donde estuvo dos días sin que lo viera nadie. (*Platero y yo*, XCIX, 198, 10-11)

『ピニートが死んで、二日間も見つからないでいたのは、この掘り割りの中だったのだよ。』(長南, 2013, 222)

(316)および(317)の動詞はともにverであるが、意味は異なる。(317)のように実際に目で見るという意味では、直接目的語としてloが用いられているが、(316)のように見いだすという意味では、直接目的語としてleが用いられている。つまり、(316)では非物理的な意味をもつために、leで表されていると考えられる。

加えて、主語が無生物である場合、直接目的語としてloが用いられている。

- (318) Parece que la agonía lo ha sembrado en el suelo...  
(*Platero y yo*, CXIII, 212, 17-18)

『苦しみのために、地面に根っ子を生やしたかのようだ……』(長南, 2013, 252)

同例では主語はla agonía、つまり無生物である。主語が無生物である場合、直接目的語としてleが用いられている例は同作品にはみられない。

以上のことから、同作品では直接目的語の受ける影響が小さい場合、leが用いられる傾向にあると考えられる。

#### 4.4.3.3.2. le語法の割合が高い作品

##### 4.4.3.3.2.1. はじめに

本項では、人の男性単数のle語法の割合が75%を超える非le語法圏出身の作者による作品(*El burlador de Sevilla*、*El diablo cojuelo*、*Raquel*、*Cartas marruecas*、*El estudiante de Salamanca*、*El trovador*)を考察する。これら6作品のなかで*Raquel*および*El trovador*では指示対象が人の男性単数である場合、全例でle語法が用いられている。

##### 4.4.3.3.2.2. loが用いられている例

ここでは、指示対象が人の男性単数である場合にloが直接目的語として用いられている例を考察する。同指示対象におけるle語法の割合が高いle語法圏出身の作者による作品において同指示対象にloが用いられている例と同様に、非le語法圏出身の作者による作品でもまた、直接目的語が物のように扱われている例においてloが用いられている。

- (319) —El Príncipe Nuestro Señor —dijo don Cleofás—, que pienso que **le** crió Dios en la turquesa de los ángeles. (*El diablo cojuelo*, VIII, 204, 16-17)  
『「私たちの主の王子です。」とドン・クレオファスは言った。「神が彼を天使の型に入れて育てたと思います。」』

- (320) , que tiene talle de comérselo antes que **criallo**, (*El diablo cojuelo*, II, 102, 1-2)  
『(隣に住む男は)彼を育てるというよりもむしろ彼を食べてしまおうとしています。』

(319)および(320)の動詞はcriarであるが、直接目的語としてそれぞれ異なる形態le、loが用いられている。(319)ではleで表された人物は、育てられる対象である人として扱われている。一方、(320)のloの指示対象は、直前のcomérseloのloの指示対象と同じである。つまり、指示対象は人ではあるものの、同時に食べようとされている対象であり、物のように扱われている。

また、同作品では同じ動詞llevarで異なる形態leとloが用いられている例がみられる。

- (321) —Vuelva en su juicio —dijo el güéspedes—, que aquí no hay almidones ni toda esa tropelía de disparates que ha referido, y mucho mejor fuera llevarle a casa del Nuncio, (*El diablo cojuelo*, IV, 127, 3-6)

『「正気に戻ってください」と宿主は言いました。「ここには糊やあなたが言ったとんちんかんなものはすべてありません。教皇大使の家にあなたを連れて行ったほうがはるかに良かったです。』

- (322) ¡Por vida de la Marquesa, que no lo ha de llevar!

(*El diablo cojuelo*, IX, 222, 22-23)

『侯爵夫人の命にかけて、彼を連れて行くべきではありません！』

(321)では、直接目的語の指示対象である人物は強制的に連れて行かれているわけではなく、leで表されているが、(322)では捕らえて連れて行くという文脈においてloで表されている。

次に、他動性をもっとも高いとされる動詞であるmatarの例を考察する。4.3.3.2.2.2.において、動詞がmatarである場合、直接目的語がloで表されている例がle語法圏出身者の複数の作品でもみられることが確認されたが、非le語法圏の作品でもまた、同じことがいえると考えられる。

- (323) —¡Juro a Dios —dijo don Cleofás— que lo he de ir a matar antes que se apee, y a cortalle las piernas a doña Tomasa! (*El diablo cojuelo*, X, 225, 10-12)

『「私は彼が下る前に彼を殺し、トマサ夫人の足を切り落とすことを神に誓います！」とドン・クレオファスは言った。』

- (324) Me alegraré que lo mate. (*El estudiante de Salamanca*, 121, 692)

『ドン・フェリックスを倒してくれりや言うことなしさ。』(佐竹, 2012, 66)

(323)は、同作品において動詞matarが人の男性単数を指示対象とする代名詞化された直接目的語を伴う唯一の例であり、loが用いられている。また、(324)は*El estudiante de Salamanca*において唯一、指示対象が人の男性単数である直接目的語としてloが用いられている例である。また、同一指示対象の命令法の例では直接目的語はleで表されている。したがって、同作品では法による形態の選択はなされていないが、動詞が直接目的語への物理的変化をもたらすmatarである場合、直接目的語はloで表されている。しかし、指示対象が人の男性単数である場合、全例でle語法が用いられている作品では、同動詞の直接目的語としてleが用いられている。

- (325) ¡Matadle! (*El burlador de Sevilla*, II, 255, 1662)

『そいつの命を奪ってちょうだい。』(佐竹, 2014, 73)

- (326) Ahora se acaba de hallar  
su cadáver junto al muro,  
que de la noche en lo oscuro  
le debieron de matar. (*El trovador*, II, I, 18, 259-262)  
『今、城壁のところでご遺体が見つかったばかりです。夜の暗やみに紛れて殺害を計ったに  
違いありません。』(稲本, 2017, 29)

また、*Cartas marruecas*は指示対象が人の男性単数である場合、全例でle語法が用いら  
れている作品ではないが、次に示す(327)および(328)ように、動詞が他の作品においてloが  
用いられる傾向にあるmatarやtenerである場合でも、直接目的語はleで表されている。

- (327) ; pero alguno le ha de matar, aunque no se valgan más que del cansancio que  
ha de causar el manejo de las armas, (*Cartas marruecas*, IX, 183, 20-22)  
『その武器を用いること、暑さや土埃、全方位に広がる敵の軍勢に対する立ち回りからくる疲労に  
よってかよらずか、いずれは誰かが彼の命を奪うだろう。』(富田, 2017, 48)
- (328) Con haber dejado las deudas en el estado que las halló, sin cobrar ni pagar,  
cualquiera le hubiera tenido por equitativo, todos hubieran alabado su  
benignidad, pues, teniendo en su mano el arbitrio de ser juez y parte, parecería  
suficiente moderación la de no cobrar lo que podía.  
(*Cartas marruecas*, LXXIII, 318.24-319.2)  
『国家の内にあった債務を取り立てることも支払うこともせずにいたのであれば、誰しものが彼を公  
平と考え、その手に判事と検察の裁量を持ちながら、取れるものを取らなかったという節度によ  
って、皆がその寛大を称賛したことでしょう。』(富田, 2017, 213)

しかしながら、同作品では動詞がmirarである場合、(329)のように直接目的語としてle  
が用いられている例もあるが、同例以外の3例では(330)のようにloが用いられている。

- (329) »-Para que nadie se engañe -respondí yo, mirándole cara a cara-,  
(*Cartas marruecas*, LXXXII, 180, 13-14)  
『「誰にも誤解のないようにするためですよ」面と向かって私は彼に答えた。』(富田, 2017, 44)
- (330) ; y que el ser buen ciudadano es una verdadera obligación de las que contrae el  
hombre al entrar en la república, si quiere que ésta le estime, y aun más si  
quiere que no lo mire como a extraño. (*Cartas marruecas*, LXX, 316, 15-18)  
『共和国に足を踏み入れるに際し、もしそこで尊敬を受けたいのであれば、さらには異邦人と見ら  
れたくないのであれば、数多くの負うべき義務の中にあって、よき市民であることこそが真のそ  
れである。』(富田, 2017, 210)

(330)のmirarの主語はla república、つまり共和国の人々であり、直接目的語el hombre  
はloで表されている。しかし、同例と主語と直接目的語の指示対象が同じ直前の文の動詞



estimarでは、直接目的語はleで表されている。したがって、動詞がmirarである場合、直接目的語にはloが用いられる傾向にあると考えられる。

#### 4.4.3.3.2.3. 人の男性複数形のle語法

本項では、非le語法圏出身者の作品のなかで人の男性単数のle語法の割合が高い6作品において男性複数形のle語法がみられる例を考察する。これら6作品のなかで、主語が無生物である場合に男性複数形のle語法がみられるのは、*El diablo cojuelo*、*Raquel*、*Cartas marruecas*、*El trovador*の4作品である。*El trovador*では主語が無生物である場合、le語法の例のみみられるが、同例は(331)に示すように使役動詞hacerの例であり、(332)のようにlosが用いられているほかの3例では主語は人である。

- (331) ¡Y esto les hacía reír!... (*El trovador*, V, VI, 68, 12-13)  
『それで奴らが笑いよったのじゃ!……』(稲本, 2017, 113)

- (332) Adiós, don Lope; esta noche los castigaremos si se atreven.  
(*El trovador*, II, IV, 24, 32)  
『失礼する、ドン・ロペ。今夜やる気なら天罰を食らわせてやる。』(稲本, 2017, 40)

(331)の主語estoは、マンリケの祖母が処刑にあっている光景を指しており、無生物である。しかし、*El trovar*以外の3作品では、次に示すように主語が無生物である場合、必ずしもle語法がみられるわけではない。

- (333) aquellos que en sangrientos caracteres  
de heridas por su nombre recibidas  
llevan la ejecutoria de sus hechos  
sobre el noble papel del pecho escrita,  
ni temen amenazas, ni calumnias,  
por más que les combata la malicia. (*Raquel*, I, 179-184)  
『その名誉ゆえに、血潮に塗れた傷という刻印を受けることで彼らは貴族としての証明をその胸に刻まれたのであり、いかなる悪意と対峙するとも誹謗や脅迫に物怖じすることはありえない。』  
(富田, 2022, 331)

- (334) Los leales  
jamás acciones de su Rey critican,  
aun cuando el desacierto los disculpe. (*Raquel*, I, 73-75)  
『失策であるという言い訳が立つ時でさえ、忠臣はけっして王のおこないを批判してはならない。』  
(富田, 2022, 328)

- (335) Los pueblos que, por su genio inventivo, industria mecánica y sobra de habitantes, han influido en las costumbres de sus vecinos, no sólo lo aprueban, sino que les predicán el lujo y los empobrecen, persuadiéndoles ser útil lo que les deja sin dinero.

(*Cartas marruecas*, XLI, 245.32-246.3)

『人々はその創意工夫の才、機械産業、人口の過剰によって隣人の習慣に影響を与え、贅沢を認めるばかりでなく、それを公に訴え、隣人を貧しくするとともに、彼らを文無しにするものの有用性を説きます。』(富田, 2017, 123)

- (336) Hablo sólo de las desgracias que han experimentado en España los sabios inocentes de cosas que los hagan merecedores de tal castigo, y que sólo se le han adquirido en fuerza de la constelación que acabo de referirte,

(*Cartas marruecas*, LXXXIII, 345, 26-30)

『わたしはただ、罰を受けるに値するようなことからは無縁の賢人たちがスペインにおいて経験することになった不幸についてのみ、そしてわたしが先ほど述べ、この考察を形作ることになった、星の位置が彼らにもたらした不幸についてのみ語っているのです。』(富田, 2017, 244)

- (337) Las naciones que no tienen esta ventaja natural gritan contra la introducción de cuanto en lo exterior choca a su sencillez y traje, y en lo interior los hace pobres. (*Cartas marruecas*, XLI, 246, 3-6)

『生まれながらにこの性質を持たない国々には、外面においてはその簡素さと身なりに変化をもたらしつつも内面を貧しくするものの流入に声を大きくして反対します。』(富田, 2017, 123)

*Raquel*について、(333)および(334)の主語はそれぞれ、la malicia(悪意)、el desacierto(失策)、つまり物であるが、直接目的語としてles、losという異なる形態が用いられている。また、*Cartas marruecas*について、主語が無生物である場合、lesとlosの例はそれぞれ8例、12例あり、3.3.2.で確認した作品全体における同指示対象のle語法の割合を上回っている。(335)について、同例のlesの指示対象は少し前のempobrecerの直接目的語losと同一であるが、empobrecerの主語はlos pueblos(国民)、つまり人であるのに対し、lesの動詞であるdejarの主語はlo que、つまり中性の代名詞で表された物である。さらに、(336)および(337)について、これら2例の主語はそれぞれcosas、cuanto、つまり特定性の低い物であり、これは無生物のなかでも有生性階層において低い位置を占める名詞句である。同作品ではこれらの例と同様、動詞hacerが直接目的語とその叙述補語を伴っている場合、全6例でlosが用いられていることから、(336)および(337)においてlosが用いられていることは、動詞が直接目的語とその叙述補語を伴うhacerであるためであると考えられる。したがって、とくに主語が特定性の低い物である場合、le語法、つまりlesが用いられる傾向にあると思われる。

ちなみに、同作品では指示対象が人の男性単数である場合について、(338)に示されるように主語が無生物である場合、全22例でleが用いられている。

- (338) Si hubiese contraído la naturaleza, al tiempo de producirle, alguna obligación de mantener<sup>[le]</sup> siempre en la edad florida, moriría sin haber dejado de gozar continuos placeres y felicidades. (*Cartas marruecas*, LXXXII, 344, 12-15)

『もしも自然が彼を生み出す際に、彼をつねにその青春時代に保っておくという契約を結んでいたものであったなら、彼はその理性を用いることなど一度もなく、表面的な快樂と幸福に恍惚として死んでいったらう。』(富田, 2017, 243)

- (339) Oficiales de distinción y experiencia, soldados veteranos, armas bien acondicionadas, banderas que daban muestras de las balas que habían recibido, y todo lo restante del aparato, verdaderamente guerrero, daba la idea más alta del poder de quien lo mantenía. (*Cartas marruecas*, XXXVII, 241, 2-6)

『気品があり経験も豊かな将校たち、練達の兵士たち、よく手入れされた装備、それが受けた銃弾の痕を示す戦旗、その他これに付随した真に戦闘に関わるすべてが、これを従える人物の権力のいと高きことを告げ知らせておりました。』(富田, 2017, 243)

(338)ではmantenerの主語はla naturaleza、つまり物であり、直接目的語はleで表されている。一方、(339)では同動詞の主語はquien、つまり人であり、直接目的語はloで表されている。

続いて、同作品における否定文の例を考察する。

- (340) Se piden cuenta del poco tiempo que han dejado de aprovechar en seguir por entre precipicios el fantasma de la ambición que les guía.

(*Cartas marruecas*, LI, 267, 11-13)

『彼らを導いてきた野心の亡霊を断崖絶壁を縫って追いかけるために費やすことを放棄したわずかな時間についてさえ、彼らは釈明を求める。』(富田, 2017, 149-150)

- (341) No hay disciplina militar, ni armas, ni ardides, ni método que infunda al soldado fuerzas tan invencibles y de efecto tan conocido como la idea de que los acompaña un esfuerzo sobrenatural y que los guía un caudillo bajado del cielo;

(*Cartas marruecas*, LXXXVII, 351, 31-35)

『超自然の努力が味方し、天より降臨した首領が指揮を執ってくれるという考えほど効果目覚ましく、不撓不屈の力を兵士たちに注ぎ込む軍規も武具も計略も方法もありはしない。』

(富田, 2017, 251)

(340)および(341)の動詞はともにguiarであるが、(340)は否定文の例であり、直接目的語がlesで表されているのに対し、(341)は肯定文の例であり、直接目的語はlosで表されている。また、作品全体におけるles、losの例はそれぞれ21例、49例あるのに対し、否定文の例はそれぞれ7例、5例ある。つまり、全体ではlosの例のほうが多いが、否定文ではlesの例のほうが多い。したがって、同作品について、否定文ではle語法が用いられる傾向にあると考えられる。

#### 4.4.3.3.2.4. 物のle語法

最後に、物のle語法の例を考察する。まず、*Cartas marruecas*の例を示す。

- (342) »Tengo, como vuestra merced sabe, don Joaquín, un tratado en vísperas de concluir<sup>le</sup> contra el archicrítico maestro Feijoo,  
(*Cartas marruecas*, LXVII, 303, 17-19)  
『「ドン・ホアキン、君も知るようにわたしは大批評家フェイホー先生に反駁する論文を間もなく書き上げようとしているが、」(富田, 2017, 193)

(342)のleの指示対象はun tratado(論文)である。しかし、これに続く文において、同一指示対象に対して(343)のようにloが用いられている例がみられる。

- (343) Hago ánimo de publicarlo en breve con láminas finas y exactos mapas;  
(*Cartas marruecas*, LXVII, 304, 1-2)  
『近いうちにそれをみごとに図版と精密な地図を添えて出版しようつとめよう。』  
(富田, 2017, 193)

同例から、指示対象の性質によって形態が選択されているわけではないことが推察される。

また、(342)と同様、動詞がconcluirである例(344)では、直接目的語はloで表されていることから、concluirは直接目的語としてleを要求する動詞である可能性も低いと思われる。

- (344) Trataré en mi tierra con tedio los negocios que me llaman, dejando en la tuya el único que merece mi cuidado, y al punto volveré a concluir<sup>lo</sup>,  
(*Cartas marruecas*, XC, 359, 10-12)  
『わたしの注意に値する唯一の用件をあなたの国に残していく以上、自分の国にあってわたしは、倦怠をおぼえながら、自分と呼ばせかけた用件の対処をするでしょう。残した用件を果たしにわたしはすぐに戻ります、』(富田, 2017, 259)

次に、*El trovador*の例を考察する。同例では直接目的語の指示対象の性質によって、leが用いられていると考えられる。

- (345) Tú ya no estabas,  
y sólo hallé a mi lado  
un esqueleto y, al tocarle<sup>le</sup> osado,  
en polvo se deshizo, que, violento,  
llevo al punto retronando el viento. (*El trovador*, IV, VI, 839-843)  
『僕の側にあったのは一体の骸骨だけで、おそろおそろ触れてみたら、崩れて粉々の灰になったかと思うと、雷が鳴って、激しい風が吹いて瞬く間に灰を吹き飛ばした。』(稲本, 2017, 86)

(345)は同作品で唯一、指示対象がun esqueleto、つまり物である場合にleが用いられている例である。骸骨はもとは人間のものであったものであるためか、leで表されているが、同作品において他の代名詞化された直接目的語の指示対象はllanto、clamor、valorであり、いずれもloで表現されている。

#### 4.5. まとめ

4.3.4.でおこなった分析の結果、次のことが考えられる。13世紀の作品では、特定の動詞ではle語法がみられる。また、同世紀の作品では他動性の高低によると考えられる形態の選択はあまりみられず、このような形態の選択は14世紀以降の作品でみられる。ただし、形態の選択に影響していると考えられる他動性の項目は時代や作品ごとに異なる。

まず、14世紀以降のle語法圏出身者の作品において各項目がどのように形態選択に影響しているかを示す。

(1) 意図性および主語の有生性について、いずれの作品でも主語が無生物である場合、le語法の割合が高い。また、le語法の割合が低い作品について、主語が有生性階層においてもっとも高い位置を占める一人称または二人称である場合、le語法は特定の動詞または文脈においてのみみられるが、主語が有生性階層においてより低い位置を占める三人称の特定性の高い人物である場合、leまたはloが用いられている理由を説明することができない例がみられる。このことから、4.3.3.1.で言及したカシナワ語やイディン語で格標示のタイプが交わる中間点では機能によって異なる形態が用いられるように、有生性階層の中間層を占める三人称の特定性の高い名詞句は、主語の有生性が高い場合、直接目的語をloで表す傾向と主語が無生物である場合、直接目的語をleで表す傾向が交わる点であるため、どちらか一方の形態が選択されやすいわけではなく、両形態が区別せずに使用されている可能性があると考えられる。

(2) 目的語の特定性について、指示対象が不特定の人物である場合、*Cantar de Mio Cid* や *El Alcalde de Zalamea* ではもっぱらleが用いられており、与格に典型的な意味ではなく、他動性の低さによって形態が選択されている可能性がある。また、*Libro de Alexandre* で

は一部の文脈において目的語の特定性が低い場合は、loで表されている例もみられたが、その他の多くの作品では同項目は形態の選択に関与していないと考えられる。

(3) 直接目的語が受ける影響および動性について、*Cárcel de amor*以前の作品では直接目的語に物理的变化や移動をもたらす動詞であっても、文脈によってはleも用いられることもあるが、主にloが用いられている。しかし、*La Celestina*以降の多くの作品ではこのような動詞でもleが用いられており、直接目的語が受ける影響の強弱に関係なく、形態が選択されている。ただし、*La vida del Buscón*や*El Alcalde de Zalamea*のような作品では直接目的語が強い影響を受ける文脈ではloで表されている。

(4) 肯定性について、*Rimado de Palacio*では主語が一部の人称である場合を除いて、否定文ではle語法の割合が高い。しかし、他の作品では肯定文であるか否定文であるかは形態の選択にあまり影響していないと考えられる。

(5) 法について、反実仮想を表す条件文の条件節ではle、命令法ではloが用いられる傾向にある。また、*La Celestina*から*Fuente Ovejuna*までの作品については命令法では直接目的語としてleまたはloが用いられているが、*La vida del Buscón*以降の作品ではloが用いられている例はみられない。したがって、*La vida del Buscón*以降の作品では、形態の選択において法は重要ではなくなったと考えられる。

(6) アスペクトについて、完了アスペクトでもとくに複合完了ではloが用いられる傾向にある。それに対し、不完了アスペクトでもとくに未実現の事柄や習慣を表す文脈ではleが用いられる傾向にある。また、*Rimado de Palacio*においてle語法がみられやすい否定文であっても、完了アスペクトではloが用いられていることから、少なくとも同作品では肯定性よりもアスペクトのほうが形態の選択に強く影響していると考えられる。

(7) 話者の語用論的評価について、愛情や尊敬を表す文脈ではle、軽蔑を表す文脈ではloが用いられる傾向にある。

(8) 複数形および女性形のle語法について、これらのle語法の割合は低い、特定の文脈や動詞ではle語法が用いられており、たとえば、主語が無生物である場合、多くの作品で複数形のle語法がみられ、*Fuente Ovejuna*以降の作品ではle語法の例のみみられる。また、同主語において、女性形のle語法がみられる作品もある。

次に、非le語法圏出身者の作品において他動性の各項目がどのように形態選択に影響しているかを示す。

(1) 意図性および主語の有生性について、主語が無生物である場合、le語法の割合が低い作品においてもleが用いられる傾向にあり、le語法の割合が高い作品では全作品でleが用いられている。

(2) 目的語の特定性について、同項目が形態の選択を決定していると考えられる作品はない。

(3) 目的語への影響および動性について、le語法の割合が低い作品では動詞がmatarやtenerである場合、直接目的語にはloが用いられている。一方、le語法の割合が高い作品では動詞がmatarである場合、leまたはloのどちらを直接目的語として用いるかは作品ごとに異なる。また、*El estudiante de Salamanca*では動詞がmatarである場合にのみ直接目的語としてloが用いられている。

(4) 肯定性について、*Guzmán de Alfarache*では主語が一部の人称である場合を除いて、否定文ではle語法がよくみられる。また、*Cartas marruecas*でも否定文ではleが用いられる傾向にある。しかし、その他の作品では肯定性による形態の選択はなされていないと考えられる。

(5) 法について、*Guzmán de Alfarache*では反実仮想を表す条件文の条件節ではleが用いられるが、命令法ではloが用いられる傾向にある。しかし、le語法の割合が高い作品では命令法においてもleが用いられており、法は形態の選択にあまり影響していないと考えられる。

(6) アスペクトについて、*Guzmán de Alfarache*において主語が無生物である場合、特定の動詞および文脈を除いて、完了アスペクトではloが用いられている。しかし、主語が有生物である場合や同作品以外の作品ではアスペクトによる形態の選択はなされていないと考えられる。

(7) 話者の語用論的評価について、le語法の割合の高低に関係なく、直接目的語の指示対象への愛情が表されている場合、le語法の例がみられる。反対に、直接目的語の指示対象が物のように扱われている場合、loが用いられている例がみられる。

(8) 複数形および女性形のle語法について、le語法圏出身者の作品同様、特定の動詞および主語が無生物である場合、複数形のle語法がみられる。ただし、le語法圏出身者の作品とは異なり、主語が無生物である場合、lesのみが用いられている作品はない。また、女性形のle語法は、*Guzmán de Alfarache*や*El sombrero de tres picos*において主語が意図的に行動していない場合や、主語が無生物である場合にみられる。

以上のことから、地域および時代によって程度には違いがみられるものの、いずれの地域および時代においても他動性が低い文脈ではle語法がみられやすい。また、各項目について次のことが推測できる。形態の選択に強く影響していると考えられる項目は、主語の有生性および目的語が受ける影響の強弱である。とくに、目的語への影響の強弱について、同項目は対格および与格に典型的な意味のうちのひとつであり、目的語の受ける影響が強い場合、le語法の割合が高い作品でもloが用いられている例がみられること、反対に、目的語の受ける影響が弱い場合、le語法の割合が低い作品においてもleが用いられ、目的語が活動性の高い参与者である「助ける」を意味する動詞の例が13世紀のle語法の例の半数以上を占めることから、同項目は通時的に直接目的語の形態の選択にかなり強く影響していると考えられる。また、主語の有生性と特定性について、主語が無生物である場合、地域および時代を問わず、le語法がみられやすい。加えて、直接目的語の指示対象に対する尊敬や愛情など、与格に典型的な意味から派生すると考えられる要因による形態の選択はle語法の割合が低い作品でもみられる。

反対に、形態の選択にあまり影響していないと考えられる項目は、肯定性および直接目的語の特定性である。まず、肯定性について、同項目が形態の選択に影響しているのは一



部の作品の一部の文脈に限られる。次に、目的語の特定性について、一部の作品では不特定の人物である場合、もっぱらleのみ用いられているが、他の多くの作品では目的語の特定性による形態の選択はなされていないと思われる。

また、本研究で考察したこれら以外の他動性の高低を測る項目については、次のようにいえる。法とアスペクトについては、作品によっては一部の文脈でのみ形態の選択に影響している。さらに、動性については、動詞がmatarである場合、一部の作品では指示対象が人の男性単数である場合に唯一loが用いられていることや本研究の資料体では複数形のle語法の例がみられないことから、動性の高い動詞ではloが用いられやすいと考えられる。しかし、他動性の観点からみれば、tenerが状態を表す動詞である場合、leが用いられやすいと考えられるが、le語法の割合が高い作品でのみleの例がみられ、本研究の資料体では複数形のle語法がみられる作品がないことから、多少の動性がないとle語法は用いられにくいと思われる。

最後に、意図性について、主語が有生物である例で、代名詞化された三人称の直接目的語を伴う例がほとんどみられないため、このような場合に意図性がle語法の使用に有利に働くかどうかを判断することはできない。とはいえ、主語が無生物である場合、le語法がみられやすいことから、少なくともloの使用を促す要因であるとは考えにくい。

ただし、形態の選択に強く影響していると考えられる項目と、あまり影響していないと考えられる項目のなかで非常に強く形態の選択に影響していると考えられる特定のパラメータが併存する場合、後者が選択される形態を決定している場合もあるため、形態の選択は非常に複雑になされているといえる。

第3章および本章における考察の結果、le語法圏における直接目的語の形態の選択の歴史的変遷について次のことがいえる。他動性による形態の選択が未発達であった13世紀の作品では、主に「助ける」を意味する動詞など特定の動詞でのみle語法はみられるため、le語法の割合は低い。また、「助ける」を意味する動詞の直接目的語は活動性の高い役割を果たすため、le語法が用いられやすいこと、さらに同意味の動詞において主語が無生物である場合を除いて、直接目的語の指示対象が不特定の人物である場合、loが用いられていることから、対格および与格に典型的な意味によって形態が選択されている可能性がある。しかし、14世紀以降の作品では対格および与格に典型的な意味から派生するとされる他動性の高低および話者の語用論的評価による形態の選択がなされるようになり、le語法が占める割合は増加した。続いて、15世紀末以降の作品では、指示対象が有生物の単数である場

合、性による形態の区別がなされるようになり、ほとんどの例でle語法が用いられている。ただし、他動性が高い文脈、とくに直接目的語が物理的变化を受ける文脈では15世紀末以降の作品であっても語源を維持した形態が用いられている例がみられる。

次章では、本章で考察した主語と直接目的語の2つの参与者からなる二項文よりも他動性が高いとされる主語、直接目的語、間接目的語の3つの参与者からなる三項文における形態の選択を考察する。

## 5. 項数

### 5.1. はじめに

本章では、主語、直接目的語、間接目的語の3つの参与者からなる三項文における形態の選択を考察する。一般的にこれら3つの参与者からなる三項文は、主語と直接目的語の2つの参与者からなる二項文よりも他動性が高いとされている。したがって、三項文では二項文よりもloが用いられやすいと考えられる。そこで、ともに三人称の弱形代名詞であるse、leがそれぞれ与格、対格の機能を果たす形態として組み合わせられて用いられることが避けられる傾向にあることや、反対に、se leの組み合わせが可能な場合について例証する。5.3.では、本研究の資料体において直接目的語がleで表されている三項文の例を考察する。最後に、5.4.で本章の総括をおこなう。

### 5.2. se leの組み合わせ

García(1975:444)によると、se、leがそれぞれ与格、対格の機能を果たす三項文について、二項文では同じ指示対象の直接目的語としてleを使用するle語法使用者でもse leの組み合わせは強く避け、直接目的語には常にloのみを使用するものの、間接目的語が一、二人称の場合、三項文であってもme le、te leの組み合わせは許容される。その理由として2つの理由があげられている。ひとつめは、指示対象はすぐに特定することができ、三人称の弱形代名詞が2つ続く場合とは違って、記憶に頼る必要がないためである。ふたつめは、人称の階層において高い位置を占める人称がより高い役割を果たすという原則に従って、me le、te leの組み合わせでは一人称、二人称が与格、三人称が対格の役割を果たすことが聞き手によって自然と理解されるためである(García1975:449-450)。

ここで、García(1975)があげているse leの組み合わせが可能な場合を記述する。ひとつめは、再帰代名詞seまたは再帰不定人称と共起する場合であり、この場合、三項文ではなく、二項文である(García1975:448)。また、Hopper&Thompson(1980:277)によると、再帰動詞の文は一項文よりも他動性は高いが、主語と直接目的語が同一人物ではない二項文よりは他動性が低い。さらに、Cuervo(1895:245-246)やButt&Benjamin(2019:167)によっても、再帰不定人称文では指示対象の性や有生/無生に関係なく、le(s)が用いられることが報告されている。ふたつめは、形態によって性を区別するle語法使用者の場合であり、三項文において間接目的語が三人称の場合であってもse leの組み合わせを用いる(García

1975:444)。Fernández Ramírez(1987:55)もまた、le語法使用者は人称を問わず再帰代名詞や間接目的語を伴う場合でも、直接目的語としてleを用いることがあると指摘している。

### 5.3. 分析

#### 5.3.1. le語法圏出身者の作品

本項では、直接目的語がleで表されている三項文の例をle語法圏出身者による作品および非le語法圏出身者による作品別に考察する。まず、le語法圏出身者による作品を考察する。本研究の資料体である26文学作品のなかでこのような例がみられる最古の作品は*Cantar de Mio Cid*である。同作品では二項文と同様に、三項文でも指示対象に対する愛情を表すためにleが用いられていると考えられる例がみられる。

- (346) Si a vós **le** tolliés, el cavallo no havrié tan buen señor, (*Cantar de Mio Cid*, 3517)  
『そなたからそれを取り上げたら 馬が良き乗り手を失うことになるからだ。』  
(牛島、福井, 1994, 275)

(346)の直接目的語の指示対象はCidの愛馬Baviecaであり、leで表されている。4.4.3.2.1.3.1.で確認したように、愛情を表すために同指示対象は二項文でもleで表されている。しかし、動詞および直接目的語の指示対象が同じであるにもかかわらず、loが用いられている例がある。

- (347) quien vos **lo** toller quisiere, no l' vala el Criador, (*Cantar de Mio Cid*, 3520)  
『そなたからその馬を取り上げる者には神の庇護はあるまい』(牛島、福井, 1994, 275)

(347)は同作品においてBaviecaが唯一loで表されている例である。同例においてloが用いられているのは、同例がCidからBaviecaを取りあげる者は誰でも神の庇護を受けることはできないという一般論を表す文脈であるためではないかと考えられる。4.4.3.2.1.3.1.で確認したように、同作品において一般論を表す文脈では二項文の例でもloが用いられる。したがって、三項文でも直接目的語の指示対象に対する愛情を表す文脈や一般論を表す文脈では二項文と同様の方法で形態が選択されていることから、参与者の数よりもそれぞれの形態の使用に有利に働く要因のほうが形態の選択においてより重視されていると考えられる。

次に、*La Celestina*を考察する。直接目的語の指示対象が人である場合、(348)のように間接目的語が一人称である場合だけでなく、(349)のように三人称である場合でもle語法が用いられている。

- (348) Muchos y muchos días son pasados que ese noble caballero me habló en amor; tanto me fue entonces su habla enojosa cuanto, después que tú me **le** tornaste a nombrar, alegre. (*La Celestina*, X, 228, 7-10)

『あの気高い方がわたしに愛を告白なさったのはずいぶん前。あのときは聞いて不愉快になった。でもあなたの口からお名前が出たあと、あれは心浮き立つ言葉に変わった。』(岡村, 2020, 173)

- (349) Quiero bajarme a la puerta por que duerma mi amo sin que ninguno le impida, y a cuantos le buscaren se **le** negaré. (*La Celestina*, XIII, 264, 20-21)

『玄関へおりていよう。旦那様がお休みになるのに邪魔がはいるといけないからな。誰がきても、ご不在でございますって断らなきゃ。』(岡村, 2020, 206)

また、(348)と同様、動詞がnombrarである二項文の例(350)でもまた、直接目的語としてleが用いられている。

- (350) Calla, por Dios, madre, no traigan de su casa cosa para mi provecho ni **le** nombres aquí. (*La Celestina*, X, 225, 18-19)

『やめて、お願い、おばさん。わたしのためだからといって、そんなところからなにも持ってきてくれなくていい。だめ、ここでその名前を口にしては。』(岡村, 2020, 171)

さらに、他の作品でもみられたように、直接目的語の叙述補語が表す内容によって形態が選択されていると考えられる例が同作品でもみられる。

- (351) Escóndete, hermana, tras ese paramento, y verás cuál te **lo** paro, lleno de viento de lisonjas, que piense, cuando se parta de mí, que es él, y otro no.

(*La Celestina*, XVII, 301, 13-16)

『ねえさん、そのカーテンの陰に隠れて。見てて、おだてまくってやっとうまく料理してみせるから。それで、帰るときは、あたしがあいつにそっこんだって思い込ませてやる。』(岡村, 2020, 235)

(351)のloの叙述補語はlleno de viento de lisonjas(おだてまかれた人)であり、直接目的語の指示対象に対する軽蔑のニュアンスが込められているため、loで表されていると考えられる。同例から、三項文でleが用いられている文脈では、二項文でもle語法が用いられると思われる。

一方、直接目的語の指示対象が物である場合、(352)および(353)のようにleが用いられている例も、(354)のようにloが用いられている例もある。ただし、Flores(2007)が指摘して

いるように、leが用いられている例(352)および(353)では間接目的語は直接目的語が表す物の所有者を指している。

- (352) Y se **le** abras y lastimes del crudo y fuerte amor de Calisto, tanto, que, despedida toda honestidad, se descubra a mí y me galardone mis pasos y mensaje; (*La Celestina*, III, 109.14-110.3)

『メリペーアの心をばこじあげ、カリストへの激しく荒々しき愛にて苦しめよ、淑徳をば残らず擲ち、われに本心を晒し、使者たるわが働きに報いるまでに。』(岡村, 2020, 78)

- (353) El vientre no se **le** he visto, pero juzgando por lo otro, creo que le tiene tan flojo como vieja de cincuenta años. (*La Celestina*, IX, 207, 7-8)

『お腹は見たことないけど、ほかから想像すると、たぶん五十のお婆さん並みにぶよぶよでしょ。』(岡村, 2020, 156)

- (354) Yo conozco, amiga, otro compañero de Pármeno, mozo de caballos, que se llama Sosia, que le acompaña cada noche; quiero trabajar de se **lo** sacar todo el secreto, (*La Celestina*, XV, 291, 11-13)

『だったら、あんた、パルメノの奉公仲間をひとり知ってる。馬丁で、ソシアっていう男。夜のお忍びじゃいつもお供してる。あたしがこいつからなんとか秘密をあらいざらい聞き出すよ。』(岡村, 2020, 226)

(352)および(353)のleの指示対象はそれぞれ心(el corazón)、お腹(el vientre)、つまり物である。また、両例の間接目的語seはその所有者を表している。一方、直接目的語がloで表されている(354)では間接目的語seはその所有者を表していない。Flores(2007:100)は、同作品において(352)と同様に、指示対象が心(el corazón)である二項文の例で、leが用いられている例について次のように述べている。同作品では指示対象が物である場合、le語法の使用率は指示対象が人である場合と比べて低いにもかかわらず、le語法が用いられていることは、本来は物である指示対象がその所有者として概念化され、動作主としての高い潜在力が主観的に付与されていることを意味するとしている。

以上のことから、同作品では指示対象が人である場合、間接目的語の人称に関係なく、直接目的語はleで表されるが、指示対象が物である場合には、間接目的語が直接目的語の表す物の所有者である場合にのみ直接目的語はleで表されると考えられる。また、三項文においてleで用いられている動詞も、loが用いられている動詞も二項文においてはleが用いられていることから、二項文よりも三項文において直接目的語はloで表される傾向にあると思われる。

次に、*Lazarillo de Tormes*を考察する。同作品では、指示対象が人である場合、三項文では全3例でleが用いられている。

(355) Acá, señor, nos **le** traen. (*Lazarillo de Tormes*, III, 61, 2)  
『だから旦那様、うちへ運んできます』(岡村, 2018, 102)

(356) Y cuando alguno de éstos escapaba, Dios me lo perdone, que mil veces **le** daba al diablo, y el que se moría otras tantas bendiciones llevaba de mí dichas. (*Lazarillo de Tormes*, II, 31.21-32.1)  
『もしも生き返る者があれば——神様、お赦してください——千回呪いました。ちゃんと死んでくれたなら、反対に千回冥福を祈ってやりました。』(岡村, 2018, 49)

一方、指示対象が物である場合、直接目的語としてle、loが用いられている例はそれぞれ2例、6例である。また、同じ動詞quitarで、(357)のようにleが用いられている例と、(358)のようにloが用いられている例がある。

(357) —Sí es, y sí tiene, y también me **lo** quitaba él a mí; mas, de cuantas veces yo se **le** quitaba primero, no fuera malo comedirse él alguna y ganarme por la mano. (*Lazarillo de Tormes*, III, 62, 1-3)  
『なるほど騎士であった。確かに財産があった。わしに対して帽子もとっておった。だがな、いつもこちらが先に挨拶しておるのだから、たまには向こうが気を遣って先にしてもよさそうなものではないか』(岡村, 2018, 105)

(358) Pues hágate saber que yo soy, como vees, un escudero, mas vótote a Dios, si al conde topo en la calle y no me quita muy bien quitado del todo el bonete, que otra vez que venga me sepa yo entrar en una casa, fingiendo yo en ella algún negocio, o atravesar otra calle, si la hay, antes que llegue a mí, por no quitárselo. (*Lazarillo de Tormes*, III, 62, 8-12)  
『で、ひとつ教えておくが、見てのとおりわしは卿士。しかし道で伯爵と出会い、きちんと帽子を脱いで挨拶されなかったら、次に見かけたときは帽子をとらずに済むよう、近づく前になにか用があるふりをして適当な建物の中へはいるか、あるいはもし横道があればそこへはいる。』(岡村, 2018, 105-106)

(357)および(358)のle、loの指示対象はいずれもel bonete(帽子)であり、両例においてquitarの3つの参与者は完全に一致している。ただし、(357)は相手が私に対して帽子をとり、自分も相手に対して帽子をとるという対になった文脈である。このような文脈では、第4章で観察したように一方ではleが用いられ、他方ではloが用いられている。

また、同動詞について、(359)のように二項文の例ではleが用いられている。

(359) Cuando el pobreto iba a beber, no hallaba nada, espantábase, maldecíase, daba al diablo el jarro y el vino, no sabiendo qué podía ser.  
—No diréis, tío, que os lo bebo yo —decía—, pues no **le** quitáis de la mano. (*Lazarillo de Tormes*, I, 17, 15-19)  
『知らぬが仏のじいさん、いざ飲もうとするとからっぽなんでびっくり。なにがどうなったのやらわけがわからず、こんちくしょう、なんだこの壺は、酒はどうしたんだと腹を立てます。「おじさん、おいらいに飲まれたなんて言っちゃ嫌だよ」あたしはそうしらばくれてやりました。「だってず

っと手を放さなかっただろ？」と。』(岡村, 2018, 26)

(359)のleの指示対象は壺(el jarro)、つまり(357)および(358)のloの指示対象と同様、物である。同例から、二項文ではleが用いられる動詞であっても、三項文ではloが用いられると考えられる。

以上のことから、同作品でもまた、指示対象が人である場合、間接目的語の人称に関係なく、直接目的語はleで表されるのに対し、指示対象が物である場合には、基本的にはloが用いられている。

*La Galatea*を考察する。同作品では間接目的語が(360)のように一人称または(361)のように二人称の例では、全10例で物を表す直接目的語としてleが用いられている。

- (360) ¿Qué ganas en turbarme el alegría,  
o qué bien en quitármele consiguies? (*La Galatea*, III, 186, 309-310)  
『喜びをかき乱そうと益はなし  
悲しくさせて幸せが得られるものか』(本田, 2017, 252)

- (361) Por esto no os pediré  
remedio al mal que sostengo;  
y si a pedírosle vengo,  
es, Amarili, porqué  
sola es fe la fe que os tengo. (*La Galatea*, VI, 405, 26-29)  
『ゆえにそなたにわが不幸  
癒してもらおう意志もなし  
さては知るべしアマリリよ  
《わが信のみが信たらん》』(本田, 2017, 556)

(360)および(361)のleの指示対象はそれぞれel alegría、remedioである。

次に、間接目的語が三人称である例を考察する。この場合、直接目的語として(362)のようにleが用いられている例は4例、(363)のようにloが用いられている例は2例あり、間接目的語が三人称である場合でも、直接目的語としてleが用いられている例のほうが多い。

- (362) ; y, puniendo en la mano muerta de Leonida el puñal que su hermano traía, que era el mismo con que él la había muerto, ayudándole yo a ello, tres veces se le hincó por el corazón. (*La Galatea*, I, 50, 31-34)  
『彼女の萎えた手に兄のもっていた短刀を握らせました。それは彼女が殺されたのと同じものでした。ぼくは彼女の手をとって彼の心臓に三度それを突き刺しました。』(本田, 2017, 65)

- (363) Y, por mejor informarse de todo el suceso, quisieran preguntárselo al pastor homicida, pero él, con tirado paso, dejando al pastor muerto y a los dos admirados, se tornó a entrar por el montecillo adelante.



(*La Galatea*, I, 32, 23-26)

『彼らは事件の真相をよりよく知ろうとして、殺人を犯した牧人に問い質そうと思ったが、彼は死んだ牧人と呆然としていた二人を残して、再び目の小山に足早に入って行ってしまった。』  
(本田, 2017, 45)

(362)および(363)のle、loの指示対象はそれぞれel puñal(短刀)、suceso(真相)である。

以上のことから、同作品では間接目的語が一人称または二人称である場合、直接目的語として必ずleが用いられるが、間接目的語が三人称である場合、loが用いられている例もみられるが、leが用いられている例のほうが多い。

*Fuente Ovejuna*でもまた、指示対象が物である場合、(364)のようにleが用いられている例がみられる。

(364) Temor que tuve de dos,  
el tuyo me le ha quitado. (*Fuente Ovejuna*, 2256-2257)

『二人は心配だったが、お前にはもう心配しないぞ。』(田尻, 2020, 258)

しかし、指示対象が人である場合、指示対象が物である場合よりもleが用いられやすいと考えられるが、(365)のように直接目的語の指示対象に対する軽蔑を表している文脈では直接目的語としてloが用いられている。

(365) ¡Dánoslo a las mujeres, Mengo! ¡Para,  
acaba por tu vida...! (*Fuente Ovejuna*, 1908-1909)

『メンゴ、その男、こっちに寄こして。さあ、そこまです……!』(田尻, 2020, 252)

(365)はFloresに鞭打たれたことを恨んでいるMengoに代わってPascualaら女性たちがFloresを殺害するために、Floresを自分たちに引き渡すよう命令している場面を表している。同例から、第4章で指示対象への軽蔑を表す文脈ではloが用いられると確認したように、三項文でも同じことが起きていると考えられる。

続いて、*La vida del Buscón*を取り扱う。まず、同作品において指示対象が有生物である場合を考察する。指示対象が有生物である場合、間接目的語が(366)のように一人称である場合にのみ三項文の例が存在し、全3例で直接目的語としてleが用いられている。

(366) Murió el pobre mozo, enterrárnosle muy pobremente, por ser forastero, y quedamos todos asombrados. (*La vida del Buscón*, I, III, 25, 3-5)

『気の毒な若者は亡くなって、よその土地の者であったためにとってもつましく葬られ、私たちはみんな恐ろしさにふるえ上がってしまいました。』(牛島, 1997, 140-141)

また、(366)と同様、動詞がenterrarである二項文においても、(367)に示すように直接目的語としてleが用いられている。

- (367) Esto le cayó muy en gracia, porque traía él una sotana con canas, de puro vieja, y con tantas cazcarrias que, para enterrarle, no era menester más de estregársela encima. (*La vida del Buscón*, II, III, 71, 16-19)

『これは男をたいそう面白がらせました。といいますのも男の着ている法衣ときたら、高齢のためすっかり白髪になり、一面に泥のはねをつけたしろもので、男を土の中に埋めるにはその法衣を頭の上ではたけば十分だったからです。』(牛島, 1997, 198)

これらの例から、同作品でもまた、三項文でleが用いられている場合には、二項文でもleが用いられていることがわかる。

次に、指示対象が物である例を考察する。間接目的語が一人称である場合、直接目的語がle、loで表されている例はそれぞれ7例、1例ある。まず、leが用いられている例を考察する。

- (368) Yo las pedí por favor y como en gracia un rosario engazado en oro que llevaba la más bonita dellas, en prendas de que las había de ver a otro día sin falta. Regatearon dármele. (*La vida del Buscón*, III, II, 116, 5-8)

『私は次の日もまた間違いなく会えるしるしとして、二人のうちのきれいな方が手にしていた金のひもを通した数珠をぜひとも預らせてほしいと願い出ました。二人はそれには応じません。』(牛島, 1997, 246)

(368)のleの指示対象はun rosario(数珠)である。同例のように間接目的語が一人称である場合には、直接目的語がleで表されている例のほうが多い。続いて、直接目的語がloで表されている例を考察する。

- (369) Llegamos cerca del cenador, y, al pasar una enramada, prendióseme en un árbol la guarnición del cuello y desgarróse un poco. Llegó la niña y prendíomelo con un alfiler de plata, y dijo la madre que inviase el cuello a su casa al otro día, que allá lo aderezaría doña Ana, que así se llamaba la niña.

(*La vida del Buscón*, III, VII, 144, 16-20)

『私たちはあずまやの近くまで来ましたが、木の茂ったところを通り抜けたときに私の襟の飾りが枝にひっかかって、ちょっとやぶけてしまいました。すると娘がすっとなでてきて、そこを銀のピンでとめてくれました。ドーニャ・アナというのが娘の名前でしたが、母親もその襟はアナがつくりますから明日、家にとどけなさいと言ってくれました』(牛島, 1997, 280)

(369)のprenderの直接目的語loの指示対象はel cuello(襟)であり、直後の二項文であるaderezarのloで表されている直接目的語と同一指示対象である。このことから、指示対象がel cuelloであるために、loが用いられていると考えられる。

一方、間接目的語が三人称である場合、直接目的語がle、loで表されている例はそれぞれ4例、2例ある。まず、直接目的語としてleが用いられている例を示す。

- (370) Sentáronse y, entre los dos estudiantes y ellas, no dejaron sino un cogollo, en cuatro bocados, el cual se comió don Diego. Y, al dársele, aquel maldito estudiante le dijo: (*La vida del Buscón*, I, IV, 29, 24-25)

『女たちは食卓につくと、二人の学生と一致協力して二口か三口でサラダを始末してしまい、レタスの芯だけを残しましたが、それはかろうじてドン・ディエゴのお腹に収まりました。その芯を主人にまわすとき、例のいまいましい学生はこんなことを言ったのです、』(牛島, 1997, 146)

(370)のleの指示対象はレタスの芯(un cogollo)、つまり物である。しかし、同例と同様、動詞がdarである二項文の例(371)ではloが用いられている。

- (371) Y lo que más me tenía en duda era el hacer dél una casa o darlo a censo, que no sabía yo cuál sería mejor y de más provecho.

(*La vida del Buscón*, III, VI, 142, 23-25)

『とくに悩みに悩んだのが持参金で家を建てるべきか、それとも利子を稼ぐべきかということとして、どちらの方が得になる、よりよい金の使い道なのやら私には見当がつかなかったのです。』(牛島, 1997, 278)

(371)のloの指示対象はel dote(持参金)である。また、同例と同様、指示対象がel dinero(お金)である三人称の間接目的語を伴う三項文の例(372)においても直接目的語はloで表されている。

- (372) En fin, como el dinero ha dado en mandarlo todo y no hay quien le pierda el respeto, pagándoselo a un repostero de un señor, me dio plata y la sirvió él y tres criados. (*La vida del Buscón*, III, VII, 143, 2-4)

『結局のところ、ちかごろは金子が何もかもを取り仕切る世の中になって、お金に敬意を抱かない人などいないので、あるお偉いさんの給仕長に現生を握らせたところ、銀の食器を貸してくれ、ご当人と三人の召使いが給仕をする役も引き受けてくれたのです。』(牛島, 1997, 278)

これらの例から、指示対象がお金である場合、項数に関係なく、その直接目的語はloで表されていることがわかる。

さらに、三項文において間接目的語が三人称である場合、直接目的語がloで表されているもうひとつの例は次のものである。

- (373) —A nadie se lo he dicho que no haya hecho otro tanto, que a todos les da gran contento. (*La vida del Buscón*, II, I, 57, 6-7)  
『「私からこの話を聞いた者は誰も彼もあんたのように笑い出すんだが、私が思いつきがみんなをいたく満足させるんだな。』(牛島, 1997, 182)

(373)のloの指示対象はun árbtrio(戦術)である。また、同例と同じ動詞decirの二項文の例(374)でも直接目的語としてloが用いられている。

- (374) Preguntáronme su nombre y no bien lo dije, cuando el uno de los estudiantes se llegó a él medio llorando y, dándole un abrazo apretadísimo, dijo:  
(*La vida del Buscón*, I, IV, 28, 18-20)  
『すると今度は主人の名前を訊いてきましたが、私がそれを口にするかしないうちに、学生のひとりが今にも泣き出さんばかりの顔をして主人のもとへ駆け寄り、相手を力いっぱい抱きしめるとこんなふうに叫んだのです。』(牛島, 1997, 145)

同作品では同動詞でle語法が用いられている例はないことから、同動詞では直接目的語としてloが用いられる傾向にあると考えられる。

以上のことから、同作品では間接目的語の人称に関係なく、直接目的語としてleが用いられている例のほうが多いが、loが用いられている例もある。したがって、基本的には性によって形態が区別されているが、loが用いられる傾向にある動詞など一部の例ではloが用いられると考えられる。

続いて、*El sí de las niñas*を考察する。まず、同作品において指示対象が有生物である例を考察する。同作品には(375)のように間接目的語が一人称で、直接目的語としてle用いられている例が2例ある。

- (375) ¡No permita Dios que me le engañe alguna bribona de estas que truecan el honor por el matrimonio! (*El sí de las niñas*, I, I, 87, 2-3)  
『名譽を蔑ろにして結婚にありつこうなどという、あの手のあばずれ女に甥が騙されるなんてことがあれば、わしは断じて赦さんからな!』(佐竹, 2018, 22-23)

(375)と同じ動詞の二項文の例(376)でもまた、直接目的語はleで表されている。

- (376) ¡Oh! No hay que temer... Y si tropieza con alguna fullera de amor, buenas cartas ha de tener para que **le** engañe. (*El sí de las niñas*, I, I, 87, 4-5)

『いや、心配には及びませんて！……色恋をもてあそぶ性悪女に引っかかると思えば、あの方を煙に巻くほどの大した切り札を持ってるにちがひありませんや。』(佐竹, 2018, 23)

これらの例から、三項文でleが用いられる場合、二項文でもleが用いられると考えられる。

次に、同作品において指示対象が物である例を考察する。間接目的語が三人称である場合も、(377)のように全3例で直接目的語はleで表されている。

- (377) Toma (vuelve a atar el pañuelo y se **le** da a Rita, la cual se va con él y con las mantillas al cuarto de doña Irene), (*El sí de las niñas*, I, II, II, 89, 6-7)

『これお願いね。(ふたたびハンカチを結び、リタに手渡す。リタはそれを受けとり、スカーフといっしょにドニャ・イレネの部屋へ持ち去る)』(佐竹, 2018, 26)

これらの例から、同作品では間接目的語の人称や、指示対象が有生物であるか、無生物であるかに関係なく、三項文では全例で直接目的語としてleが用いられており、性による形態の区別が強くなされていると考えられる。

続いて、*Don Juan Tenorio*を考察する。同作品でもまた、*El sí de las niñas*と同様、直接目的語としてloが用いられている例はなく、(378)のように指示対象が人である場合でも、(379)および(380)のように物である場合でも間接目的語の人称に関係なく、直接目的語はleで表されている。

- (378) Encerradme **le** hasta el día. (*Don Juan Tenorio*, I, II, VII, 1198)

『あしたまで、ぶち込んでおけ。』(高橋, 1976, 65)

- (379) Don Juan,  
un punto de contrición  
da a un alma la salvación,  
y ese punto aún te **le** dan. (*Don Juan Tenorio*, 3700-3703)

『ドン・フワンよ。刹那の覚悟に、魂は済度される。その刹那はまだ、君のために残っておる。』(高橋, 1949, 168)

- (380) Es claro; esperar le hicieron  
en vuestro amor algún día,  
y hondas raíces tenía  
cuando a arrancársele **le** fueron. (*Don Juan Tenorio*, I, III, III, 1676-1679)

『そうございましょうとも！あなたを恋こがれるようになってからでも、ずいぶんお待たせしたのですもの。その芽を摘みとろうとしたときは、もう深く深く根をおろしてしまっていましたから。』（高橋, 1976, 53）

(378)のleの指示対象はdon Luis、つまり人である。一方、(379)および(380)のleの指示対象はそれぞれun punto de contrición(刹那の覚悟)、vuestro amor(愛)、つまり物である。

ただし、3.3.2.で確認したように、本研究の資料体のなかで指示対象が人の男性複数である場合、le語法の割合もっとも高い同作品においても、(381)のように三項文では直接目的語としてlosが用いられており、本研究の資料体には三項文で直接目的語の指示対象が有生物であるか、無生物であるか、さらに間接目的語の人称に関係なく、直接目的語がlesで表されている例は存在しない。

(381) Por mí, pues, no ha de quedar  
y, a poder ser, estad ciertos  
que cenaréis con los muertos,  
y os los voy a convidar. (*Don Juan Tenorio*, II, I, VI, 3202-3205)  
『そこで、さしあたって、いいかい、亡者といっしょに、夕飯をおごるよ。君たちのために、亡者を招待してやろう。』（高橋, 1976, 146）

これらの例から、*El sí de las niñas*と同様、同作品では間接目的語の人称や、指示対象が有生物であるか、無生物であるかに関係なく、三項文では全例で直接目的語としてleが用いられており、性による形態の区別が強くなされていると考えられる。

### 5.3.2. 非le語法圏出身の作者による作品

ここでは、非le語法圏出身の作者による作品として、まず*Guzmán de Alfarache*を考察する。同作品において三項文でleが用いられているのは、次の例のみである。

(382) Uno solo, el cual es hacer bien al que no te le hace y te persigue, como nos está mandado y tenemos obligación. (*Guzmán de Alfarache*, I, I, IIII, 87, 12-14)  
『一つだけありますが、それは、私たちは命じられており、義務があるので、あなたに善を行わず、あなたを迫害する人に善を行うことです。』

また、(382)と同様、動詞がhacerである肯定文の例では直接目的語としてloが用いられている。

(383) : que el agravio que os hizo a vos, también lo hizo a Dios, cuyo sois y él es.

(*Guzmán de Alfarache*, I, I, IIII, 86, 4-5)

『彼があなたにした侮辱を彼はあなたのものでもあり、彼のものでもある神にしたからです。』

したがって、(382)でleが用いられているのは、動詞がhacerであるためではないと考えられる。また、(384)のように間接目的語が一人称である否定文では直接目的語としてloが用いられている。

(384) Híceme a una parte, dejelo, creyendo ser amistad y que de tan poco escote no me lo quería repartir. (*Guzmán de Alfarache*, I, I, IIII, 97, 24-25)

『それは友情であり、割り前がほとんどないので、それを分けたくないと思っていると思って、私は端に寄り、彼にそうさせた。』

これらの例から、(382)でleが用いられていることを決定づけているのは、動詞がhacerであることでも、間接目的語が三人称ではないことでもないが、4.4.3.3.1.で確認したように、同作品では主語が三人称の人称代名詞または固有名詞である場合を除いて、否定文ではleのほうがよく用いられることから、同例も否定文であるためにleが用いられている可能性があると考えられる。

次に、*El Burlador de Sevilla*を考察する。まず、動詞がdarである例を考察する。間接目的語が一人称の場合、直接目的語としてleが用いられている。

(385) Para vos, Marqués, me han dado  
un recado hartó cortés  
por esa reja, sin ver  
el que me le daba allí;  
sólo en la voz conocí  
que me le daba mujer. (*El Burlador de Sevilla*, II, 248, 1466-1471)

『やあ、侯爵、先ほど姿こそ見られなかったものの、その格子窓からきみへのたいそう丁寧な伝言があった。声からして女だってことはわかった。』(佐竹, 2014, 64)

しかし、動詞および指示対象が同じ例であっても、(386)のように間接目的語が三人称である場合には、直接目的語としてloが用いられている。

(386) Digo que se lo daré. (*El Burlador de Sevilla*, II, 245, 1384)

『お引き受けいたしましょう。』(佐竹, 2014, 61)

ただし、間接目的語が一人称である場合、同例のように直接目的語は必ずしもleで表されるわけではなく、(387)および(388)のようにloが用いられている例もある。

- (387) Que aunque me la has encubierto,  
ya en Sevilla el Rey la sabe,  
cuyo delito es tan grave  
que a decírtelo no acierto. (*El Burlador de Sevilla*, II, 250, 1516-1519)  
『おまえはわしの目を誤魔化そうとしているようだが、セビーリャでは先刻陛下のお耳に入っている。厳しい処刑ということもあり、本人の前で口にするのも辛い。』(佐竹, 2014, 66-67)

- (388) ¡Estrellas que me alumbráis,  
dadme en este engaño suerte,  
si el galardón en la muerte  
tan largo me lo fiáis! (*El Burlador de Sevilla*, III, 271, 2037-2040)  
『夜空に輝く星よ、ペテンの罪の償いをおれの死後まで首を長くして待っていてくれるというのなら、今は幸運を掴ませてくれ。』(佐竹, 2014, 91)

(387)および(388)のloの指示対象はそれぞれ処刑(delito)、償い(galardón)である。これらの例から、間接目的語が三人称である場合、直接目的語はloで表されると考えられる。また、間接目的語が一人称である場合、直接目的語としてleが用いられる傾向にあるが、loが用いられている例もある。

続いて、*El diablo cojuelo*を考察する。同作品では指示対象が(389)のように人である場合でも、(390)および(391)のように物である場合でも間接目的語の人称に関係なく、直接目的語はleで表されている。

- (389) Si hubieres menester algún agüelo o agüela para algún crédito de tu calidad, a tiempo estamos, don Cleofás Leandro, que yo tengo aquí un ropero amigo que desnuda los difuntos la primera noche que los entierran y nos le fiará por el tiempo que quisieres. (*El diablo cojuelo*, III, 116, 13-18)  
『あなたの地位の信用のために老人か老女が必要な場合、間に合っています。というのも、クレオファス・レアンドロ様、埋葬された最初の夜に亡骸を追い剥ぎする年寄りの友達がここにおり、あなたは望む間、私たちにそれを保証するからです。』

- (390) Pero salgámonos muy apriesa de aquí, que con tener estómago de demonio y no haberme mareado las maretas del infierno, me le han revuelto estas sabandijas que nacieron para desacreditar la naturaleza y el rentoy.  
(*El diablo cojuelo*, III, 105, 1-5)  
『しかし、私に悪魔の胃袋があり、地獄の潮流にめまいを感じたことがないにもかかわらず、自然やレントイ<sup>44</sup>の貶めるために生まれたこれらの害虫は私の胃袋をむかむかさせているので、早くここから出ましょう。』

---

<sup>44</sup> トランプゲームの一種。



- (391) , que a estas horas se subía a su azotea a tocar de la tarántula con un peine y un espejo que podía ser de armar, y el Cojuelo, viendo la ocasión, se le pidió con mucha cortesía para el dicho efeto, diciendo:

(*El diablo cojuelo*, VIII, 189, 2-9)

『彼女はこんな時間に髪型を整えるために櫛と大きな鏡を持って屋根に上がっていました。跋扈の悪魔は機会を見て、先述のことを実行するために非常に礼儀正しく彼女に鏡を頼みました。』

次に、*Cartas marruecas*を考察する。次に示す(392)は同作品において唯一の三項文の例であり、指示対象が人である直接目的語がloで表されている。

- (392) Desea conocer a España; me ha encargado de procurarle todos los medios para ello, y lo presento a toda esta amable tertulia.

(*Cartas marruecas*, XI, 192, 21-23)

『スペインを知りたいと望んでおり、そのためにあらゆる方策を彼のために取るようわたしに乞うのです。ついてはこの親愛なるテルトゥリアの皆様にご紹介したい』(富田, 2017, 60)

最後に、*Platero y yo*を考察する。同作品で三項文の直接目的語としてleが用いられている例はなく、(393)のように間接目的語が一人称である場合も、(394)のように三人称である場合も全例でloが用いられている。

- (393) Al fin, una noche, me lo trajo. (*Platero y yo*, LX, 155, 19)

『とうとうある夜、その品は届いた。』(長南, 2013, 140)

- (394) Yo les traigo a Platero, y se lo doy, para que jueguen con él.

(*Platero y yo*, CXVI, 215, 22)

『わたしはプラテロを連れてきて、こどもたちにかしてやり、いっしょに遊ばせる。』(長南, 2013, 258)

(393)について、loの指示対象はスタンプ(un sello)である。また、(394)のloの指示対象はPlatero、つまり動物である。したがって、三項文では直接目的語の指示対象が有生物であるか、無生物であるかにかかわらず、loで表されている。

#### 5.4. まとめ

本章では、3つの参与者からなる三項文における形態の選択を考察した。本研究の資料体では三項文の複数形の直接目的語としてlesが用いられている例は1例もみられない。また、直接目的語の指示対象が人である場合について、三項文で人の男性単数のle語法がみられる作品は同指示対象におけるle語法の割合が高い作品である。一方、直接目的語の指示対

象が物である場合について、le語法圏出身者の作品では同指示対象のle語法の割合が50%以下の作品では間接目的語が一人称または二人称である場合のみle語法の例がみられ、同指示対象のle語法の割合が50%以上の作品でも間接目的語が一人称または二人称である場合のほうが三人称である場合よりもle語法の割合が高い。したがって、García(1975)が述べているように、間接目的語が三人称である場合よりも一人称または二人称である場合のほうが直接目的語としてleが用いられる可能性は高いと考えられる。また、*El sí de las niñas*および*Don Juan Tenorio*において単数形では全例でle語法が用いられていることから、これらの作品では項数に関係なく、性による形態の区別が強くなされていると考えられる。

同様に、非le語法圏出身者の作品でも間接目的語が三人称である場合よりも、一、二人称である場合のほうがle語法はみられやすいと考えられる。また、le語法の割合が低い作品においては、三項文の同語法はまったくみられない。しかし、物の男性単数のle語法の割合が50%以下の作品である*El diablo cojuelo*では間接目的語の人称や指示対象が有生物であるか、無生物であるかに関係なく、le語法が用いられている。

さらに、三項文でleが用いられている動詞では二項文でもleが用いられており、三項文ではloが用いられている動詞であっても、二項文ではleが用いられている。

以上のことから、三項文では二項文よりもloが用いられる可能性が高いと考えられる。また、三項文においても他動性によると考えられる形態の選択がみられる。

## 6. まとめ

本章では、本論文の総括をおこない、今後の展望を示す。

まず、le語法の通時的な出現の変遷を考察すると、時代および地域に関係なく、指示対象が人の男性単数である場合にle語法がもっともよくみられることがわかる。13世紀の作品では指示対象が人である場合にのみle語法はみられるが、時代が下るにつれて物を指示対象とするle語法の出現率が増加している。しかし、複数形のle語法の出現率は横ばいである。また、非le語法圏出身者による作品においても、とくに17世紀中頃から19世紀中頃に書かれた作品では指示対象が人の男性単数である場合にle語法が高い割合でみられることから、一般的に非le語法圏とされるアンダルシア地方やムルシア地方、バダホス県を非le語法圏とみなすことはできないと考えられる。ただし、性による形態の区別はle語法圏のほうがよくみられる。さらに、非語源的用法の発展と衰退の時期は両地域で異なる。

次に、le語法がみられやすい文脈について、本研究で選定した26文学作品の資料体を考察した結果から、他動性が低い場合、le語法がみられやすいことがわかった。また、複数形や女性のle語法がみられる文脈は、人の男性単数のle語法がみられる文脈と一致しており、人の男性単数のle語法がみられない文脈で複数形や女性のle語法がみられることはない。

さらに、他動性の高低と選択される三人称の直接目的語の形態の関係について、他動性の高低を測る項目のうち、形態の選択に影響していると考えられる項目もあれば、あまり影響していないと考えられる項目もある。形態の選択に強く影響していると考えられる項目は、主語の有生性および目的語が受ける影響の強弱である。主語の有生性については、主語が有生性階層において高い位置を占める一人称または二人称である場合、語源を維持した形態が用いられる傾向にあり、反対に有生性階層において低い位置を占める無生物である場合はle語法がみられやすく、そのあいだに位置づけられる名詞句では作品ごとに用いられる形態は異なり、なかには当該の形態が選択されている理由を説明することが不可能である例も存在する。また、目的語への影響の強弱について、受ける影響が強い場合、le語法の割合が高い作品でもloが用いられている例がみられ、反対に、受ける影響が弱い場合、leが用いられる傾向にあると考えられる。さらに、直接目的語の指示対象に対する愛情や軽蔑など、与格に典型的な意味から派生する要因によると考えられる形態の選択もみられる。

反対に、形態の選択にあまり影響していないと考えられる項目は、肯定性および直接目的語の特定性である。まず、肯定性について、否定文では一部の作品の一部の文脈においてはle語法が用いられる傾向にある。次に、目的語の特定性については、一部の作品では不特定の人物である場合、もっぱらleのみ用いられているが、他の多くの作品では目的語の特定性による形態の選択はなされていないと考えられる。

また、法とアスペクトについては、作品によっては一部の文脈でのみ形態の選択に影響している。さらに、動性について、動詞がmatarである場合、一部の作品では指示対象が人の男性単数である場合に唯一loが用いられていることや本研究の資料体では複数形のle語法の例がみられないことから、動性の高い動詞ではloが用いられやすいと考えられる。しかし、他動性の観点からみれば、tenerやhaberが状態を表す動詞として用いられている場合、le語法が用いられやすいと考えられるが、これらの動詞ではle語法の割合が高い作品でのみleの例がみられ、複数形のle語法がみられないことから、多少の動性がないとle語法は用いられにくいと思われる。

Hopper&Thompson(1980)によると、他動性が高い項目が多ければ多いほど、その文脈の他動性は高いが、本研究の考察の結果から、形態選択は他動性の高い項目あるいは低い項目の多寡によってされているわけではないと考えられる。むしろ、形態選択においては項目間だけでなく、パラメータ間にも優劣が存在し、形態選択においてより重視される項目のパラメータによって形態が決定されているため、形態選択は非常に複雑になされていると思われる。加えて、地域や時代によって他動性の各項目が形態の選択に影響する程度は異なる。

さらに、形態の選択の歴史的変遷について、他動性による形態の選択が未発達であった13世紀の作品では、与格に典型的な意味によって形態が選択されている。しかし、14世紀以降の作品では対格および与格に典型的な意味に由来する他動性の度合いや話者の語用論的評価による形態の選択がなされるようになり、15世紀末の作品では、指示対象が有生物の単数である場合、性による形態の区別がなされるようになった。ただし、他動性が高い文脈、とくに直接目的語が物理的変化を受ける文脈では15世紀末以降の作品であっても語源を維持した形態が用いられている例がみられる。

今後の展望としては、上記のことを確信するには時代ごとのさらに多くのデータを収集する必要があることが第一にあげられる。また、他動性が低いため、tenerやhaberが状態を表す動詞として用いられている場合、直接目的語としてleが選択されることが期待され

るが、実際はleが用いられにくい理由を考察する必要がある。このように、動性については、他動性の高低の観点からは説明困難な点が唯一存在する。さらに、他動性の高低を測る項目のひとつとして採用した意図性については、主語が有生物である場合、意図の有無によって形態選択がなされていると考えられる例が乏しく、意図性が形態の選択に影響しているかどうかを判断することができなかった。そのため、行為が非意図的であることが副詞などで表されている文脈に焦点をあて、考察をおこなう必要がある。

## 7. 参考文献

- Alarcos Llorach, Emilio (1948): "Investigaciones sobre el libro de Alexandre", *Revista de filología española*, anejo 45, Madrid.
- Asencio, Manuel (1959): "La intención religiosa del Lazarillo de Tormes y Juan de Valdés", *Hispanic Review*, vol.27, n°.1, págs. 78-102.
- Butt, John, Benjamin, Carmen y Moreira Rodríguez, Antonia (2019<sup>6</sup>): *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, London y New York, Routledge.
- Cano Aguilar, Rafael (1977-1978): "Cambios en la construcción de los verbos en castellano medieval", *Archivum*, tomo 27-28, págs. 335-379. [en línea]  
<https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=866035> (閲覧日:2023年10月10日)
- . (1984): "Cambios de construcción verbal en español clásico", *Boletín de la Real Academia Española*, tomo 64, cuaderno 231-232, Real Academia Española, págs. 203-256. [en línea]  
[https://apps.rae.es/BRAE\\_DB\\_PDF/TOMO\\_LXIV/CCXXXI-CCXXXII/CanoAguilar\\_203\\_255.pdf](https://apps.rae.es/BRAE_DB_PDF/TOMO_LXIV/CCXXXI-CCXXXII/CanoAguilar_203_255.pdf) (閲覧日:2023年11月30日)
- Cáseda Teresa, Jesús F. (2020): "Algunas noticias biográficas de Diego de San Pedro", *Artifara*, n°.20, págs. 301-314. [en línea]  
<https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=7957221> (閲覧日:2024年5月14日)
- Comrie, Bernard (1989<sup>2</sup>): *Language universals and linguistic typology*, Oxford, Basil Blackwell. [バーナード・コムリー(1992)『言語普遍性と言語類型論』(松本克己、山本秀樹訳)、ひつじ書房]
- Coon, Jessica (2013): "TAM Split Ergativity, Part I", *Language and Linguistics Compass*, 7 (3), págs.171-190. [en línea] <https://compass-onlinelibrary-wiley-com.osaka-u.idm.oclc.org/doi/10.1111/lnc3.12011> (閲覧日:2023年12月19日)
- Croft, Robert William (2003<sup>2</sup>): *Typology and universals*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Cuervo, Rufino José (1895): "Los casos enclíticos y proclíticos del pronombre de tercera persona en castellano", *Romania*, n°.93, tomo 24, págs.95-113. [en línea]  
[https://www.persee.fr/doc/roma\\_0035-8029\\_1895\\_num\\_24\\_94\\_5877](https://www.persee.fr/doc/roma_0035-8029_1895_num_24_94_5877) (閲覧日:2023年9月27日)

- Dixon, R.M.W. (1994): *Ergativity*, Cambridge, Cambridge University Press. [R.M.W.デイクソン(2018)『能格性』(柳沢民雄、石田修一訳)、研究社]
- Echenique Elizondo, M.<sup>a</sup> Teresa (1981): "El sistema referencial en español antiguo: leísmo, laísmo y loísmo", *Revista de la Filología Española*, vol.61, n<sup>o</sup>.1, págs. 113-157. [en línea]  
[https://www.researchgate.net/publication/274777523\\_El\\_sistema\\_referencial\\_en\\_espanol\\_antiguo\\_leismo\\_laismo\\_y\\_loismo](https://www.researchgate.net/publication/274777523_El_sistema_referencial_en_espanol_antiguo_leismo_laismo_y_loismo) (閲覧日:2024年3月1日)
- Fernández-Ordóñez, Inés (1993): "Leísmo, laísmo y loísmo: Estado de la cuestión", en O. Fernández Soriano (ed.), *Los pronombres átonos*, Madrid, Taurus Universitaria, págs. 63-96. [en línea]  
<https://www.uam.es/FyL/Fern%C3%A1ndez-Ord%C3%B3ñez-Hern%C3%A1ndez-In%C3%A9s-/1242658495653.htm?pid=1242658433973/> (閲覧日:2023年10月1日)
- . (1994): "Isoglosas internas del castellano. El sistema referencial del pronombre átono de tercera persona", *Revista de Filología Española*, LXXIV: 1, págs. 71-125. [en línea]  
<https://www.uam.es/FyL/Fern%C3%A1ndez-Ord%C3%B3ñez-Hern%C3%A1ndez-In%C3%A9s-/1242658495653.htm?pid=1242658433973/> (閲覧日:2023年10月1日)
- . (1999): "Leísmo, laísmo, loísmo", en I. Bosque & V. Demonte (dirs.): *Gramática descriptiva de la lengua española*. vol.1, Madrid, Espasa-Calpe, págs.1317-1397.
- . (2001): "Hacia una dialectología histórica reflexiones sobre la historia del leísmo, el laísmo y el loísmo", *Boletín de la Real Academia Española*, tomo 81, cuaderno 284, Real Academia Española, págs. 389-464. [en línea]  
<https://www.uam.es/FyL/Fern%C3%A1ndez-Ord%C3%B3ñez-Hern%C3%A1ndez-In%C3%A9s-/1242658495653.htm?pid=1242658433973/> (閲覧日:2023年10月1日)
- Fernández Ramírez, Salvador (1987): *Gramática española. 3.2. El pronombre* [1951], volumen preparado por José Polo, Madrid, Arco/Libros.

- Flores, Marcela (2004): "Transitividad y valoraciones pragmáticas en los procesos del leísmo, el laísmo, el loísmo", *Signo y seña*, n.º.13, págs.137-184. [en línea] <https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=6914212> (閲覧日:2023年9月8日)
- . (2006): "Leísmo, laísmo y loísmo", *Sintaxis histórica de la lengua española. La frase verbal*, Concepción Company (ed.), México, Universidad Nacional Autónoma de México, vol.1, págs.671-749.
- García, Erica C. (1975): *The role of theory in linguistic analysis: the Spanish pronoun system*, Amsterdam, North-Holland.
- García Godoy, M.<sup>a</sup> Teresa (2002): "Notas sobre el leísmo en la historia del español de Andalucía (s. XVIII)", en M.<sup>a</sup> Teresa Echenique Elizondo (ed.), *Actas del V Congreso Internacional de Historia de la Lengua Española*, Madrid, Gredos, págs.645-655.
- Gómez Seibane, Sara (2016<sup>2</sup>): *Pronombres átonos (le, la, lo) en español*, Madrid, Arco/Libros.
- . (2021): "Acerca del leísmo de cortesía y del leísmo personal en la correspondencia de los siglos XVIII y XIX", *Revista internacional de lingüística iberoamericana*, vol.19, n.º.38, Madrid, Iberoamericana Editorial Vervuert, págs. 129-150.
- Givón, T (1985): "Ergative morphology and Transitivity gradients in Newari", en Frans Plank (ed.), *Relational typology*, Berlin, Mouton, págs.89-107.
- Hopper, Paul. y S. Thompson (1980): "Transitivity in Grammar and Discourse", *Language*, vol.56, n.º.2, págs. 251-299. [en línea] <https://www.jstor.org/stable/413757> (閲覧日:2023年9月5日)
- Hurst, Dorothy (1951): "Spanish Case: Influence of Subject and Connotation of Force", *Hispania*, vol.34, n.º.1, págs. 74-78. [en línea] <https://www.jstor.org/stable/333172> (閲覧日:2024年1月9日)
- Huygens, Astrid (2008): "El leísmo en Andalucía: una radiografía sociolingüística", en Blas Arroyo, José Luis, etc. (coords.), *Discurso y sociedad II*, págs. 555-570. [en línea] <https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=4355989> (閲覧日:2024年3月1日)



- Klein-Andreu, Flora (1981): "Distintos sistemas de empleo de «le», «la», «lo»: perspectiva sincrónica, diacrónica y sociolingüística", *Thesaurus*, tomo 36, nº.2, págs. 284-304. [en línea] <https://cvc.cervantes.es/lengua/thesaurus/boletines/1981.htm> ( 閱 覧 日:2024年3月27日)
- Langacker, R.W. (1991): *Concept, Image, and Symbol*, Berlin, De Gruyter Mouton.
- Lapesa, Rafael (1968): "Sobre los orígenes y evolución del leísmo, laísmo y loísmo", en Cano Aguilar, Rafael. y Echenique Elizondo, M.<sup>a</sup> Teresa (ed.)(2000), *Estudios de morfosintaxis histórica del español*, Madrid, Gredos. tomo 1, págs. 279-310.
- . (1981): *Historia de la lengua española*, Madrid, Gredos.
- Llorente Maldonado de Guevara, Antonio (1980): "Consideraciones sobre el español actual", *Anuario de Letras*, vol.18, págs. 5-61. [en línea] <https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=31305> ( 閱 覧 日:2024年2月12日)
- López-Vázquez, Alfredo Rodríguez (1983): "La autoría de El Burlador de Sevilla: Andrés de Claramonte", *Castilla*, nº.5, págs. 87-108. [en línea] <https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=136077> ( 閱 覧 日:2024年2月10日)
- Malchukov Andrei L. (2013): "Towards a Typology of Transitivity Splits", 『国語研プロジェクトレビュー』, nº.3, 国立国語研究所, págs. 1-15. [en línea] <https://repository.ninjal.ac.jp/records/567> ( 閱 覧 日:2024年1月18日)
- Maldonado, Ricardo (2007): "Grammatical Voice in Cognitive Grammar", en Dirk Geeraerts y Hubert Cuyckens (eds), *Oxford Handbooks of Cognitive Grammar*, Oxford, Oxford University Press, págs. 829–868.
- Menéndez Pidal, Ramón (1961): "Dos poetas en el *Cantar de Mio Cid*", *Romania*, tomo 82, nº.326, págs. 145-200. [en línea] [https://www.persee.fr/doc/roma\\_0035-8029\\_1961\\_num\\_82\\_326\\_2805](https://www.persee.fr/doc/roma_0035-8029_1961_num_82_326_2805) ( 閱 覧 日:2024年5月14日)
- Moreno Cabrera, Juan Carlos (2002<sup>2</sup>): *Curso universitario de lingüística general*, tomo I: *Teoría de la gramática y sintaxis general*, Madrid, Editorial Síntesis.
- Real Academia Española (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa Libros.

- Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2020): *Glosario de términos gramaticales*, Salamanca, Ediciones Universidad de Salamanca.
- Ramírez López, Marco Antonio (2006): "Fortunas y adversidades de la autoría del Lazarillo de Tormes y la postura de Rosa Navarro Durán", *Signos Literarios*, vol.2, nº.4, págs. 9-43. [en línea]  
<https://signosliterarios.izt.uam.mx/index.php/SL/article/view/157> (閲覧日:2023年12月13日)
- Recio Doncel, Ana (2021): "El sistema pronominal átono de tercera persona: revisión bibliográfica y análisis de documentos bajomedievales", *Res Diachronicae*, vol.19, págs. 1-19. [en línea] <https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=8240975> (閲覧日:2024年3月1日)
- Revenga García, Nàdia (2021): *La Estrella de Sevilla y las potencialidades de la edición digital*, Tesis Doctoral, Valencia, Universitat de València. [en línea]  
<https://roderic.uv.es/rest/api/core/bitstreams/099d3837-086e-4bfc-b15d-410534485bfa/content> (閲覧日:2024年2月10日)
- Serradilla Castaño, Ana M.<sup>a</sup> (1998): *El régimen de los verbos de entendimiento y lengua en español medieval*, Madrid, Ediciones de la Universidad Autónoma de Madrid.
- Serrano de Haro, Antonio (1975<sup>2</sup>): *Personalidad y destino de Jorge Manrique*, Madrid, Gredos.
- Silverstein, Michael (1976): "Hierarchy of features and ergativity", en R.M.W. Dixon (ed.), *Grammatical categories in Australian languages*, Canberra, Australian Institute of Aboriginal Studies, pág. 112-171. [en línea]  
<https://www.semanticscholar.org/paper/7.-Hierarchy-of-Features-and-Ergativity-Silverstein/e4e75fd72fc08111121bd8d2889cb2210d025e0> (閲覧日:2023年10月30日)
- Tsunoda, Tasaku (1981): "Split case-marking patterns in verb-types and tense/aspect/mood", en *Linguistics*, vol.19, págs. 389-438. [en línea]  
<http://grammar.ucsd.edu/courses/lign236/readings/Tsunoda.pdf> (閲覧日:2024年1月4日)

尾谷昌則、二枝美津子(2011)『構文ネットワークと文法』研究社.  
佐竹謙一(2009)『スペイン文学史』研究社.  
高橋瑛奈美(2022)「中世スペイン語におけるle語法の変遷と出現傾向」大阪大学修士論文.  
———. (2023)「16・17世紀におけるle語法の使用法および出現傾向」,『Estudios  
Hispánicos』, 47, 大阪大学外国語学部スペイン語部会, págs.105-118.  
角田太作(2009)『世界の言語と日本語』くろしお出版.  
中岡省治(1993)『中世スペイン語入門』大学書林.  
福嶋教隆、フアン・ロメロ・ディアス(2021)『詳説スペイン語文法』白水社.

#### 参考URL

Diccionario de la Lengua Española [en línea] <https://dle.rae.es/> (閲覧日:2023年9月9日)  
Real Academia de la Historia [en línea] <https://www.rah.es/> (閲覧日:2023年9月9日)

## 8. 資料体

- Adams, Kenneth M (ed.) (1993): *Rimado de Palacio*, Madrid, Cátedra.
- Alonso, Martín (1986): *Diccionario medieval español: desde las Glosas Emilianenses y Silenses (s. X) hasta el siglo XV*, 2vols., Salamanca, Kadmos.
- Andioc, René (ed.) (2002): *Raquel*, Madrid, Castalia. [ビセンテ・ガルシア・デ・ラ・ウエ  
ルタ(2022)『スペイン新古典悲劇選』(富田広樹訳)、論創社]
- Corominas, Joan y Pascual, José A. (1980): *Diccionario crítico etimológico castellano e hispánico*, Madrid, Gredos.
- Devoto, Daniel (ed.) (1969): *Milagros de Nuestra Señora: texto íntegro en versión de Daniel Devoto*, Madrid, Castalia.
- Fernández, Angel R. y Arellano, Ignacio (ed.) (1988): *El diablo cojuelo*, Madrid, Castalia.
- García, Michel (ed.) (1978): *Libro de poemas : Rimado de palacio*, Madrid, Gredos, 2vols.
- López Estrada, Francisco (ed.) (2016): *Fuente Ovejuna*, Madrid, Castalia. [ロペ・デ・ベ  
ガ(2020)『ベスト・プレイズII』(田尻陽一訳)、論創社]
- López-Vázquez, Alfredo Rodríguez (ed.) (2022<sup>2</sup>): *El burlador de Sevilla*, Madrid, Cátedra.  
[ティルソ・デ・モリーナ(2014)『セビーリャの色事師と石の招客』(佐竹謙一訳)、岩  
波文庫]
- Montero Padilla, José (ed.) (1996): *Los intereses creados / La malquerida*, Madrid,  
Castalia. [ベナベンテ(1928)『作り上げた利害』(水田寛定訳)、岩波書店]
- Menéndez Pidal, R. (1944): *Cantar de Mío Cid: texto, gramática y vocabulario*, Madrid,  
Espasa Calpe, 3vols.
- Predmore, Michael P. (ed.) (2022): *Platero y yo*, Madrid, Cátedra. [Juan Ramón Jiménez  
(1957), Platero and I, (Eloïse Roach訳), University of Texas Press、J. R. ヒメーネ  
ス(2013)『プラテロとわたし』(長南実訳)、岩波文庫]
- Morrás, María (ed.) (2003): *Poesía*, Madrid, Castalia.
- Parrilla, Carmen (ed.) (1995): *Cárcel de amor*, Barcelona, Crítica. [en línea]  
[https://www.rae.es/sites/default/files/Carcel\\_de\\_amor\\_Diego\\_de\\_San\\_Pedro.pdf](https://www.rae.es/sites/default/files/Carcel_de_amor_Diego_de_San_Pedro.pdf)  
(閲覧日2021年5月25日)
- Real Academia Española. (ed.) (2011): *Cantar de Mío Cid*, Madrid, Espasa Calpe. [(1994)  
『わがシッドの歌』(牛島信明、福井千春訳)、国書刊行会]

- . (ed.) (2011): *La Celestina*, Madrid, Espasa Calpe. [フェルナンド・デ・ローハス(1996)『ラ・セレスティーナ』(杉浦勉、牛島信明訳)国書刊行会、フェルナンド・デ・ローハス(2020)『セレスティーナ：カリストとメリベアアの悲喜劇』(岡村一訳)、水声社]
- . (ed.) (2011): *Milagros de Nuestra Señora*, Barcelona, Galaxia Gutenberg. [Gonzalo de Berceo (1997), *Miracles of Our Lady*, (Richard Terry Mount, Annette Grant Cash訳) The University Press of Kentucky、ゴンサロ・デ・ベルセオ(2014-2016)『聖母の奇跡』(太田強正訳) [en línea]  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no183/18304.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no184/18410.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no186/18615.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no187/18708.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no188/18803.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no189/18908.pdf> (閲覧日2021年5月7日)]
- . (ed.) (2012): *Don Juan Tenorio*, Barcelona, Galaxia Gutenberg. [ドン・キセ・ソリーヤ(1935)『ドン・フアン・テノリオ：宗教夢幻劇』(杜泰三訳)、不二屋書房、ホセ・ソリーヤ(1976)『ドン・フワン・テノーリオ』(高橋正武訳)、岩波書店]
- . (ed.) (2012): *Guzmán de Alfarache*, Barcelona, Círculo/Galaxia Gutenberg. [アレマン(1991)『バロックの箱』(牛島信明訳)、筑摩書房]
- . (ed.) (2012): *Rimado de Palacio*, Madrid, Espasa Calpe.
- . (ed.) (2013): *El trovador*, Barcelona, Círculo de Lectores/ Galaxia Gutenberg. [アントニオ・ガルシア＝グティエレス(2017)『吟遊詩人』(稲本健二訳)、現代企画室]
- . (ed.) (2013): *Poesía*, Barcelona, Galaxia Gutenberg. [ホルヘ・マンリーケ(2011)『父の死に寄せる詩』(佐竹謙一訳)、岩波文庫]
- . (ed.) (2014): *La Galatea*, Barcelona, Círculo de Lectores/Galaxia Gutenberg. [ミゲル・デ・セルバンテス(2017)『セルバンテス全集①ガラテア』(本田誠二訳)、水声社]
- . (ed.) (2014): *Libro de Alexandre*, Barcelona, Galaxia Gutenberg. [(2018-2022)『アレクサンダーの書』(太田強正訳) [en línea]

<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no194/19419.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no195/19503.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no196/19613.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no197/19705.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no198/19808.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no199/19905.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no200/20015.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no201/20104.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no202/20206.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no203/20328.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no204/20408.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no205/20506.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no206/20604.pdf>  
<http://human.kanagawa-u.ac.jp/gakkai/publ/pdf/no207/20704.pdf> (閲覧日 2023 年 10 月 1 日)、神奈川大学人文学会]

- . (2014): *Diccionario de Autoridades*, Madrid, JdeJ Editores.  
 ————. (ed.) (2015): *La comedia nueva / El sí de las niñas*, Barcelona, Círculo de Lectores/Espasa Calpe. [モラティン(2018)『娘たちの空返事』(佐竹謙一訳)、岩波文庫]  
 ————. (ed.) (2016): *La vida del Buscón*, Barcelona, Círculo de Lectores/Espasa Calpe, [ケベード(1986)『世界文学全集3大悪党』(桑名一博訳)、綜合社、フランシスコ・デ・ケベード(1997)『ピカレスク小説名作選』(牛島信明、竹村文彦訳)、国書刊行会]  
 ————. (ed.) (2016): *Lazarillo de Tormes*, Barcelona, Círculo de Lectores/ Espasa Calpe. [(1997)『ピカレスク小説名作選』(牛島信明訳)、国書刊行会、(2018)『ラサリーリョ・デ・トルメスの人生』(岡村一訳)、水声社]  
 ————. (ed.) (2017): *El sombrero de tres picos*, Barcelona, Círculo de Lectores/Espasa Calpe. [アラルコン(1939)『三角帽子』(會田由訳)、岩波書店]

- . (ed.) (2021): *El médico de su honra / El alcalde de Zalamea*, Barcelona, Planeta. [カルデロン(1978)『人の世は夢；サラメアの村長』(高橋正武訳)、岩波書店、カルデロン・デ・ラ・バルカ(1982)『サラメアの村長』(岩根罔和訳)、大学書林]
- Robert Jammes (ed.) (2016): *Soledades*, Barcelona, Castalia. [レイス・デ・ゴンゴラ(1999)『孤独』(吉田彩子訳)、筑摩書房]
- Robert Marrast (ed.) (2021): *El estudiante de Salamanca*, Barcelona, Castalia. [エスプロンセーダ(2012)『サラマンカの学生』(佐竹謙一訳)、岩波文庫]
- Russell P. Sebold (ed.) (2022): *Cartas marruecas / Noches Lúgubres*, Madrid, Cátedra. [ホセ・デ・カダルソ(2017)『モロッコ人の手紙；鬱夜』(富田広樹訳)、現代企画室]
- Salvador Martínez, H (ed.) (2000): *Rimado de Palacio*, New York, Peter Lang.
- Serés, Guillermo (ed.) (2006): *El Conde Lucanor*, Barcelona, Galaxia Gutenberg. [ドン・フアン・マヌエル(1994)『ルカノール伯爵』(牛島信明、上田博人訳)、国書刊行会]
- Whinnom, Keith (ed.) (1983): *Obras completas, II Cárcel de amor*, Madrid, Castalia.

高橋作太郎編(2012<sup>3</sup>)『リーダーズ英和辞典』研究社.

近松洋男(1980)『中世スペイン語辞典』風間書房.

橋本一郎(1986)『聖母の奇蹟』大学書林.

———. (1990)『ラ・セレスティナ』大学書林.

山田善郎ほか編(2015)『スペイン語大辞典』白水社.

本論文に誤り、追記および差し替えがございました。以下の通り訂正させていただくとともに、深くお詫び申し上げます。他にもございましたら、ご教示いただけますと幸いです。

ページ	箇所	誤	正
II	12-13行	形態による有生/無生および性の区別	有生/無生および性による形態の区別
VI	23行	orejada	ojeada
VIII	11行	Sin embargo,	Aunque
VIII	15行	carece	carecen
VIII	18行	sentencias negativas	oraciones negativas
VIII	23行	sino también entre los factores	sino también entre los parámetros
6	16-17行	estos/estas, esos/esas, aquellos/aquellas	estos/estas、esos/esas、aquellos/aquellas
9	表2-2	(可算単数形男性の)lo	le
9	13行	ラス・エンカルナシオネス	ラス・エンカルタシオネス
9	14行	である。	である(Fernández-Ordóñez1993:13-14, 1994:24, 27, 43, 2001:14)。
13	15行	体系	ロマンス語
17	18行	これは	(削除)
23, 31	7行, 1行	le語法	le語法圏
25	5-6行	結果、次のように述べている。セビーリャの都心部に住む若い男性において、	結果によると、le語法をもっともよく用いるのはセビーリャの都心部に住む若い男性(15-34歳)であり、
26	脚注8	筆者	筆写
28	6行	Don Juan Tenorio	<i>Don Juan Tenorio</i>
29	表3-1	77.8%(42/55) ( <i>Cárcel de amor</i> のleの欄)	77.8%(42/54)
29	表3-1	10.6%(7/65) ( <i>Lazarillo de Tormes</i> のloの欄)	10.6%(7/66)
30	6行	示されている。一方、	示されている一方で、
30	7-8行	あまり高くない、あるいは1例もみられない。	あまり高くない。
31	2-3行	出現率も高く、～。反対に、人の男性単数の～	出現率も高いが、人の男性単数の～
32, 35, 38, 40	表3-3, 3-5, 3-8, 3-10	(各表の1行目左端の文字の見切れ)	le語法圏の作品
39	表3-9	2.6%(1/38) ( <i>El sí de las niñas</i> のleの欄)	2.6%(1/39)
40	2行	あいだに書かれた出現率が高かった	あいだ出現率が高かった
41	8行	3.3.3. le語法の出現率の序列	(この見出しを削除)
41	11, 12行	20作品	19作品
41	13行	12作品	11作品
41	13行	<i>Libro de Alexandre</i>	(削除)
41	22行	6作品	7作品
41	25行	残り1作品( <i>Platero y yo</i> )では	<i>Platero y yo</i> では
42	14行	高い。 <sup>24</sup> また、	高い <sup>24</sup> 。また、
42	20行	女性単数	女性複数
42	23行	18世紀前半	20世紀初頭
44	表3-11	( <i>Cantar de Mio Cid</i> の5番目の欄の斜線)	人女複
46	8-9行	le語法圏では20世紀の初頭で減退が確認されるのに対し、非le語法圏では18世紀末の作品ですでに減退している。	le語法圏では20世紀の初頭で物のle語法の減退が確認されるものの、人の男性単数のle語法の減退はみられないのに対し、非le語法圏では18世紀末の作品ですでに人の男性単数のle語法が減退している。
58	図4-2 キャプション, 3行	Malchukov(2015)	Malchukov(2010)
59	下から2行	tener	状態を表す動詞



64	19-20行	一部の言語で対格標示が唯一なされる命令法ではloが用いられやすい	一部の言語では命令法において対格標示が唯一なされる
76	図4-3 キャプション	形態選択	形態選択基準
79, 80	3行, 下から3行	le	li
84	(57)	airólo	airólo
89	5行	不特定の特定の人物	不定の特定の人物
89	12行	また、	ただし、
89	14-15行	したがって、～考えられる。	(この文章を削除)
89	下から2行	ほぼゼロ	ゼロ
93	11行	直接法	直説法
106	図4-5 2)	主語=物	主語が物
106	図4-5 3) i)	不完了アスペクト→lo 完了アスペクト→le	不完了アスペクト→le 完了アスペクト→lo
108	14行	(127)および(128)	(127)および(128)
113, 149	表4-11, 4-16	(1行目右端の)%	%(le)
118	(150)	犯させないように	犯させることは
119	最終行	特定の物	特定または不特定の物
124	6行	目的語の特定	目的語の特定性
124	下から3行	主語が特定の無生物	主語が不特定の無生物
130	14行	loとleの指示対象は	各例3行目のloとleの指示対象は
142	2行	le圏出身者	le語法圏出身者
156	5-6行	(273)および(274)のように～に限られている。	(273)～(275)のように特定の動詞に限られている。
156	(273)	334.25-26	334, 25-26
157	12-13行	主語が無生物である場合、～と考えられる。	同動詞では主語が有生物であるか、無生物であるかによって形態が選択されていると考えられる。
157	14-15行	形態が弁別されている動詞においても、アスペクトが完了アスペクトである場合には、	形態が弁別されていると考えられるほかの動詞について、主語が無生物である場合、完了アスペクトにおいても
159, 162	1行, 12行	特定の動詞および文脈では	特定の動詞では
159	5行	特定の文脈～、それ以外の文脈	特定の動詞～、それ以外の動詞
162	10行	特定性の文脈	特定の文脈
168	9行	<i>Raquel</i> および <i>El trovador</i>	<i>El burlador de Sevilla</i> 、 <i>Raquel</i> および <i>El trovador</i>
172	下から2行	について、(338)に	(読点と括弧の間の半角アキを詰める)
173	30-32行	(340)および(341)の動詞は～で表されている。	(340)および(341)はともに否定文であるが、それぞれ異なる形態les、losが用いられており、同作品では否定文において直接目的語の形態が完全なカタチで弁別されているわけではない。
174	16行	また、～	(この文章を一字下げる)
176	1行	において	を除いて
177	3行	<i>Fuente Ovejuna</i> 以降の作品	16世紀後半以降に書かれた作品
179	14行	代名詞化された三人称の直接目的語を伴う例	代名詞化された三人称の直接目的語に対して非意図的行為を及ぼしている例
179	16行	少なくともloの使用を促す	非意図的行為が少なくともloの使用を促す
179	25-26行	主語が無生物である場合	主語が不特定の人物または無生物である場合
183	下から3-4行	同例から、～と思われる。	同例から、項数を問わず、他の要因によって形態が選択されていると考えられる。
187	25行	(366)のように	(366)および(367)のように
187	26行	全3例	全2例
188	3-4行	また、～leが用いられている。	(この文章を削除)
188	11-12行	これらの例から、～ことがわかる。	これらの例から、指示対象が有生物である場合、三項文においてもleが用いられていることがわかる。
192	17-19行	これらの例から、～と考えられる。	(この文章を同ページ5行目末に移動)
194	1行	間接目的語が一人称である場合、同例のように	間接目的語が三人称以外である場合、(385)のように

196	12行	まったく	ほとんど
197, 198	下から2行, 22行	与格に典型的な意味	格に典型的な意味
202	13-20行	Gómez Seibane, Sara (2016 <sup>2</sup> ):~ ———. (2021):~ Givón, T (1985):~	Givón, T (1985):~ Gómez Seibane, Sara (2016 <sup>2</sup> ):~ ———. (2021):~
203	16行	Malchukov Andrei L. (2013)	Malchukov Andrei L. (2010)
203-204	28行-8行	Real Academia Española (2009):~ Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2020): ~ Ramírez López, Marco Antonio (2006):~	Ramírez López, Marco Antonio (2006): ~ Real Academia Española (2009):~ Real Academia Española y Asociación de Academias de la Lengua Española (2020): ~
206	18-28行	Montero Padilla, José (ed.) (1996):~ Menéndez Pidal, R. (1944):~ Predmore, Michael P. (ed.) (2022):~ Morrás, María (ed.) (2003):~ Parrilla, Carmen (ed.) (1995):~	Menéndez Pidal, R. (1944):~ Montero Padilla, José (ed.) (1996):~ Morrás, María (ed.) (2003):~ Parrilla, Carmen (ed.) (1995):~ Predmore, Michael P. (ed.) (2022):~
206	下から2行	Real Academia Española.	(ビリオドを削除)

・追記

p.31 表3-2の下に次の文を追記

人の男性単数のle語法の出現率が高くない14世紀までの作品では、指示対象が動物の男性単数である場合でもle語法の出現率は高くない。また、15世紀以降の作品について、同指示対象の例がみられるle語法圏の作品ではいずれの作品においてもle語法の出現率は高い。一方、非le語法圏の作品では人の男性単数のle語法の出現率が高い*El diablo cojuelo*においては動物の男性単数のle語法の出現率も高いが、人の男性単数のle語法の出現率が低い*Guzmán de Alfarache*や*Soledades*、*Platero y yo*では指示対象が動物の男性単数である場合でもle語法の割合は低い、あるいは1例もみられない。したがって、～

7. 参考文献に次の4点を追記

Comrie, Bernard (1981): *The languages of the Soviet Union*. Cambridge, Cambridge University Press.

Flores, Marcela y Melis Van Eerdewegh, Chantal (2007): "El leísmo desde la perspectiva del marcado diferencial del objeto", *Revista de Historia de la Lengua Española*, n°.2, págs.83-107. [en línea]

<https://dialnet.unirioja.es/servlet/articulo?codigo=2604855> (閲覧日:2023年3月17日)

Guardiola Tey, María Luisa (2013): "Antonio García Gutiérrez y «El trovador»", en Real Academia Española (ed.), *El trovador*, págs.131-183.

Tsunoda, Tasaku (1999): "Transitivity and Intransitivity", *Journal of Asian and African Studies*, vol.57, págs.1-9. [en línea] <https://tufs.repo.nii.ac.jp/records/1889> (閲覧日:2024年5月21日)

・差し替え

- (340) La misma desenvoltura de los jóvenes, insufrible a quien no les conoce, tiene un no sé qué que los hace amables. (*Cartas marruecas*, XXIX, 226, 1-2)

『若者たちのこの奔放さは、赤の他人にとっては堪えがたいものでありながら、何かしら彼らを好ましくさせるものを持っています。』(富田, 2017, 99)

- (341) Los hombres serios, formales e importantes no los admiten,  
(*Cartas marruecas*, LXXXII, 343.39-344.1)

『真面目で、礼儀正しく、重要な人物たちは彼らを受け入れることはないだろう。』(富田, 2017, 242)

- (366) Llévomele y dijo, nombrándome alférez: (*La vida del Buscón*, III, I, 105, 15)

『で、俺のところへ小僧を引っばってきて『少尉さん』と俺を呼んでから、』(牛島, 1997, 235)

- (367) Llevaba un jumento; alquilómele, y salime a aguardarle a la puerta fuera del lugar. (*La vida del Buscón*, II, V, 91, 6-7)

『その男がロバを連れていたので私はそれを賃借りし、町の門の外に出て男を待ちました。』  
(牛島, 1997, 218)